佐賀市文化財調査報告書第34集

村徳永遺跡

―― J地区の調査 ――

平成3年3月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

佐賀市教育委員会では、昭和63年度から毎年継続して、村徳永遺跡の発掘調査を行ってきました。これまでに、A・B・C地区（昭和63年度）とD・E・F・G・H地区（平成元年度）の調査を行い、今年度は、J地区とK地区の調査を行いました。

その結果、村徳永遺跡は、縄文時代から室町時代にかけての広大な複合遺跡であることが明らかになりました。特に、F・G地区で確認された掘立柱建物群と竪穴住居群は、弥生時代後半に大規模な集落の存在を証明しています。

本書は、県道小城・北茂安線のバイパス部分の新設に先立ち、佐賀市教育委員会が平成2年度に発掘調査を実施した村徳永遺跡（J地区）の発掘調査報告書です。

今回の調査では、主に弥生時代と鎌倉時代の遺構・遺物が数多く検出され、多大な成果を収めました。検出された遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・周溝状遺構・溝などです。特に、昨年度の調査に引き続き検出された弥生時代の掘立柱建物は、その分布範囲が西北方向に大きく広がることが確認され、当時の弥生時代集落の規模を考える上で、貴重な知見を得ることができました。

この報告書が、市民のみなさんの歴史学習や郷土の文化財についての研究資料として、おおいに利用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた地元の方々に、深く感謝いたします。

平成3年3月

佐賀市教育委員会

教育長　山田　清人

例　　言

1．本書は、一般県道小城・北茂安線緊急整備事業に伴い、平成２年度に実施した村徳永遺跡J地区の発掘調査報告書である。

2．調査は佐賀県土木部の委託を受けて、佐賀市教育委員会が実施した。

3．調査地の所在および規模などは以下のとおり。

遺跡登録番号	2037・3054・5023	遺跡略号	MTN－J
調査地	佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永	開発面積	13,515㎡
調査対象面積	9,000㎡	調査実施面積	9,000㎡
遺跡調査番号	0201	調査期間	平成2年4月12日～同年7月20日

4．発掘作業・整理作業・報告書作成の分担は以下のとおり。

表土除去　佐賀県土木事務所（山豊建設株式会社）

空中写真　有限会社空中写真企画

遺構実測　新九州測量設計株式会社
福田義彦・西田巌・前田達男・友添丸子・龍由美子・副島カスミ・原京子・山口美枝子・横尾ますよ・山口美佐子

遺構写真　西田巌・前田達男

遺物写真　前田達男

遺物復元　鬼崎玲子・馬場恵美子・野中スヤ

遺物実測　前田達男・貞包洋子・古賀尚子・前山光子・野中スヤ

製　　図　前田達男・貞包洋子・古賀尚子・前山光子・野中スヤ

5．中世・近世に属する遺物については、徳永貞紹氏（佐賀県教委文化財課）にご教示を受けたが、文責は前田にある。

6．調査記録類および出土遺物は、佐賀市文化財資料館（本庄町大字本庄1121番地）で一括保管している。巻末の収蔵品目録を参照されたい。

7．本書の執筆・編集は、一部に西田の支援を受けて、前田がこれにあたった。

本文目次

Ⅰ．序　　説……1
1．調査にいたる経過……1
2．調査組織……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……3
1．遺跡の位置……3
2．歴史的環境……3
(1)　周辺の遺跡……3
(2)　村徳永遺跡の各調査地点……4
Ⅲ．調査の概要……8
1．調査区の名称……8
2．調査の方法……8
3．J地区の層序……10
4．調査成果の概要……10
5．記述の方法……12
Ⅳ．J1区の記録……15
1．遺構の分布状況……15
2．竪穴住居と出土遺物……15
3．掘立柱建物と出土遺物……41
4．井戸と出土遺物……43
5．土壙と出土遺物……44
(1)　貯蔵穴の可能性がある土壙……44
(2)　土器溜の土壙……48
(3)　性格不明の土壙……56
6．周溝状遺構と出土遺物……59
7．溝と出土遺物……60
Ⅴ．J2区の記録……71
1．遺構の分布状況……71
2．竪穴住居と出土遺物……71
3．掘立柱建物と出土遺物……75
4．井戸と出土遺物……93
5．土壙と出土遺物……105
(1)　井戸の可能性がある土壙……105
(2)　貯蔵穴の可能性がある土壙……106
(3)　土器溜の土壙……109
6．周溝状遺構と出土遺物……116
7．溝と出土遺物……119
8．その他の遺構と出土遺物……121
9．その他の出土遺物……122
Ⅵ．J3区の記録……124
1．遺構の分布状況……124
2．井戸と出土遺物……124
3．土壙と出土遺物……135
(1)　井戸の可能性がある土壙……135
(2)　土器溜の土壙……136
(3)　性格不明の土壙……138
4．溝と出土遺物……139
5．その他の遺構と出土遺物……143
6．その他の遺物……144
Ⅶ．J4区の記録……146
1．遺構の分布状況……146
2．掘立柱建物と出土遺物……149
3．井戸と出土遺物……149
4．土壙と出土遺物……151
(1)　井戸の可能性がある土壙……151
(2)　土器溜の土壙……154
(3)　土壙墓の可能性がある土壙……157
(4)　性格不明の土壙……157
5．溝と出土遺物……167
Ⅷ．小　　結……170
1．縄文時代の遺物……170
2．弥生時代集落……171
3．方形区画溝……172

4．中世の遺物 ……174

挿図目次

Fig. 1　周辺主要遺跡分布図 …… 2
Fig. 2　調査区設定図 …… 5
Fig. 3　J地区方眼区画設定図 …… 9
Fig. 4　J地区基本層位模式図 ……10
Fig. 5　J地区土層断面実測図 ……11
Fig. 6　J 1 区遺構配置図 ……13～14
Fig. 7　J 1 区主要遺構配置図 ……15
Fig. 8　SH011実測図 ……16
Fig. 9　SH011出土遺物実測図1 ……18
Fig.10　SH011出土遺物実測図2 ……19
Fig.11　SH011出土遺物実測図3 ……20
Fig.12　SH011出土遺物実測図4 ……21
Fig.13　SH012実測図 ……23
Fig.14　SH012出土遺物実測図 ……24
Fig.15　SH013実測図 ……24
Fig.16　SH013出土遺物実測図 ……25
Fig.17　SH014実測図 ……26
Fig.18　SH014出土遺物実測図 ……27
Fig.19　SH015実測図 ……29
Fig.20　SH015出土遺物実測図 ……30
Fig.21　SH016実測図 ……30
Fig.22　SH016出土遺物実測図 ……31
Fig.23　SH017実測図 ……32
Fig.24　SH017出土遺物実測図 ……33
Fig.25　SH022実測図 ……34
Fig.26　SH023実測図 ……35
Fig.27　SH024実測図 ……36
Fig.28　SH024出土遺物実測図 ……36
Fig.29　SH025実測図 ……37
Fig.30　SH025出土遺物実測図 ……38
Fig.31　SH034実測図 ……39
Fig.32　SH037実測図 ……40
Fig.33　SH037出土遺物実測図 ……40
Fig.34　SB045実測図 ……41
Fig.35　SH041・042・043・044実測図 …42
Fig.36　SE020実測図 ……43
Fig.37　SE020出土遺物実測図 ……44
Fig.38　SK026実測図 ……45
Fig.39　SK026出土遺物実測図1 ……46
Fig.40　SK026出土遺物実測図2 ……47
Fig.41　SK004実測図 ……47
Fig.42　SK004出土遺物実測図 ……49
Fig.43　SK018実測図 ……50
Fig.44　SK018出土遺物実測図1 ……51
Fig.45　SK018出土遺物実測図2 ……52
Fig.46　SK033実測図 ……53
Fig.47　SK033出土遺物実測図1 ……54
Fig.48　SK033出土遺物実測図2 ……55
Fig.49　SK033出土遺物実測図3 ……56
Fig.50　SK002・003・005実測図 ……56
Fig.51　SK005出土遺物実測図 ……57
Fig.52　SK008実測図 ……58
Fig.53　SK008出土遺物実測図 ……58
Fig.54　SR027実測図 ……59
Fig.55　SR027出土遺物実測図 ……59
Fig.56　SD001土層断面実測図 ……60
Fig.57　SD001出土遺物実測図1 ……61
Fig.58　SD001出土遺物実測図2 ……62

Fig.59 SD001出土遺物実測図3 ……63
Fig.60 SD001出土遺物実測図4 ……65
Fig.61 SD001出土遺物実測図5 ……66
Fig.62 J 2 区主要遺構配置図 ……68
Fig.63 J 2 区遺構配置図 ……69～70
Fig.64 SH107実測図 ……72
Fig.65 SH107出土遺物実測図 ……73
Fig.66 SH109実測図 ……74
Fig.67 SH109出土遺物実測図 ……75
Fig.68 SB200・201実測図 ……76
Fig.69 SB200・201出土遺物実測図 ……77
Fig.70 SB204出土遺物実測図 ……78
Fig.71 SB204実測図 ……79
Fig.72 SB205・206実測図 ……80
Fig.73 SB205・206出土遺物実測図 ……81
Fig.74 SB207・208実測図 ……82
Fig.75 SB208出土遺物実測図 ……82
Fig.76 SB209実測図 ……83
Fig.77 SB209・211・22出土遺物実測図 84
Fig.78 SB211・212実測図 ……85
Fig.79 SB213実測図 ……85
Fig.80 SB213出土遺物実測図 ……86
Fig.81 SB215実測図 ……85
Fig.82 SB216実測図 ……87
Fig.83 SB216出土遺物実測図 ……88
Fig.84 SB217・218・219・220実測図 …89
Fig.85 SB219出土遺物実測図 ……90
Fig.86 SB221・222・223実測図 ……91
Fig.87 SB223実測図 ……92
Fig.88 SE104実測図 ……93
Fig.89 SE104出土遺物実測図1 ……94
Fig.90 SE104出土遺物実測図2 ……95
Fig.91 SE105実測図 ……96
Fig.92 SE104出地遺物実測図1 ……97
Fig.93 SE104出地遺物実測図2 ……97
Fig.94 SE106・108実測図 ……98
Fig.95 SE106出土遺物実測図 ……98
Fig.96 SE108出土遺物実測図 ……99
Fig.97 SE122実測図 ……100
Fig.98 SE122出土遺物実測図 ……101
Fig.99 SE160実測図 ……102
Fig.100 SE160出土遺物実測図 ……102
Fig.101 SE193実測図 ……103
Fig.102 SE193出土遺物実測図1 ……103
Fig.103 SE193出土遺物実測図2 ……104
Fig.104 SK137実測図 ……105
Fig.105 SK137出土遺物実測図 ……106
Fig.106 SK125実測図 ……106
Fig.107 SK125出土遺物実測図1 ……107
Fig.108 SK125出土遺物実測図2 ……108
Fig.109 SK135・136実測図 ……109
Fig.110 SK135出土遺物実測図 ……110
Fig.111 SK136出土遺物実測図 ……111
Fig.112 SK176・177実測図 ……122
Fig.113 SK176出土遺物実測図 ……113
Fig.114 SK177出土遺物実測図 ……114
Fig.115 SK183実測図 ……115
Fig.116 SK183出土遺物実測図 ……115
Fig.117 SR150・152・153・154・156
実測図 ……117
Fig.118 SR150・153・154・156実測図 118
Fig.119 SD101土層断面実測図 ……119
Fig.120 SD101・102出土遺物実測図 …119
Fig.121 SD178出土遺物実測図 ……120
Fig.122 SX168実測図 ……121
Fig.123 SX168出土遺物実測図 ……121

Fig.124　J 2 区出土遺物実測図1 ……122
Fig.125　J 2 区出土遺物実測図2 ……123
Fig.126　J 3 区主要遺構配置図 ……124
Fig.127　J 3 区遺構配置図 ……125～126
Fig.128　SE318実測図 ……127
Fig.129　SE318出土遺物実測図 ……128
Fig.130　SE319実測図 ……129
Fig.131　SE319出土遺物実測図 ……130
Fig.132　SE320実測図 ……131
Fig.133　SE320出土遺物実測図1 ……131
Fig.134　SE320出土遺物実測図2 ……132
Fig.135　SE322実測図 ……133
Fig.136　SE322出土遺物実測図 ……134
Fig.137　SK328土壙実測図 ……135
Fig.138　SK328出土遺物実測図 ……136
Fig.139　SK323土壙実測図 ……137
Fig.140　SK323出土遺物実測図 ……137
Fig.141　SK310・311実測図 ……138
Fig.142　SK310・311出土遺物実測図 …139
Fig.143　方形区画溝実測図 ……140
Fig.144　SD313・317出土遺物実測図 …141
Fig.145　SD308土層断面実測図 ……141
Fig.146　SD308出土遺物実測図 ……142
Fig.147　SD309出土遺物実測図 ……142
Fig.148　SD321出土遺物実測図 ……143
Fig.149　P3001土器埋納遺構実測図 ……143
Fig.150　P3001出土遺物実測図 ……144
Fig.151　J 3 区出土遺物実測図 ……145
Fig.152　J 4 区主要遺構配置図 ……146
Fig.153　J 4 区遺構配置図……147～148
Fig.154　SB439実測図 ……149
Fig.155　SE403実測図 ……150
Fig.156　SE403出土遺物実測図 ……150
Fig.157　SK404実測図 ……151
Fig.158　SK404出土遺物実測図 ……151
Fig.159　SK412実測図 ……152
Fig.160　SK413実測図 ……152
Fig.161　SK413出土遺物実測図 ……153
Fig.162　SK420実測図 ……154
Fig.163　SK420出土遺物実測図1 ……155
Fig.164　SK420出土遺物実測図2 ……156
Fig.165　SK425実測図出土遺物実測図 …157
Fig.166　SK401実測図 ……158
Fig.167　SK401出土遺物実測図 ……159
Fig.168　SK405実測図 ……160
Fig.169　SK406実測図 ……160
Fig.170　SK405・406出土遺物実測図 …161
Fig.171　SK407実測図 ……161
Fig.172　SK407出土遺物実測図 ……162
Fig.173　SK408実測図 ……163
Fig.174　SK408出土遺物実測図 ……164
Fig.175　SK421・424実測図 ……165
Fig.176　SK421出土遺物実測図 ……165
Fig.177　SK433実測図 ……166
Fig.178　SK433出土遺物実測図 ……166
Fig.179　方形区画溝実測図 ……167
Fig.180　SD410出土遺物実測図 ……168
Fig.181　縄文土器実測図 ……170
Fig.182　方形区画溝比較図 ……171

図版目次

PL.1-1　J 1 区全景西から ……175
PL.1-3　J 1 区西側西から ……175

PL.1-4　J１区中央東から ……175
PL.1-5　SH０１１北から ……175
PL.1-5　SH１１２北から ……175
PL.2-1　SH０１４東から ……176
PL.2-2　SH０１６東から ……176
PL.2-3　SH０２２南から ……174
PL.2-4　SH０２４西から ……176
PL.2-5　SD００１南から ……176
PL.2-6　SH０２５西から ……176
PL.2-7　SK００８東から ……176
PL.2-8　SK０１８東から ……176
PL.3-1　J２区全景北から ……177
PL.3-2　J２区西側南から ……177
PL.3-3　J２区中央南から ……177
PL.3-4　J２区東側南から ……177
PL.4-1　SH１０９南から ……178
PL.4-2　SB２００北から ……178
PL.4-3　SB２０１西から ……178
PL.4-4　SB２０１P１枕木 ……178
PL.4-5　SB２０９北から ……178
PL.4-6　SB２１９P３ ……178
PL.4-7　SB２０４東から ……178
PL.4-8　SB２１１西から ……178
PL.5-1　SB２１５南から ……179
PL.5-2　SB２１８西から ……179
PL.5-3　SB２２３P２ ……179
PL.5-4　SB２１９P４ ……179
PL.5-5　SE１０８南から ……179
PL.5-6　SE１２２南から ……179
PL.5-7　SE１６０西から ……179
PL.5-8　SE１９３南から ……179
PL.6-1　SK１３５西から ……180
PL.6-2　SK１３６東から ……180
PL.6-3　SK１３７北から ……180
PL.6-4　SR１５０北から ……180
PL.6-5　SR１５２西から ……180
PL.6-6　SR１５３南から ……180
PL.6-7　SR154・155・156南から ……180
PL.6-8　SD１０１西から ……180
PL.7-1　J３区全景 ……181
PL.7-2　方形区画全景北から ……181
PL.7-3　方形区画東側西から ……181
PL.7-4　方形区画陸橋部東側 ……181
PL.7-5　SE３１８北から ……181
PL.7-6　SE３２２北から ……181
PL.8-1　SE３１９北から ……182
PL.8-2　SE３１９西から ……182
PL.8-3　SK３１０北から ……182
PL.8-4　SK３１１北から ……182
PL.8-5　SK３２８北から ……182
PL.8-6　SK３２８北から ……182
PL.8-7　SK３２７北から ……182
PL.8-8　P３００１西から ……182
PL.9-1　J４区全景西から ……183
PL.9-2　J４区全景南から ……183
PL.9-3　SD４００南から ……183
PL.9-4　SD４１０西から ……183
PL.9-5　J４区南壁土層 ……183
PL.9-6　SE４０３南から ……183
PL.9-7　SK４０１西から ……183
PL.9-8　SK４０１西から ……183
PL.10-1　SK４０４北から ……184
PL.10-2　SK４０４北から ……184
PL.10-3　SK４０７南から ……184
PL.10-4　SK４０８南から ……184
PL.10-5　SK４２５西から ……184

PL.10-6　SK４２０南から ……184
PL.10-7　SB４３９東から ……184
PL.11-1　078（SH０１１）　……185
PL.11-2　057（SK００５）　……185
PL.11-3　103（SH０１４）　……185
PL.11-4　132（SE０２０）……185
PL.11-5　143（SK０２６）　……185
PL.11-6　226（SE１０４）……185
PL.11-7　243（SE１０５）……185
PL.11-8　272（SE１０８）……185
PL.11-9　450（SK１６１）　……185
PL.11-10 500（SK１７６）　……185
PL.12-1　SE320出土土師器……186
PL.12-2　364（SK１３５）　……186
PL.12-3　SK403出土土師器　……186
PL.12-4　382（SK１３７）　……186
PL.12-5　365（SK１３５）　……186
PL.12-6　SK408出土土師器・瓦器　……186
PL.12-7　SK413出土土師器　……186
PL.12-8　1043(SK４０７）　……186
PL.12-9　533（SK１８３）　……186
PL.12-10 SK401出土陶器・瓦器　……186

凡　例

1．遺構については略記号を用いる。調査区ごとに重複しない連番号をつけ、番号の前に遺構分類記号をつけた。分類は以下のとおり。

ＳＢ：掘立柱建物	ＳＤ：溝	ＳＥ：井戸	ＳＨ：竪穴住居
ＳＫ：土壙	ＳＲ：周溝状遺構	ＳＸ：不明遺構	Ｐ：小穴・柱穴

2．原則として、遺構の測定値はm単位、遺物のそれはcm単位とした。

3．表示した方位は、すべて座標北（G.N）である。

4．容器類の遺物実測図のうち、断面白ヌキのものは縄文土器・弥生土器・土師器・石鍋、黒ヌキは須恵器を表現し、他のものは以下の記号をつけた。

黒色土器Ａ類：Ⓐ	黒色土器Ｂ類：Ⓑ	瓦器：㊎	青磁：㊑
白磁：㊍	磁器：㊌	陶器：㊐	

5．容器類の保存状態のうち、「完存」とは破損の認められない完形状態を示し、「完形」と　は破片の復元によって完形状態にあるものを示す。

6．原則として、容器類の実測図は縮尺1/4で掲載している。

7．遺物の計測値は、収蔵品目録に掲載している。

8．本書に使用した遺物番号は、重複しない連番号とし、収蔵品目録中のＩ種資料目録番号と合致させている。

Ⅰ．序　　説

1．調査にいたる経過

主要県道小城・北茂安線緊急地方道整備事業により、久保泉地区でのバイパス部分の道路新設工事が計画され、佐賀県土木部から平成元年2月2日付で、佐賀市教育委員会に対し開発計画が通知された。当該地区は、村徳永遺跡として周知されており、周辺では農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査が実施され、70,000㎡以上にわたり遺跡の広がりが確認されていた。そのため道路新設工事によって地下の埋蔵文化財が破壊されるおそれを考慮して、県土木部と市教委の間で協議を行い、工事に先立ち埋蔵文化財確認調査を実施することとした。確認調査は、道路新設部分13,515㎡を対象に、平成元年3月27・28日、同年6月8・9日の２期に分けて、市教委が実施した。その結果、路線内の9,000 ㎡について、遺跡の広がりを確認した。

この調査結果を受け、佐賀県教育委員会も交え、県土木部・市教委の間で協議を重ねた。諸般の事情によって遺跡の現状保存は難しく、工事に先立ち、県土木部の委託事業により、市教委が埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を実施することになった。

県土木部からは平成元年度中の調査着手が要望されたが、他に農業基盤整備事業関係の調査等を抱えた市教委の調査体制が整わず、平成2年4月から県土木部の委託事業として調査を開始することで協議がまとまった。

調査は、平成2年4月12日から開始し、同年7月20日にすべての現地調査が終了した。出土遺 物・調査記録の整理作業及び報告書作成は、平成2年6月から平成3年3月まで、佐賀市文化財資料館で行った。

2．調査組織

以下に述べる体制で調査を行った。７月初頭の記録的な集中豪雨等の天候不順により調査上の困難が生じたが、作業員各位の健闘と、多くの人々の協力と激励で、無事に調査が終了したことをここに明記し、感謝したい。

調査主体　佐賀市教育委員会

事務局　佐賀市教育委員会　社会教育課

社会教育課長	古川靖邦
課長補佐兼文化係長	中野和彦
事務吏員	甲木亮一（庶務担当）
	福田義彦・西田巌・前田達男（調査担当）

発掘作業員

杉町スミ子、野中ツタエ、松林キミ子、杉町英子、金崎タキヨ、福田スマ子、山口美枝子、広瀬八重子、広瀬幸子、後藤美智江、村川菊江、生田美代子、原ミチエ、宮地峰子、大野ユキ

エ、成富寿子、江口ケサエ、前山スミエ、木原ツギノ、井上ミツエ、宮地富子、原ケサ代、原ナミ子、角田千代乃、宮永ツヤ子、内村美里、角田絹子、小出香澄、山本初代、友添丸子、原京子、副島カスミ、龍由美子、畑瀬弘、山木江美子、武藤ツルヨ、緒方敏子、古賀主殿、野中マツエ、大林サトコ、武富サチコ、福田トシエ、野中エイコ、福田妙子、小副川富子、亀川すえみ、松本のり子、下村保枝、小林澄子、横尾ますよ、山口美佐子、江下生子、小林美智子、服巻ケイ子、川崎義雄、武富ヨシノ、畑瀬武義、中野俊昭、古川栄子、中村美代子

調査協力

地元各位、佐賀県土木部、佐賀県教育委員会、佐賀県農林部、久保泉土地改良区

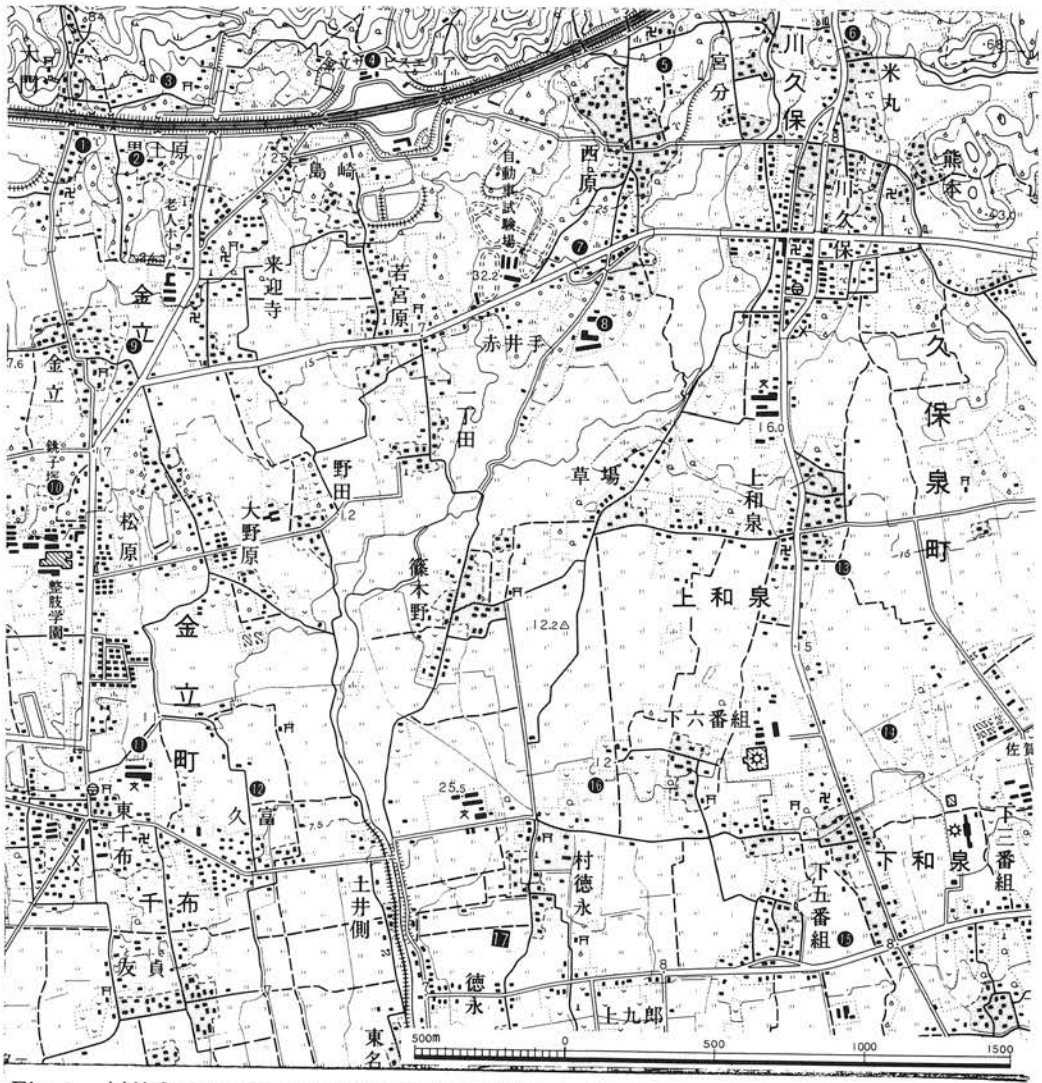


Fig. 1　村徳永遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）

①大門遺跡　②金立古墳群　③黒土原遺跡　④丸山遺跡　⑤西原古墳群　⑥関行丸古墳　⑦大日遺跡　⑧琵琶原遺跡　⑨来迎寺遺跡　⑩銚子塚遺跡　⑪東千布遺跡　⑫久富遺跡　⑬上和泉遺跡　⑭泉三本栗遺跡　⑮立野遺跡　⑯古村遺跡　**⑰村徳永遺跡**

II．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

佐賀市は、佐賀県の東南部に位置し、東は神埼・千代田・諸富町、西は大和・三日月町、北は大和町と接している。北部には、脊振山系が東西に連なり、その南麓には舌状丘陵群が突出し、いくつかの微高地が連なる。さらにその南には沖積平野が広がり、有明海北岸にいたる広大な佐賀平野の一部を形成している。村徳永遺跡は、佐賀市北部の久保泉町に所在し、佐賀市中心部の佐賀市役所から北北東約5kmに位置する。

久保泉町は、西は巨勢川、東は神埼町に接し、南は沖積平野の北部、北は脊振山系にかかる地域で、巨勢川以外は小河川が貫流するだけである。宅地化は進んでおらず、大部分は田・畑等の農地として利用されている。

村徳永遺跡は、舌状丘陵地帯の南側、中位段丘の残存によって形成される、平坦地と微高地に立地している。今回の調査地点の標高は6～7mを測り、北東にむかってやや傾斜がきつくなる。西方約200mには巨勢川が、ほぼ南北にその流路をとる。周辺は、大部分が水田・畑として利用されている。現況では、周囲に広がる水田に大きな起伏はないが、わずかに認められる田面の比高差から、旧地形を推察することができる。調査成果からも、南西方向にのびる数本の谷地形によって、遺跡の広がりが分断されていることがわかる。G・K地区の調査では、こうした谷地形を貫流する小河川の氾濫により、遺跡の一部が撹乱されたり、砂をかぶっていることが確認されている。集落遺跡と小河川の関係は時期的なものを含めよくわかっていない。

2．歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

脊振山麓及びそこから広がる平野北部には遺跡が密集するが、佐賀市域においては発掘調査例は未だ多くはない。ここでは、発掘調査が行われ概要が摑める周辺遺跡について、Fig. 1の範囲で概観したい。

縄文時代遺跡の様相は不明な点が多いが、大門遺跡・来迎寺遺跡・丸山遺跡・黒土原遺跡で調査が行われている。大門遺跡は前期・後晩期土器が出土し、来迎寺遺跡では中後期の土器・石器が出土しているが、調査方法・面積の問題で、どのような性格の遺跡か、詳細はよくわからない。晩期後半の埋葬遺跡としては、丸山遺跡では支石墓群が、黒土原遺跡では支石墓・甕棺群が検出され、当時の墓地のありかたをよく示している。こうした埋葬遺跡が、どちらの場合も古墳群と重複して検出された事実は、遺跡占地の視点から興味深い問題を提起している。

弥生時代の集落遺跡としては、琵琶原遺跡・立野遺跡・泉三本栗遺跡・久富遺跡で調査が行われている。琵琶原遺跡では、約1,700㎡の調査範囲に、後期から終末にかけて53棟の竪穴住居が密集した状態で検出されている。当該期の大規模集落の存在を予想させるものであり、在地

系のものとは思われない土器も少なからず出土している。立野遺跡は、中期に属するらしい竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構が検出され、掘立柱建物のうち8棟は棟持柱らしき柱穴を伴う。泉三本栗遺跡では、前期末から中期にかけての竪穴住居が検出されている。久富遺跡は、中期初頭に属するらしい竪穴住居が検出されている。また、金立町千布で、竪穴住居発見の報があるが、昭和30年代の応急的な調査で、その詳細は不明である。埋葬遺跡としては、東千布遺跡・黒土原遺跡の調査が行われている。東千布遺跡では前期末から中期にかけての甕棺墓群が調査されている。黒土原遺跡では、板付II式の小壷を伴う土壙墓が検出されている。その他に、久保泉町篠木野の集落内で、甕棺墓（成人棺）が発見されているが、その詳細は不明である。

古墳時代遺跡では、銚子塚や関行丸古墳等の前方後円墳をはじめ大門・金立・西原・丸山古墳群等多くの古墳が存在する。その大部分は、後期の群集墳である。昭和30年代に行われた久保泉・金立地区の古墳群の調査の詳細は、現在ではよくわからない。近代的方法による古墳の調査例は丸山遺跡・黒土原遺跡だけである。熊本山の山頂からは舟形石棺が出土していて、前方後円墳であった可能性が高い。西原にも前方後円墳が存在していたらしく、盾形石製品が出土している。集落遺跡の調査例は少なく、琵琶原遺跡・西原遺跡・泉三本栗遺跡で数棟の竪穴住居が検出された程度である。今後は、後期の群集墳に対応する時期の集落の調査が進展することが望まれる。

古代遺跡については、大日遺跡・上和泉遺跡・泉三本栗遺跡・古村遺跡で、集落の一部が調査されている。大日遺跡では、奈良時代の掘立柱建物群が検出されている。上和泉遺跡では、平安時代前半の良好な一括資料が出土している。他に琵琶原遺跡では、奈良時代の刻書・墨書土器が出土していて、「稲主」・「五月」と読める。

中世遺跡は、近年調査例が増え始め、立野遺跡や範囲外であるが本村遺跡等の調査が行われている。特に本村遺跡では、一辺40～70mの方形区画の溝の内部に、掘立柱建物群・井戸・土壙等を伴うものが、2基検出されていて、注目される。こうした方形区画の溝は、村徳永遺跡においても検出されており、今後の調査例の増加とその分析により、中世集落のありかたが示されていくものと期待される。しかしながら、この地域に関して残存している文献資料はごく少なく、中世遺跡に対する文献学上の位置付けが今後の課題となろう。

近世遺跡に関しては、遺構がほとんど検出されておらず、その概要は不明である。

(2) 村徳永遺跡の各調査地点

村徳永遺跡は、農業基盤整備事業に伴い昭和63年度に発掘調査が開始され、現在までに3ヵ年、10地点で調査が行われた。ここでは、これまでに調査が行われた地点の調査成果について、概観したい。

A・B・C地区　白鬚神社の北方約50mに位置し、3地点とも近接する調査区である。平安

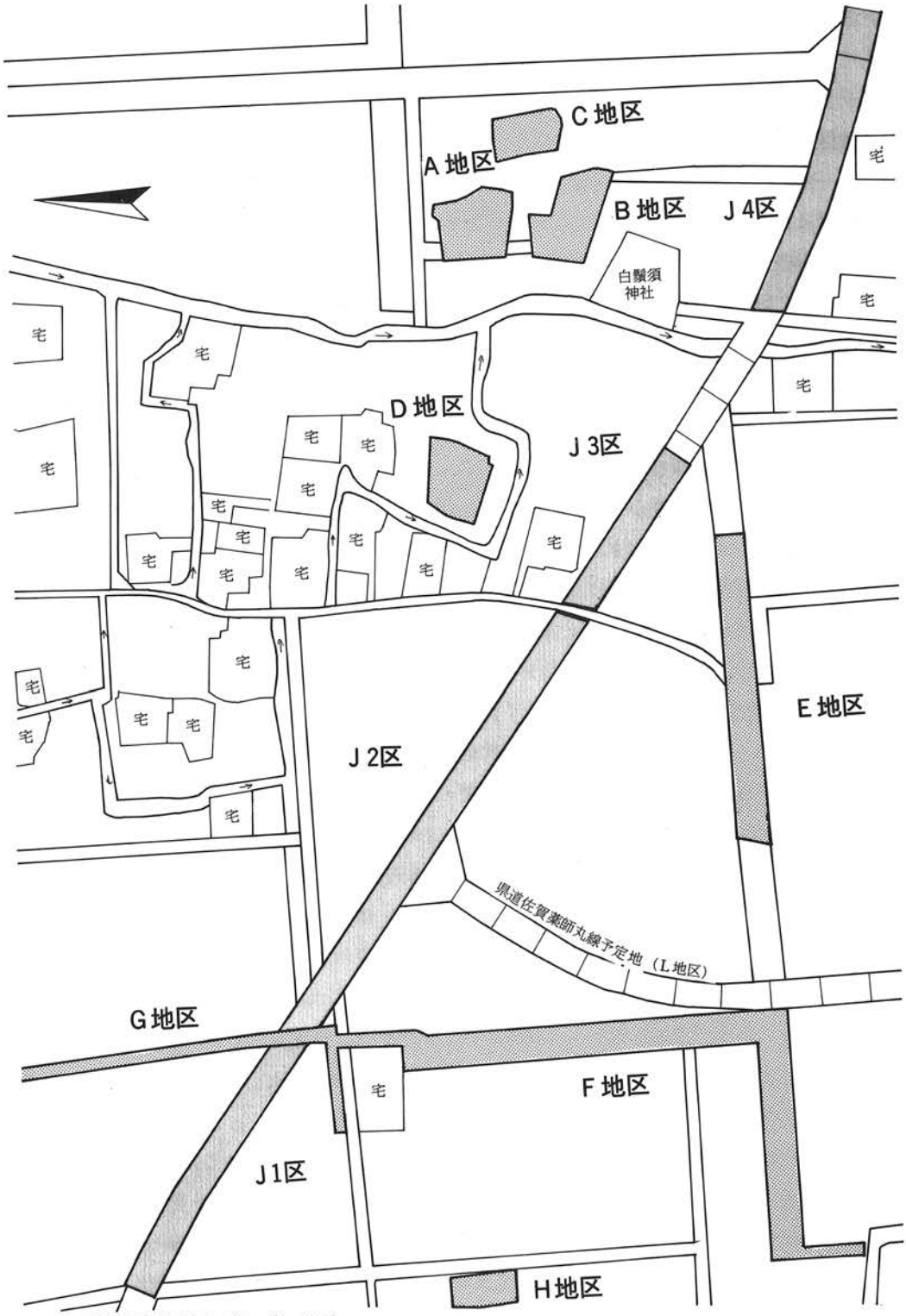


Fig.2　調査区設定図（1／2,000）

時代後半から鎌倉時代にかけての遺跡であり、掘立柱建物・土壙・井戸・溝・土壙墓等が検出されている。A・B地区で、ほぼ直角に曲がる溝のコーナー部分が検出されている。詳細は、佐賀市文化財調査報告書第24・26集に収録している。

D地区　白鬚神社の北西、A・B・C地区の西方50mに位置している。遺構の大部分は中世に属し、一部に弥生時代中期や平安時代の遺構がある。調査区が狭い割に遺構密度が高い。主な検出遺構は、土壙・井戸・溝・掘立柱建物である。調査区中央で検出されたSD００１については、A・B地区でも類似する溝が検出されていて、位置・時期を考えると同一の溝である可能性が指摘されている。本村遺跡で検出されたような方形区画の溝になることも考えられる。詳細は、佐賀市文化財調査報告書第28集に収録している。

E地区　D地区の西南約150m、今回調査したJ3区の南方50mに位置する。弥生時代と平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。弥生時代に属する主な遺構は、甕棺墓（小児棺）・土壙・井戸で、平安時代から鎌倉時代にかけての時期に属する主な遺構は、掘立柱建物・井戸・土壙・溝が検出された。古代後半から中世にかけての時期に属する遺構は、J3区と同一遺跡のものとしてとらえられ、SD０４０はＪ３区で検出された方形区画溝と対応する可能性がある。詳細は、佐賀市文化財調査報告書第32集に収録している。

F・G地区　D地区の西方約250m、E地区の西方約70mに位置し、北端は金泉中学校の南までのびる。南のF地区と北のG地区を合わせて南北約460mの長大な調査区である。G地区と今回調査したJ地区は交差していて、F・G地区とＪ１・Ｊ２区とは同一の遺跡である。検出された遺構は、縄文時代晩期から平安時代にわたるが、大部分の遺構は弥生時代中期後半から後期前半の時期に属する。検出された主な遺構は、掘立柱建物・竪穴住居・周溝状遺構・溝・井戸・土壙等である。掘立柱建物は約70棟が検出され、F地区南の東西部分とG地区の西端に集中し、竪穴住居は22棟が検出され、その多くはG地区に集中する。周溝状遺構の分布は、F地区の北側に偏る。また井戸からは、多数の木器・木製品が出土している。掘立柱建物群と竪穴住居群の分布域の偏りは、集落内での掘立柱建物と竪穴住居の占地の様相を示唆し興味深い。詳細は、佐賀市文化財調査報告書第32集に収録している。また、G地区の周辺の水田には、20年ほど前に支石墓が存在していたらしい。水田を掘削中に発見された。地元での聞き取りによれば、掌石は４個の支石によって支えられ、その下に刻目突帯を有する土器が納められていたとのことである。掌石は、現在、久保泉小学校内に記念碑として、再利用されている。

H地区　F地区の西方約100mに位置している。全体に削平を受けていて、残存状況は良好でなかった。検出した遺構は全部弥生時代のもので、主な遺構は掘立柱建物・竪穴住居・井戸・甕棺墓（小児棺）などである。詳細は、佐賀市文化財調査報告書第32集に収録している。

K地区　G地区北端から北西約500m、金泉中学校の西方に位置している。検出した遺構は、弥生時代から室町時代にわたるが、弥生時代に属する遺構が多い。主な遺構は竪穴住居・土壙・

井戸・溝（川）等である。F・G地区の弥生時代遺跡とは、やや様相が異なる。古式の須恵器を伴う竪穴住居も検出されている。平成３年度に報告書刊行予定。

こうした各調査地点の調査成果と今回のJ地区の成果とを合わせて考えると、村徳永遺跡として括られている範囲は、現在までのところ二つ以上の遺跡の集合であることが見て取れる。F地区とE地区の間には遺構の分布しない谷地形の部分があり、今回のJ2区とJ3区の間にも同様の谷地形が確認されているので、西側の弥生時代を主体とする遺跡と、東側の中世を主体とする遺跡に、分断されるものと考えられる。

参考・引用文献

佐賀市教育委員会	『大門遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第９集	昭和48年
佐賀市教育委員会	『琵琶原遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第13集	昭和56年
佐賀市教育委員会	『東千布・久富遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第15集	昭和60年
佐賀市教育委員会	『泉三本栗遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第18集	昭和62年
佐賀市教育委員会	『黒土原遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第19集	昭和62年
佐賀市教育委員会	『上和泉遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第20・21集	昭和63年
佐賀市教育委員会	『立野・村徳永遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第24集	平成元年
佐賀市教育委員会	『大日遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第25集	平成元年
佐賀市教育委員会	『村徳永遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第26集	平成元年
佐賀市教育委員会	『来迎寺遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第27集	平成２年
佐賀市教育委員会	『古村遺跡ほか』	佐賀市文化財調査報告書第28集	平成２年
佐賀市教育委員会	『本村遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第28・29集	平成２年
佐賀市教育委員会	『村徳永遺跡』	佐賀市文化財調査報告書第28・32集	平成２年
佐賀市教育委員会	『佐賀市金立地区久保泉地区古墳群』		昭和42年
佐賀市教育委員会	『銚子塚』		昭和60年
佐賀県教育委員会	『佐賀市関行丸古墳』	史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯	昭和30年
佐賀県教育委員会	『久保泉丸山遺跡』	佐賀県文化財調査報告書第84集	昭和61年

III. 調査の概要

1. 調査区の名称

今回の村徳永遺跡の発掘調査は、県道小城北茂安線バイパス部分の新設に伴うもので、その路線内に広がる調査区をJ地区と総称している。実際の遺跡の広がりは、II章で記述したように谷地形や、あるいは現況の道路や水路で分断されている。したがって、調査を行うにあたり便宜上、さらにJ地区を4個の調査区に細分した。以後、調査区を総称する場合はJ地区とし、各調査区はそれぞれ西からJ1区・J2区・J3区・J4区と呼称する。

2. 調査の方法

発掘調査は、遺物包含層・遺構面上層の20～120cmの表土の除去作業から開始した。表土の除去・運搬は、バックフォー・ブルトーザー・キャリーダンプ等の機械力による。J2区・J1区・J3区・J4区の順で行った。J2区では排土置場が遠く、排土の運搬には難渋した。

表土除去後、人力による掘削及び記録作業に入った。

調査区全面に国土座標第II系を基準として、5m方眼の測量杭を設定した。この5m方眼の区画は、遺構の記録作業の基本となるもので、1/200の遺構略図の作成・1/20の全体遺構図の基準となり、遺物包含層等の遺物の取り上げ・遺構検出作業の単位とした。方眼の名称は、X＝＋33K400・Y＝－63K900の交点を基準とし、そこから北へAA・AB・AC・・・・、東へ1・2・3・・・として、各区画をAA-1・AB-2・AC-3のように表示した。この区画の表示は、各調査地点間での遺構の関係の把握を容易にするために、D・E・F・G・H地区に用いた表示と一連同一のものとしている。

遺構検出作業が終了した部分から、1/200の遺構略配置図を作成し、遺構番号の設定と遺物の取り上げ等に利用した。検出したすべての遺構は、1/20で完掘状態の全体遺構図に記録されている。全景写真撮影は、バルーン空中写真と組立足場上からの撮影を併用した。特に必要と思われる遺構については、個別に写真撮影を行い、1/5～1/20の個別遺構実測を行った。個別実測の基準点は、1/20の全体遺構図の中に記録している。

検出作業の段階で土壙・井戸と推定された遺構は、半截して土層の堆積状態を確認し、必要と判断した遺構については、土層断面の実測と写真撮影を行い、層位ごとの遺物の取り上げを行った。竪穴住居は、四分法による掘削を原則とし、1ないし2方向の土層断面の観察を行い、床面の確認と基底部の構造を把握することに留意した。必要と判断した場合は、土層断面図を作成している。検出作業の段階で認識された掘立柱建物については、各柱穴上面の埋土を一段掘削し、柱痕跡の把握に努めた。柱痕跡が確認された柱穴についてはその柱心で、確認されなかったものについては柱穴の中心線で半截し、土層断面の観察を行った。必要と判断した場合は土層断面図を作成している。

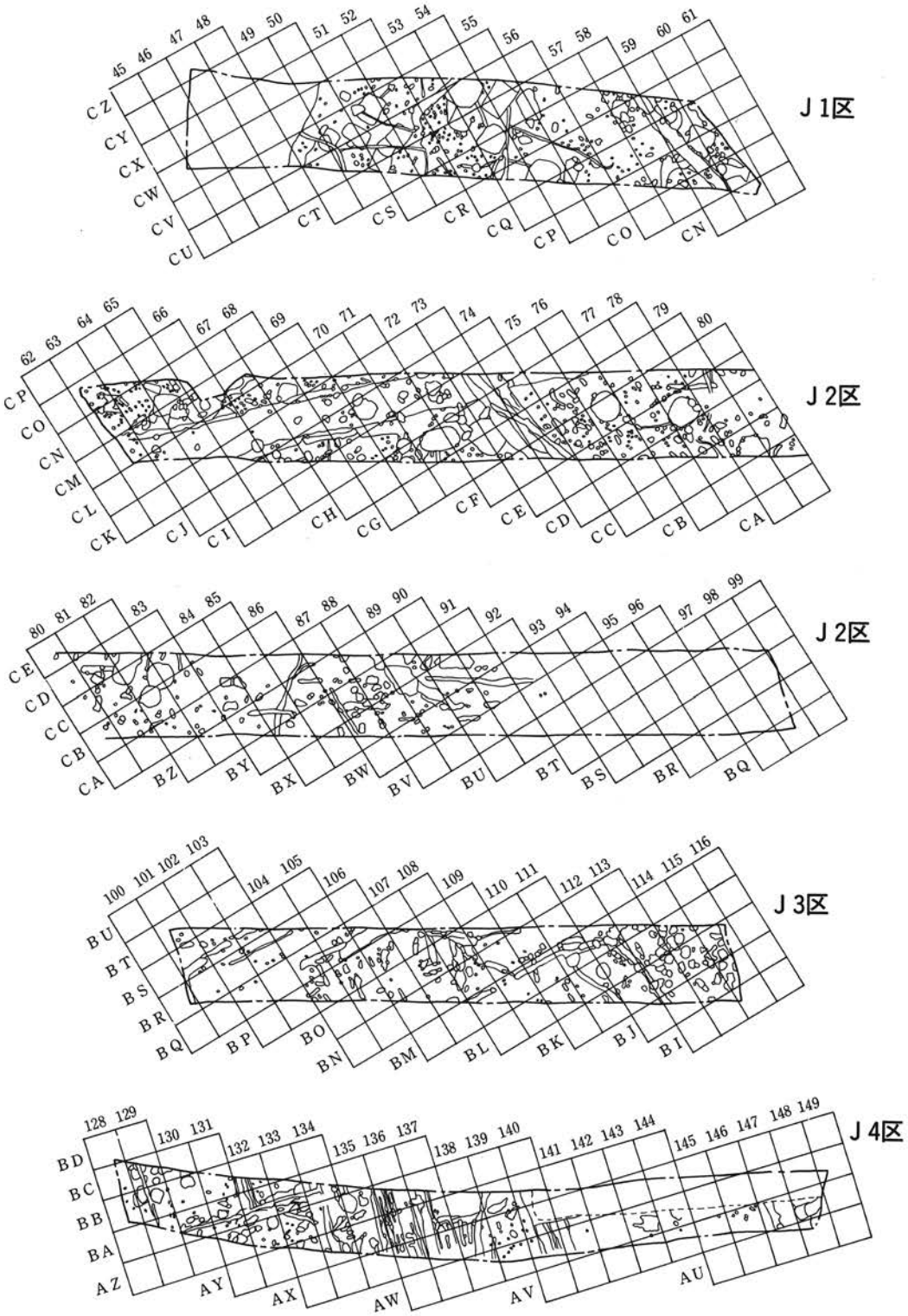


Fig. 3　村徳永遺跡 J 地区方眼区画配置図（1/1,000）

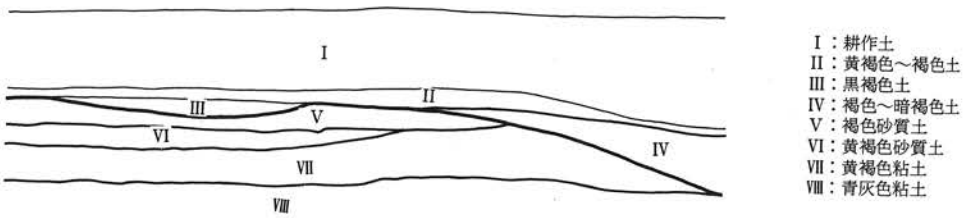


Fig. 4　村徳永遺跡Ｊ地区基本層位模式図

遺構番号は、J1区の検出遺構については0番代（P0001～・S001～）、J2区については掘立柱建物が2番代（SB200～）で他の遺構は1番代（P1001～・S101～）、J3区については3番代（P3001～・S301～）、J4区については4番代（P4001～・S401～）を用いている。

3．J地区の層序

J地区の層序は、調査区のほとんどが開田によって削平されていて、その状態はあまり良くない。基本的には、J2区中央の標高が最も高く、そこから東西にむかい徐々に低くなっているが、基盤面には微妙な起伏がかなりあった。

Fig. 3 に、基本的な層位を示している。Ⅰ層は、厚さ20～60cmの現耕作土である。II層は、厚さ10cmほどの水田の床土で、鉄分・マンガンが沈着している。III層は、厚さ5～20cmで、遺物の細片を含むが、遺物包含層ではなく二次的な堆積によるものだろう。基盤面の凹んだところに、部分的に堆積している。IV層は、遺物包含層で、谷地形の低くなっている部分に堆積している。Ⅴ層以下は、基盤（いわゆる地山）である。

縄文時代以前の遺跡の有無をを確認するために、調査終了間際に、数か所で基盤面以下を掘り込んでみたが、何らの遺物も確認されていない。

4．調査成果の概要

遺構は、Ⅴ層以下の基盤面に、褐色・黒褐色・灰褐色の有機質土が落ち込んだ状態で検出され、その判別は比較的容易であった。

検出された遺構・遺物は、大きく弥生時代・古代・中世・近世の４時期に分かれる。

弥生時代遺跡は、Ｊ１区西端の谷地形の上がりからＪ２区東端の谷地形の落ちにかかる部分まで、連続的に分布している。中期初頭～前半の遺構・遺物も存在するが、大部分は中期後半～後期前半のものである。遺構密度は濃厚で、中期後半～後期前半の時期に属する遺構どうしの切り合い関係も多く、この時期に連続的に集落が営まれたいたことが推察できる。主な検出遺構には掘立柱建物・竪穴住居・周溝状遺構・溝・井戸・土壙がある。遺構の種別によって、分布が異なる。竪穴住居は、Ｊ１区からＪ２区西側に、その分布がまとまっている。掘立柱建物は、弥生時代遺跡全域にその分布が広がっているが、Ｊ２区中央部分で重複関係にあるものが多い。この掘立柱建物群は、隣接するＦ地区・Ｇ地区の調査で、70棟以上が検出されている。不確実

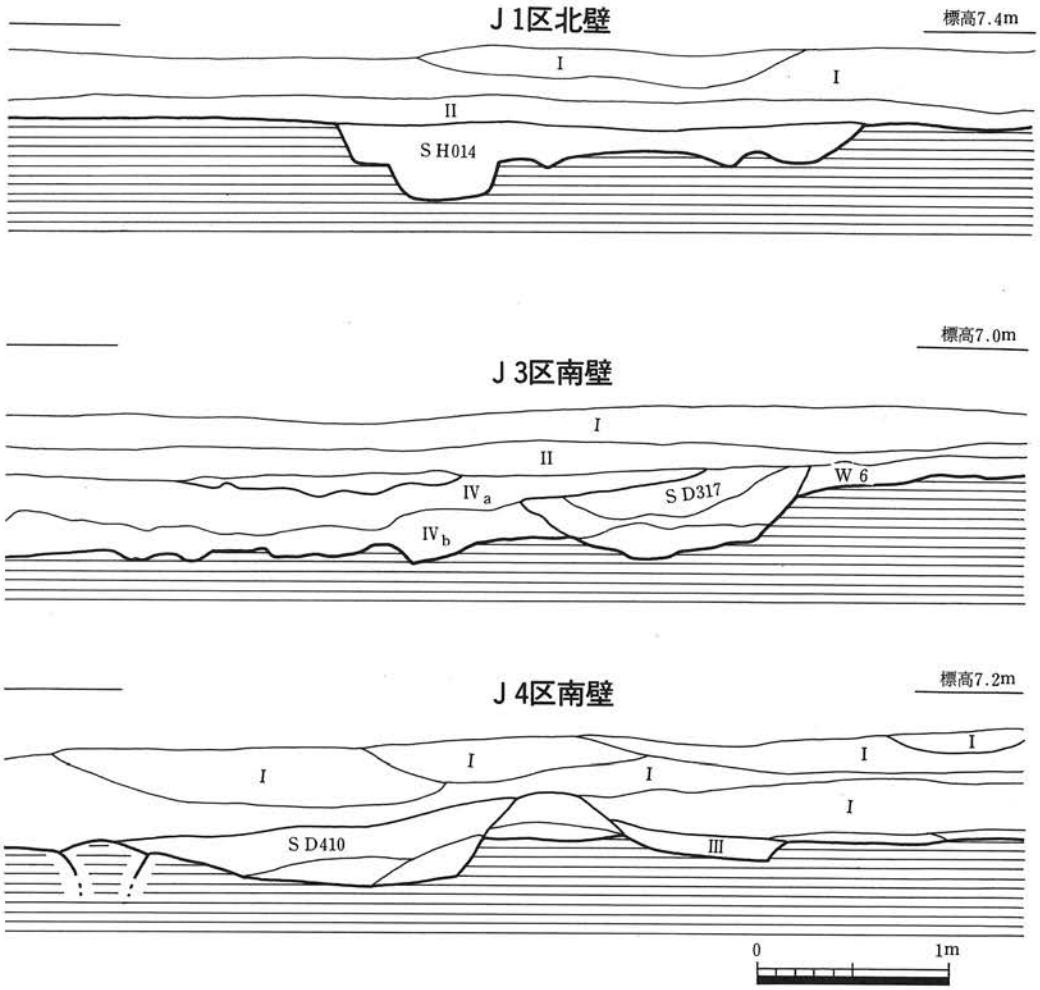


Fig.5　J1区・J3区・J4区土層断面実測図（1/40）

なものを含めると、今回検出されたものと合わせて、約12,000㎡の調査範囲内で、100棟ほどの掘立柱建物が存在している。どの調査区の幅も、狭小であることを考えれば、この地区の弥生時代遺跡にはこれに倍する掘立柱建物の存在が想定できよう。周溝状遺構も、全域に広がっているが、J2区中央部分に分布の集中が認められる。井戸は、J2区西側に、まとまりが認められる。廃棄時に、土器を用いたなんらかの祭祀行為が行われている。出土遺物の大部分は土器破片であるが、石器・土製品・木製品も出土している。遺構出土の良好な一括資料も多い。

古代の遺構は、西と東の二つに分布がわかれる。西側では、J1区西半からJ2区中央まで分布している。遺構密度は低く、まばらに分布している。主な検出遺構は、溝・土壙である。SD101は、浅いが大規模な溝で、東西方向にはしる用水か区画の溝と思われる。出土遺物はほとんどが土器破片で、土壙から良好な一括資料が出土している。東側の遺構は、J3区東半に分

布する。主な検出遺構は、井戸・土壙・土器埋納が行われたと思われる小穴である。この小穴からは良好な一括資料が出土している。J3区東端の谷地形にかかる部分では、この時期の遺物包含層が堆積している。出土遺物は大部分が土器破片で、土製品・石製品も出土している。

中世の遺構は、J3区西端からJ4区中央まで分布している。主な検出遺構は、方形区画溝・掘立柱建物・井戸・土壙である。遺構密度はかなり高く、中世に属する遺構どうしの切り合い関係も多い。J3区東側では、方形区画溝が検出されているが、その内部では掘立柱建物は確認できなかった。井戸からは良好な土器資料が出土している。J3区東端の谷地形にかかる部分では、この時期の遺物包含層が堆積していて、方形区画溝の上面にかぶっていた。出土遺物の大部分は土器破片で、石製品・土製品・木製品も出土している。

近世の遺構は、初頭期に属するもので、J4区西側で検出した。検出遺構は、方形区画溝とそれに伴う土壙である。方形区画内の一部分では土塁状の遺構を伴っていた。土壙からまとまった土器資料が出土している。

他に、各調査区で、近世後半期に属するものかと思われる溝等も検出したが、はっきりしなかったので、撹乱として処理した。

また、各調査区で、不定形な黒灰色のしみ込み状のものが、30個近く検出された。掘り込んでみたところ、掘り方は判然とせず、出土遺物もなかったため、遺構とは認識していない。いわゆる「風倒木」といわれるものか。しかし、弥生時代の遺構に明瞭に切り込まれた状態が観察でき、堆積自体は古いものと判断できる。

5．記述の方法

遺構・遺物の説明は、各調査区に分割して記述する。遺構の種別ごとに遺構番号のはやい順に説明する。遺構の属する時代・時期に分類しての記述は行わない。

遺構の記述については、現地調査で記録されたもののうち、整理作業の段階で主要な（有意な）遺構と判断できたものを記述している。小穴・柱穴は掘立柱建物等の遺構との関連が認められないかぎり記述しない。溝等で、図を掲載することが困難な遺構は、個別には図示しない。遺構図では、切り合い・重複関係を表示するように努めたが、煩雑になる場合は省く。

遺物の記述は、その遺物群が出土した遺構ごとに行う。遺物群が時期的に複合して出土している場合は、各時期のものを掲載するように努めたが、紙幅が足りない場合は、時期的に複合している遺物群のうちから、もっとも新しい時期に属すると判断したものを中心に掲載する。主要遺構以外の遺構・遺物包含層・検出面出土の遺物で特徴的なものは、各調査区ごとにまとめて掲載し、図中に出土遺構・区画を表示する。

Fig. 6　J 1区遺構配置図(1/300)

Ⅳ．J１区の記録

１．遺構の分布状況

J１区では、西端の谷地形の落ちにかかる部分を除いて、全面に遺構が検出されている。この谷地形の埋土は、砂混じりの黒灰色粘性土で、２m以上堆積している。この埋土は弥生時代の遺構を切り込んでいて、堆積自体は新しいものだが具体的な堆積時期は不明である。

検出された遺構は、近世の撹乱を除き、大部分は弥生時代に属するもので、主要な遺構ではSK003・SK008でそれぞれ古墳時代と古代の遺物が出土している。

弥生時代に属する主な検出遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・周溝状遺構・溝である。竪穴住居は調査区全面に分布している。掘立柱建物はほぼ調査区中央にかたよっている。井戸は、調査区中央に１基検出されている。土壙は、調査区全面にまばらに分布している。土壙の性格としては、貯蔵穴の可能性があるもの・土器溜・性格不明のものがある。周溝状遺構は、調査区中央に１基検出されている。溝は、比較的規模の大きなSD001を除いては、溝幅も狭く浅いものである。

弥生時代に属する遺構の大部分は中期末～後期前半の時期に属するものだが、中期初頭～前半にかけての遺物も調査区東側にむかうほど量的に多くなる。

２．竪穴住居と出土遺物

13棟を検出している。平面形は、隅丸長方形をなすものが多く、隅丸方形に近いものもある。規模はおおむね大形・中形・小形の三つに分類でき、それぞれ５・５・３棟ある。大形で平面形が長方形のもののうち１棟（SH014）は、段状部をもつ。全体に残存状態の良好なものはなく、残存壁高は低い。調査区西側にむかうほど、激しく削平されている。

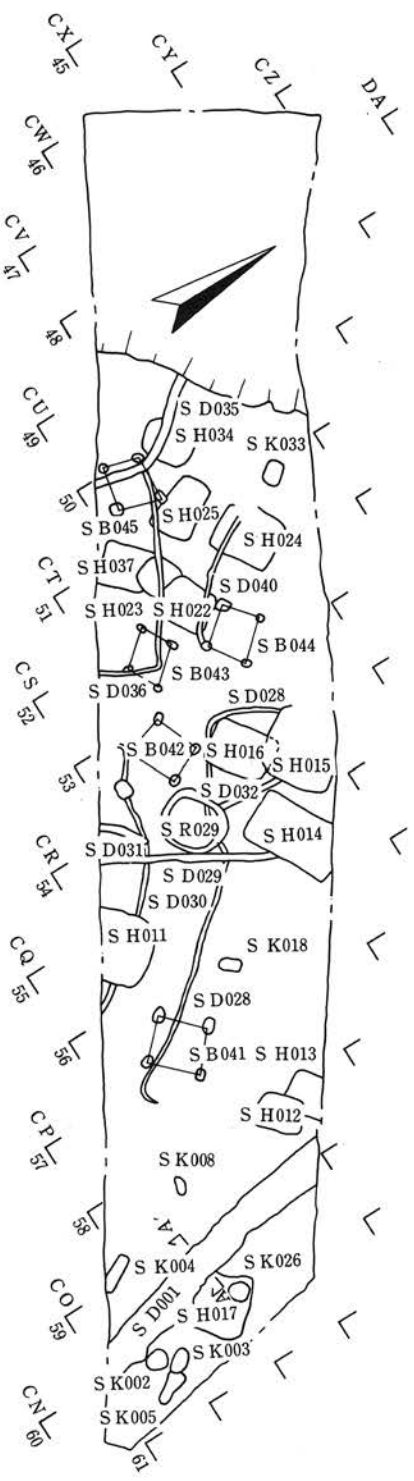


Fig. 7　JI区主要遺構配置図(1/500)

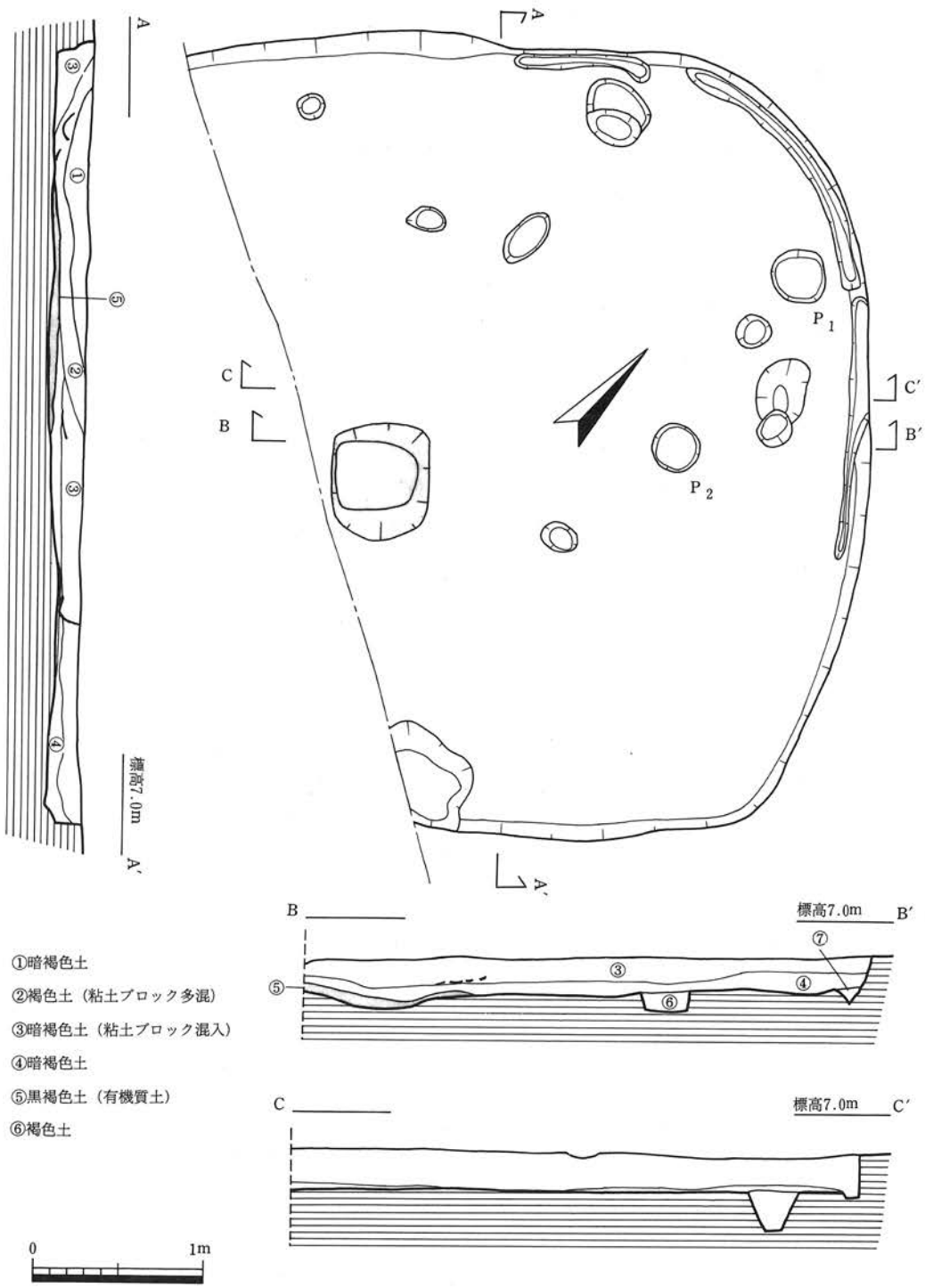


FIg. 8　SH011実測図（1/40）

ＳＨ011竪穴住居（Fig.8）

CR-54・55、CQ-55区画に検出した。検出面の標高は6.8m前後である。SD030と切り合い関係にあり、SH011が後出する。西側の1/4以上が調査区外に展開している。

東側の壁がやや外方に張り出るが、基本的には隅丸正方形の平面形を示すものと思われる。東側壁長4.4m・北側壁長3.5m以上・南側壁長2m以上を計り、残存壁高は20cm前後である。

埋土は４層に大別できる。①～③は、暗褐色土を主体とし地山粘土ブロックを含む自然流入土と思われる。④は、床面上面に堆積した埋土である。⑤は、中央部で面的に広がり、後述する中央のくぼみにも落ち込んでいて、床面の生活汚染の痕跡ではないかと考える。⑥は、後述する壁溝の埋土である。床面は、部分的に砂混じりの白黄色の粘土が張られ、張り床を形成している。

東と北側の壁の内側に沿って、深さ4cm前後の浅い壁溝が、部分的にめぐる。壁溝に伴う板材・杭等の痕跡は認められなかった。中央南側に検出された一辺0.6m前後・深さ5cm程度の浅いくぼみは、炉と考えられるが、焼土・炭・床面の赤変等は認められなかった。Ｐ１あるいは Ｐ２を主柱穴とする２本柱であった確率が大きいと考える。

住居内埋土中から、コンテナバット３箱程度の遺物が出土した。ほとんどは土器片であるが、黒曜石・安山岩製の剝片が少数出土している。遺物の大部分は第３層中（第４層上面）で出土していて、確実に床面上で配置あるいは投棄されたと認められる遺物はない。出土土器群の接合作業の結果、完形に近いものも多く、この出土土器群の大部分はSH011の埋没過程の初期で一括投棄されたものと判断する。

ＳＨ011出土遺物（Fig.9～12）

出土土器群のうち、残存状態のよいもの・特徴的なもの24点を図示した。どれも弥生土器で、甕・壷・高杯・鉢がある。甕の破片が全体の半数以上を占め、完形に近い大破片も多い。

甕（Fig.9～11）　064～073は、大型品である。064は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整で、胴部内面はナデ調整を施す。胴部外面の一部に黒斑が認められる。065は、口縁部はきつい横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施す。胴部内面はナデ調整。色調は明褐色で内面下半は灰黒色を呈する。066は、口縁端部は丸く、厚い。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施す。胴部内面はナデ調整。067は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施す。胴部内面はナデ調整。068は、口縁端部はやや尖る。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整を施す。069は、外面は縦～斜方向のハケ目調整を施す。内面はナデ調整。外面の一部に黒斑が認められる。070は、外面は斜方向のハケ目調整を施す。内面はナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。外面の一部に黒斑が認められる。071は、内外面に斜方向のハケ目調整を施す。胎土は砂粒を多量に含む。外面の一部に黒斑が認められる。072は、外面は斜方向のハケ目調整を施す。

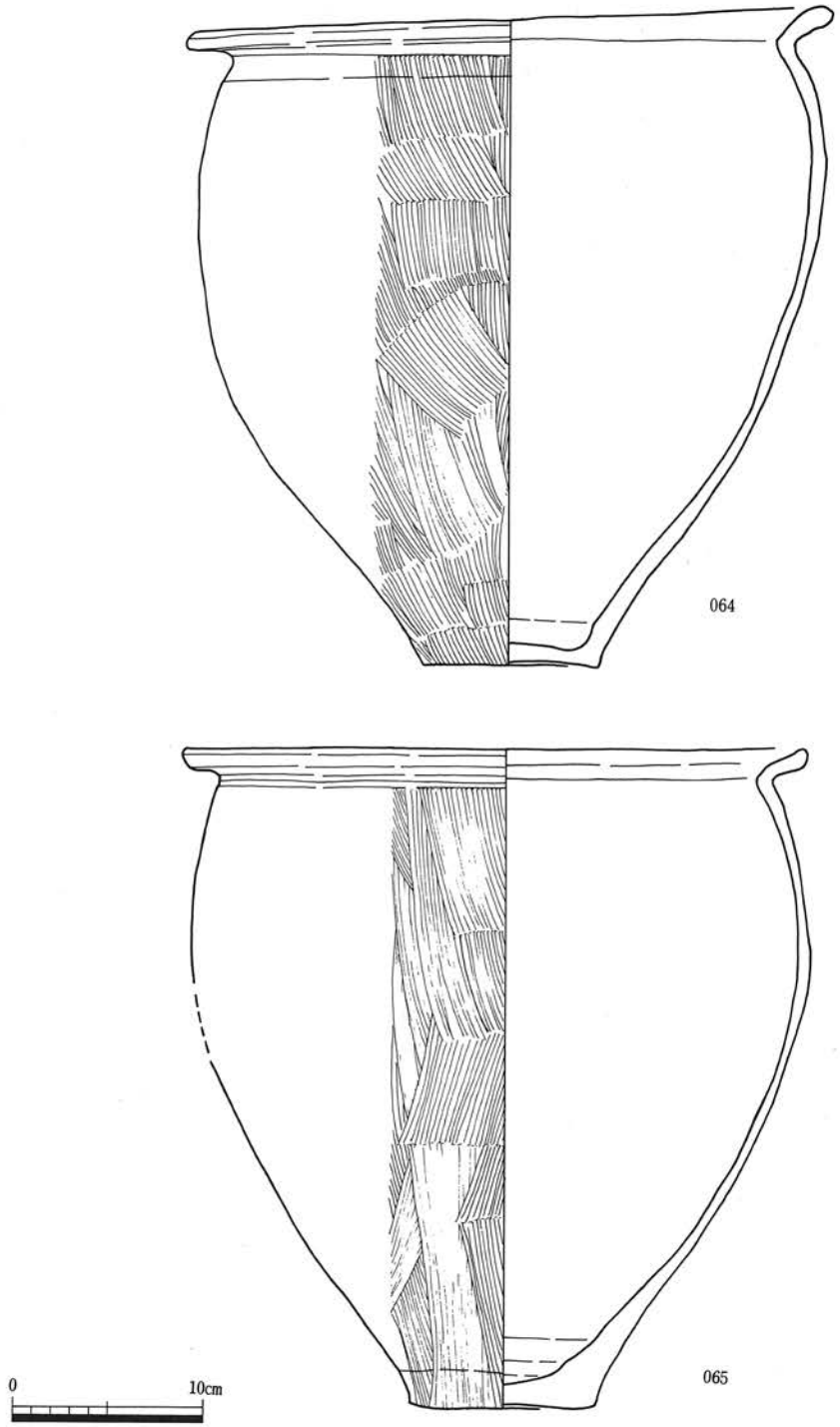


Fig. 9　SH011出土遺物実測図１（1/4）

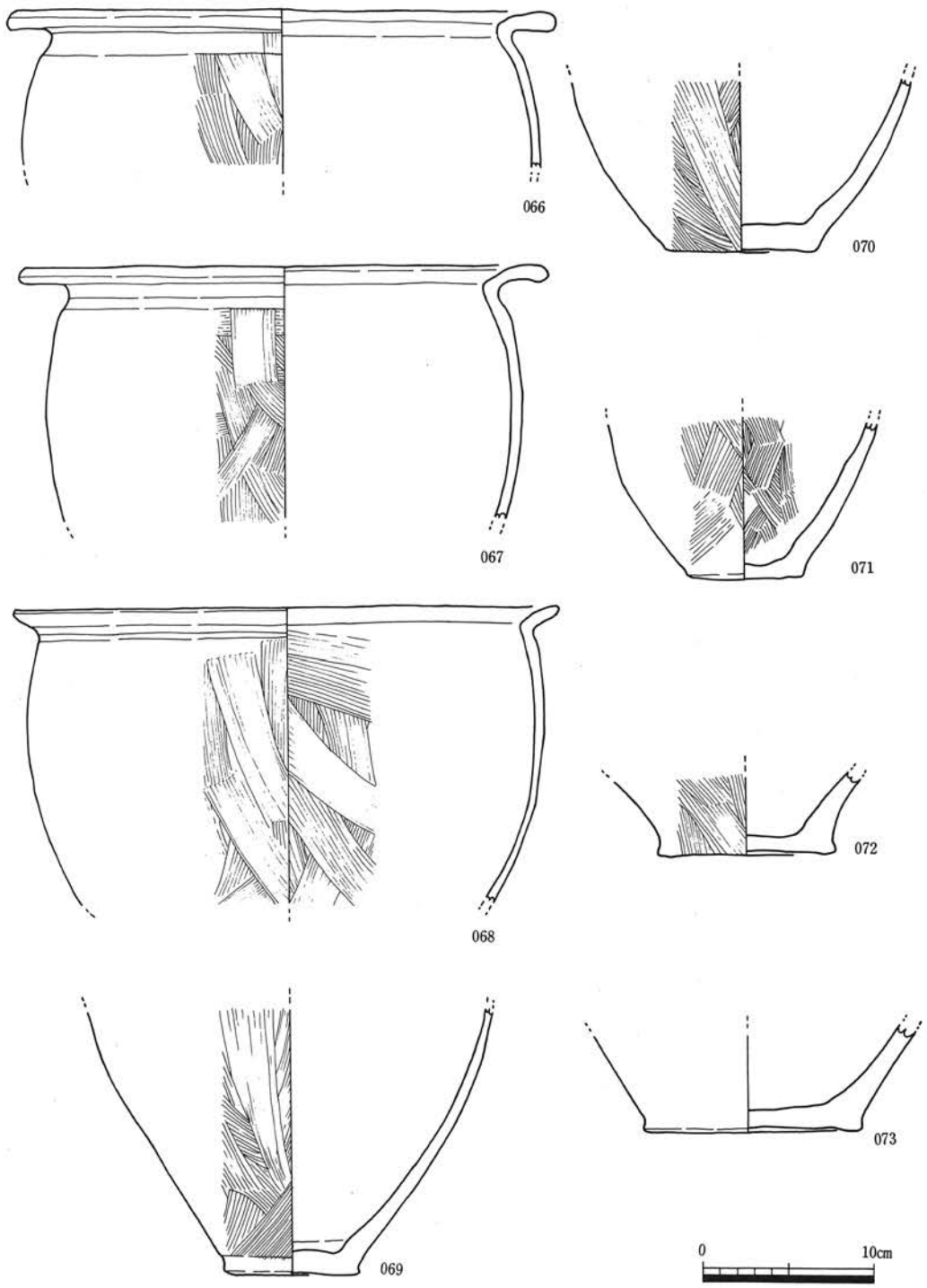


Fig.10　SH011出土遺物実測図２（1/4）

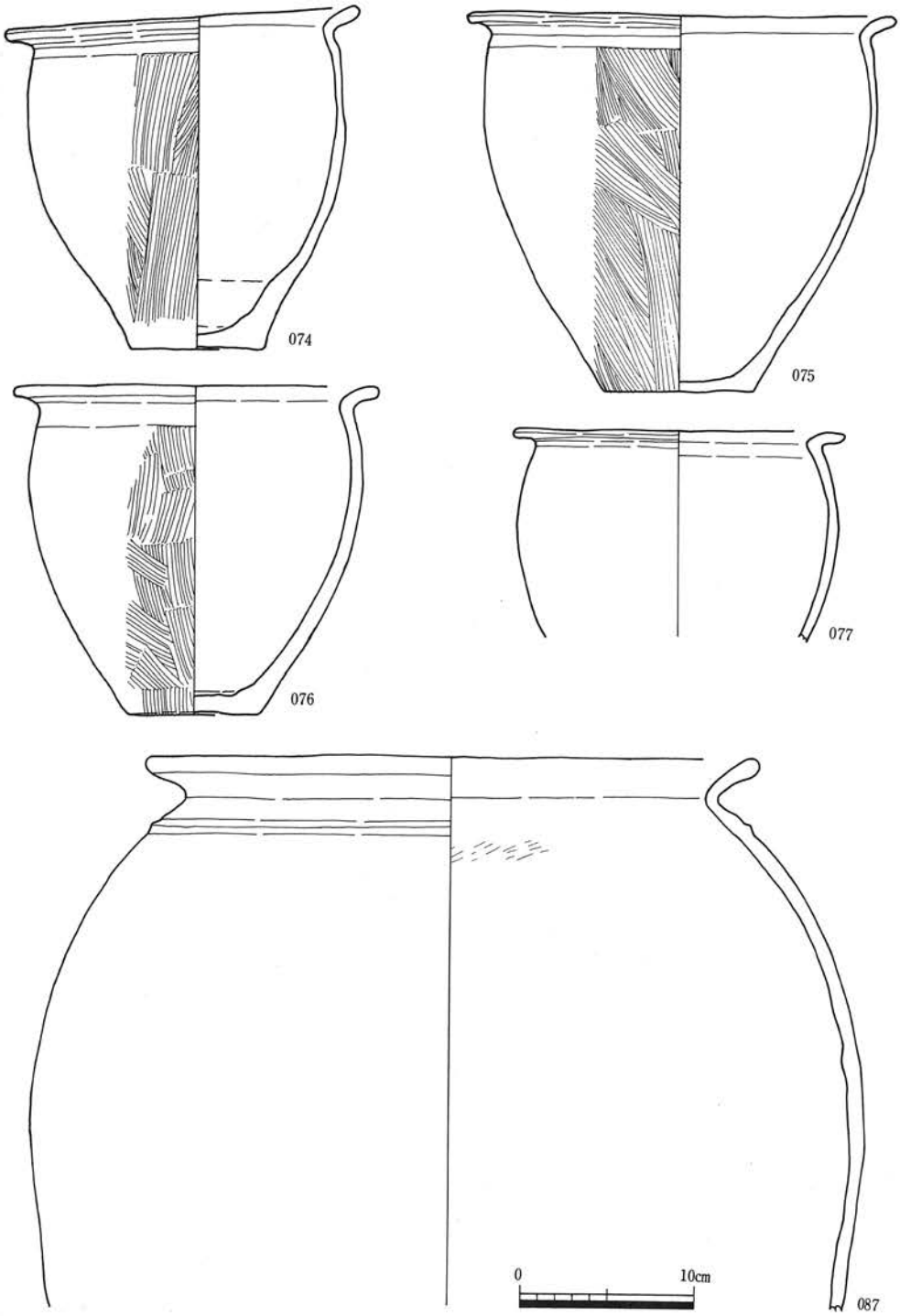


Fig.11　SH011出土遺物実測図３（1/4）

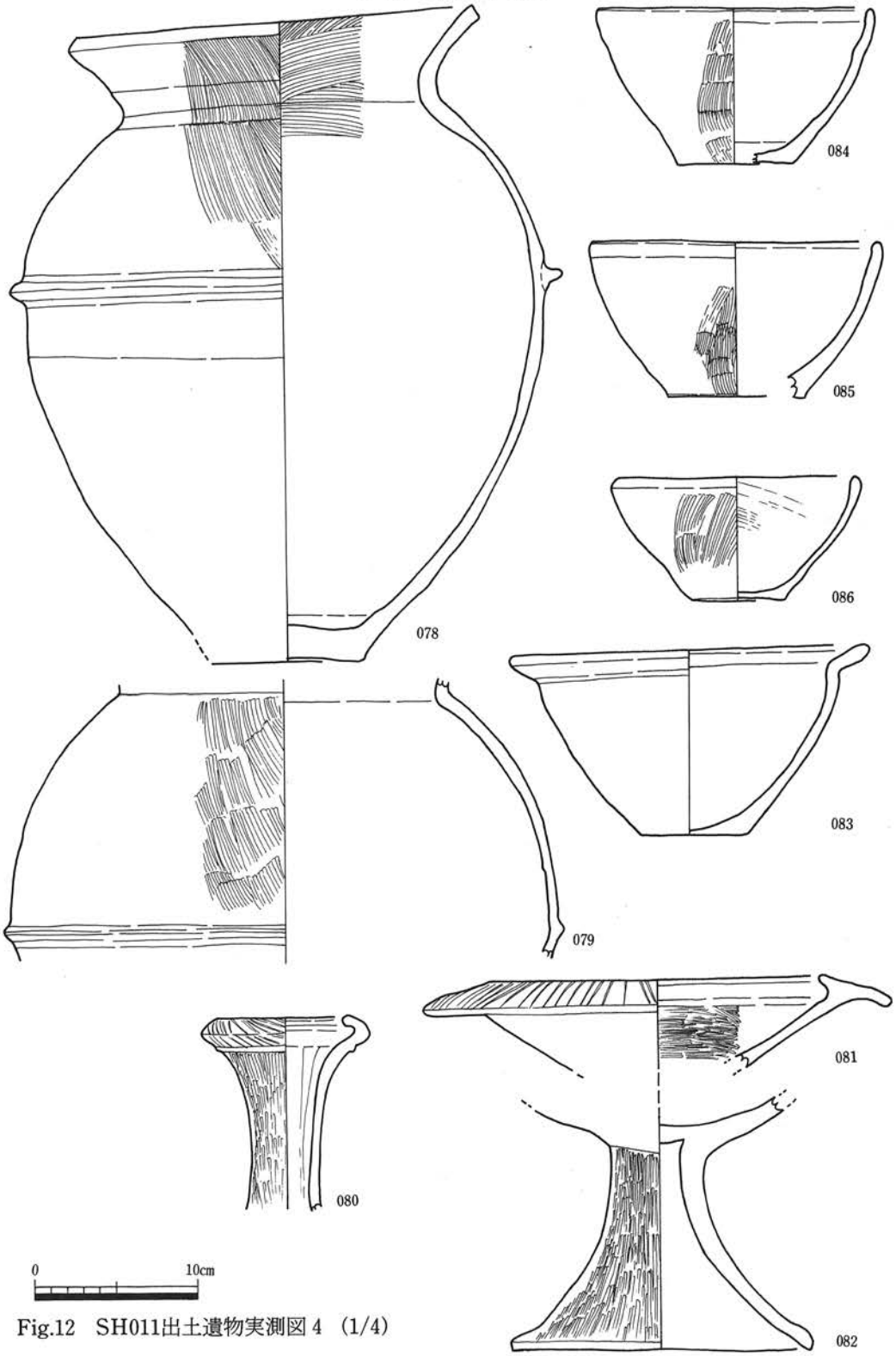


Fig.12　SH011出土遺物実測図４（1/4）

内面はナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。073は、外面はハケ目をナデ消している。内面はナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。

074～077は、小型品である。074は、ほぼ完形に近い。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施し、底部付近をナデ消している。胴部内面はナデ調整。075は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整を施す。胴部内面はナデ調整。外面の一部に黒斑が認められる。076は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施し、口縁下部はハケ目をナデ消す。胴部内面はナデ調整。底部付近に黒斑が認められる。077は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面はハケ目をきれいにナデ消す。胴部内面はナデ調整。

087は、大型の甕の上半部破片。口縁部の下に断面三角状のゆるい突帯をめぐらす。最大胴径は胴部上位にある。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整を施し、突帯の下の部分をナデ消す。胴部内面はナデ調整。

壷（Fig.12／078～080）　078は、胴部上位の最大径の部分で外方に鋭くのびる突帯がめぐる。口縁端部は、やや内方にくぼませて平坦に仕上げている。口縁端部は横ナデ調整。口縁部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整を施す。胴部外面上位は斜方向のハケ目調整で、突帯より下はハケ目をきれいにナデ消している。胴部内面はナデ調整を施す。外面に丹塗りを施している。079は、胴部最大径の部分に断面三角状の突帯をめぐらす。胴部外面は斜～縦方向のハケ目調整を施し、内面はナデ調整。080は、袋状口縁壷の頸部破片で、口縁部はきつく内方におれまがり、稜線を形成する。口縁端部は丸い。稜線の下で突帯状の段をめぐらせている。口縁部外面は段の上方でほそいヘラ状工具による暗文を施し、内面は横ナデ調整。頸部外面はていねいな縦方向のヘラミガキ調整、内面はほそいヘラ状工具による削り痕を有する。外面には丹塗りを施し、口縁部内面の一部に丹こぼれが認められる。胎土は雲母などの砂粒をわずかに含む。

高杯（Fig.12／081・082）　081は、口縁部内面・外端下面は横ナデ調整。口縁部上面では、ほそいヘラ状工具による暗文が放射状に施されている。体部外面は不明瞭であるがヘラミガキ調整と思われ、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。胎土はわずかに砂粒を含む。082は、脚端部付近で肥厚し、端部は内下方におりまげ稜線を形成し、外面は平坦に仕上げてある。杯部外面は不明瞭だが横方向のヘラミガキ調整と思われ、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整をていねいに施し、内面はナデ調整である。杯部内外面と脚部外面には丹塗りが施してある。胎土は砂粒をわずかに含む。

鉢（Fig.12／083～086）　口縁部の形態により、口縁部が外方におれるA類（083）と直口の口縁部を持つB類（084～086）に分類できる。

083は、完形に近い。口縁部は横ナデ調整。体部外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整を施す。内面の一部には黒斑が認められる。084～086の調整は、口縁部内外面横ナデ調整、体部

外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。085は体部外面下位に黒斑がある。

ＳＨ012竪穴住居（Fig.13）

CR・CS-58区画に検出した。検出面の標高は6.7～6.6mである。ＳＨ０１３と明瞭な切り合い関係にあり、SH012が後出する。

北側壁がややせまくなるが、基本的には隅丸長方形の平面形を示す。北側壁長2.7m・南側壁長3.1m・西側壁長2.1m・東側壁長2.3mを計り、残存壁高は5～10cmである。複数の小穴が上面から切り込んでいて、その撹乱のために南東側の隅と床面の遺存状態はよくなかった。

埋土は、地山粘土ブロックを含む褐色土で、自然流入土と思われる。床面には、粘土等が張られた痕跡はなかった。

床面では、壁溝・炉・主柱穴は検出できなかった。

住居内埋土中から、ビニール袋２個程度の土器片が出土した。確実に床面上で配置あるいは投棄されたと認められる遺物はない。埋土の自然流入に伴い流れ込んだ遺物と思われる。

ＳＨ012出土遺物（Fig.14）

２点が図示できる。088は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。全体にススが付着している。089は、外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整。胎土は砂粒を多量に含む。外面に黒班が認められる。

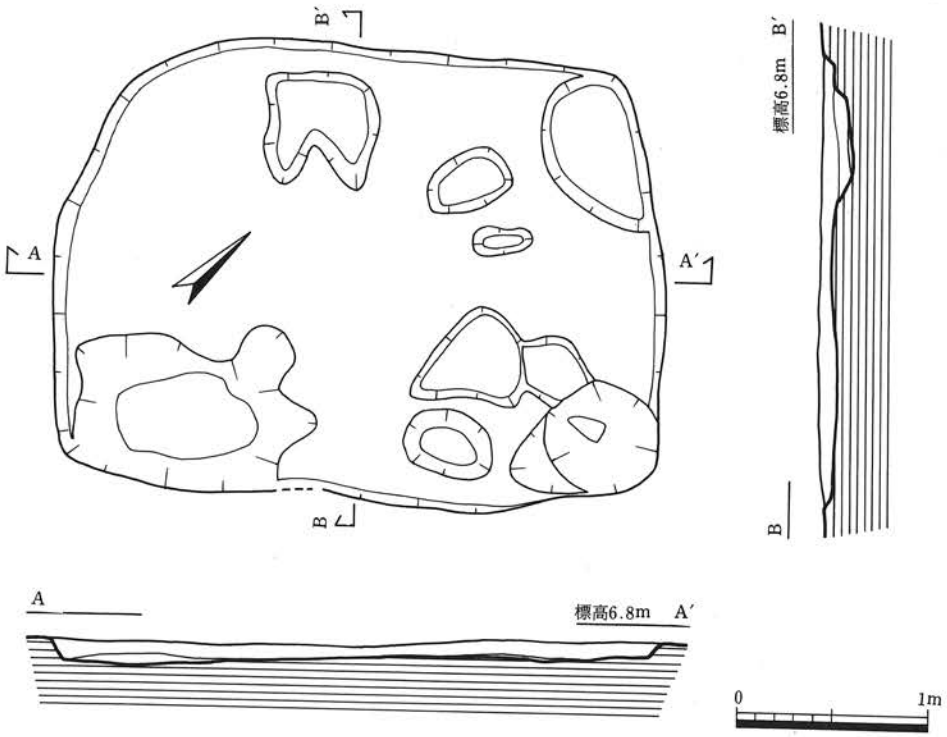


Fig.13　SH012実測図（1/40）

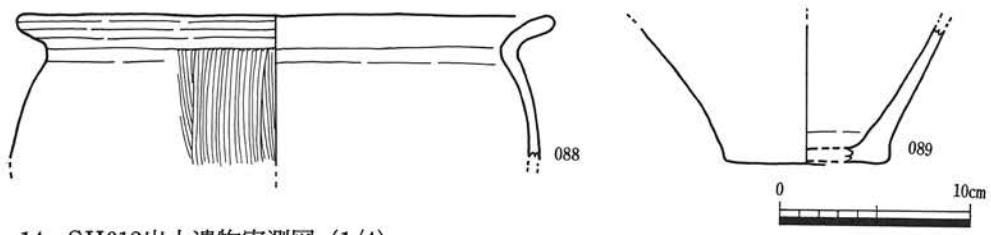


Fig.14　SH012出土遺物実測図（1/4）

S H013竪穴住居（Fig.15）

CS-58区画に検出した。検出面の標高は6.7m前後である。SH012と明瞭な切り合い関係にあり、SH013が後出する。東側の約1/3以上が調査区外に展開し、南西隅の部分をSH012に破壊されている。

短辺2.7m前後の隅丸長方形の平面形が想定できる。北側壁長1.7m以上・南側残存壁長1.3m・西側残存壁長2.2mを計り、残存壁高は5～10cmである。複数の小穴が上面から切り込んでいて、その撹乱のために床面の遺存状態はよくなかった。

埋土は、地山粘土ブロックを含む暗褐色土で、自然流入土と思われる。床面には、粘土等が張られた痕跡はなかった。

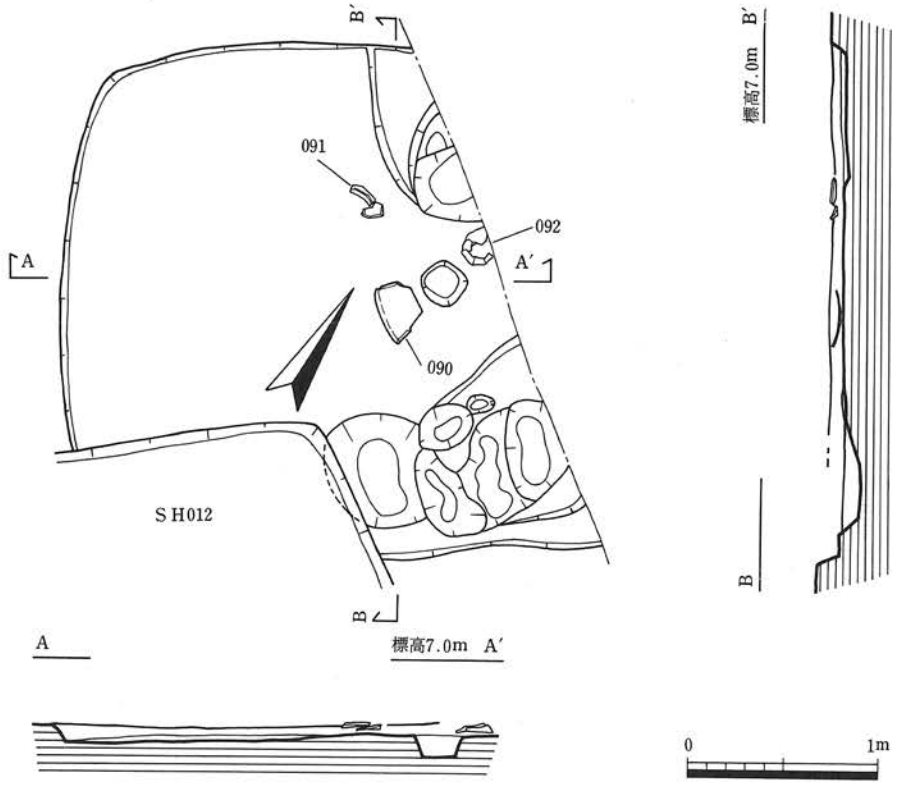


Fig.15　SH013実測図（1/40）

床面では、壁溝・炉・主柱穴は検出できなかった。

住居内埋土中及び床面上から、ビニール袋2個程度の遺物が出土した。ほとんどは弥生土器片である。090は、床面上の出土である。他の遺物は埋土の自然流入に伴い流れ込んだものと思われる。

ＳＨ013出土遺物（Fig.16）

5点が図化できた。090は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。091は、口縁部は横ナデ調整。092は、壷の胴部破片。最大胴径の部分とその上位に、2条の断面M字状の端整な突帯がめぐる。外面は横ナデ調整、内面はナデ調整を施す。外面の一部に黒斑が認められる。093は、口縁端部は丸く肥厚させ、端部外面に刻み目を有する。器壁の遺存状況が悪く調整は不明。器壁はもろい。外面にススが付着する。094は、砂岩系の石材の砥石破片。4面に使用痕があり、各面ともにかなり磨耗している。095は、黒曜石製の石鏃。表面はやや磨耗しているが、完存である。

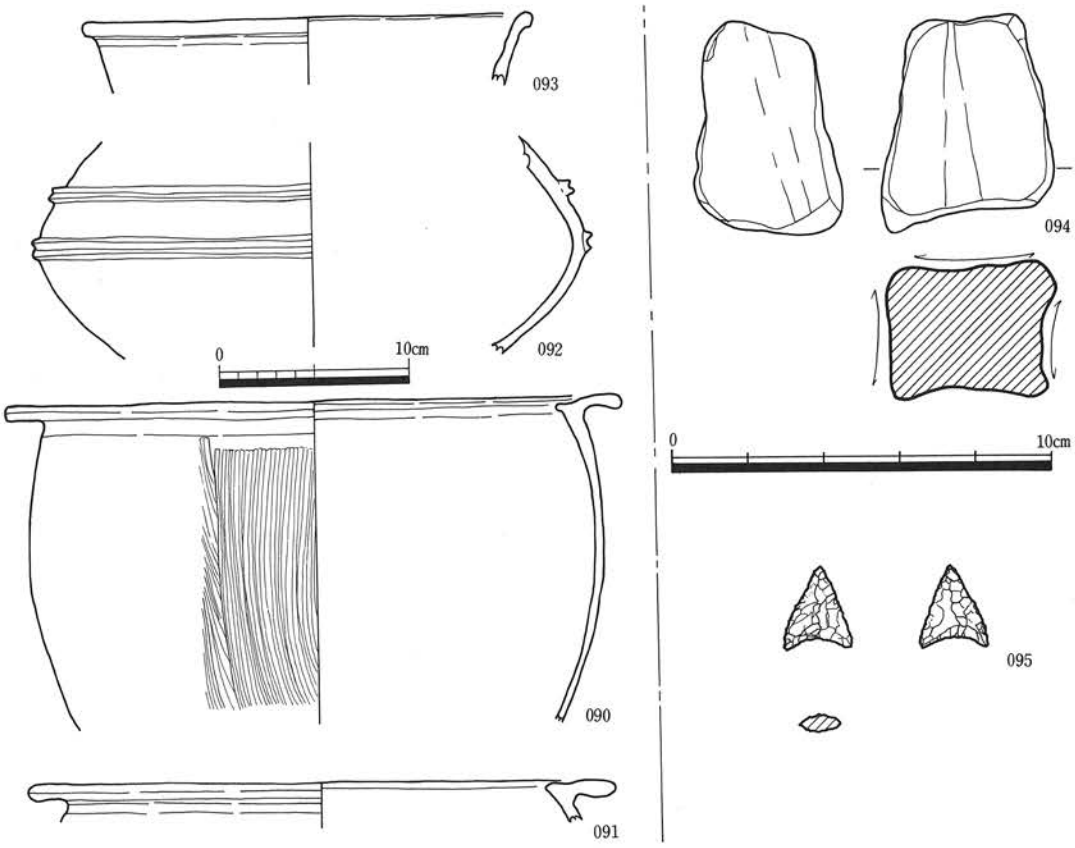


Fig.16　SH013出土遺物実測図（1/4・1/2）

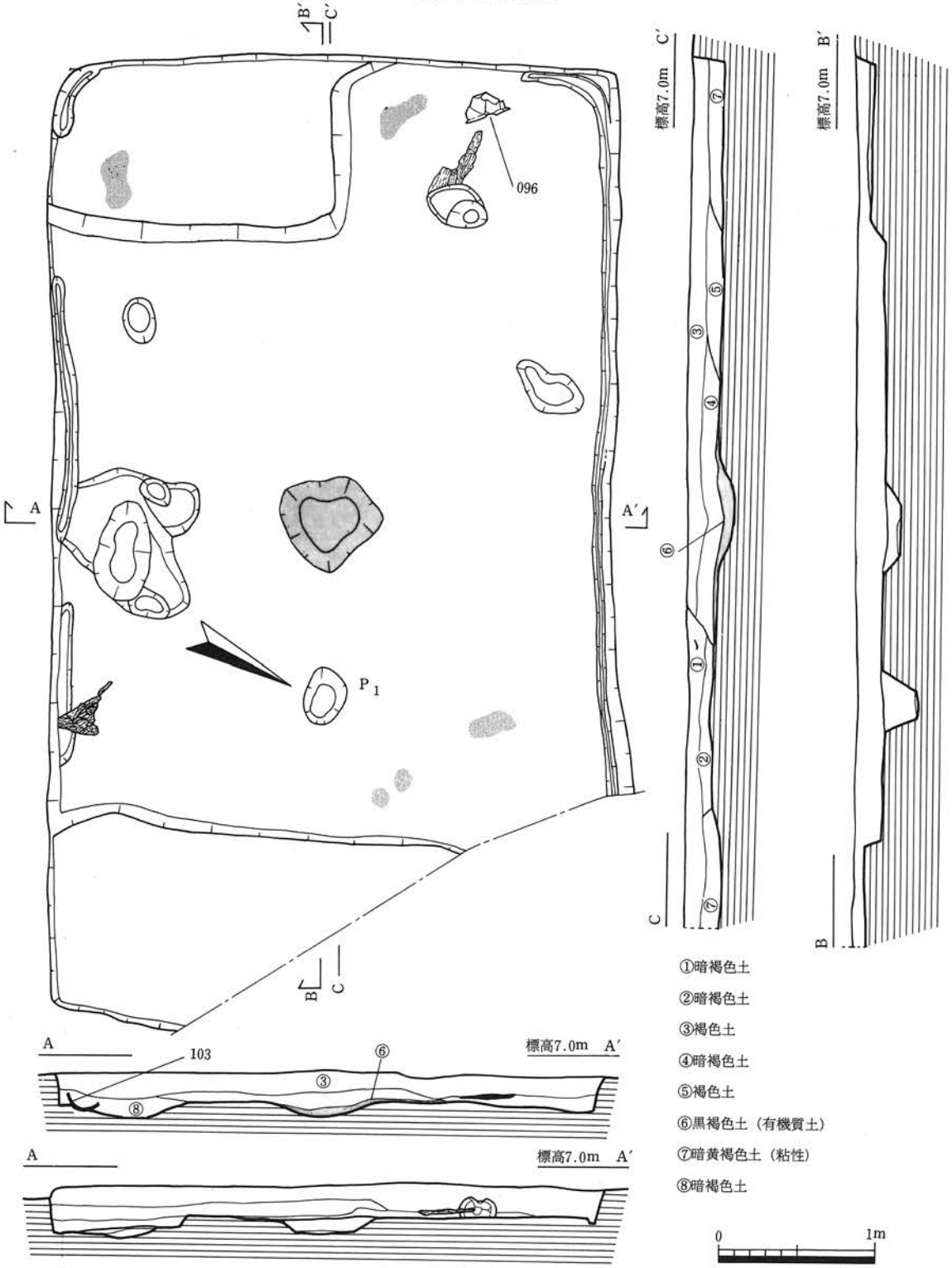


Fig.17　SH014実測図（1/4）

ＳＨ014竪穴住居（Fig.17）

CT-54・55、CU-54・55区画に検出した。検出面の標高は6.9m前後である。SD029と切り合い関係にあり、SH014が先行する。また、SH015・SH016・SD032と重複関係にある。北西側の隅を含み約1/5が調査区外に展開する。

北側壁長4.6m以上・南側壁長6.1m・西側壁長3.6mを計り、最深部で残存壁高は20cm前後である。端整な長方形の平面形を示す。東西の両短辺には、褐色砂質土を叩き締めて成形した長方形の段状部が作り付けてある。東側の段状部は南北長1.9m・東西長1.1m・床面との比高10cm程度、西側の段状部は南北長2.6m以上・東西長1.3m・床面との比高10cm程度である。

埋土は５層に大別できる。①～⑤は、砂混じりの暗褐色土を主体とした自然流入土である。⑥は、中央部で面的に広がり、後述する中央のくぼみにも落ち込んでいて、床面の生活汚染の痕跡ではないかと考える。⑦は、段状部の成形土。⑧は、南側中央の小土壙の埋土である。床面には、粘土などの張り床の痕跡は認められなかった。

南北側と西側の一部の壁の内側に沿って、深さ5cm前後の浅い壁溝がはしる。壁溝に伴う板材・杭等の痕跡は認められなかった。中央に検出された径0.6m前後・深さ10cm程度の浅いくぼみは、

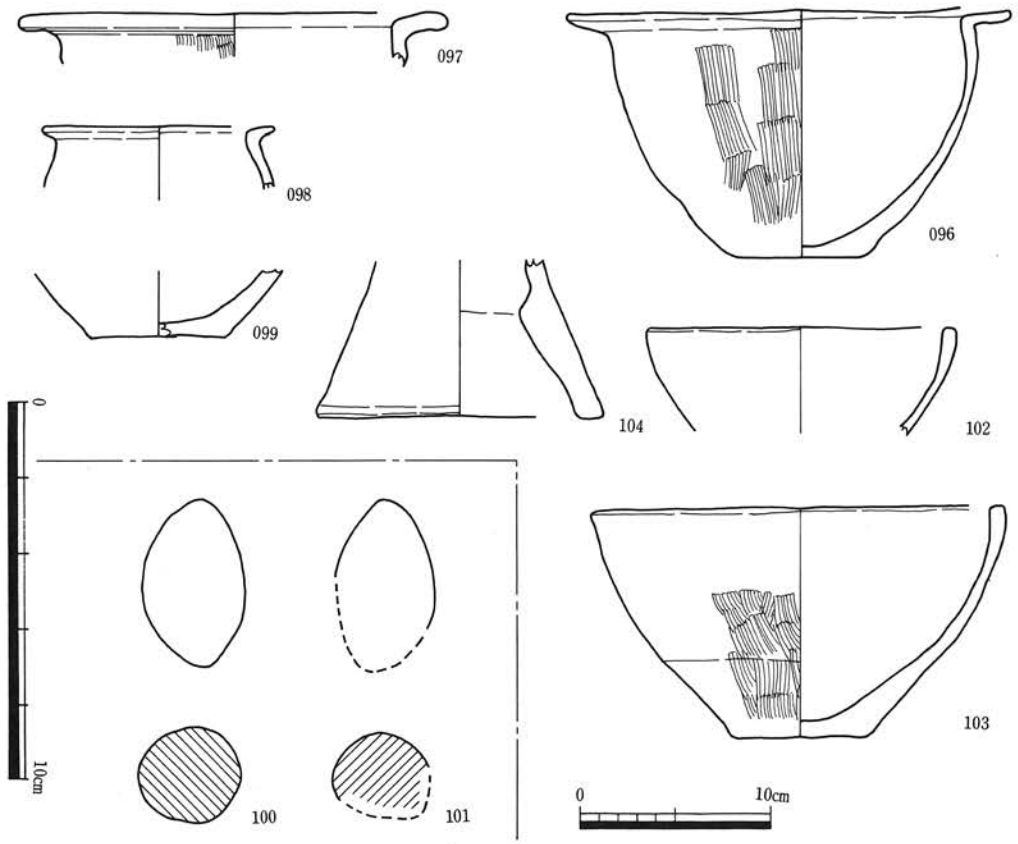


Fig.18　SH014出土遺物実測図（1/4・1/2）

炉と考えられる。焼土・炭・床面の赤変等は認められなかった。南側の壁の中央には不整形の小土壙が検出された。床面から切り込まれていて、この竪穴住居に伴うものと判断する。また、床面上から炭化木材が出土し、段状部上と床面上で部分的に焼土が検出された。Ｐ１を主柱穴とする２本柱であった確率が大きいと考えるが、Ｐ１に対応する位置に柱穴は検出できなかった。

住居内埋土中から、ビニール袋２個程度の遺物が出土した。ほとんどは土器片であるが、土弾も出土している。096は、床面上に横倒しの状態で投棄されていた。103は、完形に近い状態で、小土壙の底面上に出土した。

ＳＨ014出土遺物（Fig.18）

弥生土器７点・土弾２点が図化できた。097は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面縦方向のハケ目調整、内部はナデ調整を施す。098は、口縁部は横ナデ調整。胴部内外面はナデ調整を施す。099は、胴部内外面はナデ調整を施す。096は、鉢A類で、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は、縦方向のハケ目調整の後、一部にナデを加える。胴部内面はナデ調整を施す。胴部外面の一部に黒斑が認められる。102・103は、鉢B類。103は、完形に近く、体部外面は縦～斜方向のハケ目調整で、上位のハケ目をナデ消す。内面はナデ調整を施す。体部外面の一部にススが付着する。102は、体部内外面にナデ調整を施す。104は、器台の脚部破片。内外面ナデ調整。100・101は鶏卵形の土弾である。100は、径2.7cm・長さ4.4cm。101は一部を欠損している。

ＳＨ015竪穴住居（Fig.19）

CU-54区画に検出した。検出面の標高は6.9m前後である。SD032・SH016と切り合い関係にあり、SH015が後出する。また、SH014と重複関係にある。東側の壁の一部が調査区外に展開し、北側の壁は撹乱溝により破壊されている。

各辺の壁がやや外方にふくらむが、隅丸正方形の平面形を示すものと思われる。西側壁長4.2m・南側壁長4.3m・東側壁長1.8m以上を計り、残存壁高は10cm前後である。

埋土は砂混じりの褐色土である。床面には、張り床の粘土などは認められなかった。

床面では多数の小穴が検出されたが、壁溝・炉と思われるものは検出されなかった。中央北側に検出された不整円形の小土壙は、径0.6m・深さ45cmほどであるが、竪穴住居に伴うものかは判断できない。南側中央壁寄りに、２個の平たい自然石が床面に配置されていた。Ｐ１・Ｐ２を主柱穴とする２本柱であった確率が大きいと考える。

埋土中から小量の遺物が出土した。埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。

ＳＨ０１５出土遺物（Fig.20）

５点が図化できた。どれも小破片である。105は、小さな刻み目をもつ三角突帯を口縁外面に有する。内外面横ナデ調整。106は、口縁部は横ナデ調整。107は、胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。胴部外面から底部外面にかけて黒斑を有する。108は、高杯の口縁部か。口縁部は平坦である。口縁内面が強いナデのため屈曲する。口縁部内外面横ナデ

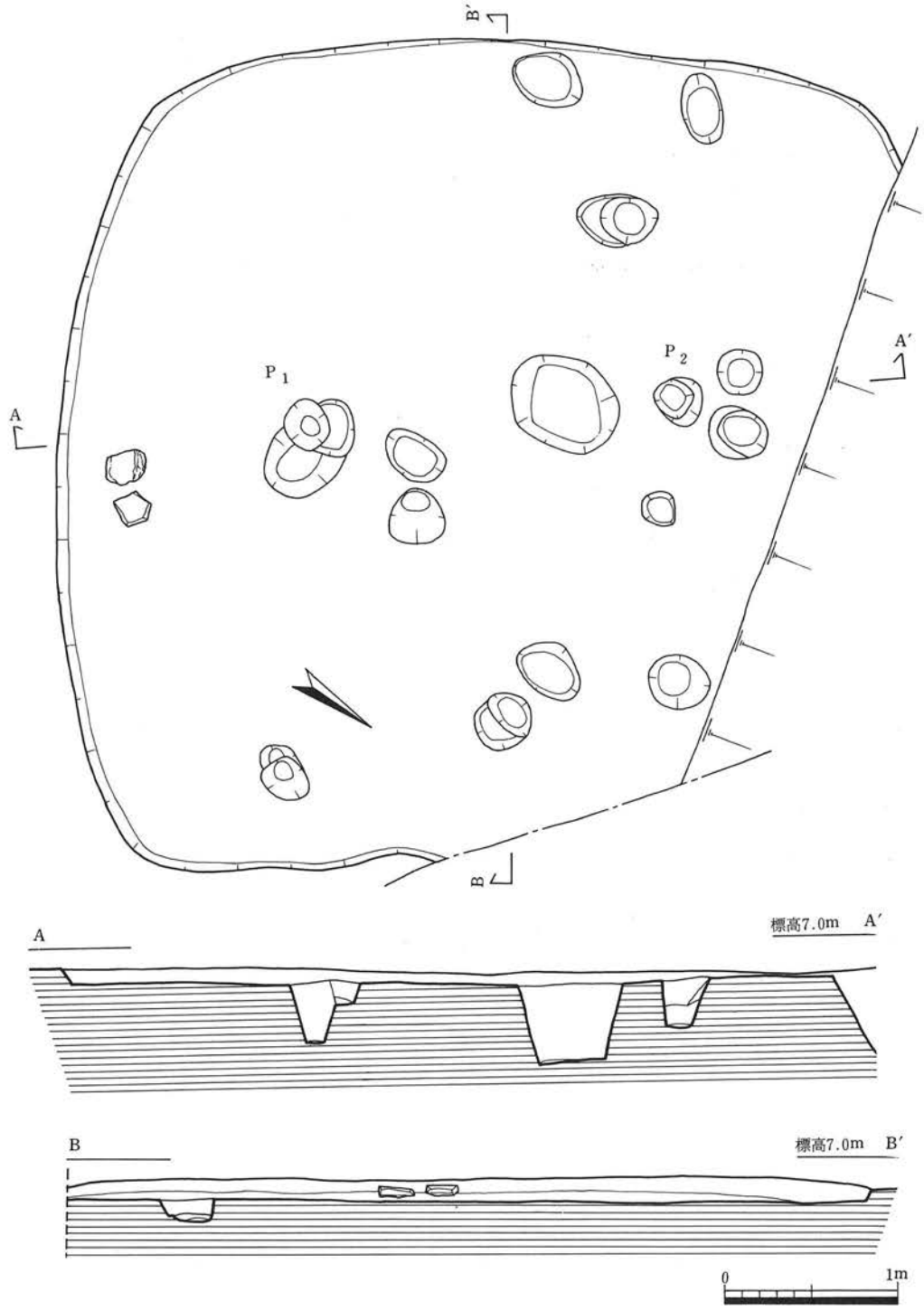


Fig.19 SH015実測図（1/40）

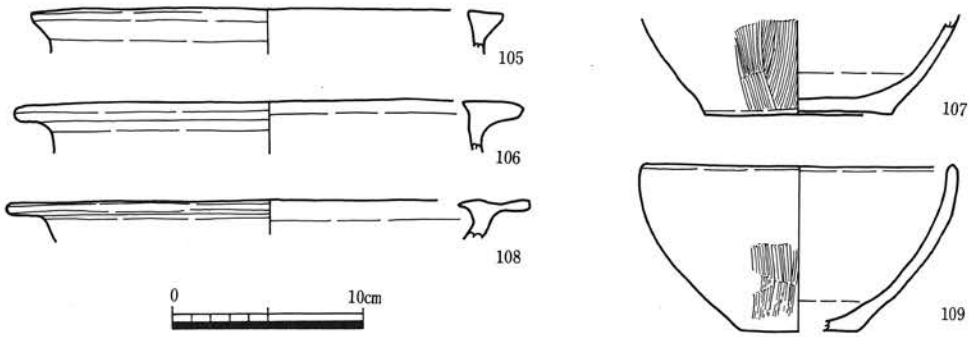


Fig.20　SH015出土遺物実測図

調整。109は、鉢B類破片。体部外面は、縦方向のハケ目調整で、上位のハケ目をナデ消す。内面はナデ調整を施す。

ＳＨ016竪穴住居（Fig.21）

CU-53・54、CT-53・54区画に検出した。検出面の標高は6.8m前後である。SD028・SH015と切り合い関係にある。SH016が、SH015に先行し、SD028より後出する。また、SH014と重複関

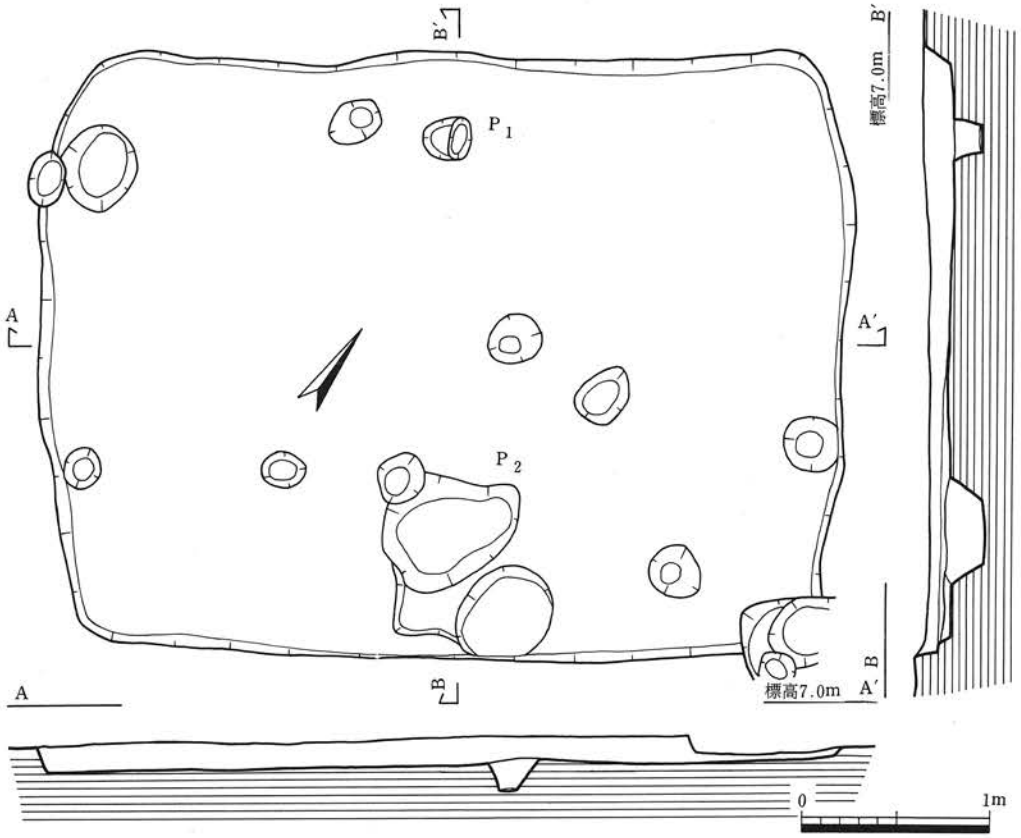


Fig.21　SH016実測図（1/40）

係にある。

隅丸長方形の平面形を示す。北側壁長3.9m・南側壁長4.0m・東側壁長3.2m・西側壁長3.0mを計り、残存壁高は12cm前後である。SH015より床面は深い。

埋土は砂混じりの淡褐色土である。床面の一部には、砂混じりの褐色粘土を叩き締めて、張り床を形成していた。

床面では複数の小穴が検出されたが、壁溝・炉と思われるものは検出されなかった。P1・P2を主柱穴とする2本柱であった可能性がある。

住居内埋土中から、若干の弥生土器片が出土した。埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。

SH016出土遺物（Fig.22）

3点が図化できた。110は、口縁下方に断面三角状の突帯がまわる。口縁部は横ナデ調整。胴部外面横ナデ調整、内面はナデ調整を施す。胴部外面の一部に黒斑が認められる。111は、胴部内外面はナデ調整を施す。112は、壷の口縁部破片と思われる。口縁端上方をつまみあげ、端部には浅いくぼみがめぐる。外面は細いヘラ状工具による縦方向の暗文を施し、内面は横方向のヘラミガキ調整。胎土はわずかな砂粒を含む。

SH017竪穴住居（Fig.23）

CQ-59・60、CP-59・60区画に検出した。検出面の標高は6.9m前後である。SD001・SK027と切り合い関係にある。SH017が、SD001に先行しSK027より後出する。

南側の1/6ほどをSD001に破壊される。やや不整形だが、隅丸正方形の平面形を示すものと思われる。北側壁長3.8m・東側壁長3.6m以上・西側壁長2.8m以上を計り、残存壁高は最深部で20cmである。

埋土は地山ブロックを含む褐色土である。床面には張り床の粘土等は認められなかった。

床面では複数の小穴が検出されたが、壁溝・炉と思われるものは検出されなかった。主柱穴と思われるものもない。

住居内埋土中から、ビニール袋3個ほどの遺物が出土した。埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。

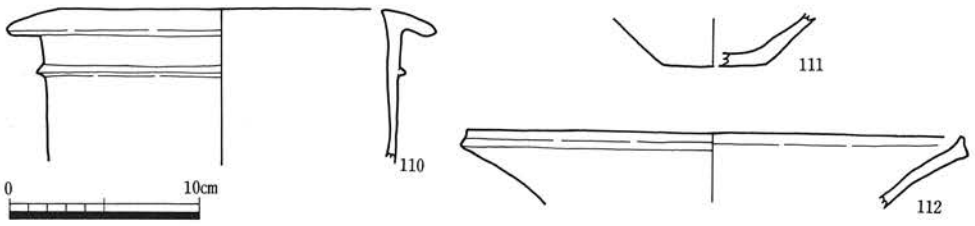


Fig.22　SH016出土遺物実測図（1/4）

ＳＨ017出土遺物（Fig.24）

9点を図示する。113は、小さな刻み目をもつ三角突帯を口縁外面に有する。内外面横ナデ調整。114は、口縁端部は肥厚しまるい。口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。115は、口縁端部はわずかにはねあがる。口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面は、斜方向のハケ目調整の後、ナデ消し。内面はナデ調整。116は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。色調は暗赤褐色を呈する。胴部外面下半に黒斑を有する。117は、胴部外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。胎土は雲母などの砂粒を多量に含む。118は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。胎土は雲母などの砂粒を多量に含み、外面に黒斑が認められる。119は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。120は、完形に近い。受部端は、わずかに上方にはねあげ気味で、外端にわずかなく

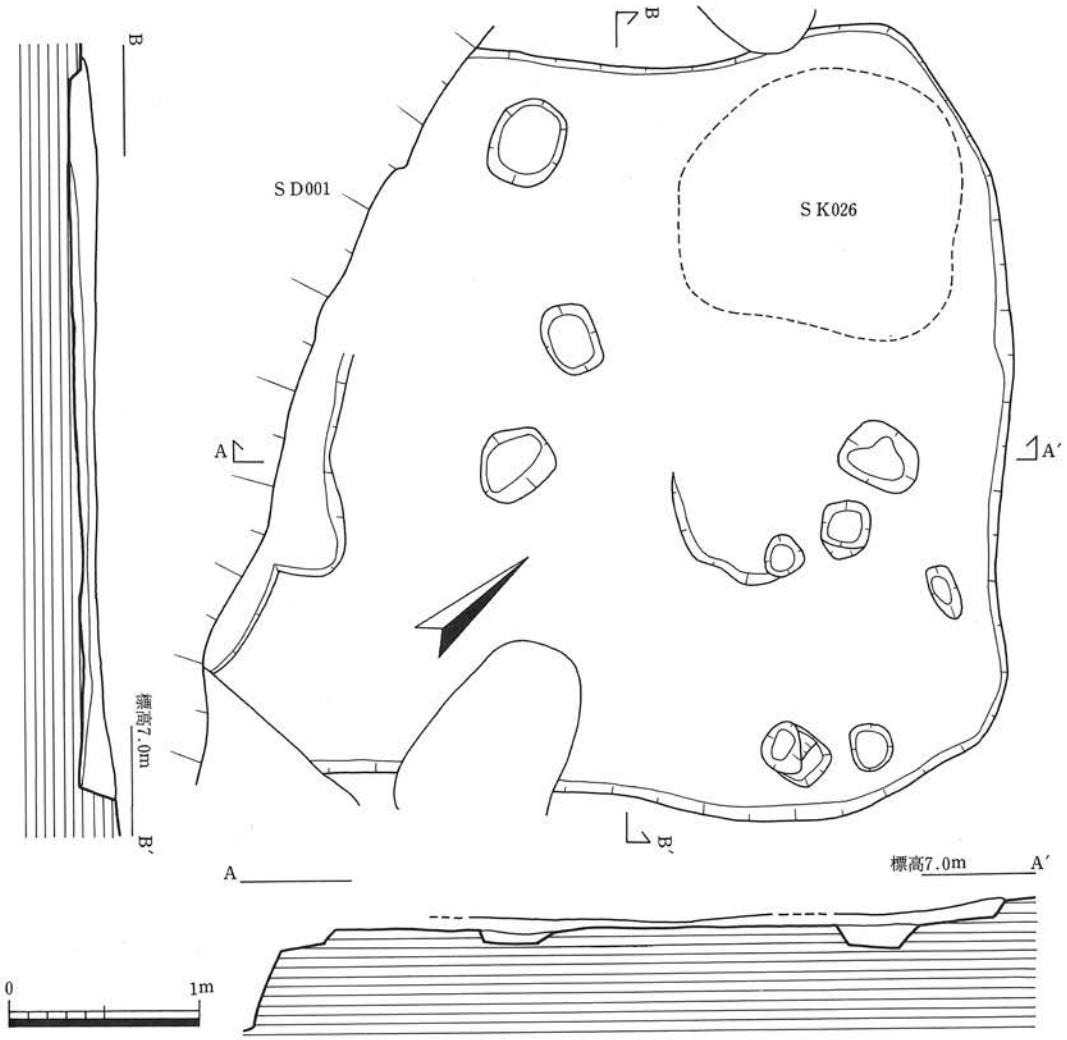


Fig.23　SH017実測図（1/40）

ぼみがめぐる。121は、小形の鉢A類。内外面ともに、横方向のヘラミガキ調整。胎土はわずかに砂粒を含む。

ＳＨ022竪穴住居（Fig.25）

CU-51・52区画に検出した。検出面の標高は6.6m前後である。SD036・SD040・SB043・SH023と切り合い関係にある。SD036・SD040・SB043に先行し、SH023に後出する。不整形ながら隅丸長方形の平面形をなす。北側壁長3.1m・南側壁長3.5m・西側壁長3.0m・東側壁長2.8mを計り、残存壁高は8～10cmである。

埋土は暗褐色土である。床面には張り床の粘土などは認められなかった。

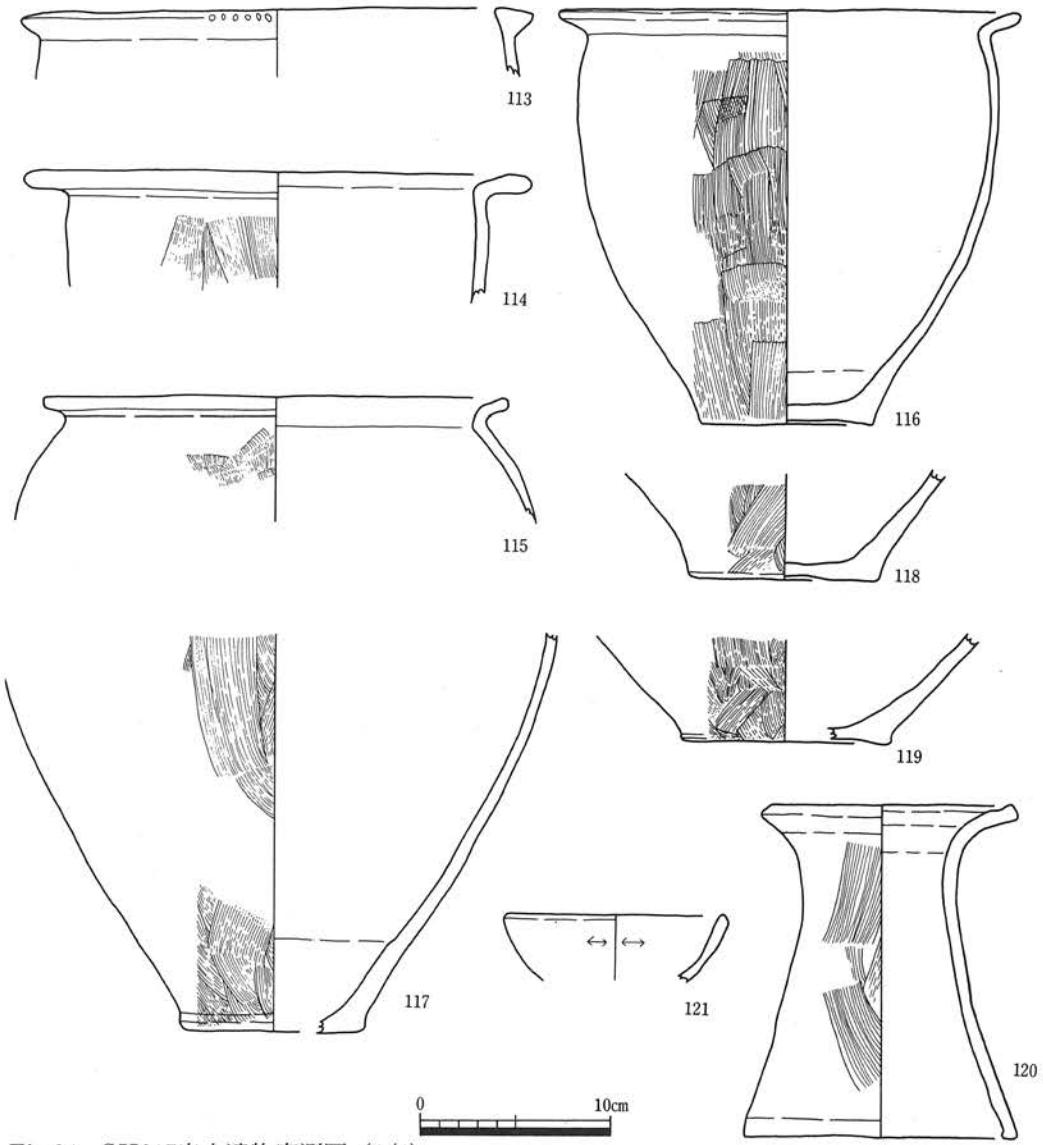


Fig.24　SH017出土遺物実測図（1/4）

壁溝・炉と思われるものも検出されていない。複数の小穴が検出されたが、主柱穴にあたるものはない。南側側辺の中央に接して小土壙が検出された。住居に伴うものと判断する。

住居内埋土から少量の遺物が出土したが、埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。図化できたものはない。

ＳＨ023竪穴住居（Fig.26）

CU-51区画に検出した。検出面の標高は6.6m前後である。SH022・SD036と切り合い関係にあり、SH023が先行する。

東側壁がSH022に破壊されている。円形に近い隅丸正方形の平面形をなすものと思われる。北側壁長2.1m以上・南側壁長2.0m以上・西側壁長2.3mを計り、残存壁高は12～20cmである。

埋土は地山ブロック混じりの暗褐色土である。

床面には張り床の粘土等は認められなかった。壁溝・炉と思われるものも検出されていない。複数の小穴が検出されたが、主柱穴にあたるものはない。

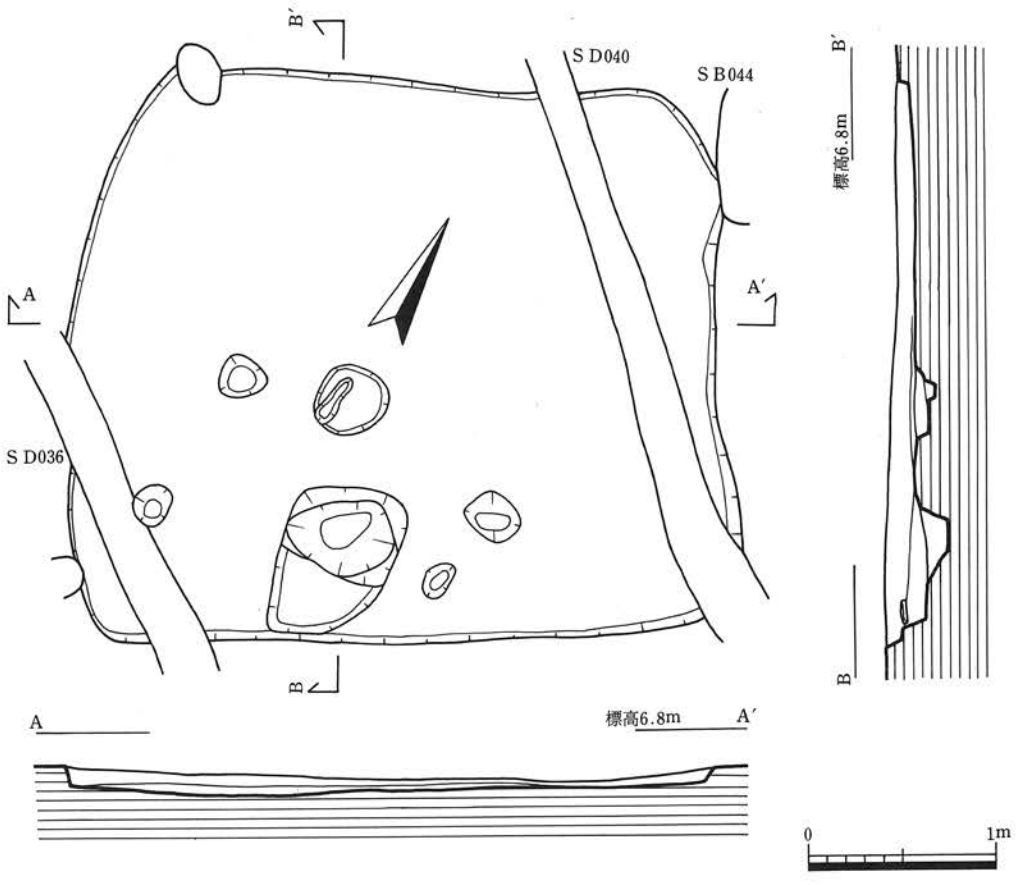


Fig.25　SH022実測図（1/40）

住居内埋土から少量の遺物が出土したが、埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。細片で図示に耐えない。

ＳＨ024竪穴住居（Fig.27）

CV-51•52区画に検出した。検出面の標高は6.6～6.5mである。SD040と切り合い関係にあり、SH024が先行する。西北側の隅が撹乱土壙に破壊されている。

隅丸正方形の平面形をなす。北側壁長3.9m前後・南側壁長3.9m・西側壁長3.1m以上・東側壁長3.3mを計り、残存壁高は12～24cmである。

埋土は褐色土である。床面の一部には、砂混じりの黄褐色粘土で張り床を行っていた。壁溝と思われるものは検出されていない。PAは、住居の中央に位置し、炉の可能性はあるが、炭•焼土•床面の赤変等は認められなかった。Ｐ１•Ｐ２•Ｐ３•Ｐ４の４本柱である確率が大きいが、Ｐ５•Ｐ６の２本柱である可能性もある。

住居内埋土からビニール袋１個程度の遺物が出土したが、埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。

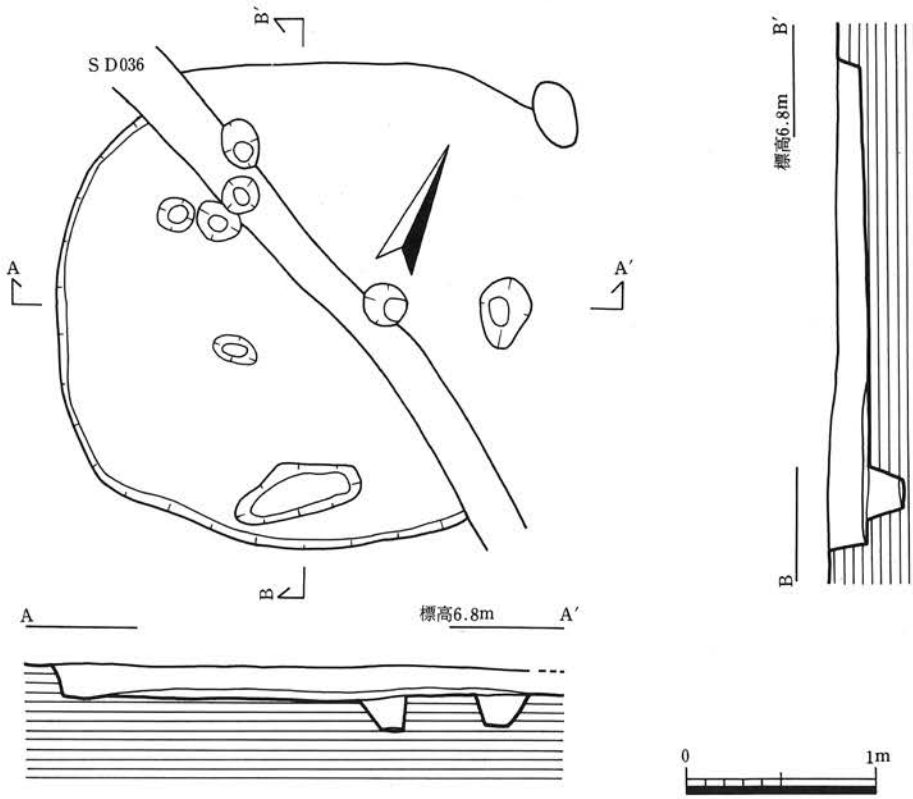


Fig.26　SH023実測図（1/40）

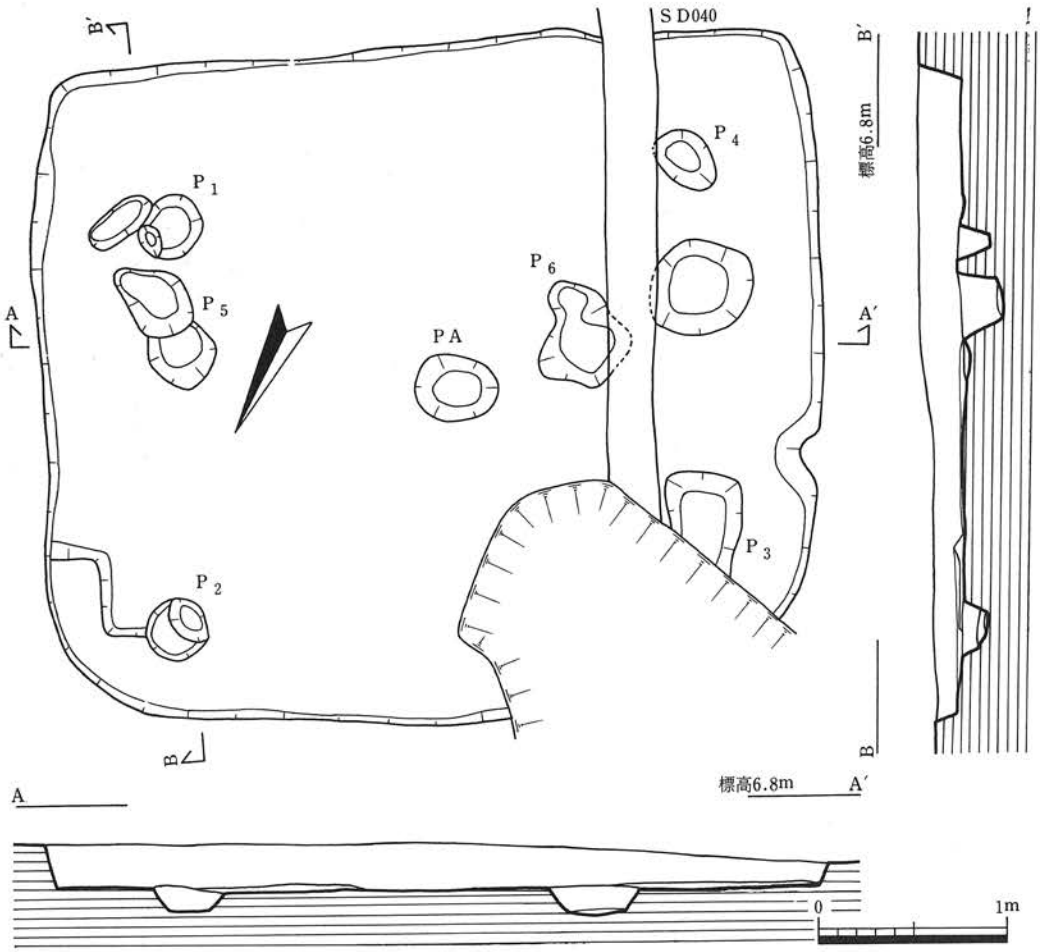


Fig.27　SH024実測図（1/40）

SH024出土遺物（Fig.28）

3点が図化できた。どれも甕の破片である。136は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整である。137は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面はハケ目をナデ消す。内面はナデ調整。138は、内外面はナデ調整を施す。

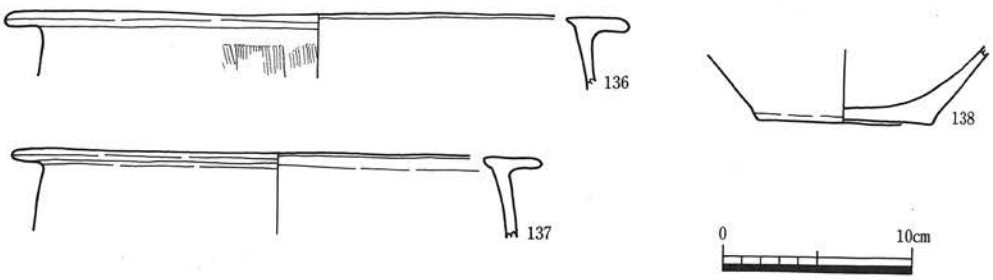


Fig.28　SH024出土遺物実測図（1/4）

ＳＨ025竪穴住居（Fig.29）

CU・CV-50、CU・CV-51区画に検出した。検出面の標高は6.4～6.6mである。SD036・SB046と切り合い関係にあり、SH025が先行する。北側は削平が激しく、壁溝しか残存していない。

北側で狭くなる隅丸長方形の平面形をなす。北側壁長2.3m・南側壁長2.8m・西側壁長3.6m・東側壁長3.5mを計り、壁高は最大で15cmが残存する。南側の側辺には、基盤を削り出して成形

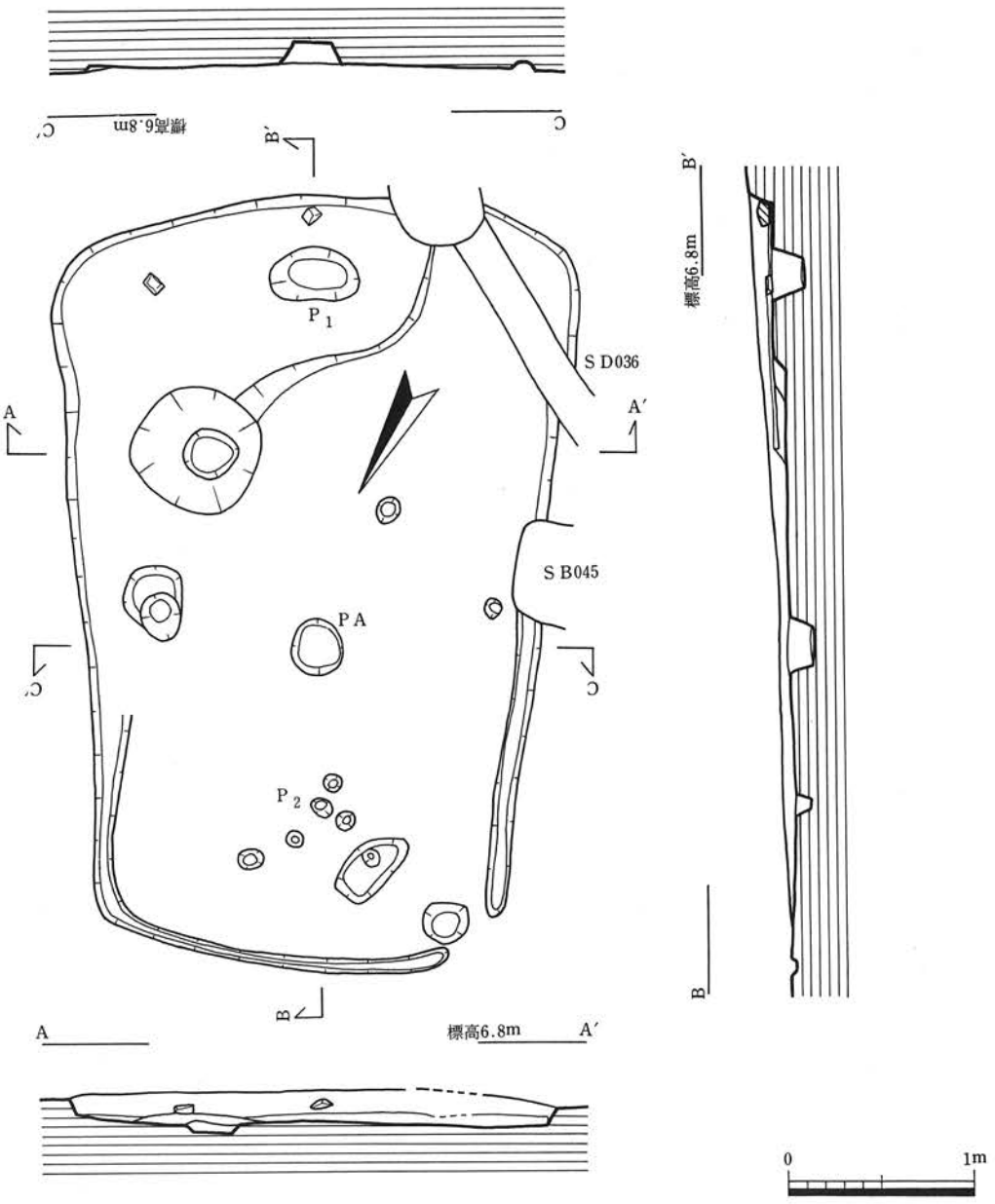


Fig.29　SH025実測図（1/40）

された不整な段状部がある。床面との比高は10cmほどある。

埋土は暗褐色土である。床面には張り床の粘土等は認められなかった。北端は検出段階で、壁溝だけが残存していた。

中央から北側にかけては、深さ3～5cmの壁溝がまわる。複数の小穴が検出されたが、Ｐ１・Ｐ２が主柱穴にあたる可能性がある。PAは炉である可能性がある。

段状部上で砥石が2点（140・141）が出土した。住居内埋土から少量の遺物が出土したが、土器片は図化できなかった。埋没過程に伴う自然流入によるものと判断する。

ＳＨ025出土遺物（Fig.30）

140・141は砥石の破片。140は1面に、141は3面に使用痕が残存している。どちらも仕上げ砥か。141は、きめが細かく、現在使用されている砥石と酷似した印象を与えている。142は、不明石製品。両側辺に研磨された刃部をもつ。基部に近い部分に径6㎜ほどの穿孔がある。穿孔は抉りが大きく、鉄器を使用したものではないと判断する。

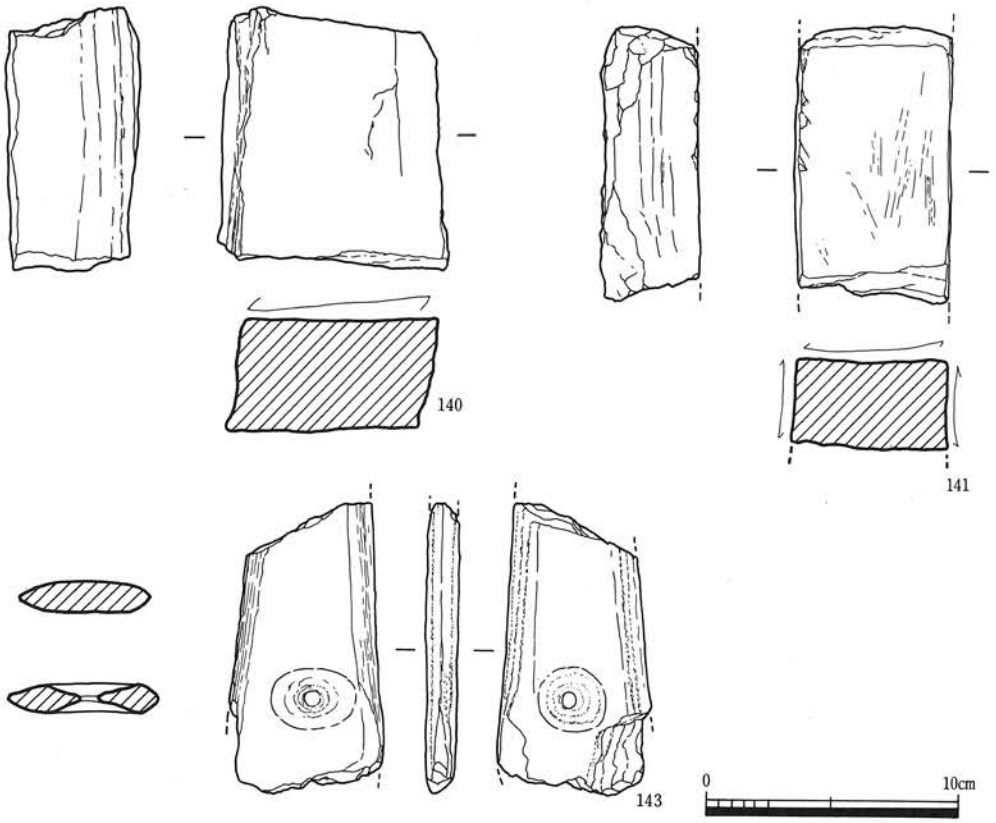


Fig.30　SH025出土遺物実測図（1/3）

ＳＨ034竪穴住居（Fig.31）

CV-49・50区画に検出した。SD035と切り合い関係にあり、SH034が先行する。北側側壁は、撹乱と削平により、消滅している。

隅丸正方形に近い平面形をなすと思われる。南側壁長2.7m・西側壁長2.5m以上・東側壁長2.3m以上を計り、壁高は最も残存する部分で10cmである。

埋土は淡褐色土である。床面には張り床は行われていない。壁溝・炉・柱穴と思われるものは検出できなかった。

埋土中から少量の土器片が出土したが、図示できるものはない。

ＳＨ037竪穴住居（Fig.32）

CT-50・51、CU-50・51区画に検出した。SH023・SD036と切り合い関係にあり、SH037が先行する。南西の隅が調査区外に展開する。

隅丸長方形に近い平面形をなす。北側長3.5m前後・南側壁長3.4m前後・西側壁長3.0m・東側壁長2.8mをはかり、残存壁高は10～20cmである。

埋土は、砂混じりの淡褐色～褐色土である。床面には張り床は行われていない。中央部西側に、炉と判断されるくぼみを検出したが、焼土・炭・床の赤変などは認められなかった。Ｐ１・

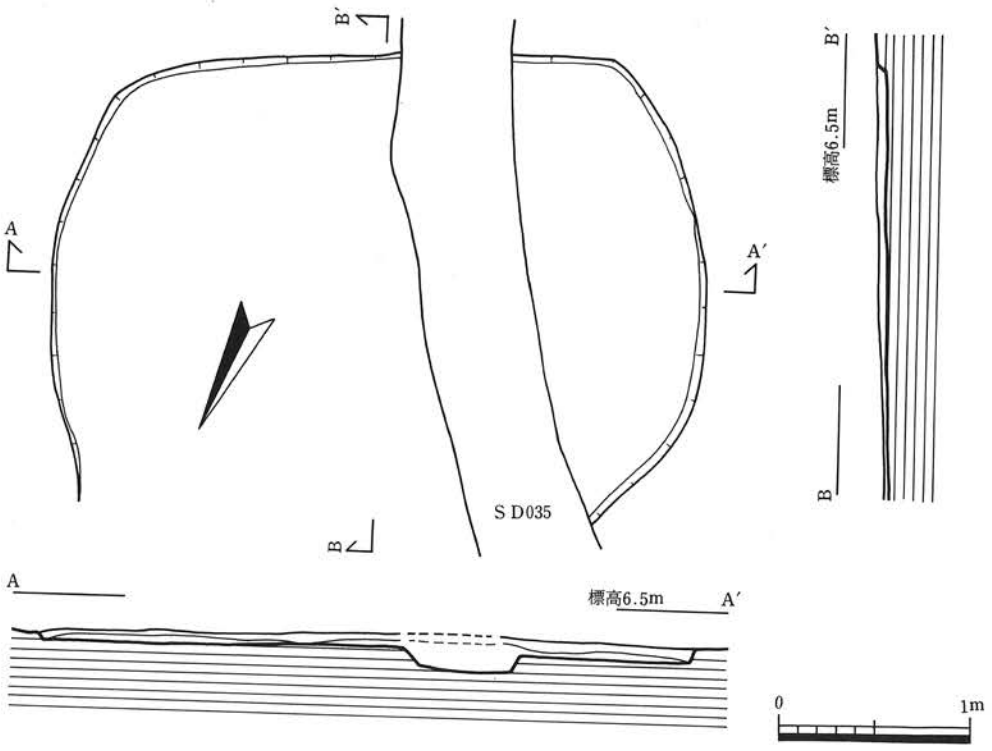


Fig.31　SH034実測図（1/40）

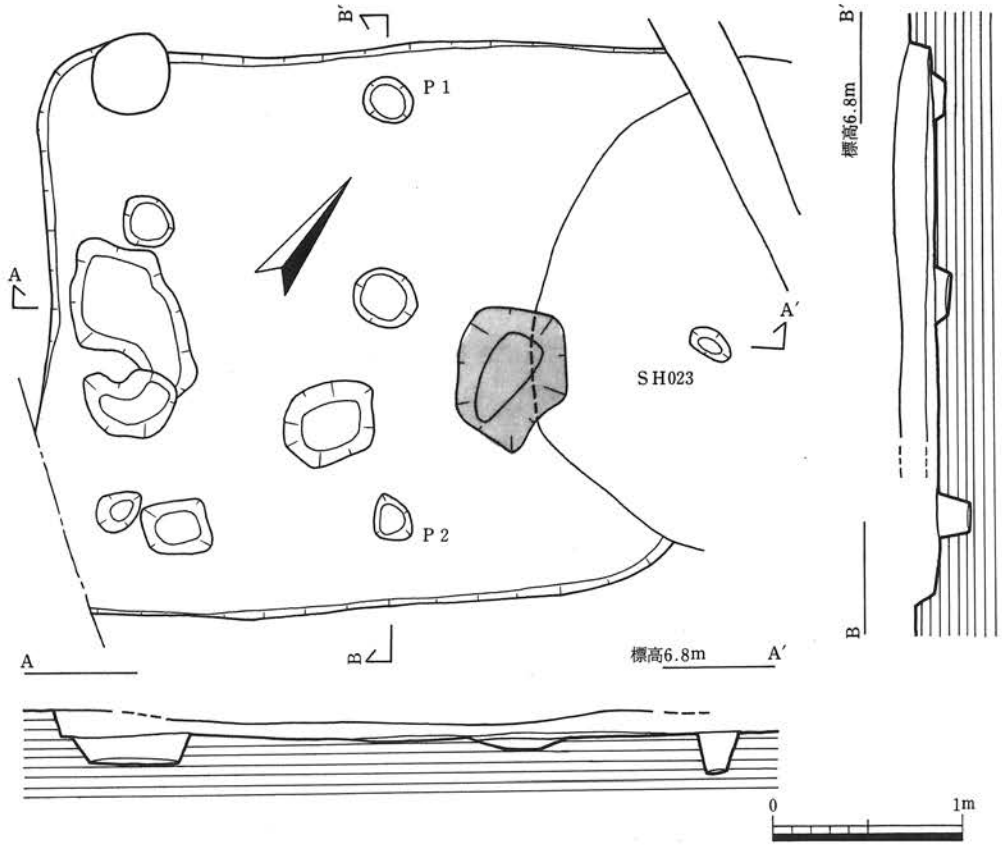


Fig.32　SH037実測図（1/4）

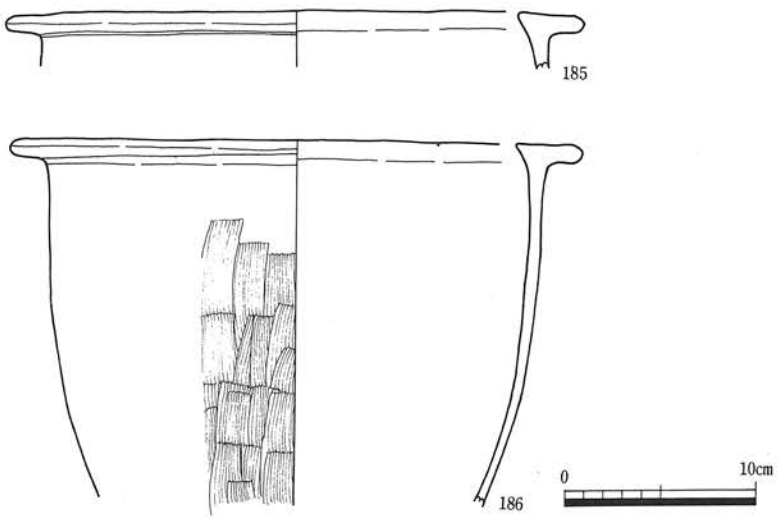


Fig.33　SH037出土遺物実測図（1/4）

P２を主柱穴とする二本柱であったと判断する。

埋土中から少量の遺物が出土した。埋没時の流れ込みによるものと判断する。

ＳＨ037出土遺物（Fig.33）

2点が図示できる。185は内外面横ナデ調整。186は口縁部は横ナデ調整。外面は、口縁下部は横ナデ調整で、他は縦方向のハケ目調整。内面はナデ調整。

３．掘立柱建物と出土遺物

Ｊ１区で検出された掘立柱建物は、どれも１間×１間のものである。柱穴検出時には掘立柱建物の認識がなかったが、柱穴埋土が褐色土層と砂層を交互に固めた独特のものであったため、現地で柱穴の再検討を行い、５棟を確認した。柱穴掘り方から若干の土器片が出土しているが、図示できるものはない。

ＳＨ041掘立柱建物（Fig.35）

CQ-56・57、CR-56・57区画に検出した。SD028と直接の切り合い関係にあり、SB041が後出する。検出面の標高は、6.7～6.8m。桁行１間・梁行１間の建物であるが、主柱穴の間に束柱と思われる支柱穴がある（Ｐ２とＰ３の間は撹乱により消滅している）。主軸をN-43°-Eにとる。柱間は図示したとおり。主柱穴の掘り方の平面形は0.6～1.1mの隅丸長方形・楕円形で、深さは0.5～0.8m。支柱穴の掘り方の平面形は径0.3～0.5mの円形・楕円形で、深さ0.2～0.4m。P1とP2は三段掘りの形状をなす。

ＳＢ042掘立柱建物（Fig.35）

CS・CT-53区画に検出した。SD030と直接の切り合い関係にあり、SB042が後出する。検出面の標高は、6.7～6.8m。桁行１間・梁行１間の建物である。主軸をN-23°-Wにとる。柱間は図示したとおり。主柱穴の掘り方の平面形は0.4～0.8mの隅丸長方形・楕円形で、深さは0.5～0.7m。P3とP4は二段掘りの形状をなす。

ＳＢ043掘立柱建物（Fig.35）

CU-52・53、CV-52区画に検出した。SH022・SD040と直接の切り合い関係にあり、SB043が後出する。検出面の標高は、6.6～6.7m。桁行１間・梁行１間の建物であるが、Ｐ１とＰ４、Ｐ２とＰ３の間に束柱の可能性がある柱穴がある。主軸をN-36°-Wにとる。柱間は図示したとおり。主柱穴の掘り方の平面形は0.5～1.0mの隅丸長方形。支柱穴の

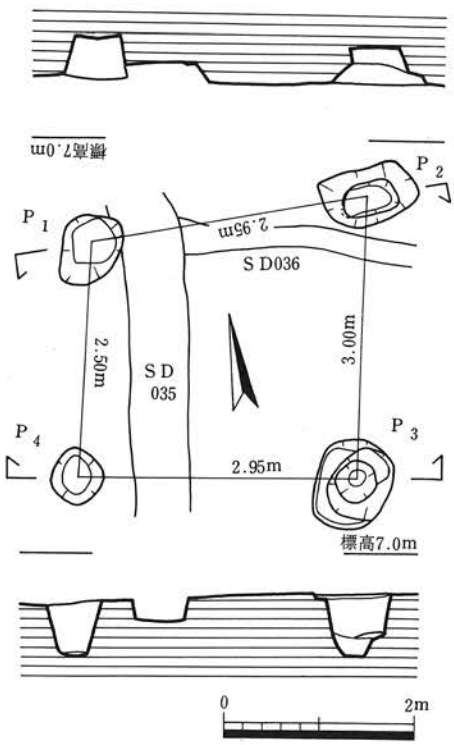


Fig34　SB045実測図（1/80）

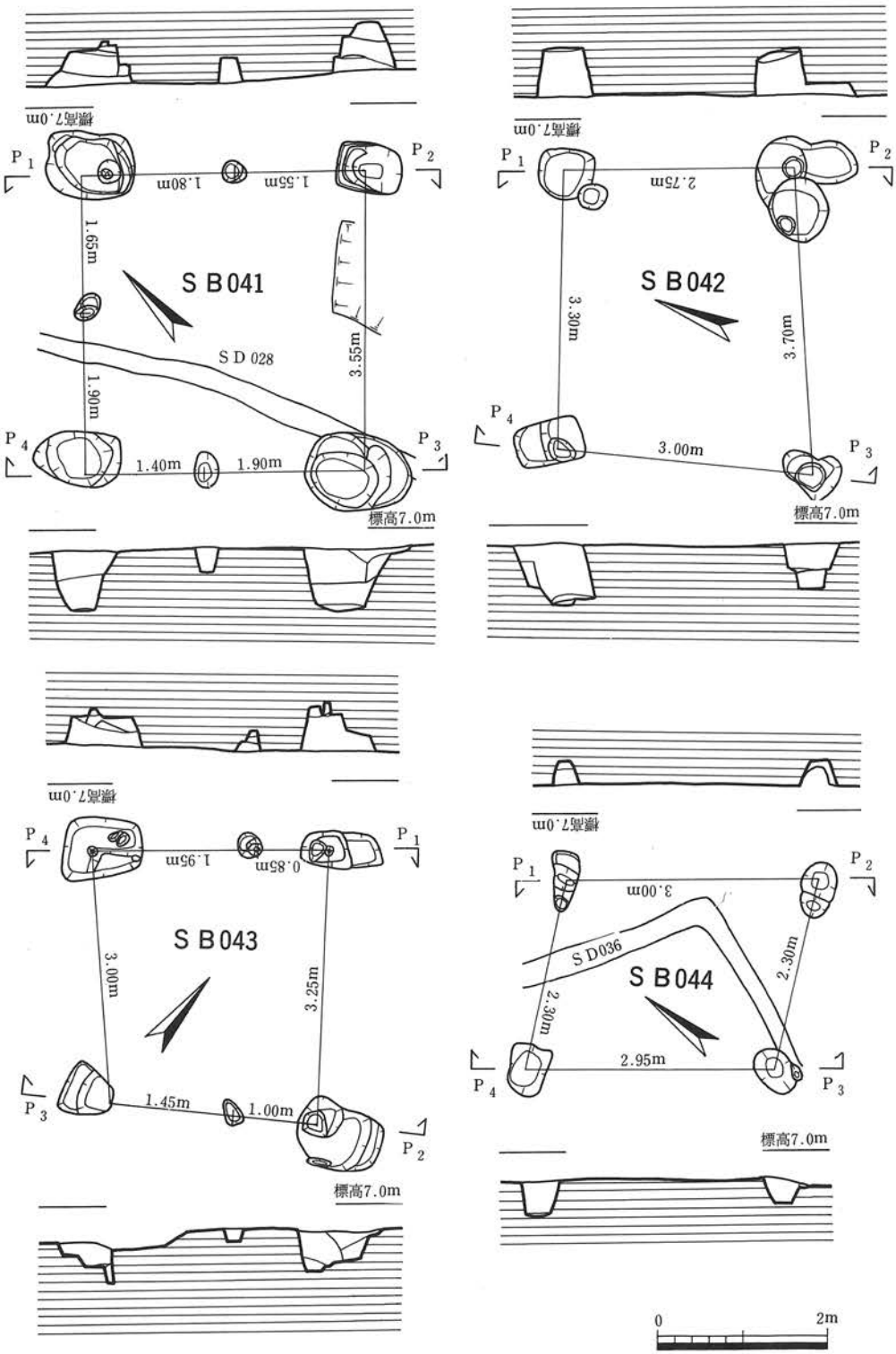


Fig.35　SB041・042・043・044実測図（1/80）

掘り方の平面形は径0.3mの円形で、深さ0.2m。Ｐ１とＰ３は三段掘りの、Ｐ２とＰ４は二段掘りの形状をなす。

ＳＢ044掘立柱建物（Fig.35）

CT-51・52区画に検出した。SD036と直接の切り合い関係にあり、SB044が後出する。検出面の標高は、6.7m前後。桁行１間・梁行１間の建物である。主軸をN-38°-Wにとる。柱間は図示したとおり。主柱穴の掘り方の平面形は0.3～0.6mの隅丸長方形をなし、深さは0.3～0.4m。

ＳＢ045掘立柱建物（Fig.34）

CU-49・50区画に検出した。SH025・SD035・SD036と切り合い関係にあり、SB045が後出する。検出面の標高は、6.4～6.6m前後。桁行１間・梁行１間の建物である。主軸をN-15°-Eにとる。柱間は図示したとおり。主柱穴の掘り方の平面形は0.5～1.0mの隅丸長方形で、深さは0.4～0.7m。Ｐ２とＰ３は二段掘りの形状をなす。Ｐ４底面では礎盤を確認したが、壁面が崩落したため記録することができなかった。

４．井戸と出土遺物

ＳＥ020井戸（Fig.36）

CS-53区画に検出した。SD030と切り合い関係にあり、SE020が後出する。検出面の標高は、6.7～6.8mである。平面形はやや不整な短楕円形で、長径1.3m・短径1.0m・深さ1.2mをはかるが、東側を除き壁面が大きく抉れ込んで、下端のラインは不整な台形状をなす。底面はレンズ状をなしている。埋土は褐色～暗褐色土で、下部に向かうほど色調は暗くなり砂が混じる。遺物は埋土の中部で大部分が出土した。下部では木片が投棄されていて、底面で完存の甕（132）が出土した。132は、この井戸が廃棄される際に埋置されたものと判断する。木片には加工材はなかった。

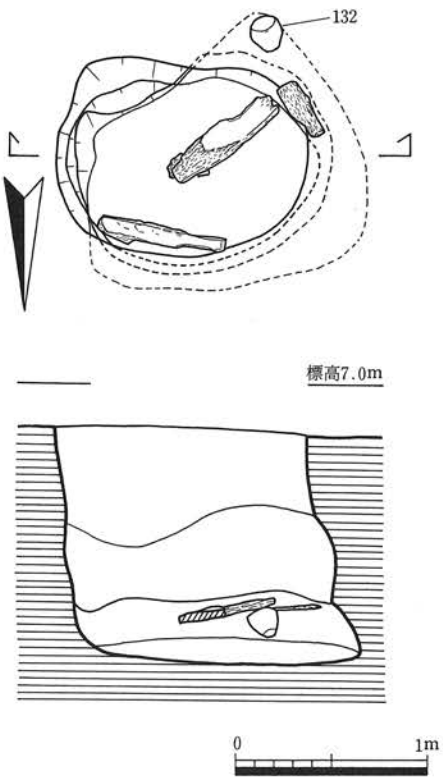


Fig.36　SE020実測図（1/40）

ＳＥ020出土遺物（Fig.37）

５点が図示できる。129～132は甕、133は鉢B類である。129は、胴部外面には黒斑が認められる。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。130は、胴部外面下位には黒斑が認められる。口縁端部は平坦に仕上げられ稜線を形成する。口縁部外面は横

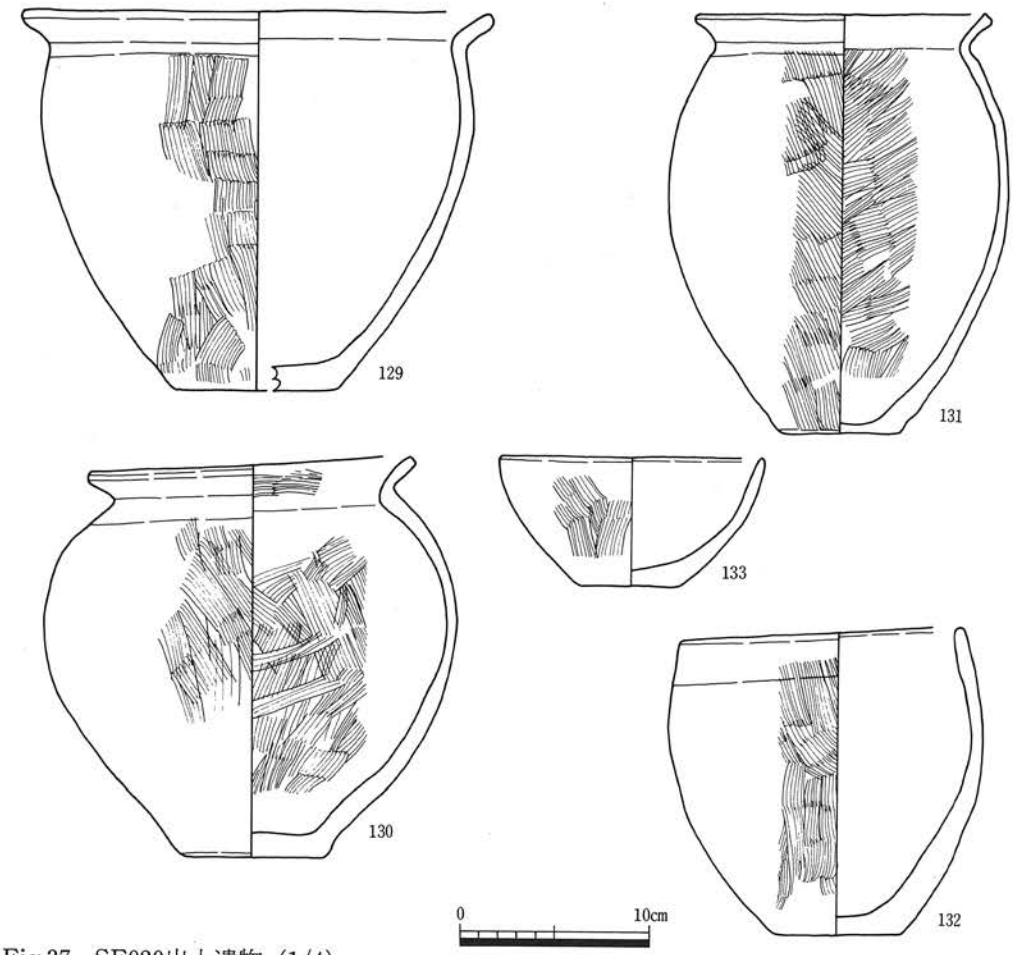


Fig.37　SE020出土遺物（1/4）

ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整で、下位はナデ消している。胴部内面は斜方向のハケ目調整で、一部にナデを加えている。131は、接合しなかったが、同一個体と判断する。口縁部は横ナデ調整。胴部内外面は斜方向のハケ目調整を施す。胴部外面中位に黒斑が認められる。132は完存品。残存状態は良好。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。内面に赤褐色の付着物がある。133は、口縁部は横ナデ調整。外面は斜～縦方向のハケ目に一部ナデを加えている。内面はナデ調整を施す。

5．土壙と出土遺物

(1)　貯蔵穴の可能性がある土壙

ＳＫ026土壙（Fig.38）

CQ-59・60区画に検出した。SH017と切り合い関係にありその床面で検出され、SK026が先行する。検出面の標高は、6.7m前後である。平面形は不整な円形をなし、径1.5～1.7m・深さ0.8mをはかる。壁面は直に立ち上り、東側と北側では中位で段部を形成する。底面はほぼ平坦であ

る。埋土は砂混じりの褐色～暗褐色土であったが、明瞭には分層できなかった。埋土上面から底部付近まで、遺物がまばらな感じで出土し、特に垂直方向での集中は認められなかった。148～150は、埋土上面から40cmの深さまでで出土し、他の遺物はそれ以下のレベルで出土した。

ＳＫ026出土遺物（Fig.39）

甕（Fig.39／143～150）　143は、口縁下部の突帯は刻み目を有しない。口縁部は強い横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。144・145は、口縁部は強い横ナデ調整。胴部外面は横ナデ調整、内面はナデ調整を施す。145は、外面にススが付着する。146・147は、胴部内外面はナデ調整、底部外面は横ナデ調整を施す。146は外面にススが付着する。

148は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整の後ナデを加えている。外面の一部に黒斑が認められる。149は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。150は、内外面にナデ調整を施す。

壷（Fig.39／151～153）　151は、口縁端部は平坦に仕上げられ稜線を形成する。調整は不

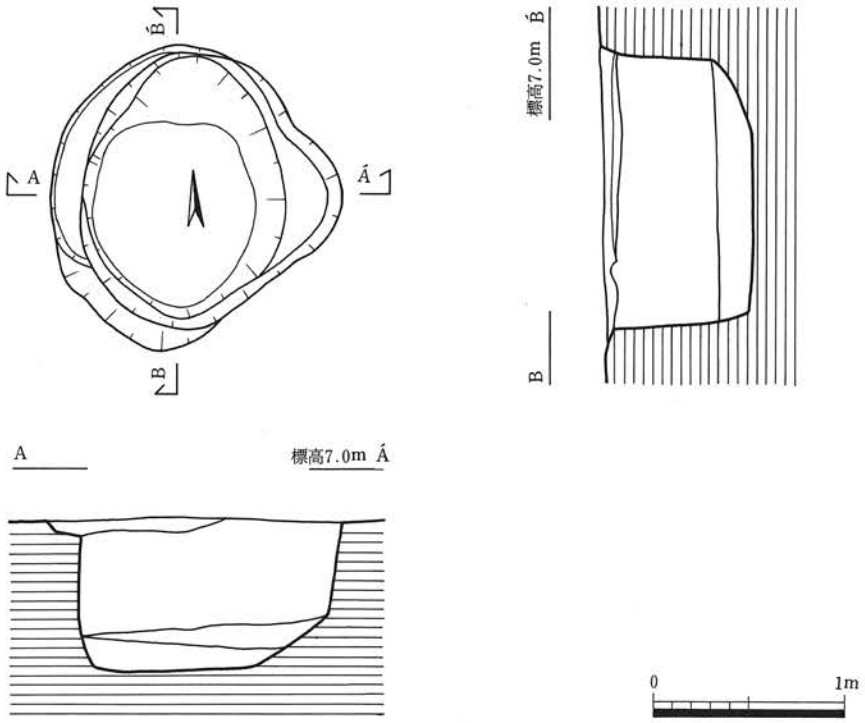


Fig.38　SK026実測図（1/40）

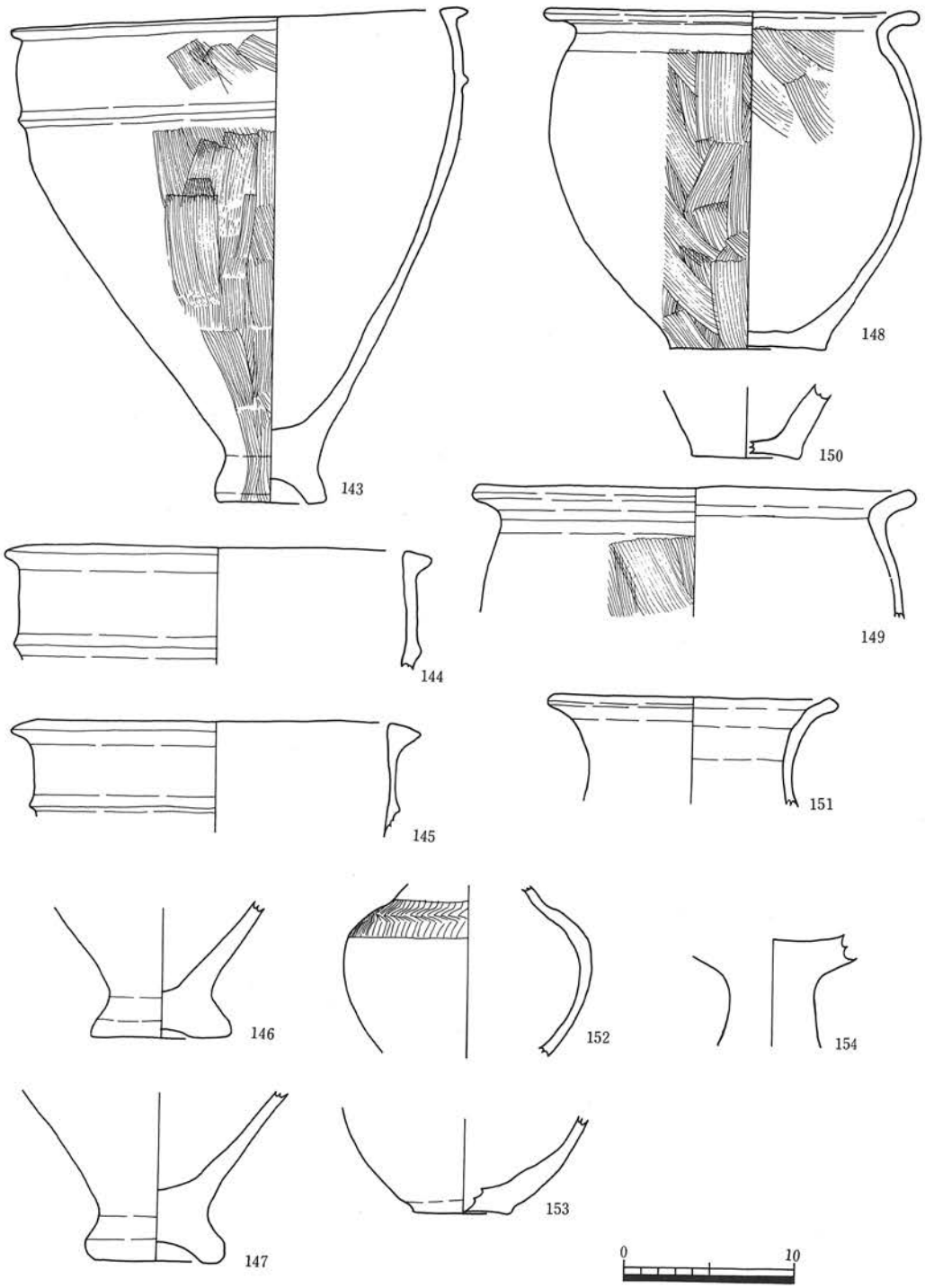


Fig.39　SK026出土実測図１（1/4）

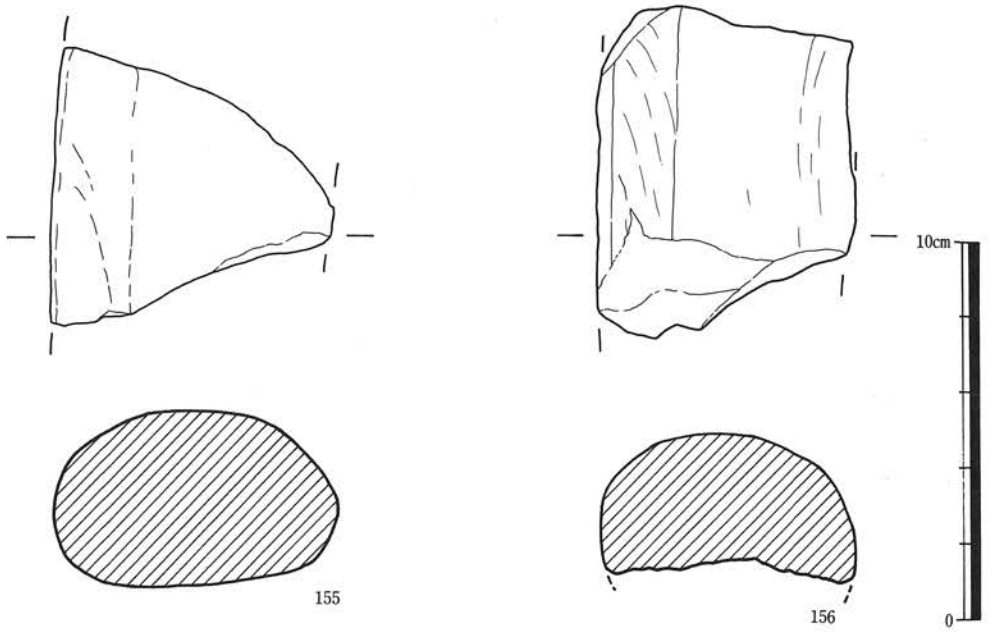


Fig.40　SK026出土遺物実測図（1/2）

明瞭。内面の一部に黒斑が認められる。152は、胴部最大径は14.6cm。最大径は頸部下方にあり肩が張っている。頸部と胴部の境にはゆるい段が形成されている。胴部上位に、ヒゴ状の工具による櫛形烈点文が施されている。内外面に付着したススのために調整は不明瞭だが、外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整と思われる。胎土には砂粒を多量に含む。153は、ススが付着し調整は不明瞭だが、内外面はナデ調整と思われる。胎土には砂粒を多量に含む。

高杯（Fig.39／154）　脚部上位の破片である。残存している部分では、脚部は中空でなく

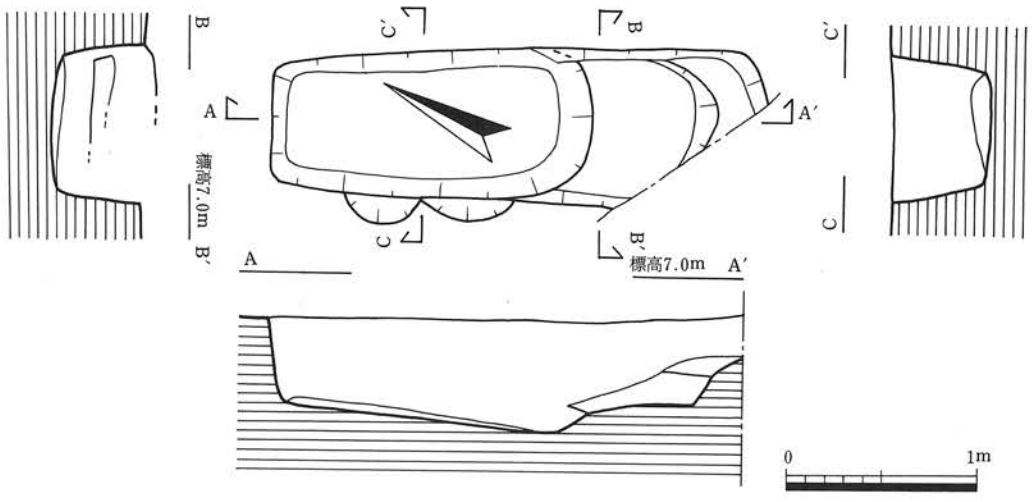


Fig.41　SK004実測図（1/40）

粘土が充塡されている。杯部の器壁も厚く、重量感がある。ナデ調整が施されている。

石斧（Fig.40／155・156）　どちらも欠損した小破片である。石材は、155が砂岩系、156がアップライト系か。

⑵　土器溜の土壙

ＳＫ004土壙（Fig.41）

CO・CP-58区画に検出した。他の遺構とは切り合い関係はない。南側の一部が、調査区外に展開する。検出面の標高は、6.8m前後。長辺2.6m・短辺0.6～0.8m・深さ0.5～0.6mをはかり、平面形は整った長方形をなす。壁面はほぼ直に立ち上り、南側には２段の段状部をもつ。底面は、平坦で、南側に向かって傾斜し、低くなっていた。埋土は、砂混じりの暗褐色土。中央の埋土中からは、弥生土器の破片が量的にまとまって出土している。

調査時には、遺構の壁がきつく立ち上っていること、遺構中央の埋土上方から土器片がまとまって出土したこと、から土壙墓の可能性を考慮した。しかし、出土した土器片が、完形に近いものがないこと、ローリングを受けていることから、土壙墓の副葬品ではないと判断した。出土土器は、おそらく短期間のうちに土壙が埋没する過程で、流れ込むか投棄されたものであろう。

ＳＫ004出土遺物（Fig.42）

051は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。052は、口縁部は横ナデ調整。胴部内面はナデ調整、外面は不明瞭だがハケ目調整を施してある。053は、口縁下部と胴部上位に、２条のゆるい断面三角形の突帯がまわる。054は、内外面ともにナデ調整を施す。

055は、口縁部は横ナデ調整。内面はナデ調整、外面は器壁が磨耗し調整は不明である。056は、口縁端部をやや平坦に仕上げている。器壁の磨耗が激しく調整は不明。

ＳＫ018土壙（Fig.43）

CS-56区画に検出した。上端の一部を小穴に切り込まれている。検出面の標高は、6.8m前後である。長辺1.5m・短辺0.7m・深さ0.5mをはかり、やや不整な隅丸長方形の平面形をなす。壁面はほぼ直に立ち上り、底部は中心がやや高くなっているが北側は平坦である。埋土は暗褐色土で、埋土中位から弥生土器片がまとまって出土した。遺構が半端に埋没した時期に、投棄されたものと判断するが、接合作業の結果、支脚を除いて完形状態に近いものはなく、その一括性には疑問がある。

ＳＫ018出土遺物（Fig.44・45）

甕（Fig.44／112，Fig.45／123）　122は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整の後、一部にナデを加えている。胴部内面はナデ調整を施す。胴部外面下位に黒斑が認められる。123は、大形品である。甕棺の破片か。口縁部は横ナデ調整。胴部内外面はナデ

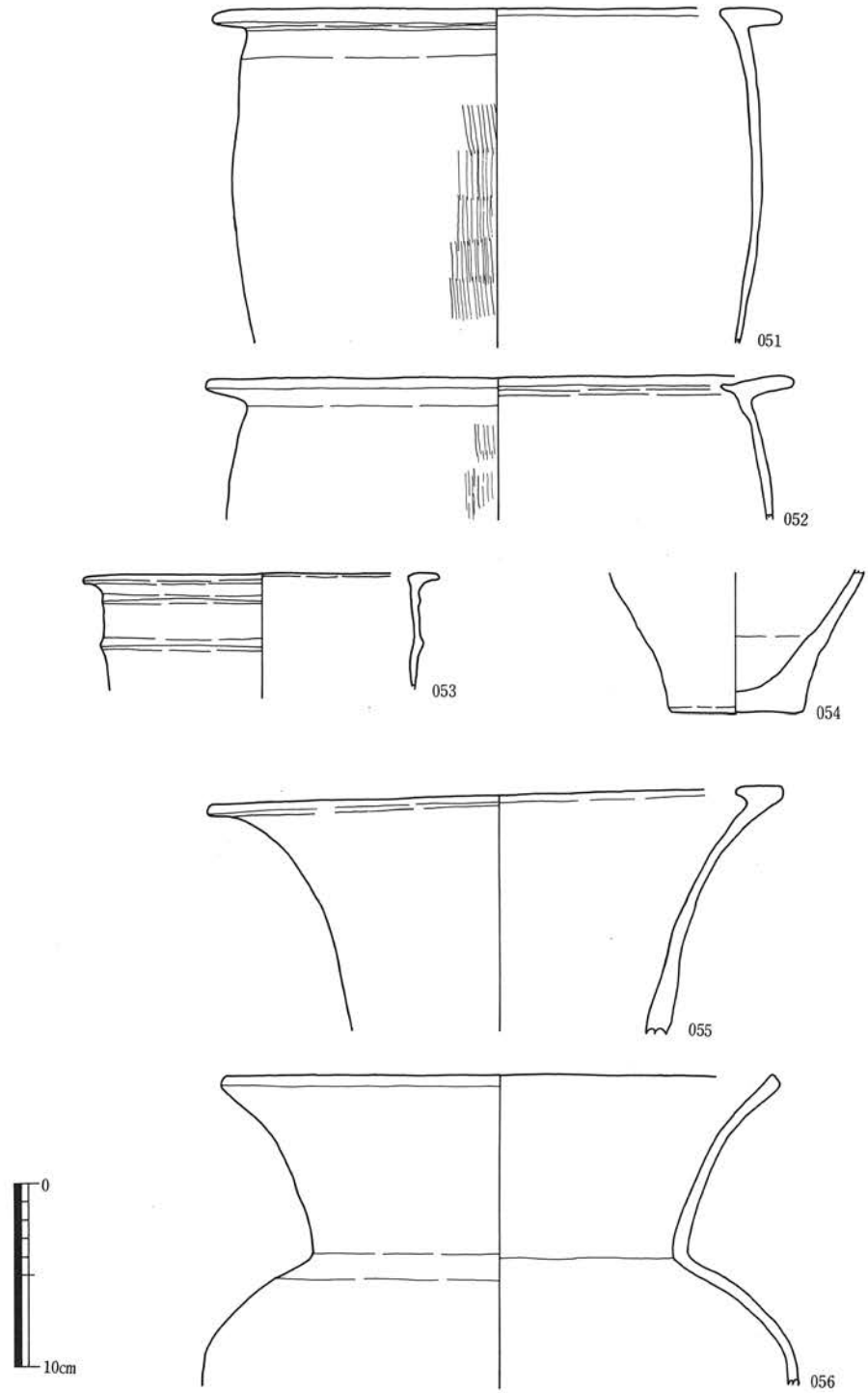


Fig.42　SK004出土遺物（1/4）

調整。胴部中位には黒斑が認められる。

壷（Fig.44／125・126，Fig.45／124）　124は、接合しなかったが、3破片とも同一個体と判断する。口縁端部は強い横ナデのため、浅い凹みがまわる。口縁部外面は横ナデの後、７本単位で、ヘラ状工具による縦方向の暗文を施している。口縁部内面は横方向のヘラミガキ調整。胴部外面は、底部付近で縦方向の、他は横方向のヘラミガキ調整。胴部内面は、上位を横方向のヘラミガキ調整、下位はナデ調整を施している。125は、口縁端部は平坦に仕上げてある。口縁部は横ナデ調整。頸部外面は横ナデ調整、内面はナデ調整。126は、外面は横ナデ調整、内面はナデ調整を施す。

高杯（Fig.44／127）　口縁部は、上面が不明瞭だが４本単位のヘラ状工具による暗文が施してあり、他は横ナデ調整。胴部内面は横方向のヘラミガキ調整、外面は調整不明瞭。

支脚（Fig.44／128）　完形に近い。器壁は厚く、重量感がある。全体に粗いナデ調整が施してある。

ＳＫ033土壙（Fig.46）

CW-51区画に検出した。他の遺構とは切り合い関係にはない。検出面の標高は、6.3～6.4m整った隅丸長方形の平面形をなし、長辺1.6m・短辺0.9m・深さ0.3～0.4mをはかる。壁面は直に立ち上り、底面はわずかに浅いレンズ状をなす。埋土は暗褐色～褐色土であった。埋土全体か

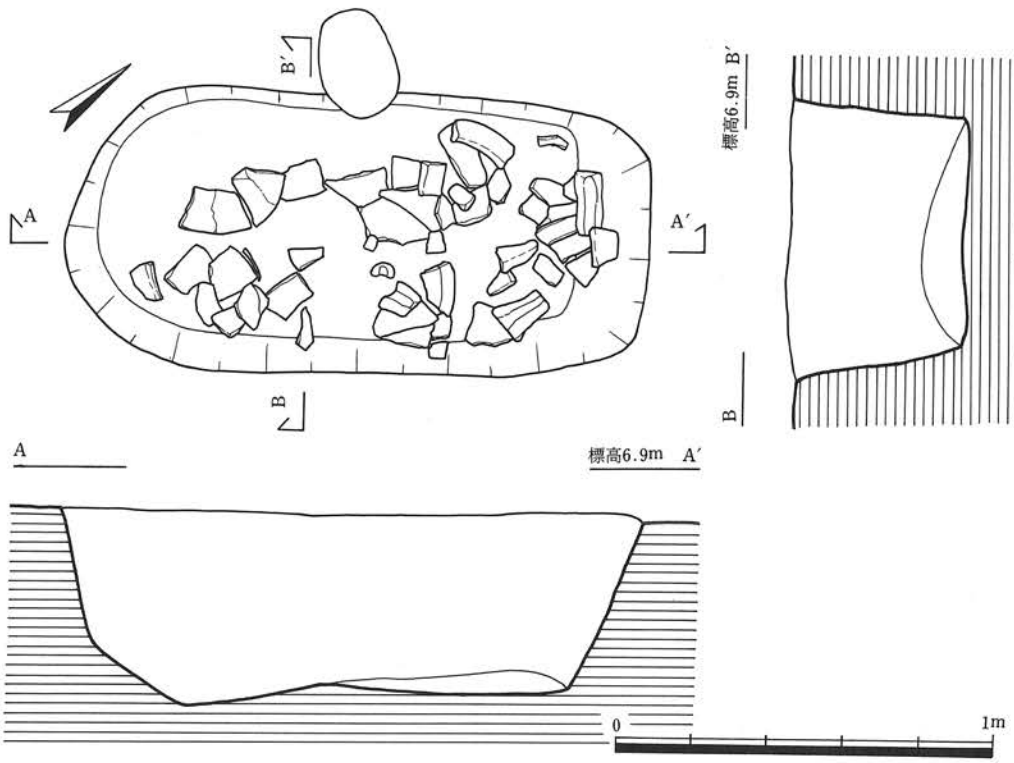


Fig.43　SK018実測図（1/20）

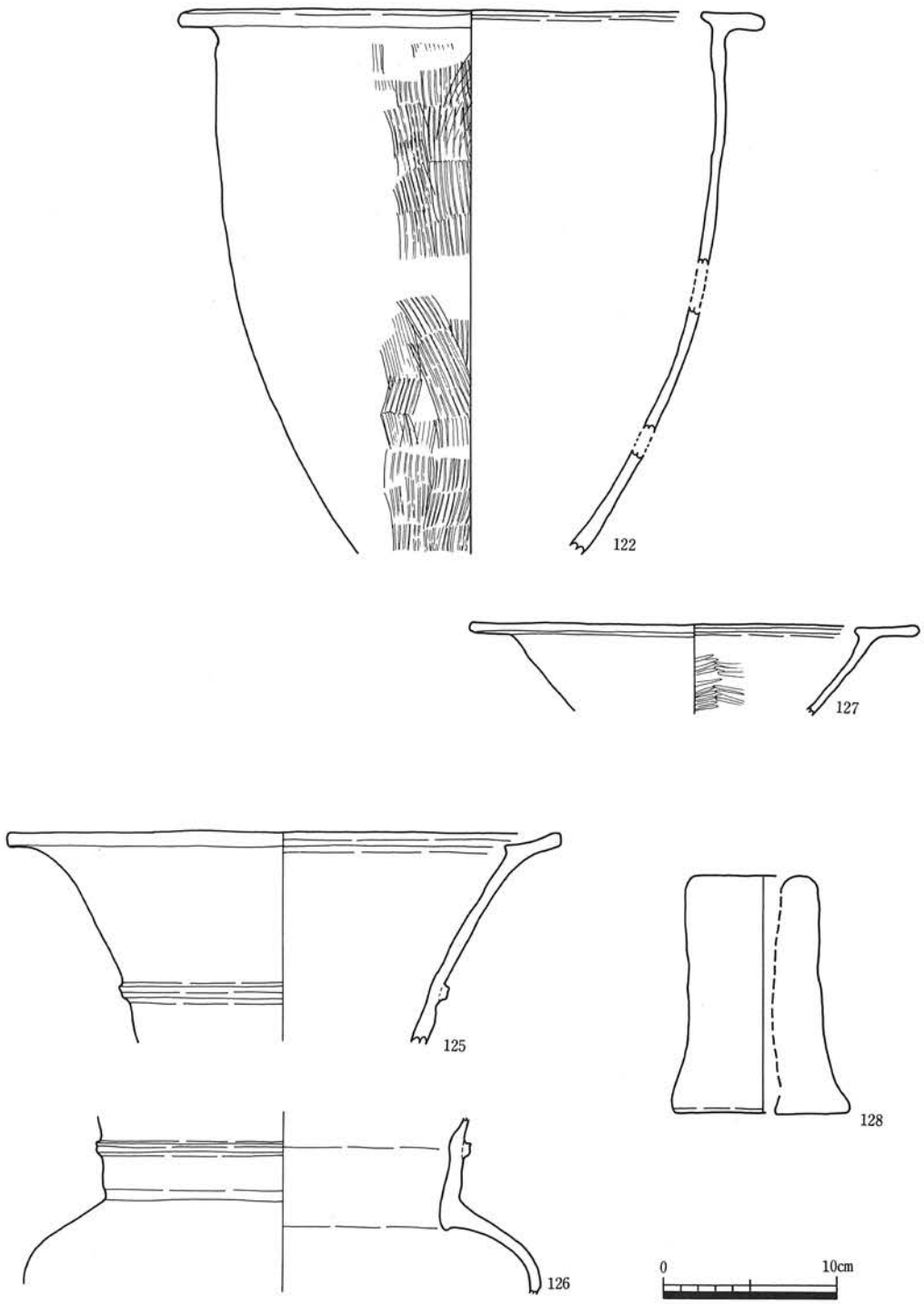


Fig.44　SK018出土遺物実測図１（1/4）

ら多量の弥生土器が出土していて、埋没の過程で一括投棄されたものと判断する。

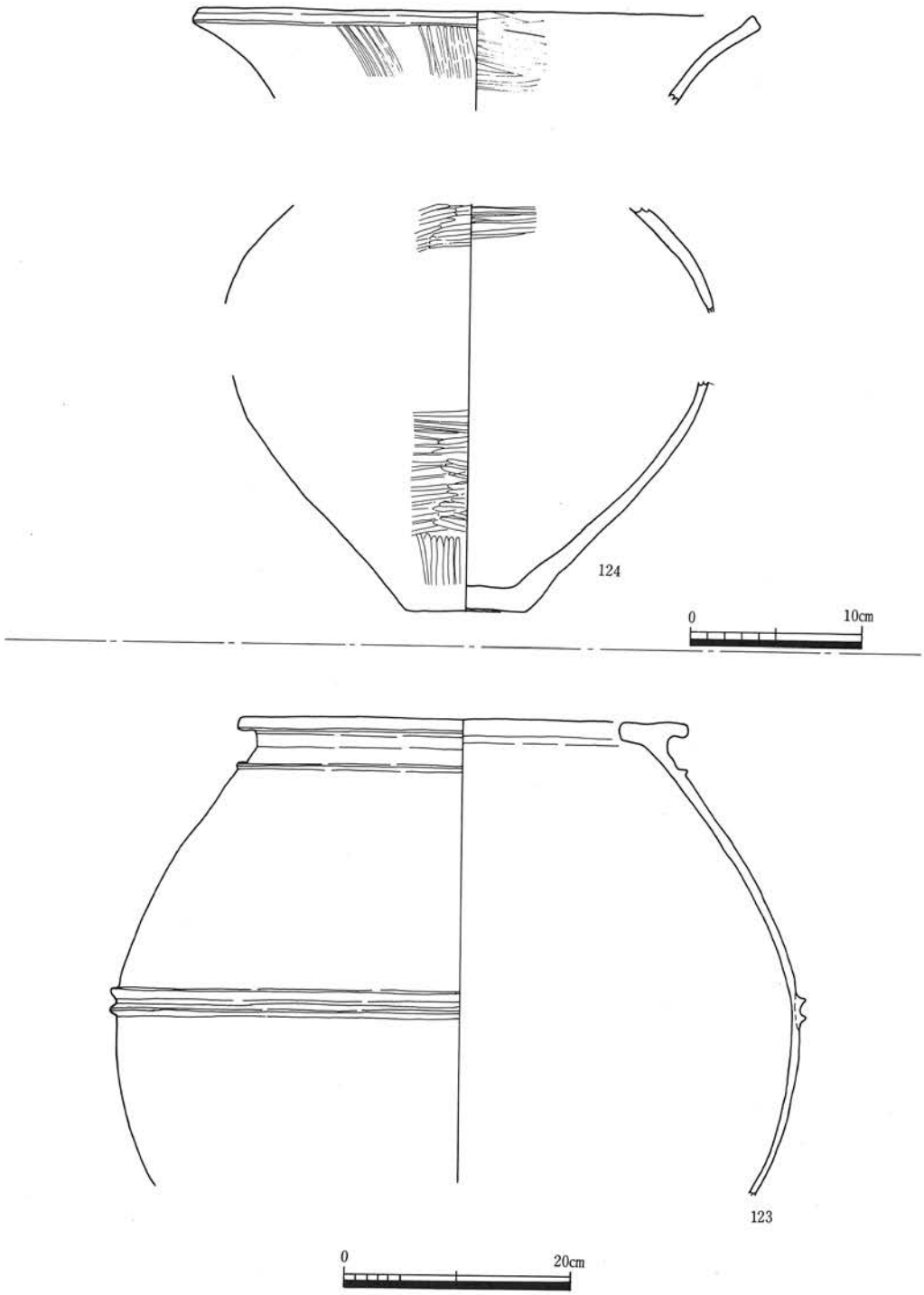


Fig.45　SK018出土遺物実測図２（1/4・1/6）

ＳＫ033出土遺物（Fig.47・48）

全体でコンテナバット２箱ほどの土器片が出土した。器種は、甕・壷・高杯・鉢・器台で、甕の破片が圧倒的に多い。

甕（Fig.47／163～170，Fig.48／171～175・179）　163～166・168～175の調整は、口縁部が横ナデ調整、胴部外面が縦～斜方向のハケ目調整、胴部内面はナデ調整を施している。164は外面にはススが付着する。165は砂粒を多量に含む。168は外面に黒斑が認められる。172は外面の一部に黒斑が認められる。173は外面の一部にススが付着する。174は胎土に砂粒を多量に含む。焼成不良で器壁がもろい。175は外面に黒斑が認められる。

167は、精製品。口縁部はていねいな横ナデ調整。胴部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。胎土は雲母•砂粒を少量含む。外面の一部に黒斑が認められる。179は、内面は剝離のため調整不明、外面はナデ調整を施す。胎土は雲母・砂粒を多量に含み、外面に黒斑が認められる。

壷（Fig.48／176～178，Fig.49／180）　176は、復元最大胴径27.2cm。外面は横ナデ調整、内面は剝離のため調整不明。外面上位に黒斑が認められる。177は、外面はナデ調整、内面は剝離のため調整不明。178は、口縁部は横ナデ調整。内面はナデ調整。外面は頸部付近が横ナデ調整、他はナデ調整を施す。180は、内外面横ナデ調整。

高坏（Fig.49／181）　外面は、細いヘラ状の工具による縦方向の暗文がはいる。内面はナデ調整。

鉢（Fig.49／182）　B類。口縁部は横ナデ調整。体部内外面はナデ調整。

器台（Fig.49／183）　受部端は、きつい横ナデのために浅い沈線状のくぼみがまわる。受部内外面は横ナデ調整。筒部外面は縦方向のハケ目調整、内面は横ナデ調整。

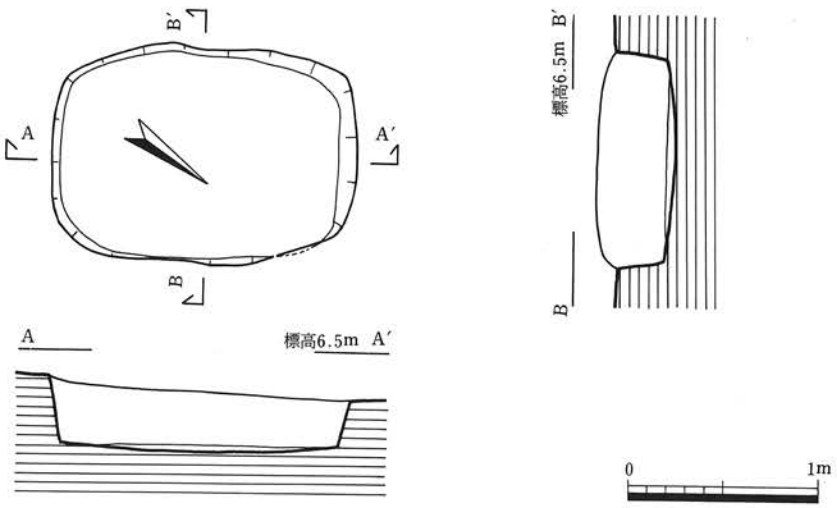


Fig.46　SK033実測図（1/40）

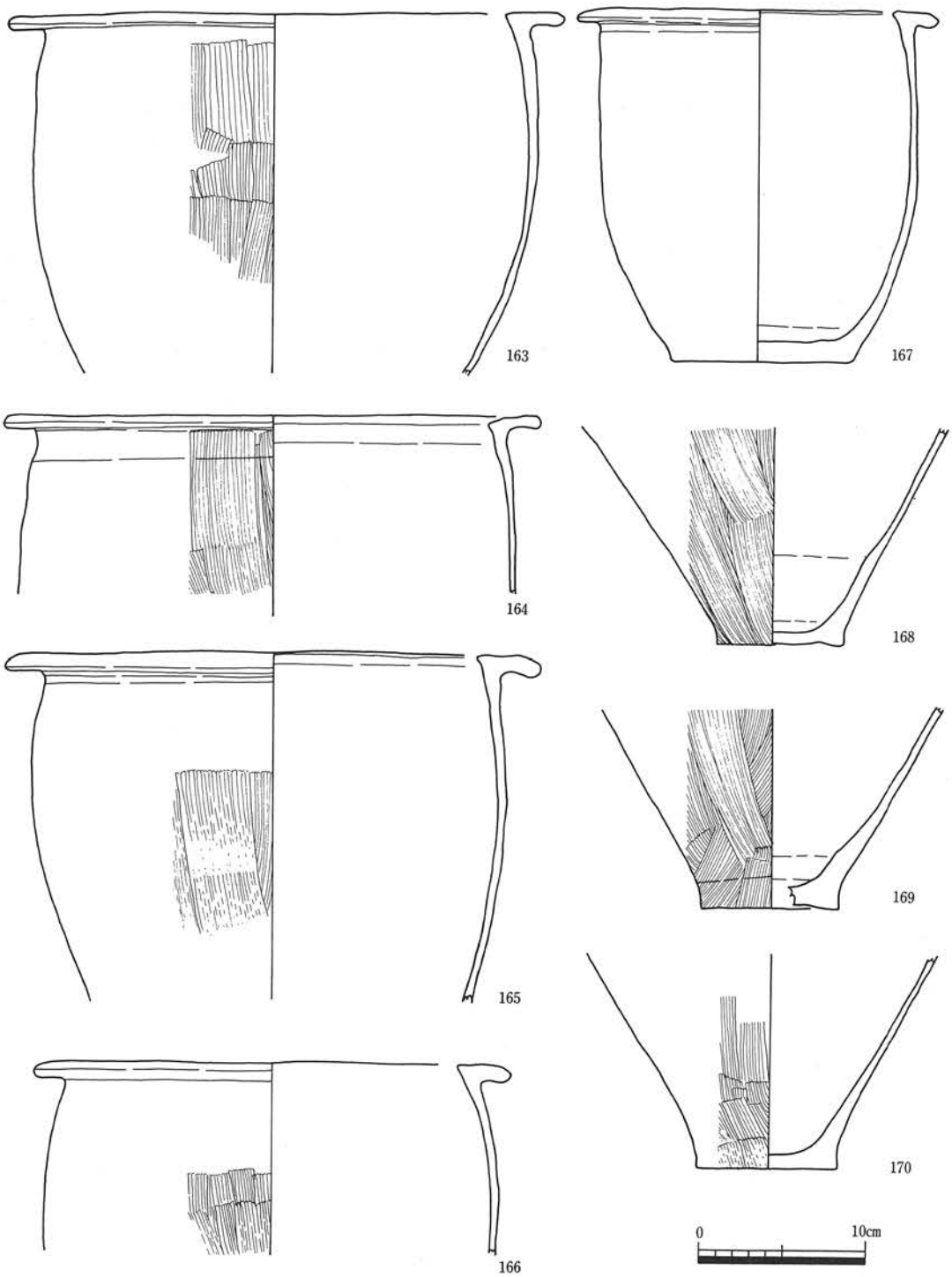


Fig.47　SK033出土遺物実測図１（1/4）

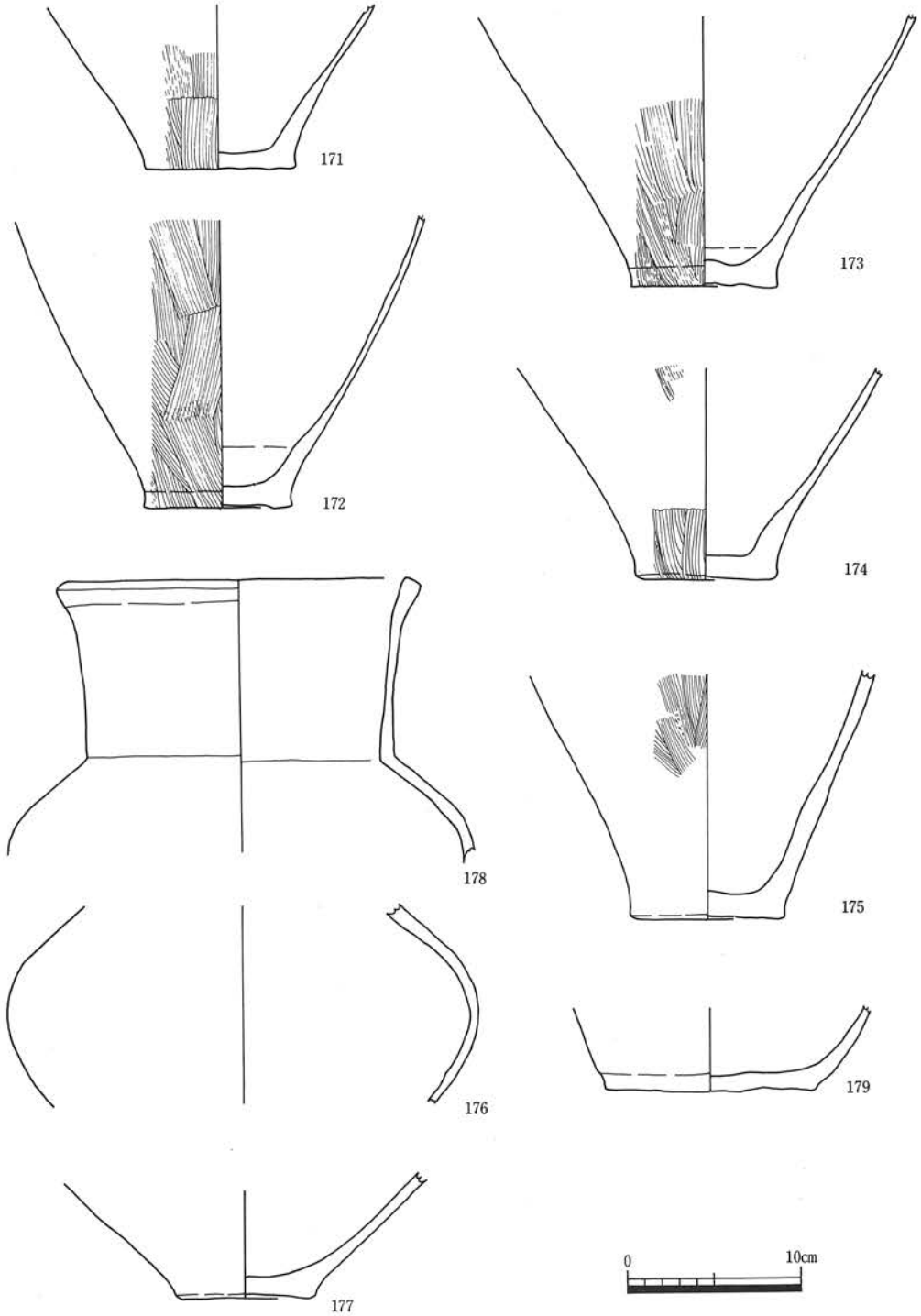


Fig.48　SK033出土遺物実測図２（1/4）

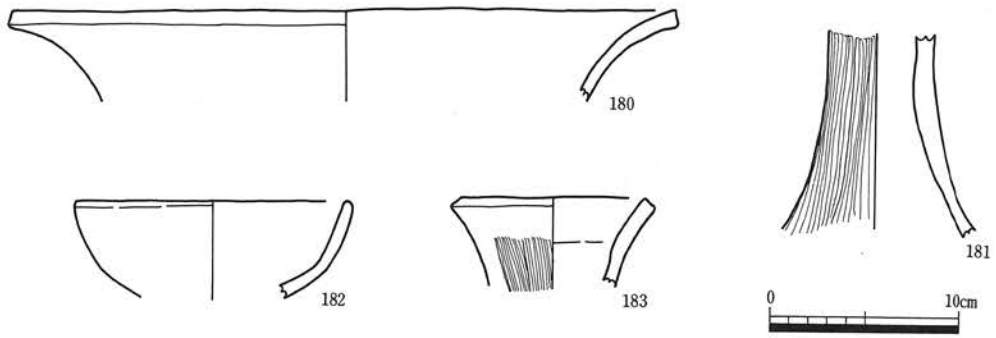


Fig.49　SK033出土遺物実測図（1/4）

(3) 性格不明の土壙

ＳＫ002土壙（Fig.50）

CO-61区画に検出した。SK003・005に近接する。検出面の標高は、6.9m前後。長径1.5m・短径1.3m・深さ0.4mをはかり、平面形は不整な短楕円形をなす。壁面はきつく立ち上がり、底面は浅いレンズ状を示す。埋土は砂混じりの暗褐色～褐色土で、埋土中から流れ込みと思われる少数の弥生土器片が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

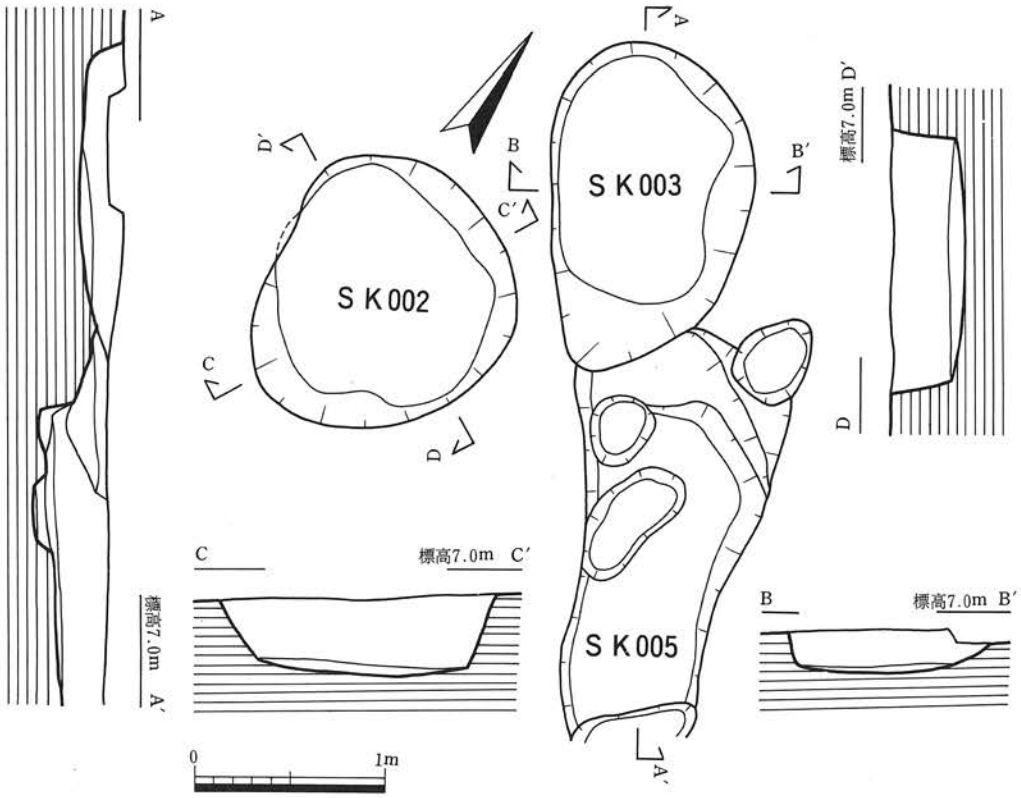


Fig.50　SK002・003・005実測図（1/40）

ＳＫ003土壙（Fig.50）

CO・CP-60区画に検出した。SK005と切り合い関係にあり、SK003が後出する。検出面の標高は、6.9m前後。長径1.7m・短径1.1m・深さ0.2mをはかり、平面形は不整な長楕円形をなす。壁面は北側と西側できつく、東側と南側でゆるく立ち上がる。底面は浅いレンズ状をなす。埋土は褐色土である。埋土中から、立ち上りがある須恵器の杯身などの土器破片が出土したが、どれも細片で図示できない。埋没過程での流れ込みによるものと判断する。

ＳＫ005土壙（Fig.50）

CO-61区画に検出した。SK003と切り合い関係にあり、SK005が先行する。4個の小穴に上面から切り込まれている。検出面の標高は、6.9m前後である。長辺2.2m以上・短辺0.8～1.2m・深さ0.3mをはかり、平面形は不整で長い長方形をなすものと思われる。壁面はゆるく立ち上り、北側で浅く不整な段部をもつ。底面はほぼ平坦である。埋土は、砂混じりの暗褐色土であった。底面からやや浮いた位置で甕（057）が1個体破砕した状態で出土し、管玉（058）が埋土中から出土している。

ＳＫ005出土遺物（Fig.51）

057は、完形に近い。口縁とその下部に2条の刻み目がある突帯がまわる。刻み目は、やや幅広く浅い。指先でつけたものか。口縁部から胴部上位の外面は横ナデ調整。胴部外面はナデ調整。底部外面は横ナデ調整を施す。内面は剝離のため調整は不明。口縁部外面に黒斑が認められる。058は、管玉である。璧玉製か。全長1.9cm・径0.6cm・孔径0.3cmをはかる。

ＳＫ008土壙（Fig.52）

CQ-58区画に検出した。他の遺構とは切り合い関係にはない。検出面の標高は、6.7m前後で

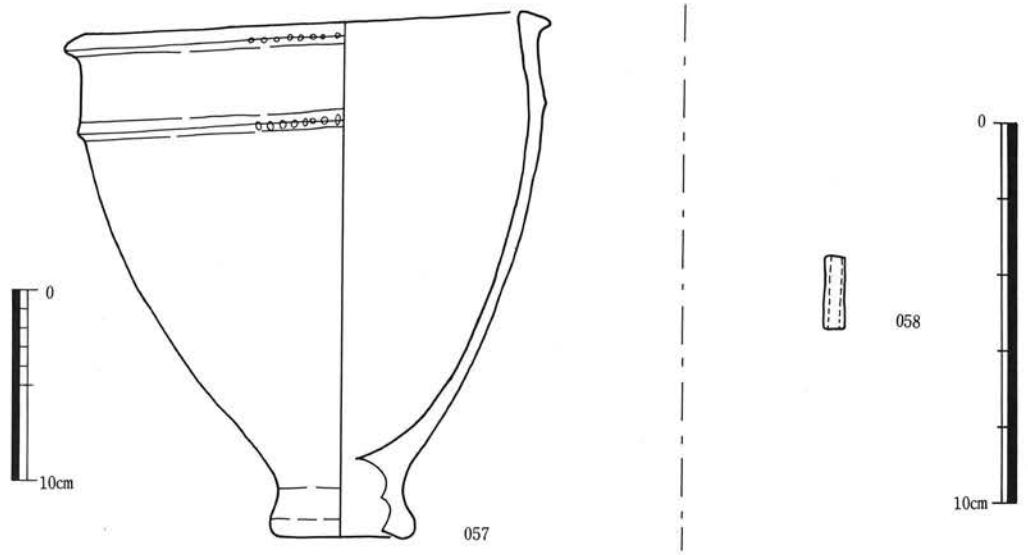


Fig.51　SK005出土遺物実測図（1/4・1/2）

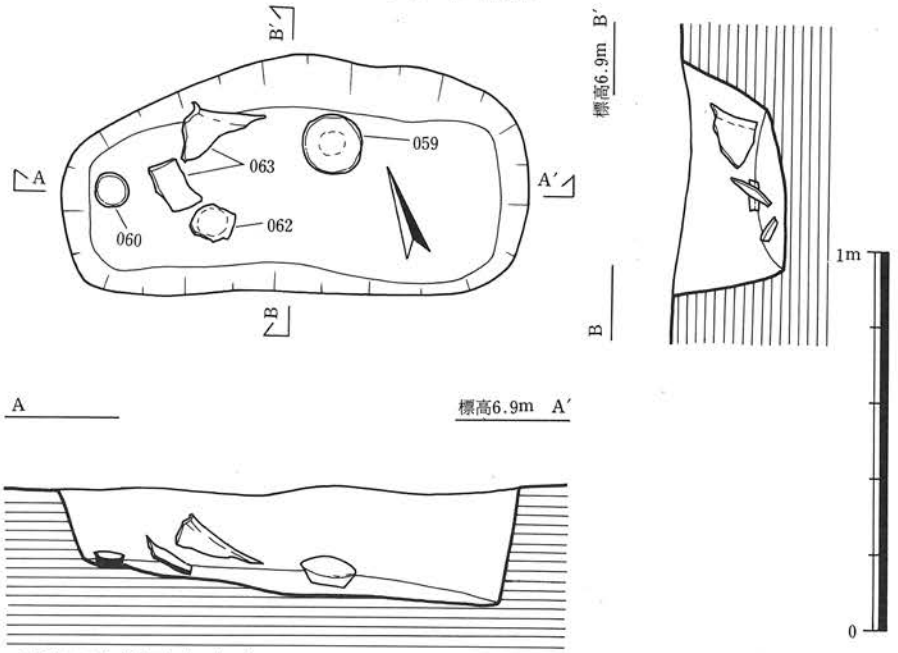


Fig.52　SK008実測図（1/20）

である。長辺1.2m・短辺0.5m・深さ0.3mをはかり、不整な隅丸長方形の平面形をなす。壁面はきつく立ち上り、底面は浅い舟底状を示し、東側に向かってやや低くなる。埋土は暗褐色土。ほぼ底面から土師器が出土している。出土状況から一括投棄されたものと判断する。

ＳＫ008出土遺物（Fig.53）

059は、土師器の高台付杯で、ほぼ完形である。体部内外面は回転ナデ調整。内底部はナデ調整を施す。060は、土師器。内底部はナデ調整。外面は回転ナデ調整を施す。062は、土師器の杯の底部破片。底部外面は、回転ヘラ切り離しの後、ナデを加えている。体部内外面は回転ナデ調整。内底部にはナデ調整を施す。063は、土師器の甕口縁部破片。口縁部内外面は横ナデ調整。胴部外面は、縦方向のハケ目の後に、平行タタキ目が認められる。胴部内面はヘラ状工具

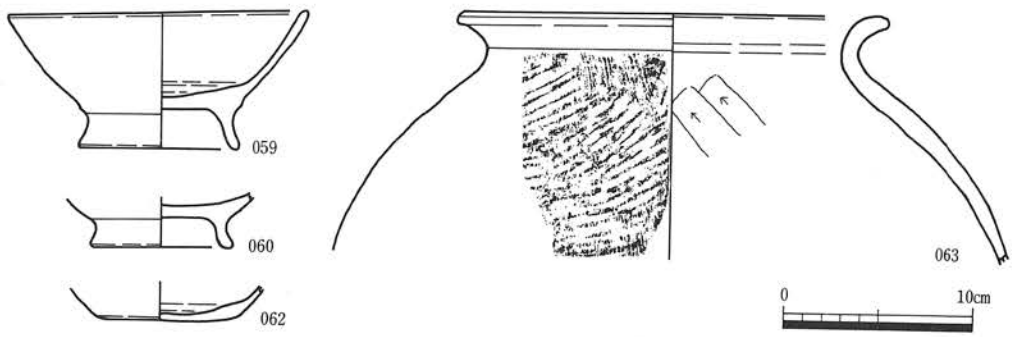


Fig.53　SK008出土遺物実測図（1/4）

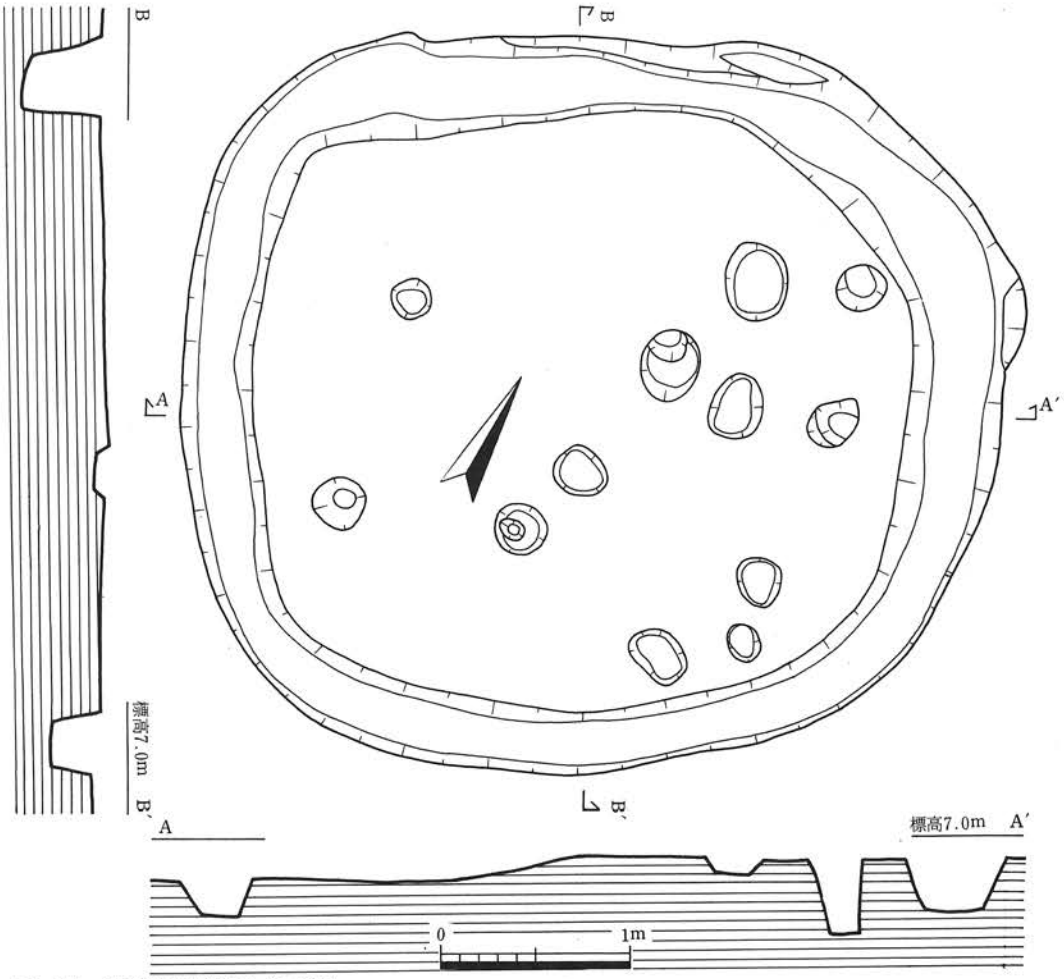


Fig.54　SR027実測図（1/40）

によるケズリを施す。色調は外面赤黄灰色、内面黄黒灰色。

6．周溝状遺構と出土遺物

ＳＲ027周溝状遺構（Fig.54）

CS･CT-54区画に検出した。SD029に近接する。SD028･SD032と切り合い関係にあり、SR027が後出する。検出面の標高は、6.8～6.9mである。平面形は不整な隅丸方形の形状をなし、一辺

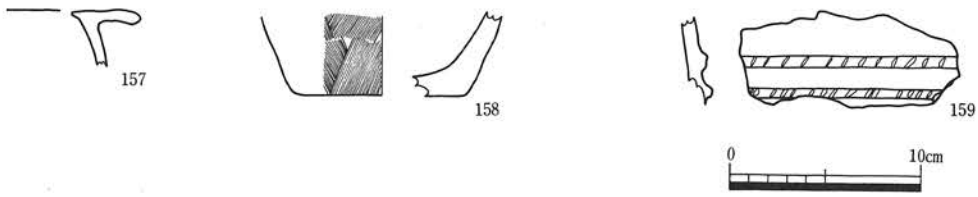


Fig.55　SR027出土遺物実測図（1/4）

3.8～4.1m・溝幅0.3～0.6m・深さ0.3～0.5mをはかる。溝の断面形は台形状で、壁面は内側はきつく外側でゆるく立ち上り、溝底は北側で深くなる。周溝の内部に12個の小穴を検出したが、この遺構に伴うものかはわからない。埋土は砂混じりの暗褐色土で、土器片が少数出土した。出土状況から流れ込みによるものと判断する。

ＳＲ027出土遺物（Fig.55）

３点が図化できた。157は、甕口縁部破片。158は、甕底部破片。胎土には雲母・砂粒を多量に含む。外面に黒斑が認められる。159は、甕胴部破片。２条の台形突帯があり、ヘラ状工具でいれた細い刻み目がある。

７．溝と出土遺物

Ｊ１区では、８条の溝が検出された。SD001以外は、どれも溝幅20～30cm・深さ5～30cm程度のもので、出土遺物も流れ込みの土器細片である。これらの小規模な溝は、調査区の中央から西側にかけてその他の遺構と複雑に切り合っていて、各遺構間の切り合い関係を把握するためには有効である。切り合い関係はFig.7に示している。SD001以外は、個別の説明は行わない。

ＳＤ001溝（Fig.56）

調査区の東端に検出した。検出面の標高は、6.7～6.9mをはかる。主軸をほぼ南北にとるが、やや西へ振れている。南北両端は調査区外へ展開する。調査区の南側に位置するG地区では、このSD001に続く部分は検出されていない(Fig.6参照)。したがって、SD001の南端は調査区から13m以内で止まるか、続くとすればG地区の手前で80°以上西に振れて屈曲していることになる。

直線的な溝で、長さ19.5m以上・溝幅2.0～2.4m・深さ0.5～0.6mをはかる。断面形は台形状で、底面はごくゆるやかに北から南へ傾斜する。北端で底面が一段15cmほど下がる部分があるが、他の遺構との切り合いではなく溝の一部である。

埋土は６層に大別できた。①～③は、暗褐色土で砂粒を含む。④・⑤は黄褐色の粘土ブロックを含む暗褐色土で、大部分の遺物はここから出土している。⑥はやや粘性がある暗褐色土である。どれも自然堆積によるものと判断される。Fig.56の部分では西側から埋没していったことが観察できる。

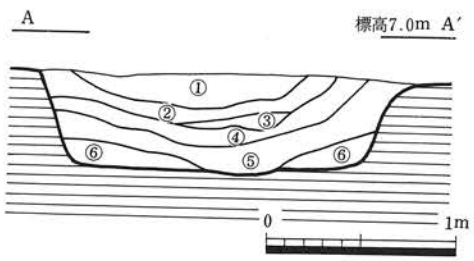


Fig.56　SD001土層断面図（1/40）

遺物は全体から多量に出土したが、CO・CP-59区画に最も集中した。042はCP-59区画でそのままつぶれた状態で出土した。

ＳＤ001出土遺物（Fig.57～61）

コンテナバット７箱ほどの遺物が出土している。大部分が小破片の状態で出土し、器台類をのぞき、完形に近い状態に復元できたものはない。弥生時代中期初頭に属する土器類（特に突

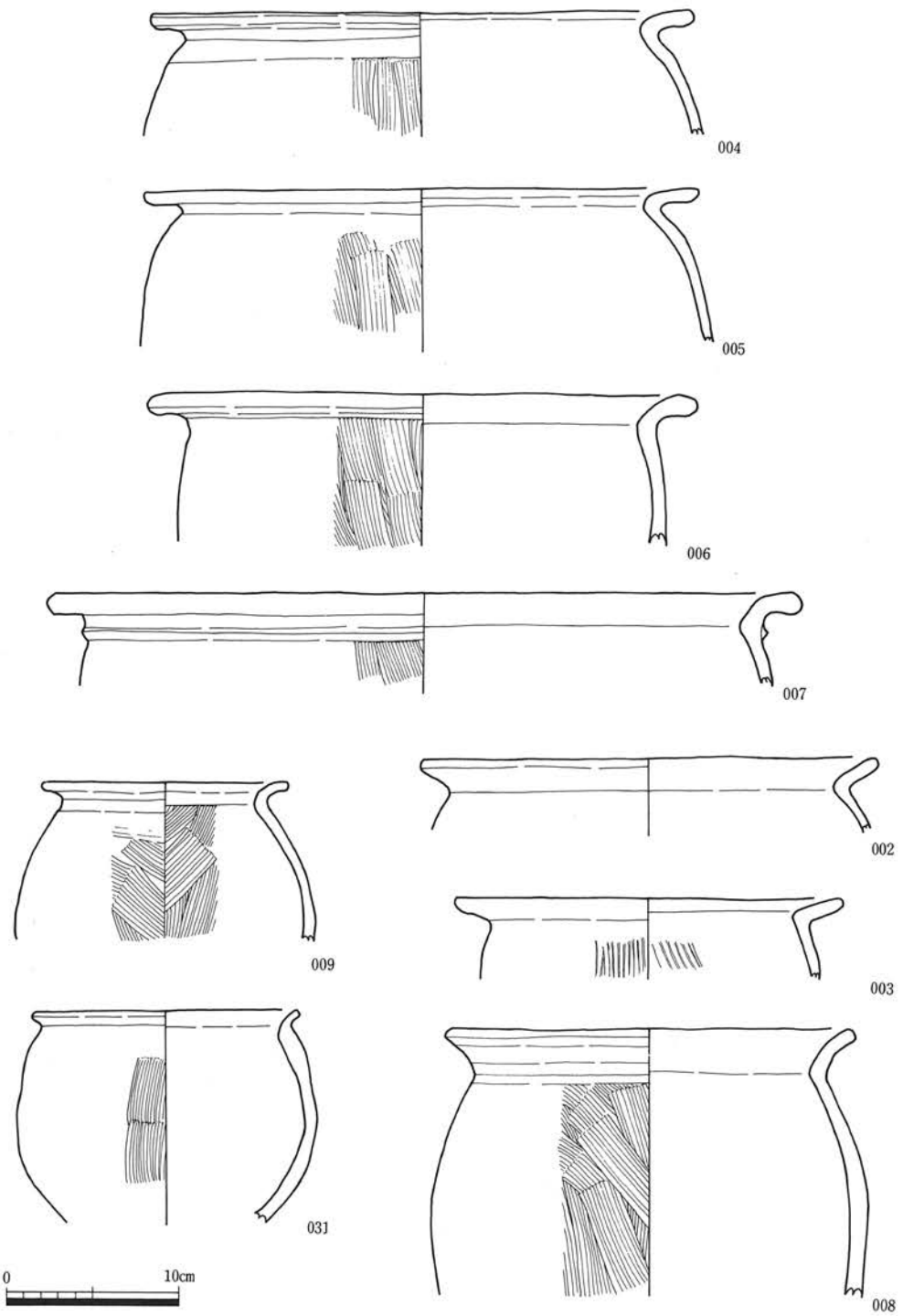


Fig.57　SD001出土遺物実測図１（1/4）

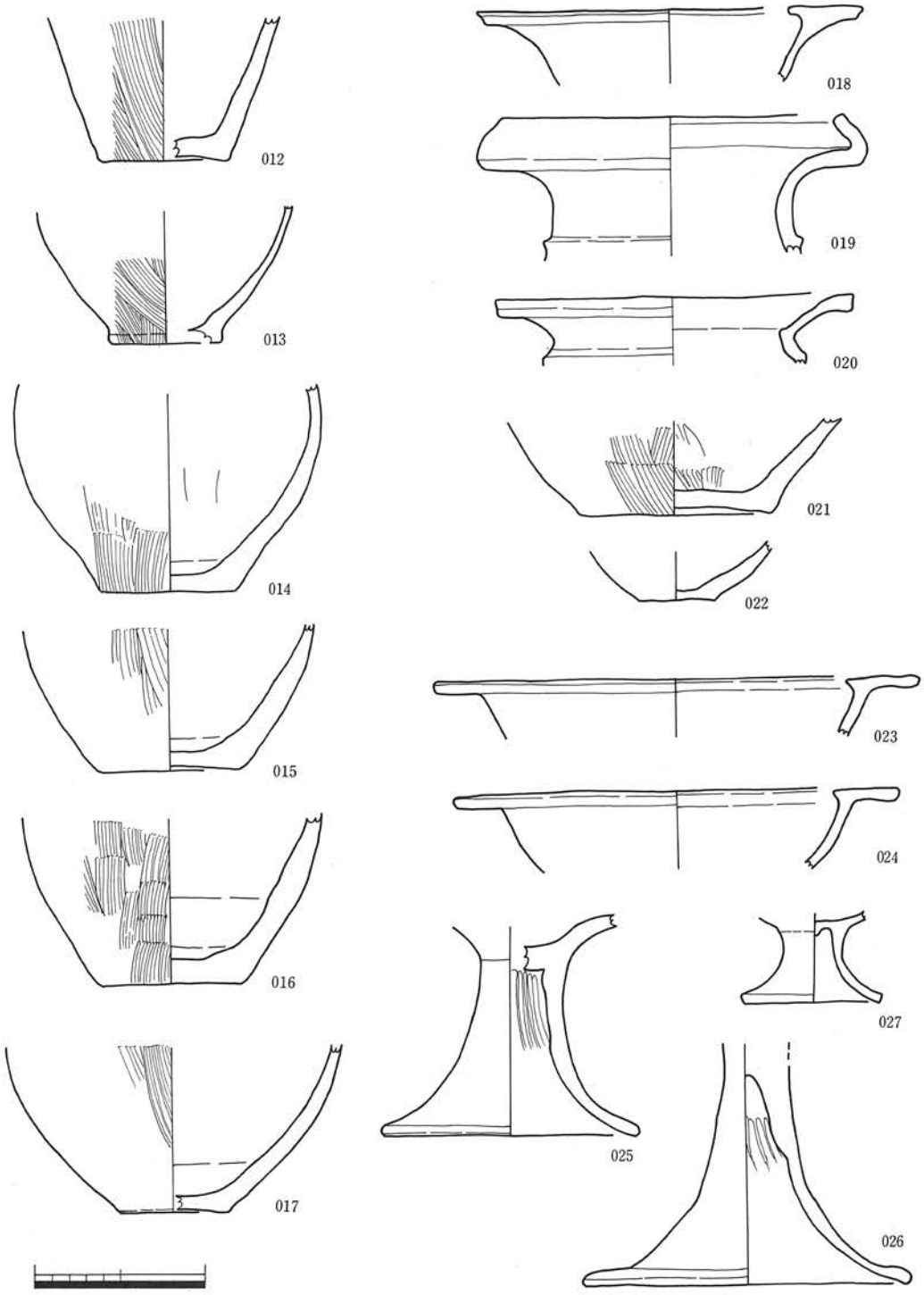


Fig.58　SD001出土遺物実測図２（1/4）

帯文系の甕破片）も多かったが、ここでは図示していない。

甕（Fig.57／002～009•031，Fig.58／012～017，Fig.59／042）　004～007は大形品、002•003・008は中型品、009・031は小形品である。042は甕棺の破片か。

004•005は、口縁部は横ナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。006は、口縁部は横ナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。007は、口縁部の下に断面三角形のゆるい突帯をもち、口縁部が鋭く屈曲する。口縁部は横ナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。丹塗りの痕跡がある。002は、口縁部は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施す。003は、口縁部は横ナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は縦方向のハケ目調整の後ナデ調整を施す。008は、口縁部は横ナデ調整、胴部外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。009は、復元口径13.8cm。口縁部は横ナデ調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整の後、上部をナデ消す。内面は斜方向のハケ目調整を施す。031は、口縁端部は平坦に仕上げている。口縁部は横ナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。042は、口縁端部は強いナデでわずかにくぼむ。口縁下に断面台形状の突帯がまわる。口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整の後ナデを加え、内面はナデ調整。

012～017は、甕底部破片である。調整は、外面は斜～縦方向のハケ目、内面はナデ調整を施す。012は、胎土に多量の砂粒を含む。015は、外面下位のハケ目を一部ナデ消す。017は、外面のハケ目を一部ナデ消す。

壷（Fig.58／018～022）　壷の破片と思われるものは、量的にかなり少ない。

018は、口縁部外端がていねいに仕上げられ、ゆるい沈線状のくぼみがまわる。内面は横ナデ調整、口縁部上面と外面は、磨耗のため不明瞭だが、ヘラミガキ調整が認められる。内外面に丹塗りを施している。019は、頸部に断面三角形の突帯がまわる。口縁部は横ナデ調整、内面はナデ調整、外面は横ナデ調整を施す。外面は丹塗りを施している。口縁部内面の一部に黒斑が

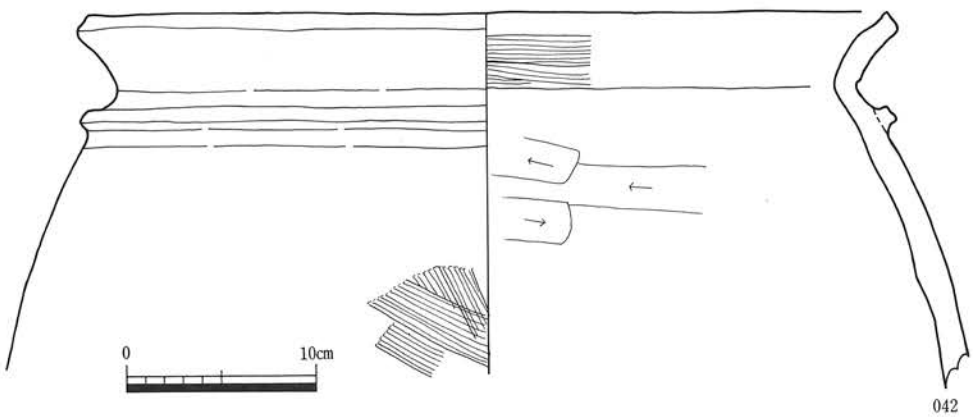


Fig.59　SD001出土遺物実測図３（1/4）

認められる。020は、口縁端部はていねいに仕上げられ、ゆるい沈線状のくぼみがまわる。頸部下位には、断面三角形の突帯がまわる。内面は剝離のため調整は不明瞭、外面は横ナデ調整を施す。

021は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はハケ目の後にナデを加える。022は、内面はナデ調整、外面は横ナデ調整を施す。

高杯（Fig.58／023～027）　023・024は、口縁部は横ナデ調整。内面はナデ調整。外面は調整不明瞭。

025は、杯部内面はナデ調整、外面はナデ調整、脚部内面下位はナデ調整、上位には絞りの痕がある。胎土には砂粒を多く含む。026は、脚部端内外面は横ナデ調整、外面はナデ調整、脚部内面上位には絞り痕がある。胎土には砂粒を多く含む。027は、脚部端をやや平坦に仕上げている。杯部内面はナデ調整、外面は横ナデ調整、脚部内面はナデ調整を施している。胎土には微量の砂粒を含む。

鉢（Fig.60／028～030・032～034）　口縁部が外方におれるA類（028～030）と、直口の口縁をもつB類（032～034）に分類できる。

028は、口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。外面の一部に黒斑が認められる。029は、口縁部は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施す。030は、口縁部は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施す。

032は、完存に近い。口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整で指頭痕が明瞭に残る。033は、内外面ナデ調整。外面の一部に黒斑が認められる。034は、口縁部は横ナデ調整、内面は横ナデ調整、外面はハケ目の後ナデを加えている。

器種不明（Fig.60／044）　外面の調整が、内面に比べてていねいであることから、蓋か器台のようなものか。復元最大径は22.0cmをはかる。内外面ともにナデ調整。外面の一部に黒斑が認められる。

器台（Fig.60／035～041）　受部が内上方に屈曲するもの（037）・受部径と裾部径がほぼ同じで筒部があまり締まらないもの（035・036）・受部径が裾部径より小さく筒部最小径が上位にくるもの（039・040）・受部径が裾部径より大きく筒部が下位で締まっているもの（038・041）、の4類に分類できる。どれも器壁は厚く、重量感がある。

037は、内外面ともにナデ調整を施す。035は、ほぼ完形。受部と裾部内外面は横ナデ調整。筒部外面は縦方向のハケ目調整。筒部内面の上位と下位は横方向のハケ目調整、中位はナデ調整を施し指頭痕が観察できる。036は、筒部内外面はナデ調整、裾部内外面には横ナデ調整を施す。039は、受部内面は横ナデ調整、外面はナデ調整。筒部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。040は、受部外面はナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。筒部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。038は、裾部内外面は横ナデ調整。筒部内外面はナデ調整で、

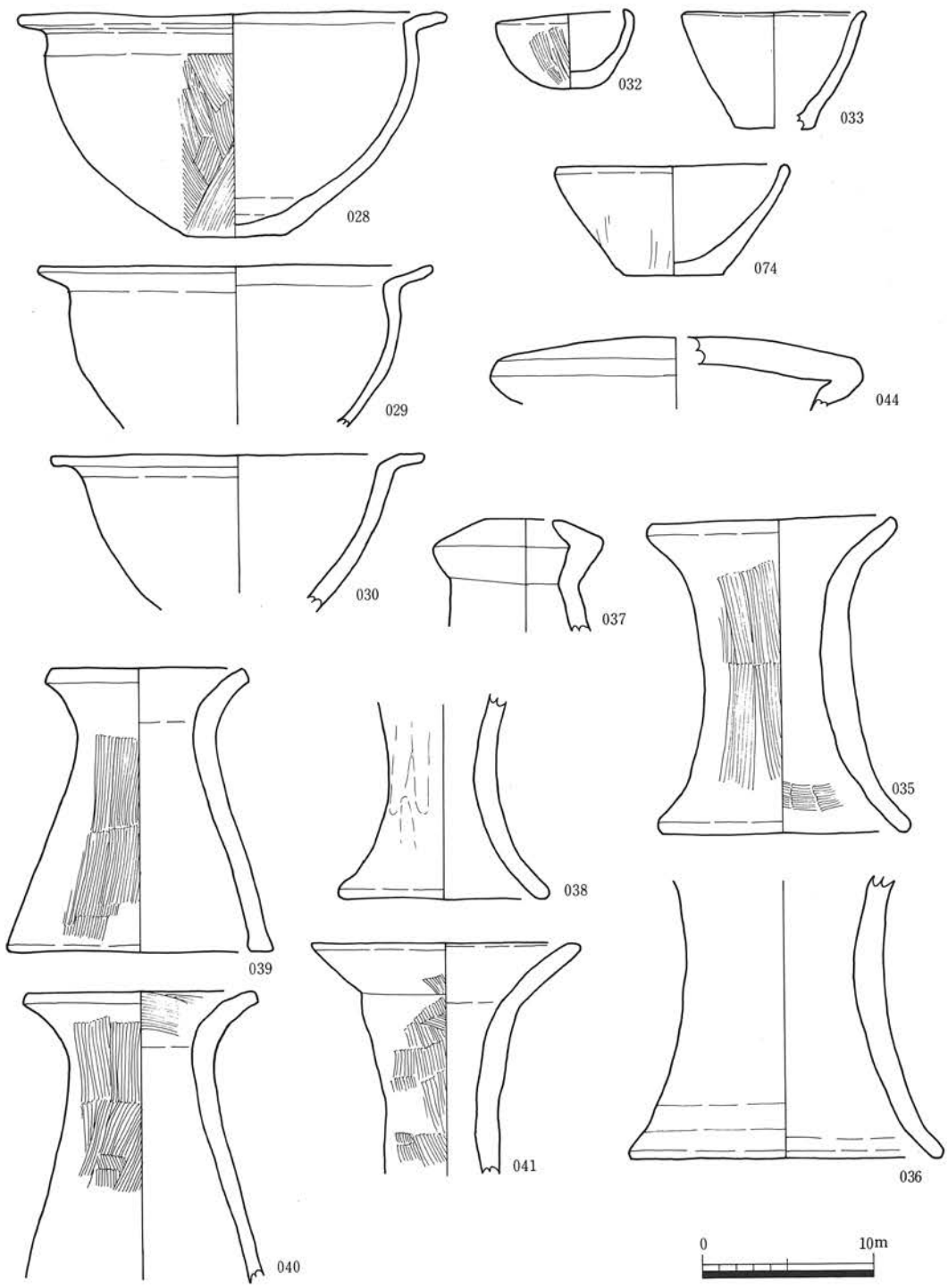


Fig.60　SD001出土遺物実測図４（1/4）

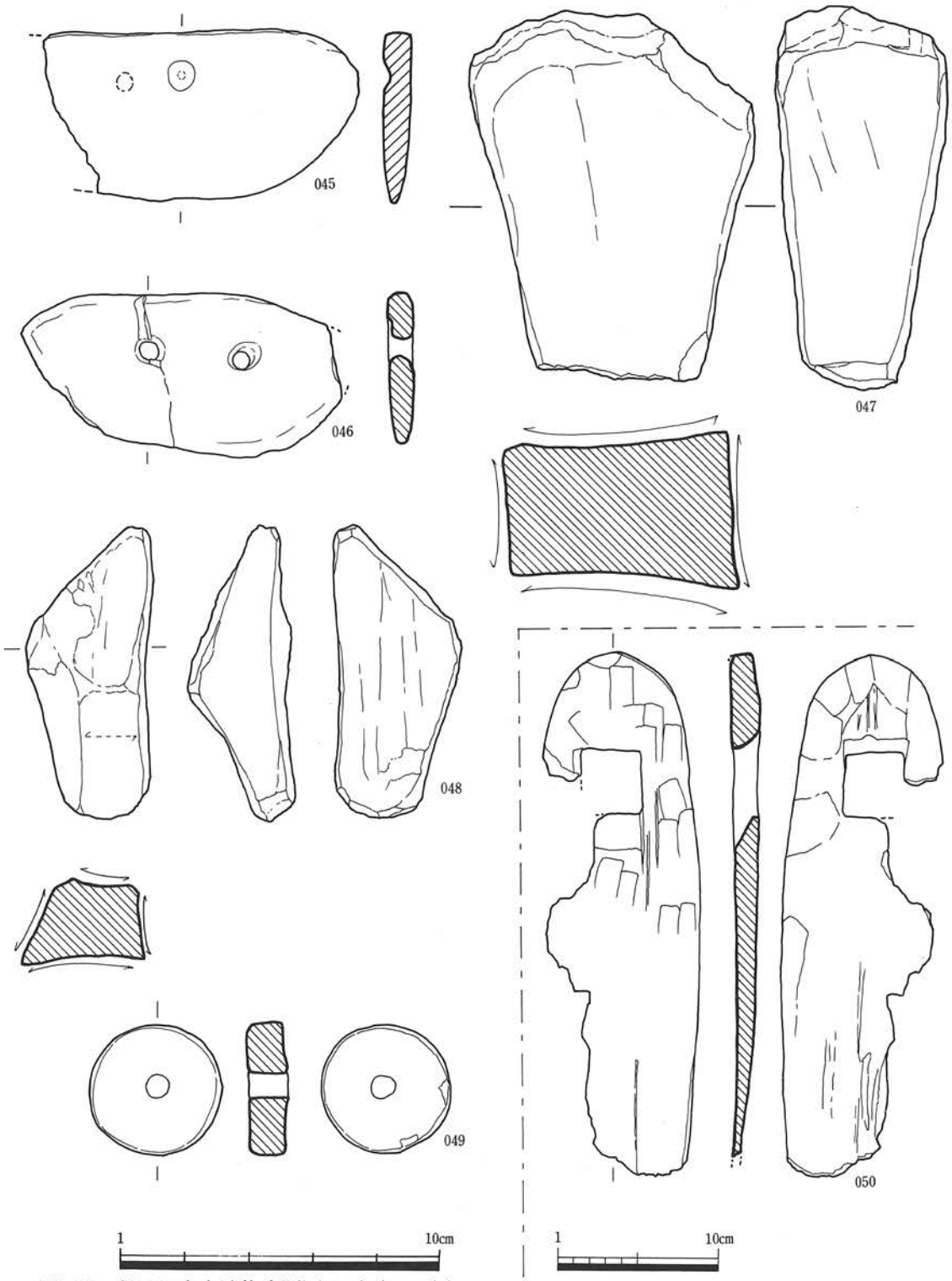


Fig.61　SD001出土遺物実測図 5 （1/2・1/4）

外面には指頭痕が観察できる。041は、受部内面は横方向のハケ目調整、外面はハケ目の後ナデを加える。筒部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

石包丁（Fig.61／045・046）　045は未製品（製造中の欠損品か）。刃部は一応研磨されているが、2個の穿孔はどちらも貫通していない。穿孔痕は片面だけである。残存長9.1cm・最大幅5.3cm・厚さ0.9cm。石材は粘盤岩系か。046は、先端の一方が欠損し、二つに折れた状態で出土した。残存長9.8cm・最大幅5.0cm・厚さ0.8cmで、穿孔は径0.6cm。石材は粘盤岩系か。

砥石（Fig.61／047・048）　石材はどちらも砂岩系と思われる。047は、石材の6面のうち4面に使用痕があり、砥石として利用している。048は、同じく7面のうち5面に使用痕がある。

紡錘車（Fig.61／049）　土製品。径4.1cm・厚さ1.3cm。穿孔の径0.8cm。胎土は微小な砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。

鍬（Fig.61／050）　木製品。残存状況はあまりよくない。先端部と側辺の一部を欠損する。残存長32.2cm・最大幅は10.5cmほどか。最大厚1.9cm。基部近くでは、削り痕が観察できる。

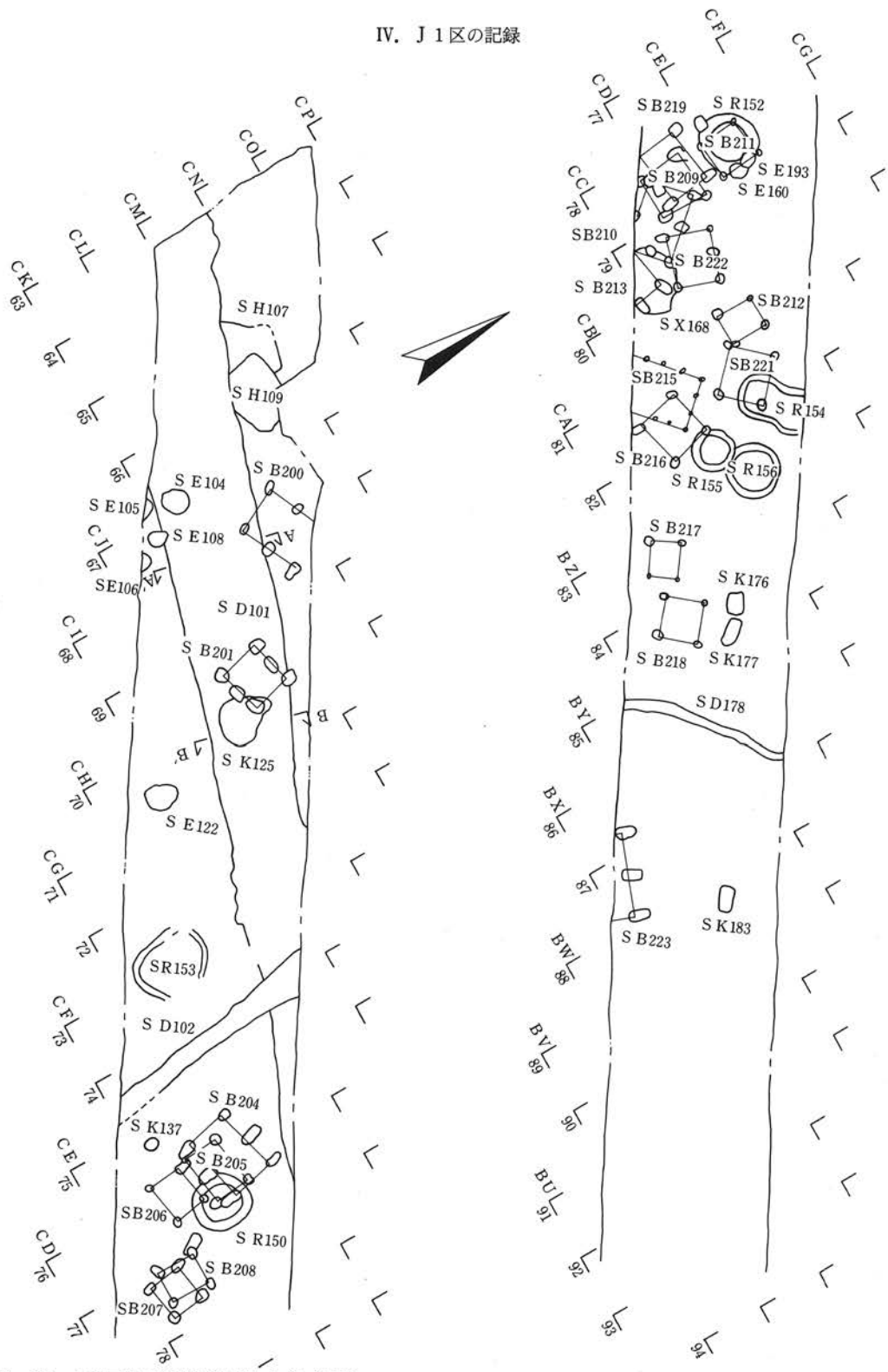


Fig.62　Ｊ２区主要遺構配置図（1/500）

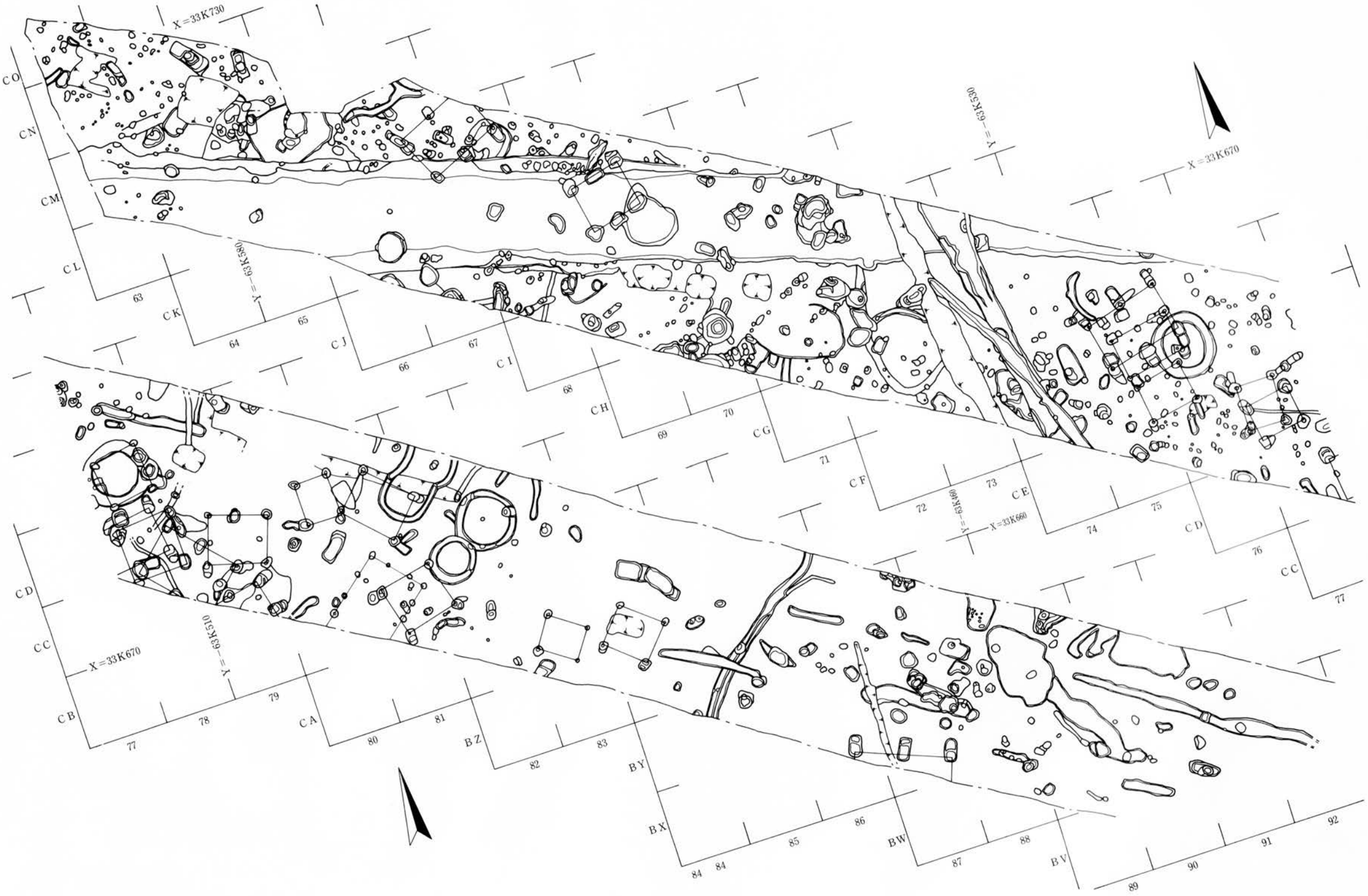


Fig.63　J 2 区遺構配置図（1/300）

V．J2区の記録

1．遺構の分布状況（Fig.62）

J2区では、BV区画以西では、谷地形にかかり遺構は検出されていない。この部分では、基盤がやや軟弱な淡赤褐色粘性土に変わり、遺物も確認されなかった。ゆるく東にむかい落ちていき、東端ではまたゆるくあがっていく。BV区画以東では、J2区東端まで連続的に遺構が分布している。

検出された遺構は、撹乱を除き、大部分が弥生時代のもので、古代・中世に属するものもある。遺物には縄文時代に属するものも若干ある。

弥生時代に属する主な検出遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・周溝状遺構・溝である。竪穴住居は、調査区西端に2棟検出された。J1区およびG地区で検出された竪穴住居群と同じ分布状況にある。掘立柱建物は、全面に検出されている。中央では激しく切り合い・重複関係にある。井戸は、CJ・CK-66・67区画に集中が認められる。廃棄時に土器を用いた祭祀行為がなされているものがある。土壙は、全面に分布していて特に集中は認められない。貯蔵穴の可能性があるもの・土器溜もあるが、大部分は性格不明。周溝状遺構は、中央から西端にかけて分布する。掘立柱建物に切られているものが多い。溝は、小規模で浅いものが全面にまばらに分布している。

古代・中世に属する主な検出遺構は、掘立柱建物・土壙・溝である。土壙は、やや中央にかたよって、まばらに分布する。井戸の可能性があるもの・土器溜・性格不明のものがある。溝は、西側で2条検出された。SD101は大規模な溝である。

2．竪穴住居と出土遺物

J2区では、2棟の竪穴住居（SH107・109）が切り合った状態で検出された。検出作業の初期の段階では切り合い関係を把握することができず、2棟の竪穴住居の出土遺物が混じってしまった。その混じり合った遺物については、整理作業の段階で、確実に各住居内から出土したことが確認された遺物と接合関係があったものだけを図示している。

SH107竪穴住居（Fig.64）

CM-65区画に検出した。検出面の標高は、6.9m前後である。SD101・SH109と切り合い関係にあり、SH107が先行する。北西隅の部分は、撹乱により破壊されている。上面から7個の小穴に切り込まれている。

SD101・SH109・撹乱により北東隅の部分と西側側辺の一部しか残存していないが、一辺4.2m以上の隅丸の長方形あるいは正方形をなすものと判断する。壁高は最大残存部で、10cmほどである。複数の小穴に切り込まれているため床面の残存状況はよくない。

埋土は、砂混じりの暗褐色土で、自然流入土と判断する。床面の一部には暗褐色砂質土を叩

きしめた張り床が形成されていた。

床面では、壁溝・主柱穴にあたるものは確認されていない。PAは、深さ6cmほどで炭が堆積していて、炉と判断する。

住居内の埋土から、若干の遺物が出土した。確実に床面上の配置あるいは投棄と認められる遺物はない。埋土の自然流入に伴い流れ込んだものと判断する。256は張り床形成土から出土した。

ＳＨ107出土遺物（Fig.65）

8点が図化できた。252は、縄文土器深鉢破片。外面は斜方向の条痕、内面はナデ調整である。色調は暗褐色で、胎土には1㎜ほどの砂粒を含む。253は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ

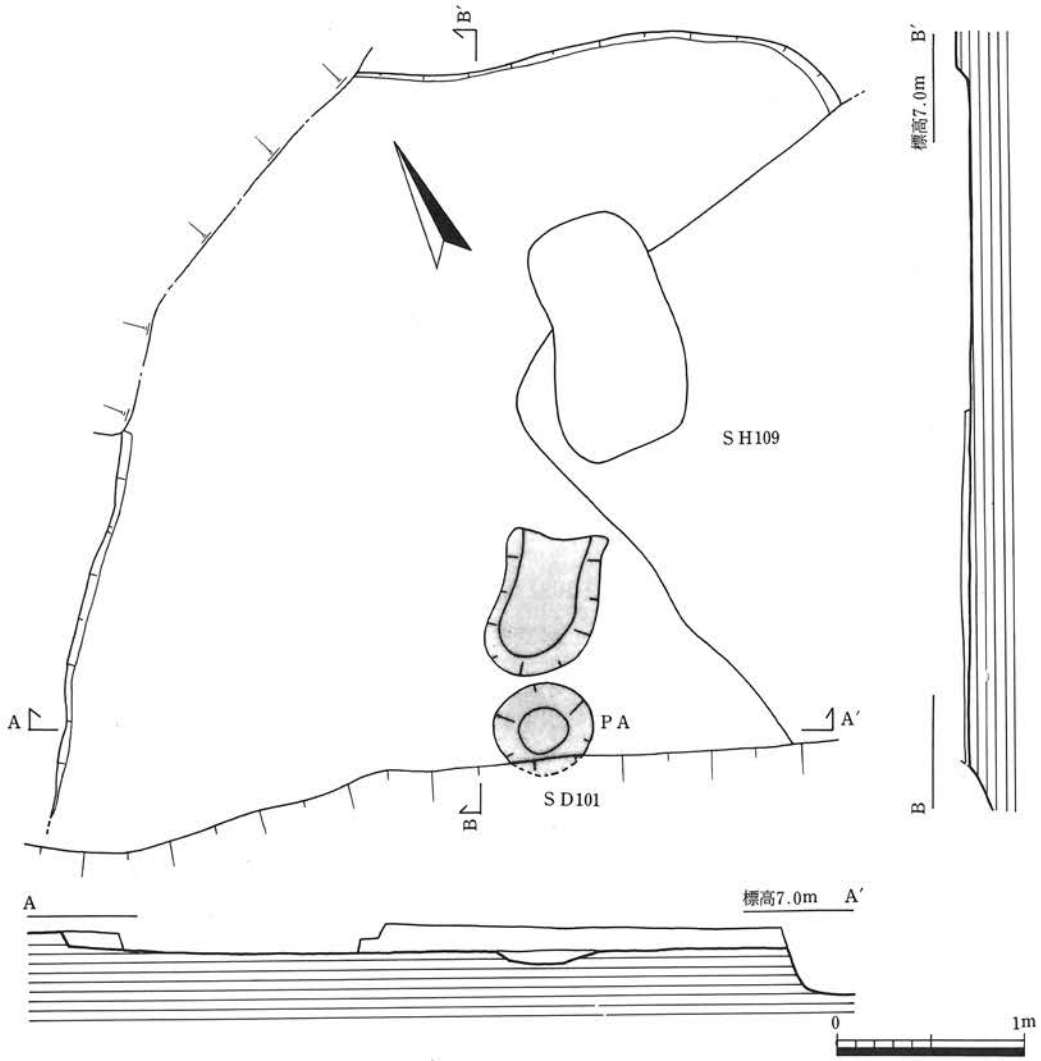


Fig.64　SH107実測図（1/40）

調整。254は、外面はきつい横ナデ調整、内面はナデ調整。口縁部の突帯に浅く小さな刻み目を有する。255は、口縁部は横ナデ調整、内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整。内面には黒班が認められる。256は、ナデ調整を施す。257は、砥石。1面に使用痕がある。258は、石斧の破片。裏面は剝離している。259は、石剣の破片。研磨により峰が形成されている。裏面は剝離している。

ＳＨ109竪穴住居（Fig.66）

CM-65・66区画に検出した。検出面の標高は、6.8m前後である。SD101・SH107と切り合い関係にあり、SH109が、SD101に先行し、SH107に後出する。北東側の隅が調査区外に展開する。

隅丸長方形の平面形をなし、北側辺3.4m以上・南側辺2.8m以上・西側辺2.7m以上・東側辺1.9m以上をはかり、壁高は10cmほど残存している。

埋土は、砂混じりの暗褐色土で、自然流入土と判断する。床面の一部には暗褐色砂質土を叩きしめた張り床が形成されていた。

床面では、壁溝にあたるものは確認されていない。P1は主柱穴と判断するが、対応する他の位置には柱穴を確認できなかった。PAは深さ10cmほどで炭が堆積していて炉と判断する。PA

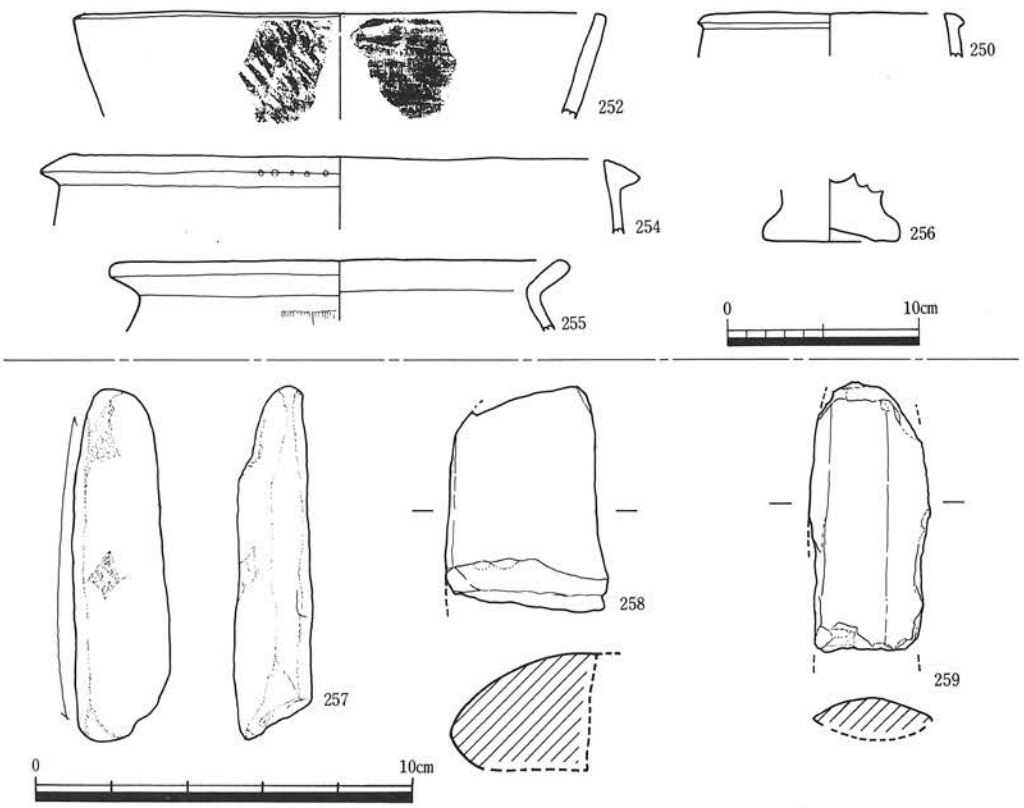


Fig.65　SH107出土遺物実測図（1/4・1/2）

北側の床面上にも炭がうすく堆積していた。

286は床面上に投棄されていた。282・283・284は張り床形成土から出土した。他の遺物は埋土の自然流入に伴い流れ込んだものと判断する。

ＳＨ109出土遺物（Fig.66）

甕（274・278・282・283）　274は、口縁部はきつい横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。278は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整で指頭痕が認められる。282は、口縁部は横ナデ調整、外面は剝離のため調整不明、内面はナデ調整を施す。

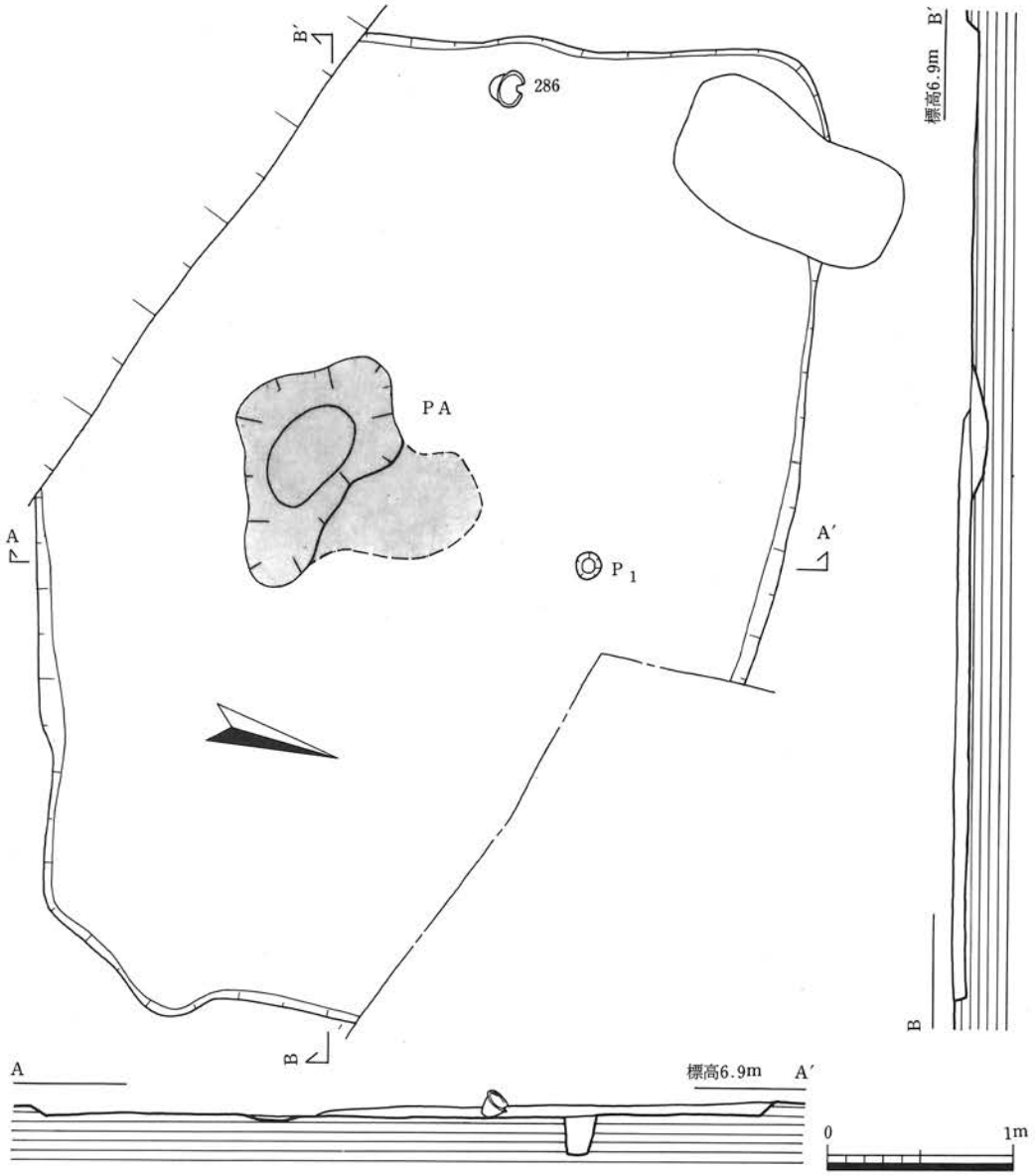


Fig.66　SH109実測図１（1/40）

283は、口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。

壷（276・277・284）　276は、外面に丹塗りが施してある。口縁部はきつい横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。277は、外面に丹塗りが施してある。口縁部はきつい横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。284は、外面は横ナデ調整で、口縁端部はきついナデのため浅いくぼみがまわる。内面はナデ調整。内外面に丹塗りが施している。

鉢（286）　A類の鉢で、ほぼ完存である。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。底部～体部下半の外面には黒斑が認められる。

土製勾玉（280）　表面はていねいに仕上げてある。胎土には1㎜ほどの砂粒を含む。

3．掘立柱建物と出土遺物

J2区で確認した掘立柱建物は総数20棟で、弥生時代に属するものと古代に属するものがある。弥生時代に属するものは19棟で、1×2間のもの7棟、1×1間のもの12棟がある。調査区中

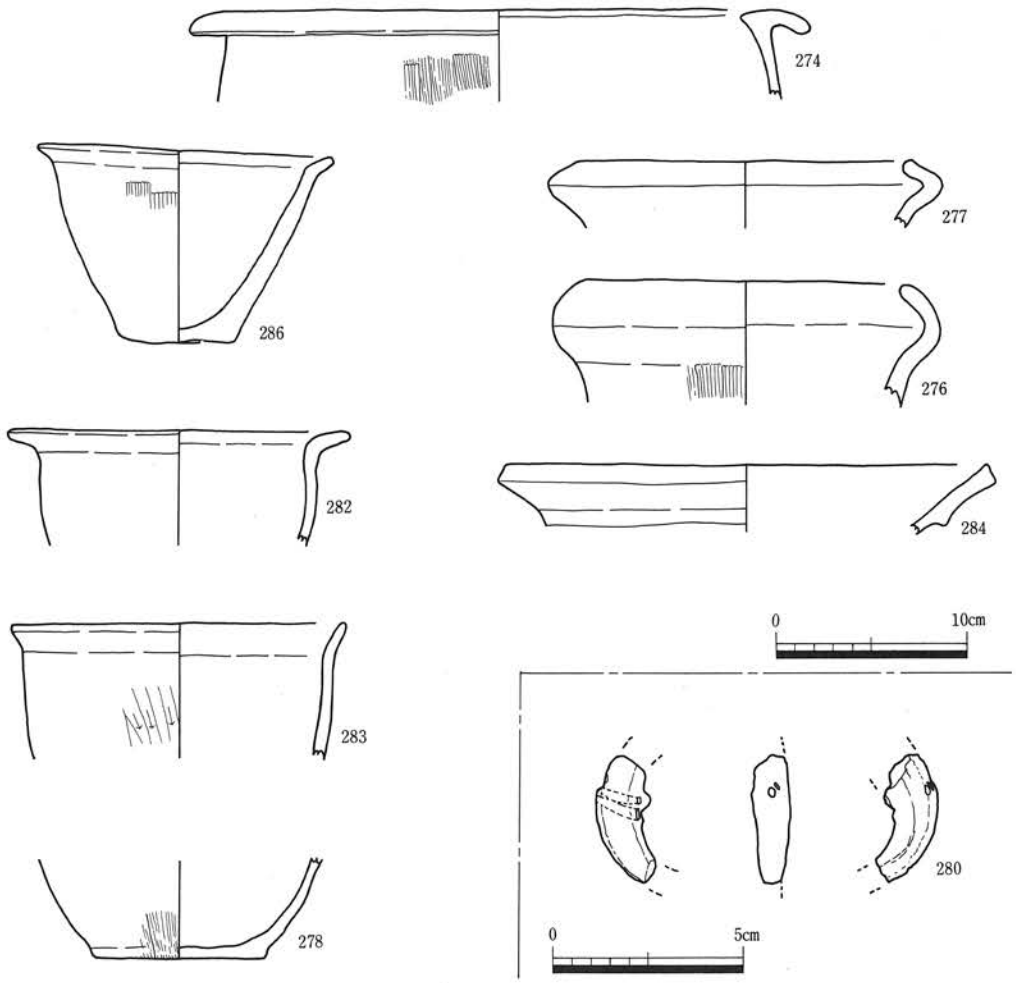
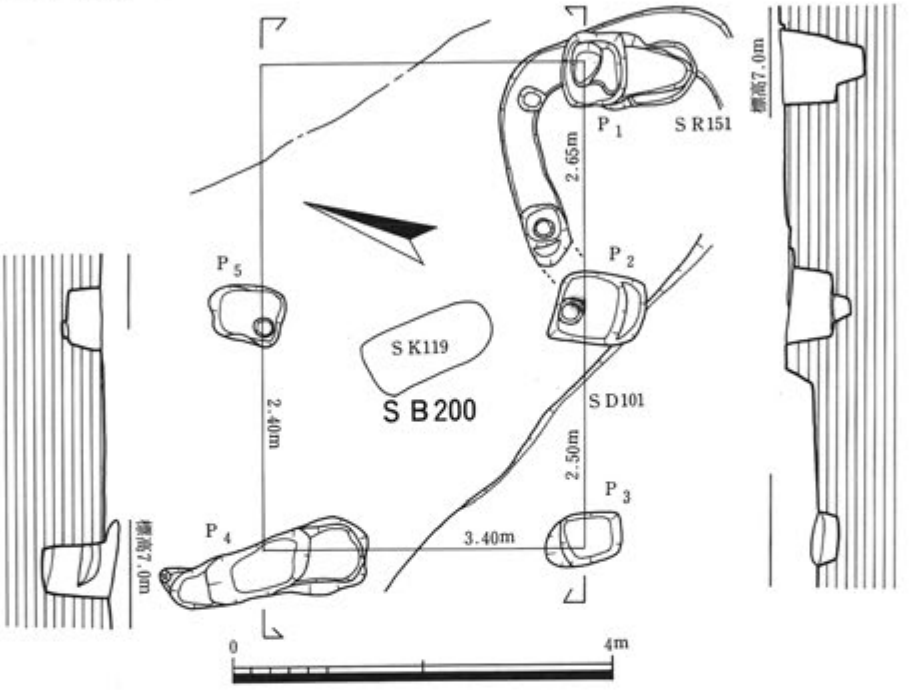


Fig.67　SH109出土遺物実測図（1/4・1/2）

央で激しく重複している。他にもラインは結べないが、確実に弥生時代の掘立柱建物建物の柱穴と判断できたものは10個あまりある。古代に属する掘立柱建物は１棟(SB215)だけが確認できた。

ＳＢ200掘立柱建物（Fig.68）

CL-67・68区画に検出した。北側の柱穴の１個は、調査区外に展開する。SD101・SR151と直接の切り合い関係にある。SB200が、SD101に先行し、SR151に後出する。SK119とは重複関係



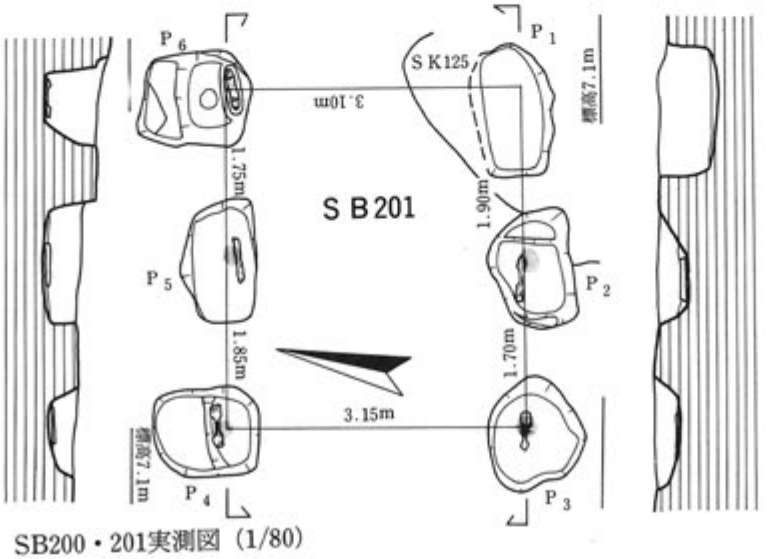


Fig.68　SB200・201実測図（1/80）

にあるが、先後関係は不明。検出面の標高は、6.5～6.8mである。梁行2間•桁行1間の建物で、主軸をN-23°-Wにとる。柱間は図示したとおり。本来、P1～P5の各柱穴掘り方の平面形は隅丸長方形をなすものと思われ、現況では一辺0.5～1.0m・深さ0.3～0.9mをはかる。P1・P2・P3は二段掘りの形状をなしていて、P1•P2では埋土の上面で柱痕跡を確認している。柱の位置は、柱穴掘り方の中で建物の内側に寄っている。P2では、柱穴底部の柱掘り方と上面の柱痕跡の位置がずれている。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色土と暗灰褐色砂の互層に叩き締めている。柱痕跡は黒灰色。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ200出土遺物（Fig.69／569・572）

569は、P1出土。口縁部は横ナデ調整、外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。572は、P4出土。鉢B類。内外面に丹塗りを施す。口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整。

ＳＢ201掘立柱建物（Fig.68）

CK-69•70、CJ-69•70区画に検出した。検出面の標高は、6.3～6.8mである。SD101とSK125と直接の切り合い関係にある。SB201が、SD101に先行し、SK125に後出する。梁行2間•桁行1間の建物で、主軸をN-13°-Wにとる。柱間は図示したとおり。柱間の距離のわりには、柱穴掘り方が大きく、寸詰まりな印象を与えている。各柱穴掘り方の平面形は隅丸長方形をなす。

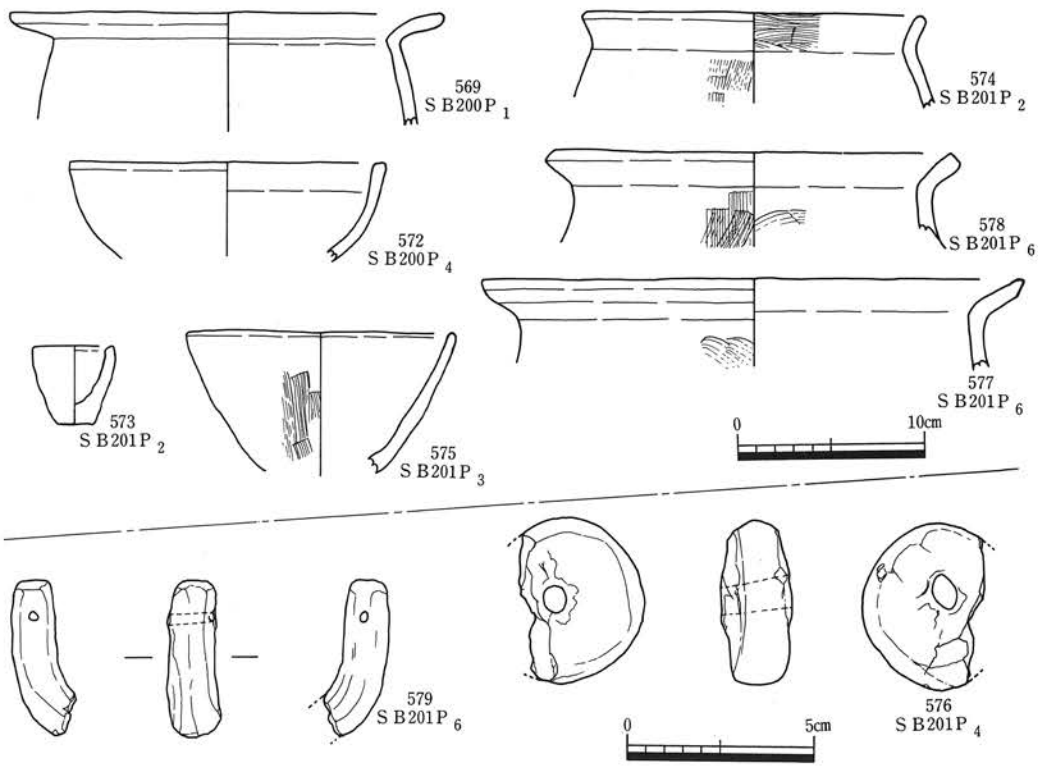


Fig.69　SB200・201出土遺物実測図（1/4・1/2）

一辺0.6～1.4m・深さ0.3～0.6mをはかる。P2・P4・P6は二段掘りの形状をなしていて、P2・P3・P4・P5では埋土の上面で柱痕跡を確認している。P1以外の柱穴掘り方底部では、枕木が確認された。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色土と暗灰褐色砂の互層に叩き締めている。柱痕跡は黒灰色。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ201出土遺物（Fig.69／573～579）

573は、P2出土。手捏土器。574はP2出土。口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。575は、P3出土。鉢B類。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。576は、P4出土。土製紡錘車。577は、P6出土。口縁部横ナデ調整、外面は斜方向のあらいハケ目調整、内面はナデ調整。578は、P6出土。外面に丹塗りの痕跡が認められる。口縁部は横ナデ調整、外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はあらい斜方向のハケ目調整を施す。579は、P6出土。土製勾玉。先端部を欠損する。

ＳＢ204掘立柱建物（Fig.71）

CF-75・76、CG-75・76区画に検出した。検出面の標高は、6.8～6.9mである。SR150と直接の切り合い関係にあり、SB204が後出する。SB205とは重複関係にあるが、先後関係は不明。P2・P4は、上面から小穴に切り込まれている。梁行２間・桁行１間の建物で、主軸をN-14°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は隅丸長方形をなす。長辺1.4～1.7m・短辺0.5～0.8m・深さ0.6m前後をはかる。各柱穴掘り方は、梁行方向に長軸をとる。P2以外の柱穴では埋土の上面で柱痕跡を確認している。柱痕跡の位置は、柱穴掘り方の建物側に寄り、その部分を深く二段掘りされている。P1以外は、柱穴掘り方底面にも、柱掘り方がある。P6では、上面の柱痕跡と柱穴底面の柱掘り方の位置がずれていて、建物側にやや傾いている。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色土層・砂層と粘土混じりの土層を交互に叩き締めている。柱痕跡は灰褐色～赤褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ204出土遺物（Fig.70）

582は、P1出土。外面は不明瞭な横方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整。583は、P3出土。鉢B類。口縁部は横ナデ調整、斜～縦方向の不明瞭なハケ目調整、内面はナデ調整を施す。584

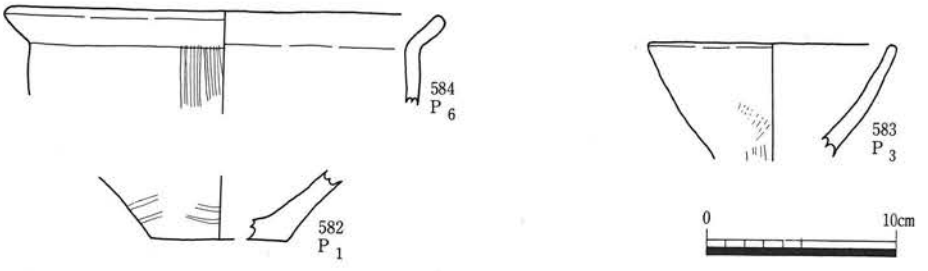


Fig.70　SB204出土遺物実測図（1/4）

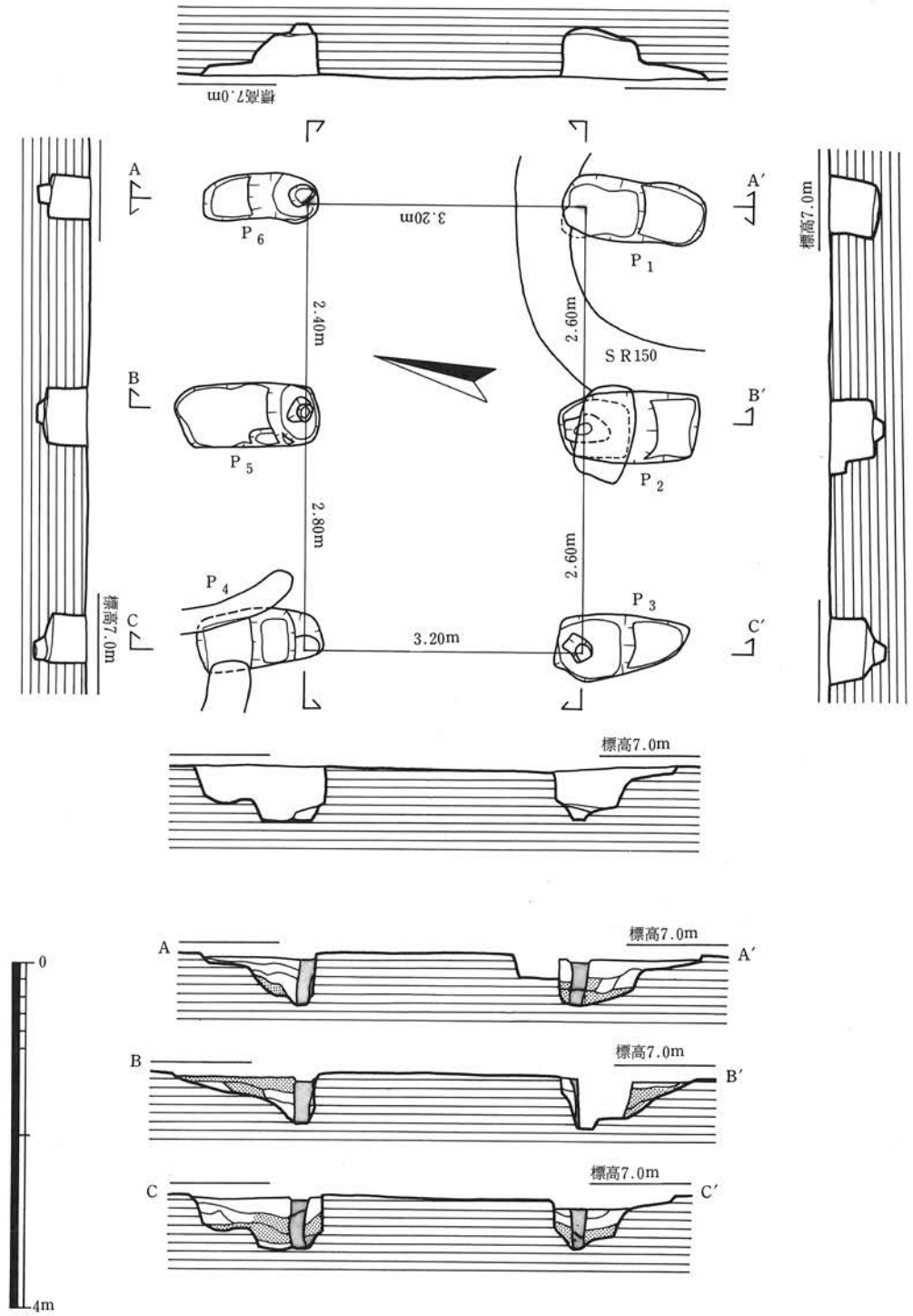


Fig.71　SB204実測図（1/80）

は、P6出土。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。

ＳＢ205掘立柱建物（Fig.72）

CF-75・76、CG-75・76区画に検出した。検出面の標高は、6.8～6.9mである。SB204・SB206と直接の切り合い関係にある。SB205が、SB204に先行し、SB206に後出する。SR150とも重複

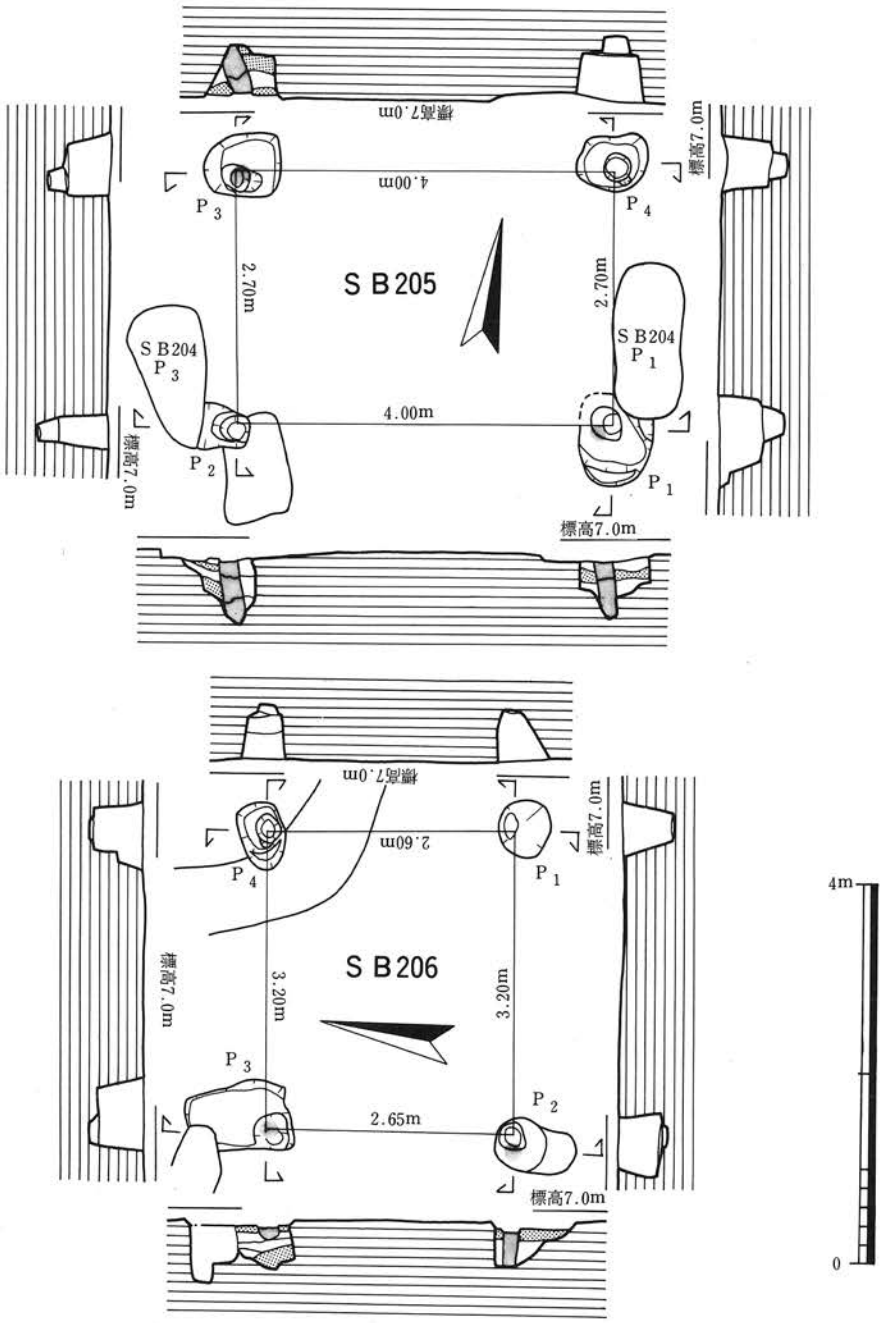


Fig.72　SB205・206実測図（1/80）

関係にあるが、先後関係は不明。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-8°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸方形をなす。一辺0.6～1.0m・深さ0.7～0.8m前後をはかる。P1・P3では埋土の上面で柱痕跡を確認している。P1～P3の土層断面では、柱はかなり傾いていたことになる。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色土層・砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は褐色土であった。。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ205出土遺物（Fig.73／585・586）

585は、P1出土。口縁部内面から胴部外面にかけて丹塗りが施されている。口縁部はきつい横ナデ調整、外面は縦方向のあらいハケ目調整、内面はナデ調整を施している。586は、P3出土。口縁部はきつい横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施す。

ＳＢ206掘立柱建物（Fig.72）

CF-75・76区画に検出した。検出面の標高は、6.8m前後である。SB205・SR150と直接の切り合い関係にあり、SB206がSB205に先行しSB150に後出する。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-9°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形をなす。長辺0.6～1.1m・短辺0.5～0.6m・深さ0.5～0.6m前後をはかる。P2・P3では埋土の上面で柱痕跡を確認している。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は黒褐色～褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ206出土遺物（Fig.73／587～590）

587は、P2出土。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。588は、P2出土。口縁部はきつい横ナデ調整、内外面はナデ調整。589は、P2出土。内外面に丹塗りを施す。調整は不明瞭だが、ヘラミガキを施してあると思われる。590は、P3出土。鉢B類。外面は斜方向の細かいハケ目調整。口縁部内面は横方向の細かいハケ目調整。内面下位は縦方向のあらいハケ目調整を施す。

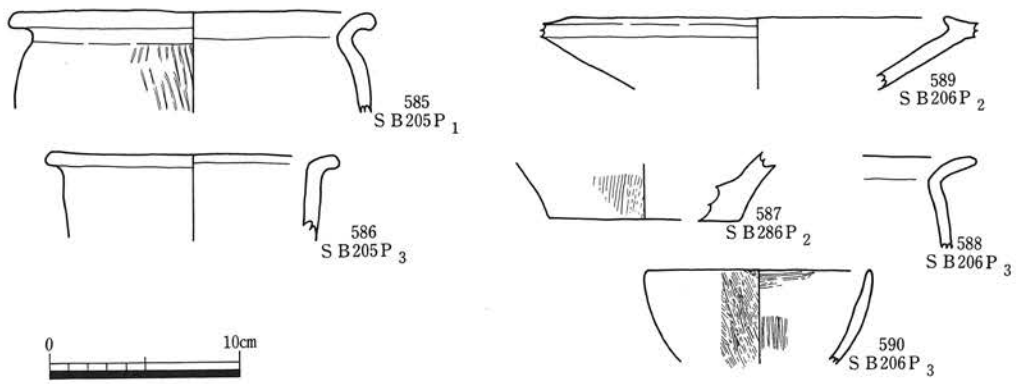


Fig.73　SB205・206出土遺物実測図（1/4）

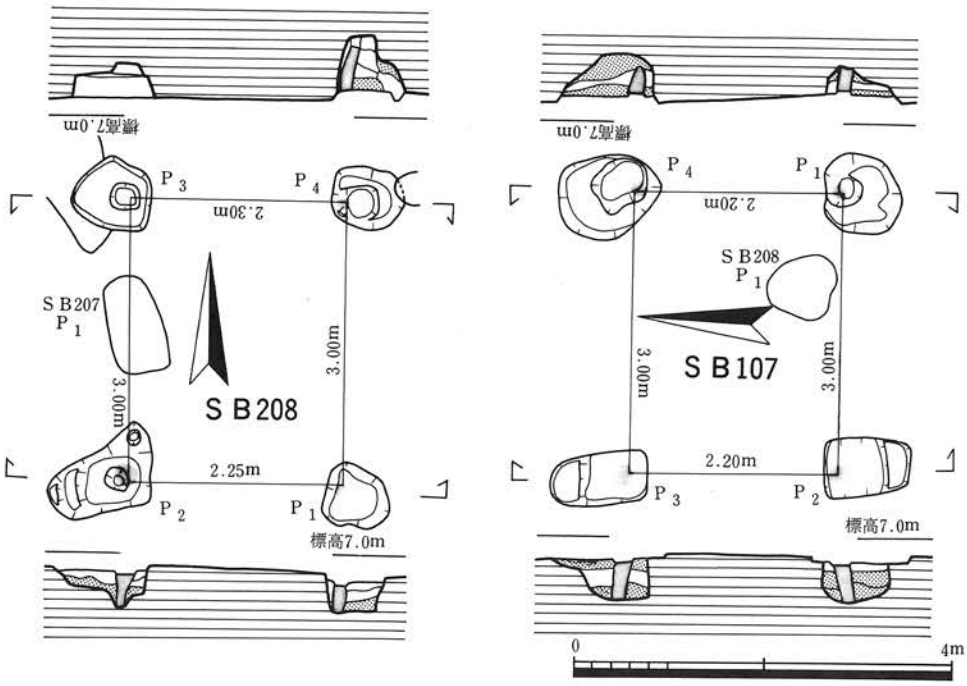


Fig.74　SB207・208実測図（1/80）

ＳＢ207掘立柱建物（Fig.74）

CE-77区画に検出した。検出面の標高は、6.7～6.8m前後である。SB208と重複するが、先後関係は不明。梁行１間•桁行１間の建物で、主軸をN-8°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形をなす。長辺0.9～1.1m•短辺0.6～0.8m•深さ0.3～0.5m前後をはかる。各柱穴で埋土の上面で柱痕跡を確認している。土層断面では、柱はかなり傾いていたことになる。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は黒褐色～褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土しているが、図示に耐えるものはない。

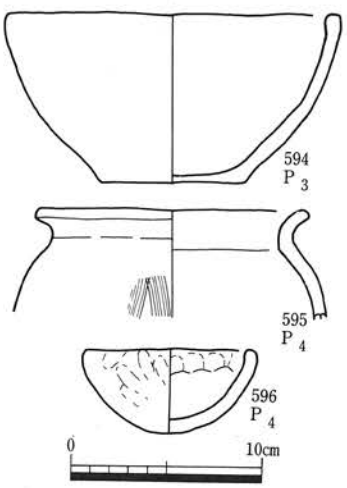


Fig.75　SB208出土遺物実測図(1/4)

ＳＢ208掘立柱建物（Fig.74）

CE-77区画に検出した。検出面の標高は、6.8m前後である。SB207と重複するが、先後関係は不明。梁行１間•桁行１間の建物で、主軸をN-1°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形をなす。長辺0.7～1.1m•短辺0.5～0.7m•深さ0.4～0.6m前後をはかる。P3以外の柱穴では埋土の上面で柱痕跡を確認している。P4では、底面に径10cmほどの柱材が残存

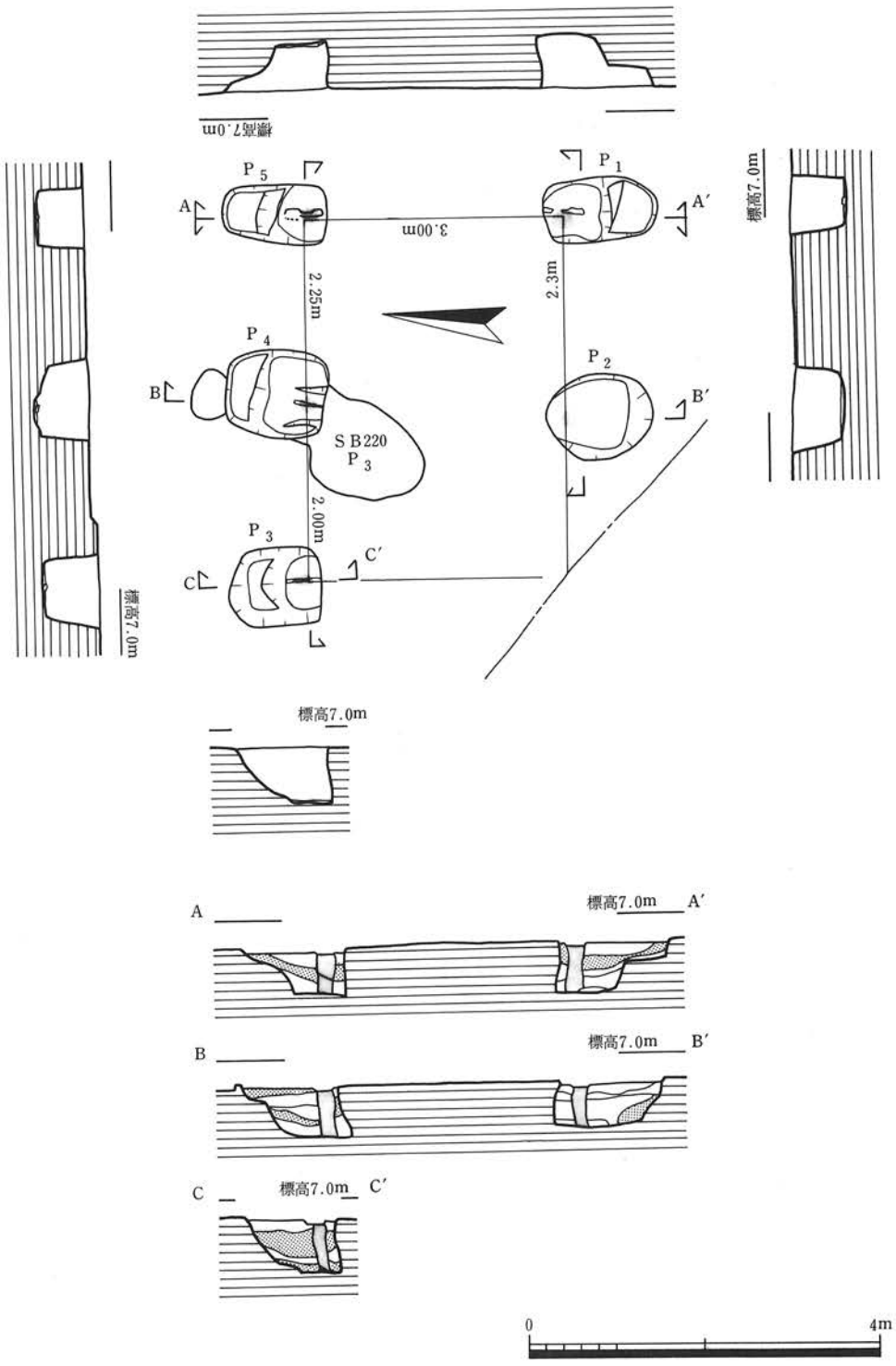


Fig.76　SB209実測図（1/80）

していた。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ208出土遺物（Fig.75）

594は、P3出土。鉢B類。内外面ナデ調整を施し、外面の一部にススが付着する。595は、P4出土。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。596は、内底部はナデ調整、他は指押さえで成形している。

ＳＢ209掘立柱建物（Fig.76）

CD-77・78区画に検出した。検出面の標高は、6.7～6.8mである。SB220・SB211と直接の切り合い関係にあり、SB209が後出する。梁行１間・桁行２間の建物で、主軸をN-8°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形はやや不整な隅丸長方形をなす。長辺1.1～1.3m・短辺0.6～1.0m・深さ0.5～0.7mをはかる。各柱穴の埋土上面で柱痕跡を確認している。P2以外では、柱掘り方底面で枕木が残存していたが、保存状況は悪かった。各柱穴掘り方は梁行方向に主軸を合わせていて、枕木も梁行方向に合わせて置かれてあった。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ209出土遺物（Fig.77／598）

P4出土。口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。

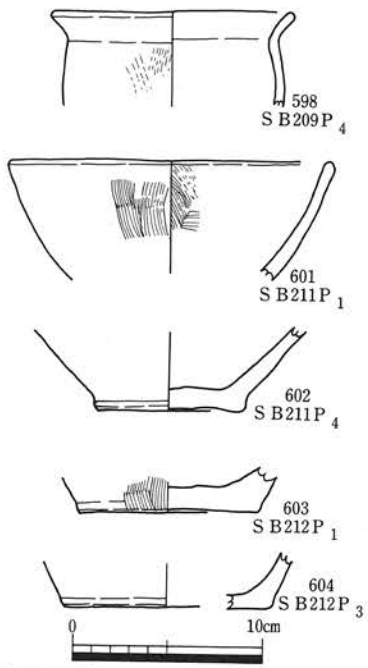


Fig.77　SB209・211・212出土遺物
実測図（1/4）

ＳＢ211掘立柱建物（Fig.78）

CE-78区画に検出した。検出面の標高は、6.6～6.8mである。SR152・SB209と直接の切り合い関係にあり、SB211が、SR152に後出し、SB211に先行する。SE160・SE193とも重複するが、先後関係は不明。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-8°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸方形をなす。一辺0.3～0.4m・深さ0.4～0.6mをはかる。柱穴掘り方の埋土は、砂混じりの暗褐色～黒褐色土。柱痕跡は確認できなかった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ211出土遺物（Fig.77／601・602）

601は、P1出土。鉢B類。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜～横方向のハケ目調整を施す。602は、P4出土。内外面ナデ調整を施す。

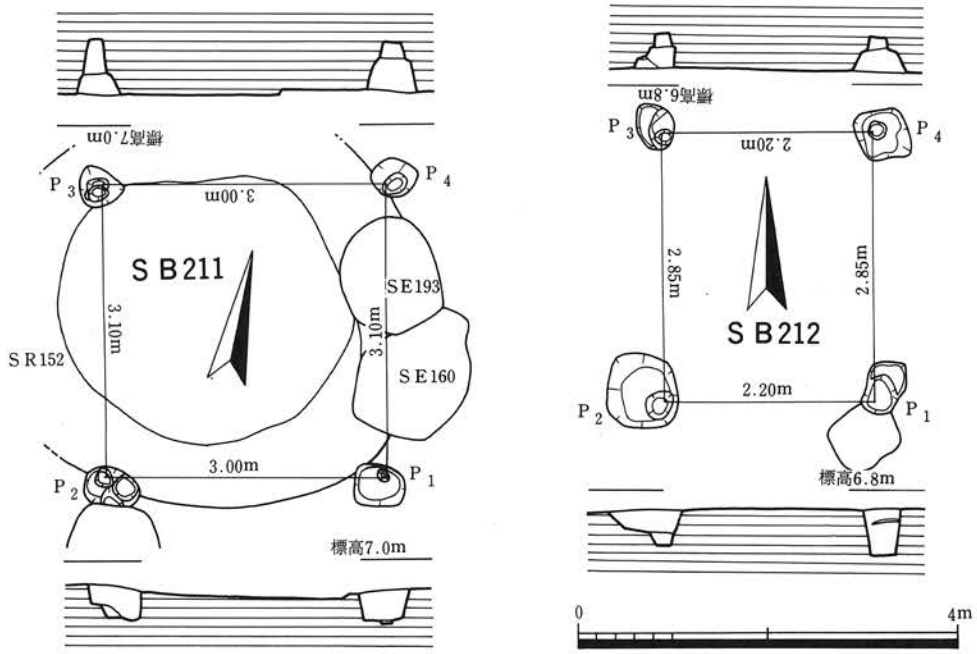


Fig.78　SB211・212実測図（1/80）

ＳＢ212掘立柱建物（Fig.78）

CC-80・81、CD-80・81区画に検出した。検出面の標高は、6.8m前後である。SB221と直接の切り合い関係にあり、SB212が後出する。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-3°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸方形をなす。一辺0.4～0.8m・深さ0.4～0.5mをはかる。柱穴掘り方の埋土は、砂混じりの暗褐色～黒褐色土。柱痕跡は確認できな

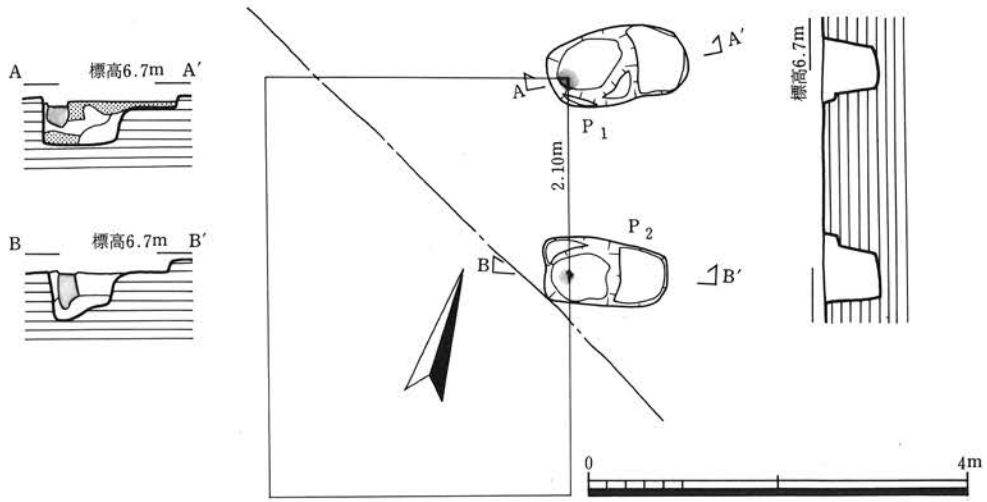


Fig.79　SB213実測図（1/80）

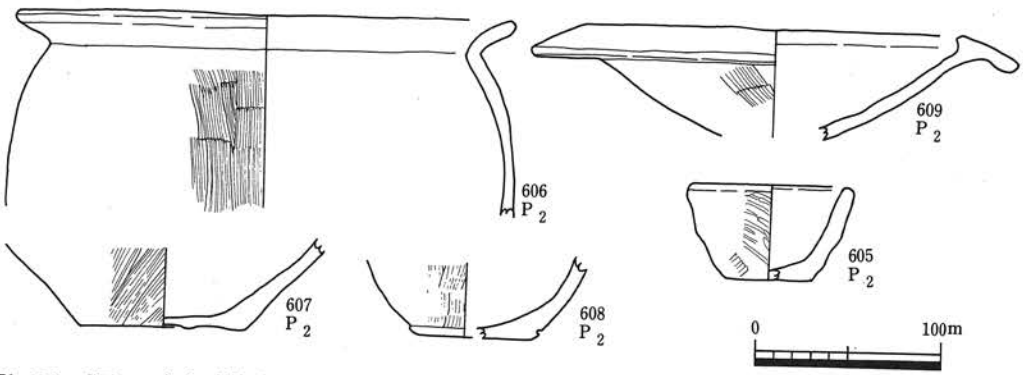


Fig.80　SB213出土遺物実測図（1/4）

かった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ212出土遺物（Fig.77／603・604）

603は、P1出土。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。底部に一部黒班が認められる。604は、P3出土。内外面ハケ目調整を施し、底部に一部黒班が認められる。

ＳＢ213掘立柱建物（Fig.79）

CC-79区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後である。柱穴掘り方の平面形と柱の位置から考えて、梁行１間・桁行２間の建物と思われる。P1・P2以外の柱穴は、調査区外に展開する。主軸をN-4°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形はやや不整な隅丸長方形をなす。長辺1.3～1.5m・短辺0.6～0.8m・深さ0.6m前後をはかる。柱穴掘り方埋土上面では、柱痕跡が確認できた。柱穴掘り方は梁行方向に主軸を合わせている。柱の位置は建物内側に寄っていて、柱穴掘り方もその部分を二段掘りにして深く掘り込んでいる。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色土層・砂層と粘土の混じり土を交互に叩き締めている。柱痕

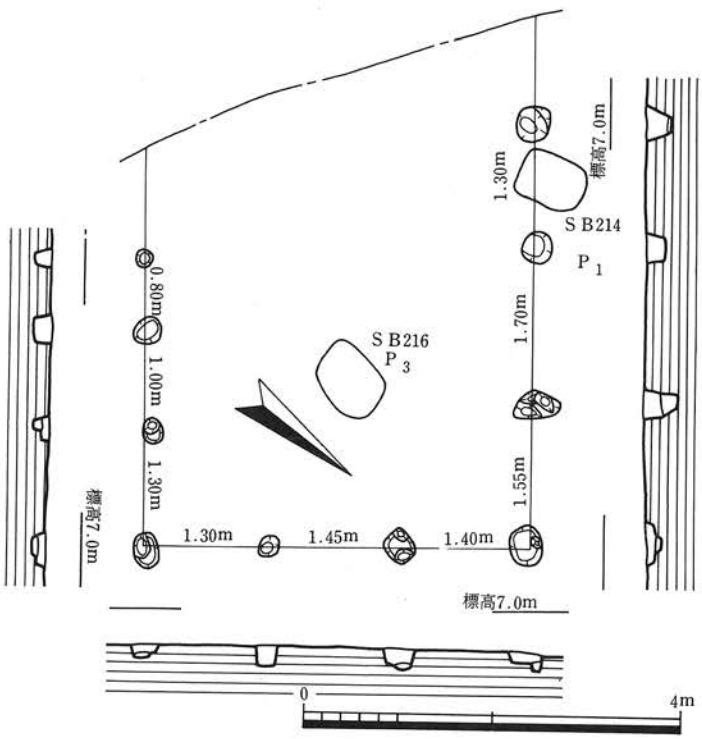


Fig.81　SB215実測図（1/80）

跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ213出土遺物（Fig.80）

どれもP2からの出土である。605は、鉢B類の精製品である。口縁部は横ナデ調整。外面は斜方向のハケ目の後に斜方向のヘラミガキ調整を施す。内面はナデ調整。606は、口縁部横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整で、口縁下部に一部横ナデを加える。内面はナデ調整。607は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。608は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。609は、口縁部は調整不明。外面は斜方向のハケ目が一部に残る。内面はナデ調整。

ＳＢ215掘立柱建物（Fig.81）

CB-80•81、CC-81区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後である。SB216と重複関係にある。西側は調査区外に展開している。梁行３間・桁行４間以上の建物で、主軸をN-39°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は円形をなし、径0.4～0.8m•深さ0.2～0.5mをはかる。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色。柱痕跡は確認できなかった。柱穴から遺物は出土しなかったが、建物の形態から、弥生時代ものではないと判断する。古代に属する可能性が高い。

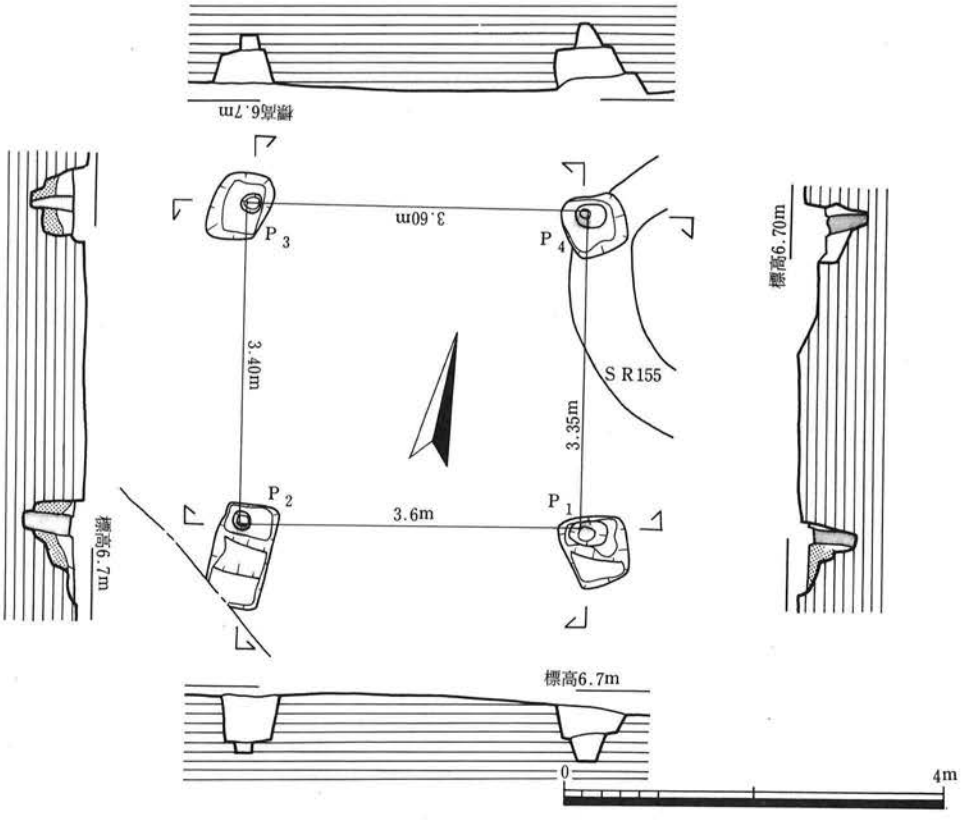


Fig.82　SB216実測図（1/80）

ＳＢ216掘立柱建物（Fig.82）

CB-81・82区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後である。SR155と直接の切り合い関係にあり、SB216が後出する。SB215とも重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行１間・桁行１間の建物である。主軸をN-4°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形はやや不整な隅丸長方形をなす。長辺0.7～1.1m・短辺0.5～0.7m・深さ0.5～0.8mをはかる。P3以外の柱穴掘り方埋土上面では、柱痕跡が確認できた。柱の位置は建物内側に寄っていて、柱穴掘り方もその部分を二段掘りにして深く掘り込んでいる。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色～暗褐色土層と砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ216出土遺物（Fig.83）

どちらもP2出土。612は、外面に丹塗りが施されている。口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ目の後に横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。内面の一部に黒斑が認められる。613は、外面に丹塗りが施されている。口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。

ＳＢ217掘立柱建物（Fig.84）

CA-83区画に検出した。検出面の標高は、6.4～6.5mである。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-34°-Eにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸方形をなす。一辺0.3～0.6m・深さ0.2～0.4mをはかる。P2・P3で柱痕跡が確認できた。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色土層と砂層である。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土しているが、図化に耐えるものはない。

ＳＢ218掘立柱建物（Fig.84）

BZ-84、CA-83・84区画に検出した。検出面の標高は、6.4～6.5mである。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-42°-Eにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形はやや不整な隅丸長方形の平面形をなし、長辺0.4～0.8m・短辺0.3～0.6m・深さ0.3～0.5mをはかる。各柱穴で柱痕跡が確認できた。柱の位置は柱掘り方内で建物の内側に寄っていて、P1・P4ではその部分が二段掘りで深く下げられている。P1・P4では、柱穴掘り方の底部に径8～10cm柱材が残存していた。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色土層と砂層で

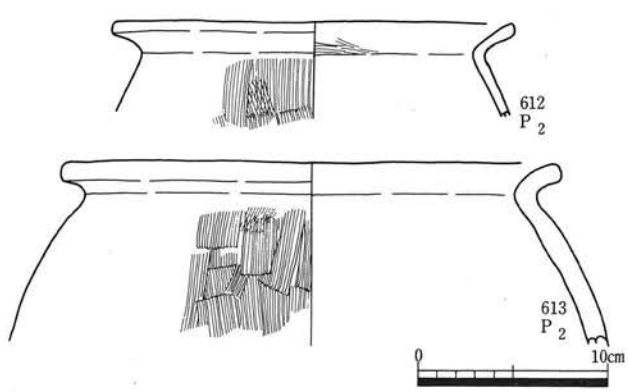


Fig.83　SB216出土遺物実測図（1/4）

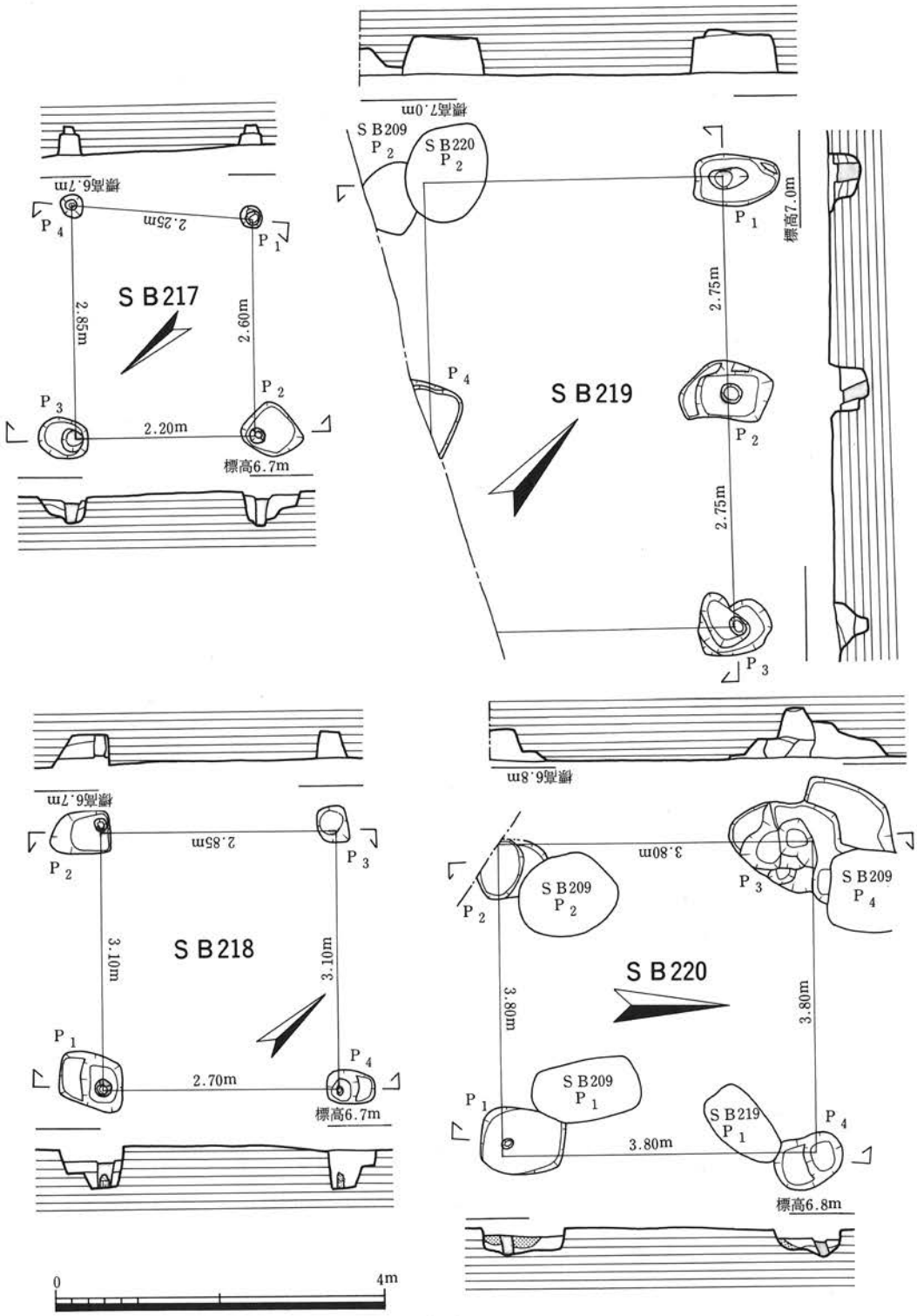


Fig.84　SB217・218・219・220実測図（1/80）

ある。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している、図化に耐えるものはない。

ＳＢ219掘立柱建物（Fig.84）

CC-78・79、CD-78・79区画に検出した。検出面の標高は、6.7m前後である。SB209と切り合い関係にあり、SB219が先行すると思われる。検出した柱穴は4個で、1個はSB209の柱穴に破壊され消滅している。もう1個は調査区外に展開する。SB220・SB222とも重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行1間・桁行2間の建物で、主軸をN-42°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形の平面形をなし、長辺0.9～1.1m・短辺0.5～0.7m・深さ0.4～0.5mをはかる。P1・P2では柱穴埋土上面で柱痕跡が確認できた。土層断面では柱痕跡はかなり傾いている（柱を抜き取ったためか）。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色～暗褐色土層と砂層である。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ219出土遺物（Fig.85）

どれもP2から出土している。615は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整。616は、内外面に丹塗りを施している。口縁部横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整。617は、口縁部は横ナデ調整、内外面ナデ調整を施す。618は、外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。

ＳＢ220掘立柱建物（Fig.84）

CD-78区画に検出した。検出面の標高は、6.7m前後である。SB209・SB219と直接の切り合い関係にあり、SB220が先行する。梁行1間・桁行1間の建物で、主軸をN-3°-Wにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形の平面形をなし、長辺0.9～1.4m・短辺0.6～1.1m・深さ0.3～0.6mをはかる。柱穴埋土上面での柱痕跡の確認はできなかった。柱穴掘り方の埋土は、黒褐色～暗褐色土層と砂層である。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土しているが図示できるものはない。

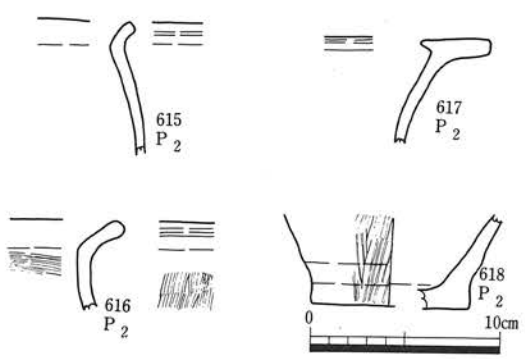


Fig.85　SB219出土遺物実測図（1/4）

ＳＢ221掘立柱建物（Fig.86）

CC-81、CD-81区画に検出した。検出面の標高は、6.5～6.7mである。SB212と直接の切り合い関係にあり、SB221が先行する。SR154とも重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行1間・桁行1間の建物で、主軸をN-44°-Eにとる。柱間は図示したとおり。P1・P4の間にある小穴は支柱である可能性があ

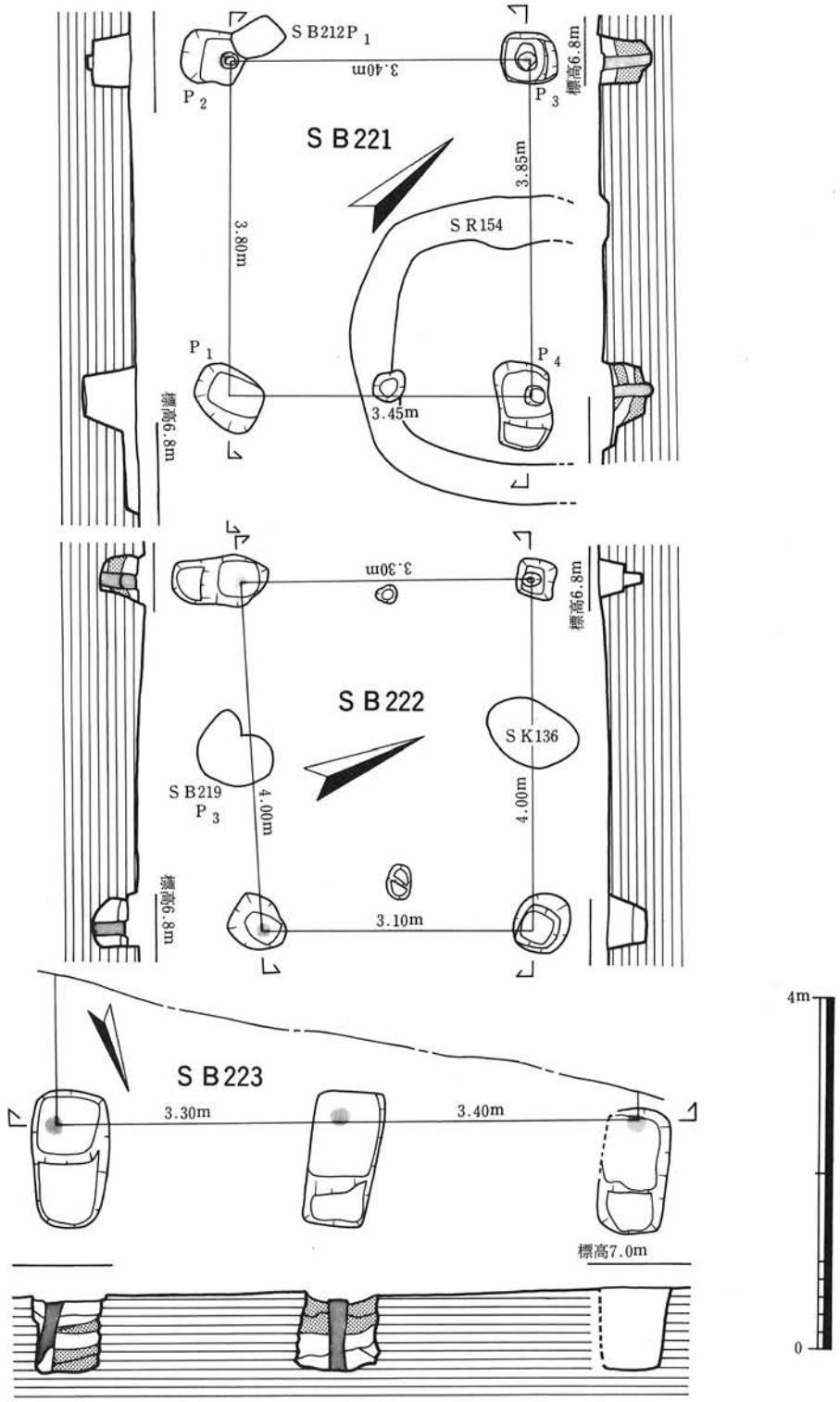


Fig.86　SB221・222・223実測図（1/80）

る。各柱穴掘り方の平面形はやや不整な隅丸長方形の平面形をなし、長辺0.6～1.0m・短辺0.6m前後・深さ0.5～0.6mをはかる。P2・P3では、柱穴埋土上面で柱痕跡が確認できた。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層である。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土しているが、図示できるものはない。

ＳＢ222掘立柱建物（Fig.86）

CC-79・80、CD-79・80区画に検出した。検出面の標高は、6.6～6.7mである。SK136・SB219と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行１間・桁行１間の建物で、主軸をN-18°-Eにとる。柱間は図示したとおり。P1・P4の間、P2・P3の間にある小穴は、深さ20cm前後で、支柱である可能性がある。各柱穴掘り方の平面形は不整な隅丸長方形の平面形をなし、長辺0.4～1.1m・短辺0.4～0.6m・深さ0.4～0.5mをはかる。P1・P2では、柱穴埋土上面で柱痕跡が確認できた。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と砂層である。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土しているが、図化できたものはない。

ＳＢ223掘立柱建物（Fig.86）

BX-86・87区画に検出した。検出面の標高は、6.6～6.7mである。梁行１間・桁行２間の建物になるものと思われる。主軸をN-29°-Eにとる。柱間は図示したとおり。各柱穴掘り方の平面形は隅丸長方形の平面形をなし、長辺1.4～1.6m・短辺0.7～0.9m・深さ0.9mをはかる。各柱穴で柱穴埋土上面で柱痕跡が確認できた。P1・P2では、柱穴掘り方底面で、径12cmほどの柱材が残存していた。柱穴掘り方の埋土は、暗褐色～黒褐色土層と青灰色粘土・砂層を交互に叩き締めている。柱痕跡は褐色土であった。柱穴掘り方から弥生土器片が少数出土している。

ＳＢ223出土遺物（Fig.87）

622は、P1出土。口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。623は、P1出土。外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整で指頭痕が観察できる。外面の一部に黒斑が認められる。624は、P2出土。口縁端部にナデによる沈線上のくぼみがまわる。口縁部は横ナデ調整。外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。625は、Ｐ３出土。口縁部は横ナ

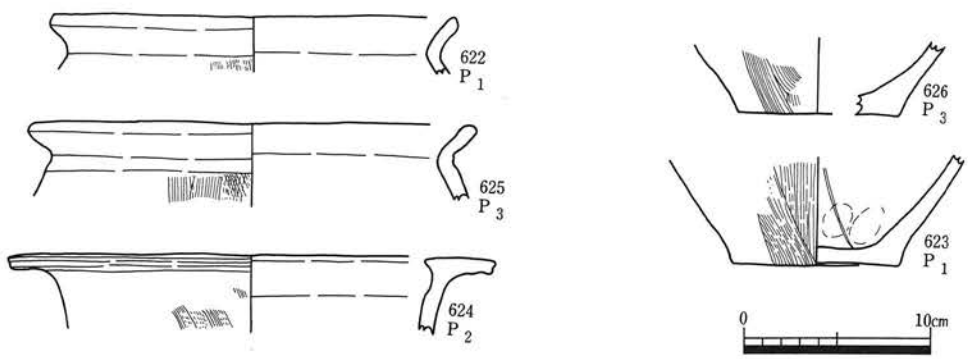


Fig.87　SB223出土遺物実測図（1/4）

デ調整。外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。626は、P3出土。外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

4．井戸と出土遺物

底面が標高5.6m付近の含水層に達しているものを、一応の目安として、井戸と分類した。調査区西側のCJ・CK-66・67区画に集中が認められる（SE104・105・106・108）。この4基は互いに切り合い関係にはない。先行した井戸が埋没しきらない時期に、次々と掘りなおしたものと判断する。調査区中央のSE193もSE160を掘りなおしたものと判断できる。

ＳＥ104井戸（Fig.88）

CK-66•67区画に検出した。検出面の標高は、6.5～6.7m。SD101と切り合い関係にあり、その底面で検出された。SE104がSD101に先行する。平面形はほぼ円形をなし、径1.9～2.0m•深さ1.2mをはかる。壁面は直に立ち上り、東側上位に段を有する。底面はレンズ状をなす。埋土は、暗褐色土で、下部へむかうほど暗い色調になり、砂が混じる。埋土全体から多量の遺物が出土しているが、埋土中位に集中が認められた。ほとんどは破片資料で、埋没の過程で投棄されたものである。底面からやや浮いた状態で、完存の甕（226）が横倒しの状態で出土している。井戸が廃棄された際に、土器を用いたなんらかの祭祀行為が行われたものと判断する。

SE104出土遺物（Fig.89・90）

大部分は甕の破片であった。壷の破片はほとんど見当らない。18点を図示する。

甕（Fig.89／217・219～224・226 Fig.90／225）

217は、口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整で下位にナデを加える。219は、ほぼ完形。口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。内外面に黒班が認められる。220は、口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整を施しているが剝離のため不明瞭。内面はナデ調整。部分的黒班が認められる。221は、口縁部は横ナデ調整。外面

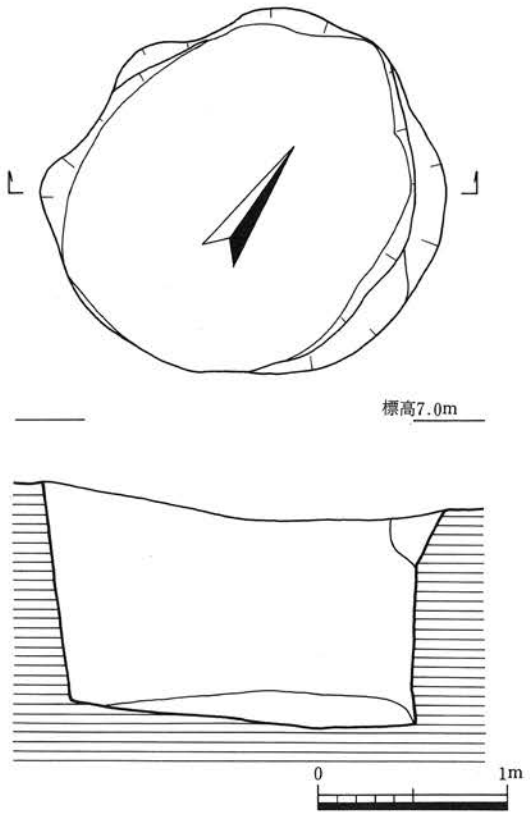


Fig.88　SE104実測図（1/40）

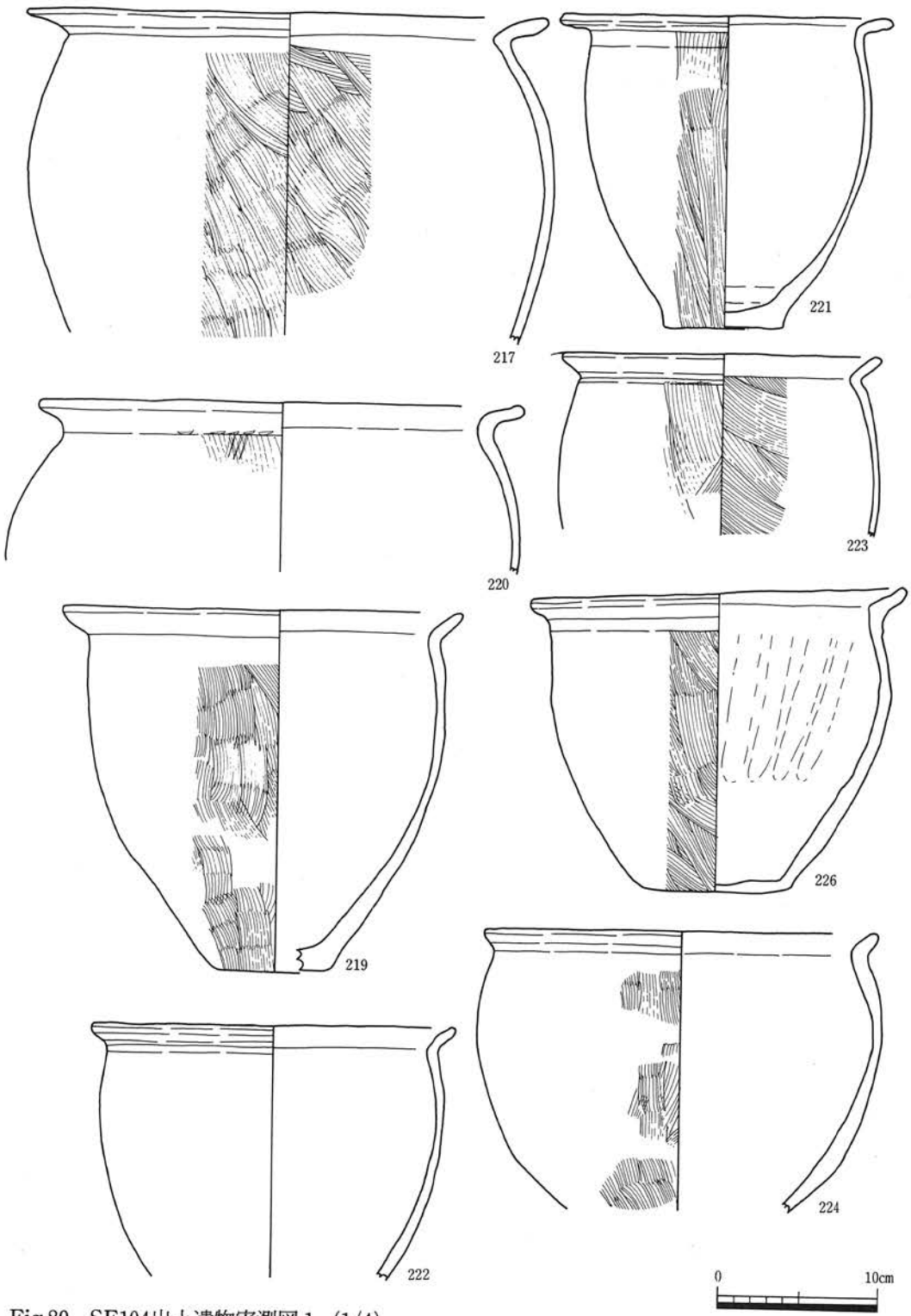


Fig.89　SE104出土遺物実測図1（1/4）

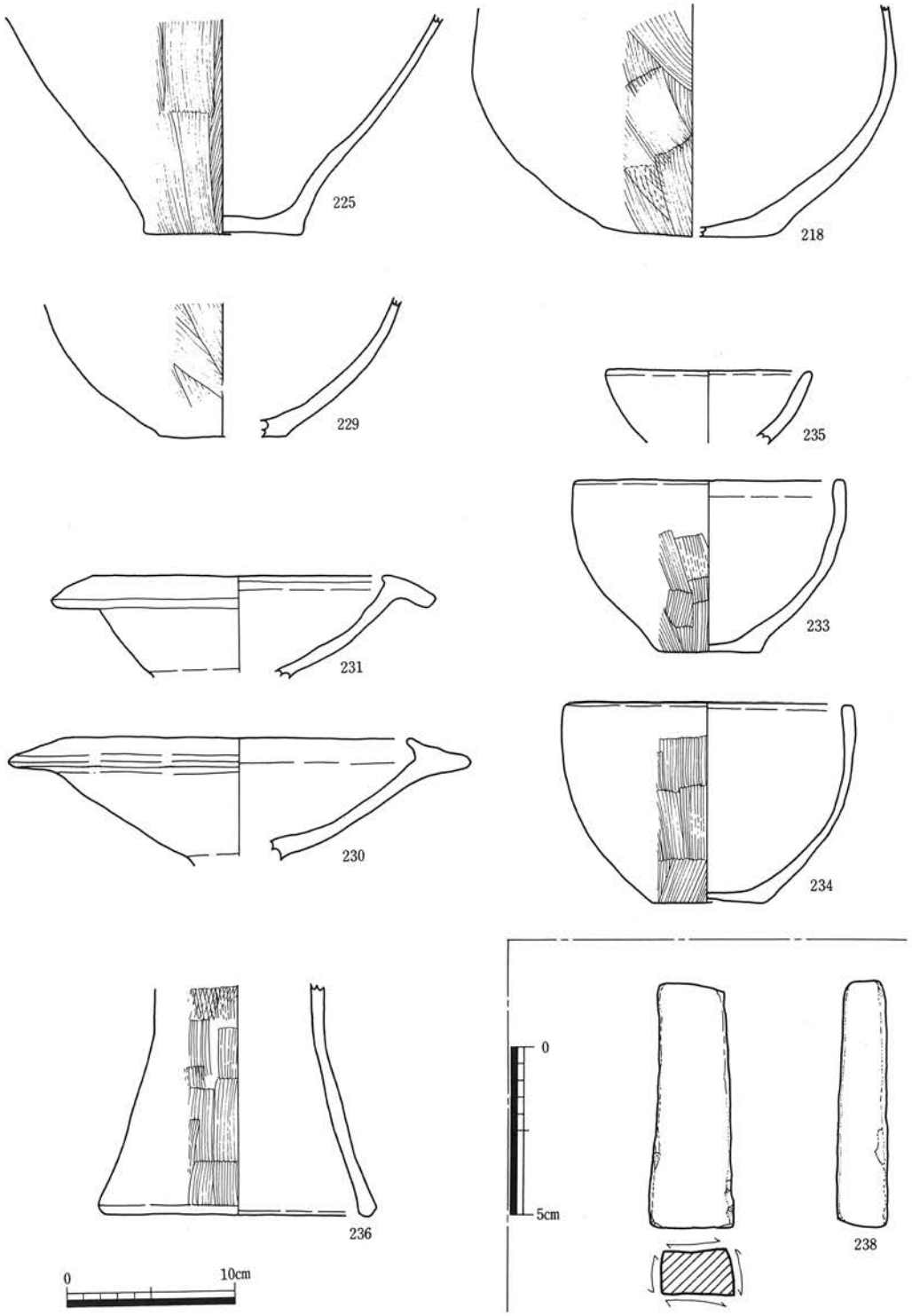


Fig.90　SE104出土遺物実測図２（1/4）

は斜～縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。部分的に黒斑が認められる。222は、口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。223は、口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整を施す。224は、口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。225は、外面縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。226は、口縁部は横ナデ調整。外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施し上位には指頭痕が観察できる。部分的に黒斑が認められる。

壷（Fig.90／218・229）　外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。229は、部分的に黒斑が認められる。

高杯（Fig.90／230・231）　口縁部は横ナデ調整。体部内外面はナデ調整を施す。部分的に黒斑が認められる。

鉢（Fig.90／233～235）　どれもB類である。233は完形に近い。口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のナデ調整、内面はナデ調整を施す。外面一部に黒斑が認められる。234は、口縁部外面はハケ目の後に横ナデ調整、内面は横ナデ調整。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。235は、内外面ナデ調整を施す。

器台（Fig.90／236）　外面は縦方向のナデ調整、内面はナデ調整を施す。

砥石（Fig.90／238）　石材は砂岩系か。4面に使用痕がある。

ＳＥ105井戸（Fig.91）

CJ・CK-66区画に検出した。半分以上が調査区外に展開する。検出面の標高は、6.8m前後。平面形は隅丸方形をなすものか。検出した部分では最大長1.7m・深さ1.2mをはかる。壁面は直に立ち上る。底面はレンズ状をなすものか。埋土中から若干の遺物が出土しているが、底面からやや浮いた状態で完存の壷（243）がほぼ直立した状態で出土している。井戸が廃棄された際に、土器を用いたなんらかの祭祀行為が行われたものと判断する。

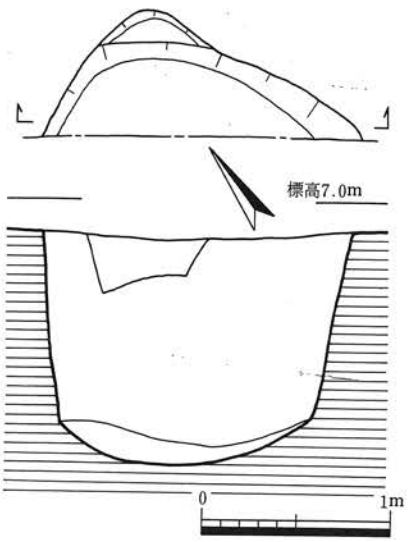


Fig.91　SE105実測図（1/40）

ＳＥ105出土遺物（Fig.92・93）

6点が図示できる。239は、口縁部は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施している。240は、内外面ナデ調整。241は、口縁部横ナデ調整。胴部外面は、上位は斜方向のハケ目調整、下位はハケ目をナデ消す。内面はナデ調整を施す。242は、丹塗りされている。器壁の磨耗のため不明瞭だが、口縁部・体部内外面はヘラミガキが施してある。243は、胴部中位に黒斑がある。口

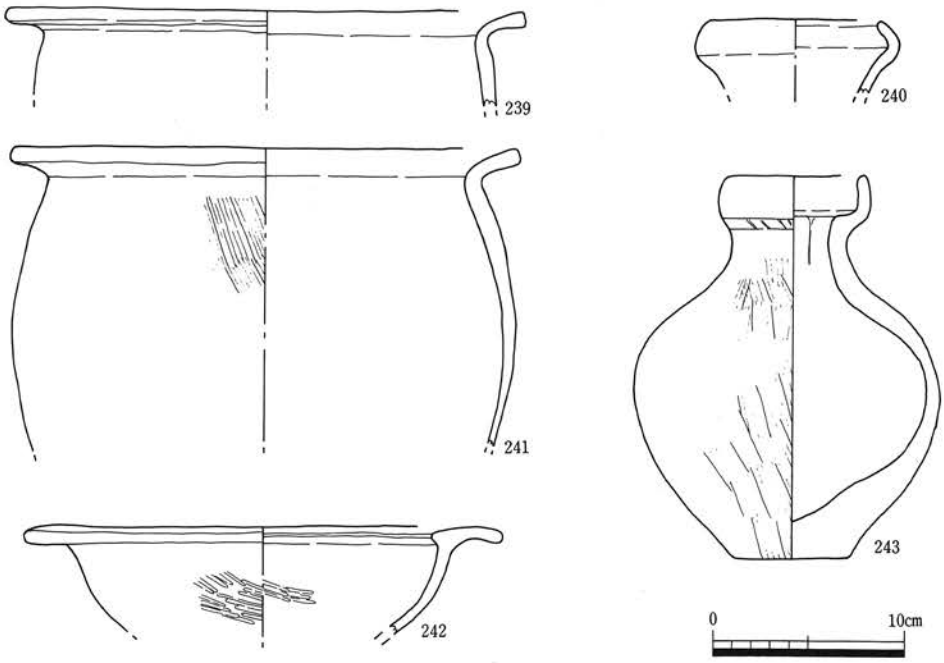


Fig.92　SE105出土遺物実測図１（1/4）

縁部から頚部にかけて横ナデ調整。胴部外面は粗いハケ目を一部ナデ消している。内面はナデ調整を施す。244は、木製品で鋤。柄の部分は剝離し、一部が残存する。削り痕は不明瞭。

ＳＥ106井戸(Fig.94)

CJ-67区画に検出した。半分以上が調査区外に展開する。検出面の標高は、6.7～6.8m。平面形は隅丸方形をなすものか。検出した部分では最大長1.5m・深さ0.8mをはかる。壁面はきつく立ち上る。埋土中から、若干の遺物が出土している。

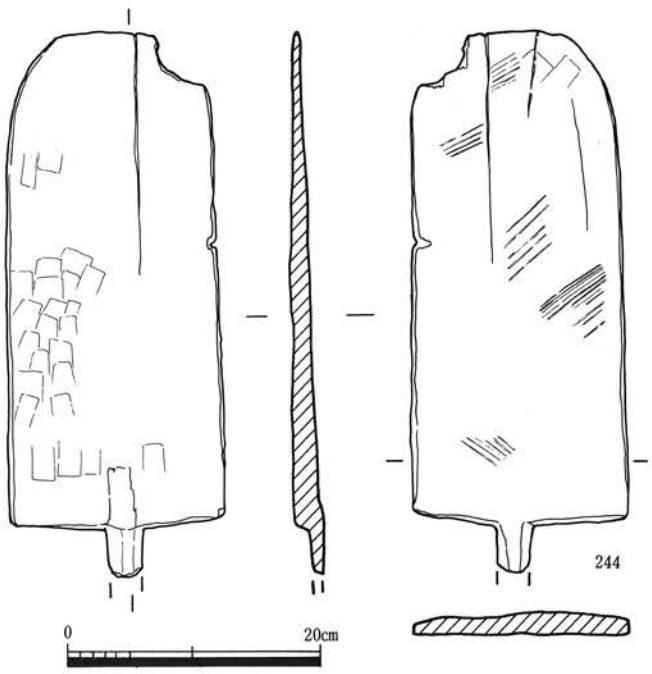


Fig.93　SE105出土遺物実測図２（1/6）

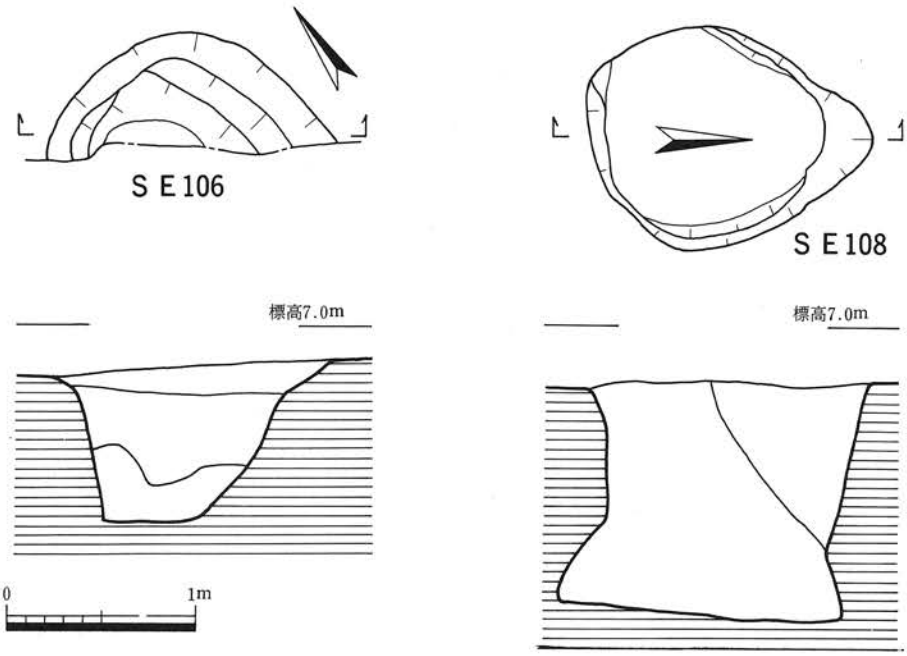


Fig.94　SE106・108実測図（1/40）

S E 106出土遺物（Fig.95）

5点が図示できた。245は、口縁部は横ナデ調整。外面は、上位横ナデ調整、突帯から下はハケ目調整。内面はナデ調整を施す。246は、受部内外面は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面は指押さえで成形している。249は、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。250は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。251は、外面は斜方向のハケ目調

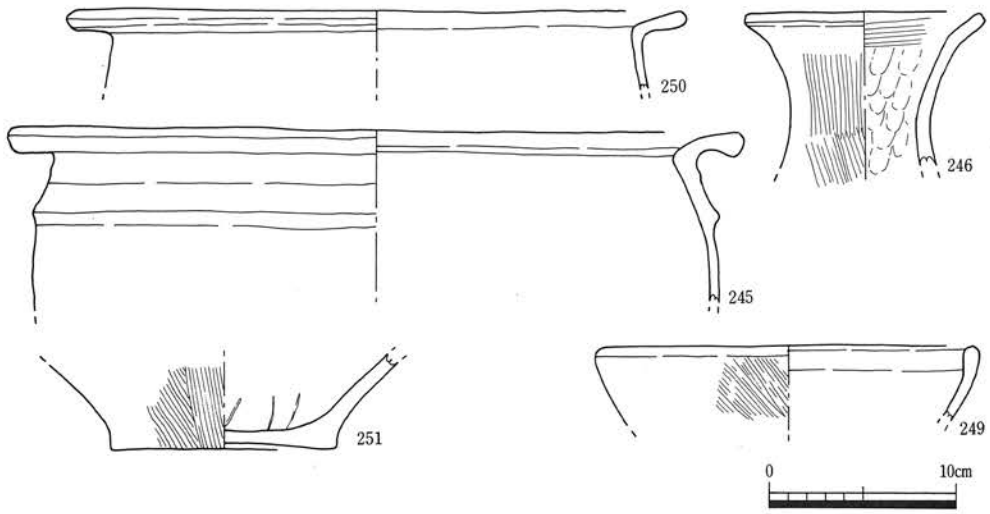


Fig.95　SE106出土遺物実測図（1/4）

整、内面はナデ調整を施す。

ＳＥ108井戸（Fig.94）

CJ-67区画に検出した。検出面の標高は、6.7m前後。SD101と切り合い関係にあり、SE108がSD101に先行する。平面形はほぼ楕円形をなし、長径1.5m・短径1.2m・深さ1.3mをはかる。壁面は直に立ち上がるが、下部で抉れ込んでいる。底面は平坦である。埋土は、暗褐色土で、下部へむかうほど暗い色調になり、砂が混じる。埋土中から遺物が出土しているが、埋土中位に集中が認められた。破片資料で、埋没の過程で投棄されたものである。底面からやや浮いた状態で、完存の壷（272）がほぼ直立した状態で出土している。井戸が廃棄された際に、土器を用いたなんらかの祭祀行為が行われたものと判断する。

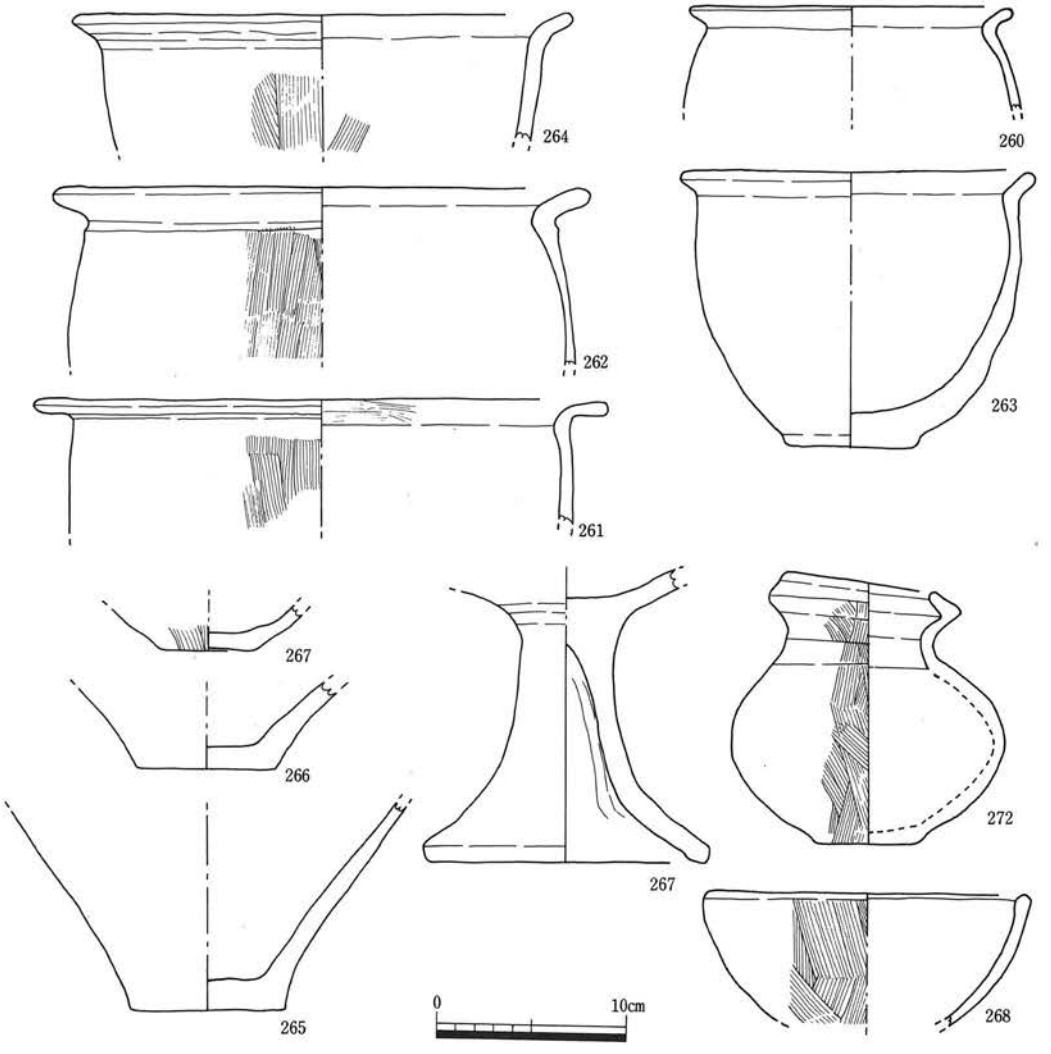


Fig.96　SE108出土遺物実測図（1/4）

ＳＥ108出土遺物（Fig.97）

甕（260～267）　260は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。261は、口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。262は、口縁部は横ナデ調整。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。263は、完形に近い。口縁部は横ナデ調整、外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整を施す。底部外面に黒班が認められる。264は、口縁部は横ナデ調整、外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はハケ目をナデ消す。265は、外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。266は、器壁の磨耗のため調整不明。267は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

壷（272）　口縁部は横ナデ調整。頸部～胴部外面は斜方向の細かいハケ目調整を施す。外面一部に黒班が認められる。

高杯（269）　丹塗りの痕跡が認められる。坏部外面はハケ目調整、内面はナデ調整。脚部外面はていねいなナデ調整、内面はナデ調整を施す。

鉢（268）　B類である。外面は縦～斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。内面の一部に黒班が認められる。

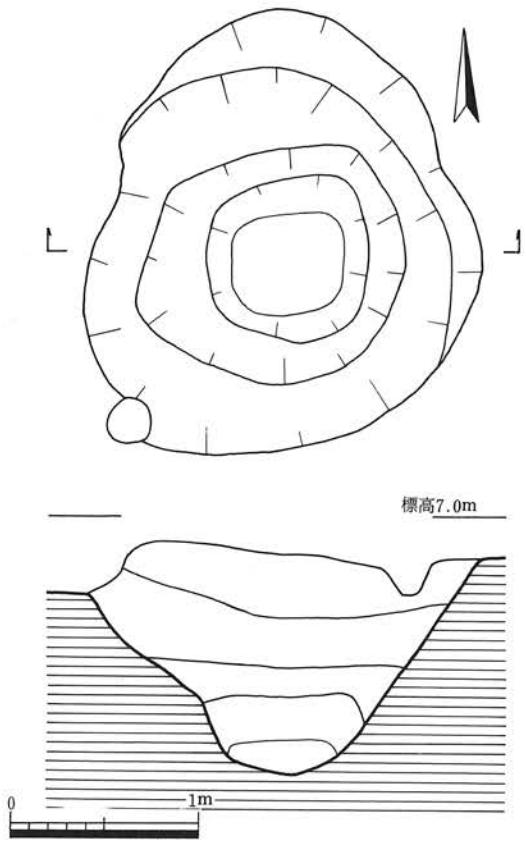


Fig.97　SE122実測図（1/40）

ＳＥ122井戸（Fig.97）

CH･CI-70区画に検出した。検出面の標高は、6.8～6.9m。平面形は楕円形をなし、長径2.3m・短径2.0m・深さ1.3mをはかる。壁面はきつく立ち上がるが、中位で二つの段部が形成されている。断面形は円錐状をなす。底面はレンズ状である。埋土は、暗褐色～黒褐色土で、下部へむかうほど砂が混じる。埋土中から遺物が出土しているが、ほとんどが破片資料であり、埋没の過程で投棄されたものと判断される。

ＳＥ122出土遺物（Fig.98）

9点が図化できた。312は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整。313は、口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。内面に黒班が認められる。314は、内外面はナデ調整。315は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。316は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナ

デ調整を施し、外面に黒斑が認められる。317は、受部内外面は横ナデ調整。外面は上位でハケ目をナデ消し、下位は縦～斜方向のハケ目調整。内面は上位でハケ目をナデ消し、下位はナデ調整で指頭痕が観察できる。裾部端は横ナデ調整。318は、内外面横ナデ調整。口縁端部に黒斑が認められる。319は、手捏土器。320は、石包丁。両端が欠損している。

ＳＥ160井戸（Fig.99）

CE-78区画に検出した。検出面の標高は、6.5～6.6m。SR152・SE193と切り合い関係にあり、SE193に先行し、SR152に後出する。SB211とも重複関係にあるが、先後関係は不明。平面形は楕円形をなし、長径1.4m・短径1.1m・深さ1.0mをはかる。壁面はきつく立ち上がり、中位で段を形成する。断面形は円錐状をなす。底面は浅いレンズ状である。埋土は、７層に大別できた。⑥・⑦は壁面の崩落土で、①～⑤は自然堆積による埋没状況を示している。埋土中から遺物が出土しているが、ほとんどが破片資料であり、埋没の過程で投棄されたものと判断される。

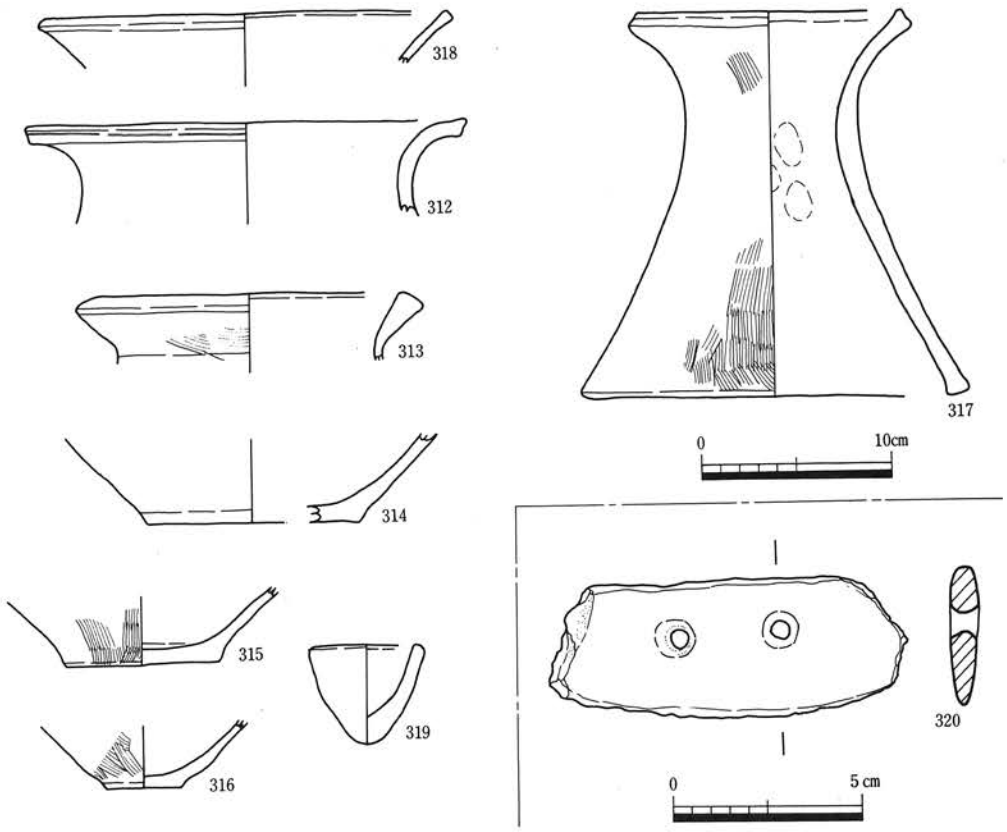


Fig.98　SE122出土遺物実測図（1/4・1/2）

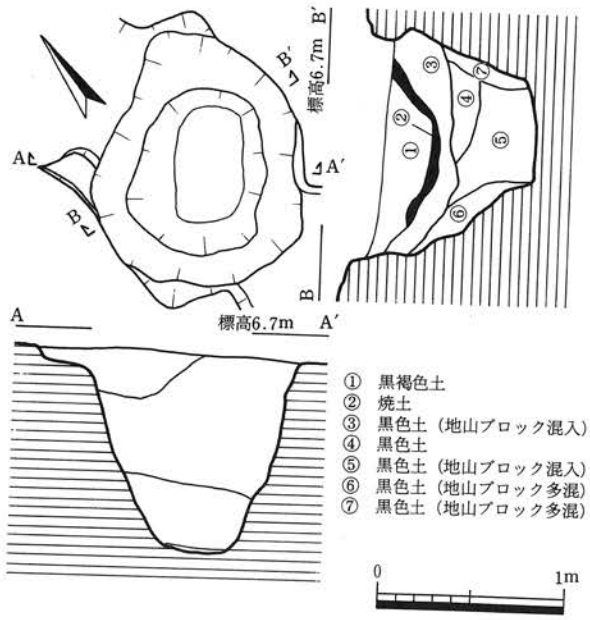


Fig.99　SE160実測図（1/40）

ＳＥ160出土遺物(Fig.100)

5点を図示する。431は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面はハケ目をナデ消している。内面はナデ調整を施す。433は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面はハケ目をナデ消している。内面はナデ調整。436は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。437は、外面は縦方向のハケ目調整。内面はナデ調整を施す。440は、口縁部は横ナデ調整。外面は粗い縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施している。

SE193井戸（Fig.101）

CE-78区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SR152・SE160と切り合い関係にあり、SE193が後出する。SB211とも重複関係にあるが、先後関係は不明。平面形は隅丸方形をなし、一辺1.0～1.1m・深さ1.2mをはかる。壁面はきつく立ち上がり、断面形は二段掘りの形状をなす。底面は浅いレンズ状である。埋土は、3層に大別できた。どれも自然堆積による埋没状況を示している。埋土中から多量の遺物が出土しているが、ほとんどが破片資料であり、埋没の過程で投棄されたものと判断される。

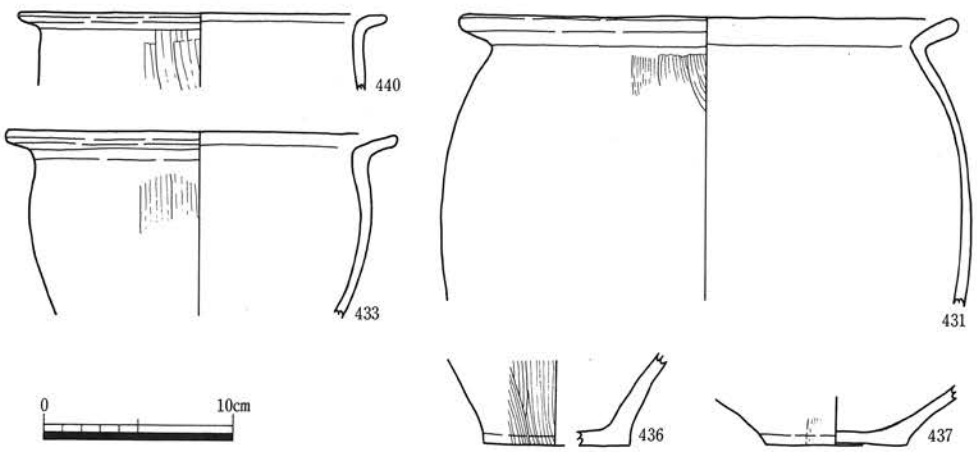


Fig.100　SE160出土遺物実測図（1/4）

ＳＥ193出土遺物(Fig.102・103)

甕(Fig.103／544・545・549～552)　544は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整。内面は、上位斜方向のハケ目調整、下位はナデ調整で、底部近くで指頭痕が観察できる。一部に黒斑が認められる。545は、口縁部は横ナデ調整。胴部外面は縦～斜方向のハケ目調整で、突帯下部は横ナデを加えている。内面は横方向のハケ目調整を施す。549は、口縁部に2個の穿孔を有する。口縁部は横ナデ調整。外面は細かい斜方向のハケ目調整。内面はナデ調整。550は、口縁部横ナデ調整、内外面にはナデ調調整を施している。551は、外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整を施す。552は、外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整。内面に赤色顔料(朱か?)が付着している。

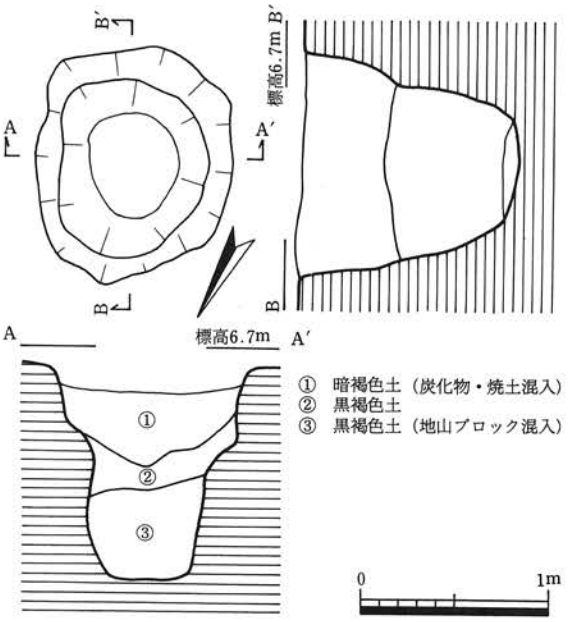


Fig.101　SE193実測図（1/40）

壷(Fig.103／546・553・554)　546は、口縁部は横ナデ調整。頸部外面は縦方向のハケ目調整、内面は一部に斜方向のハケ目調整。553は、内面に丹塗りの痕跡がある。外面は細かい斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。554は、一部に黒斑が認められる。口縁部は横ナデ調整。外面はハケ目の後縦方向のヘラミガキ調整。内面はナデ調整を施している。

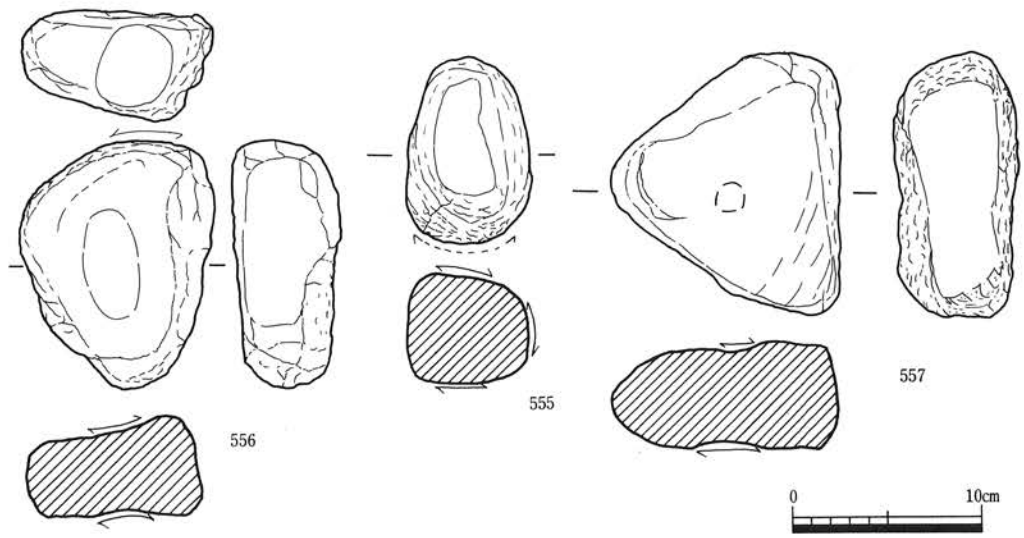
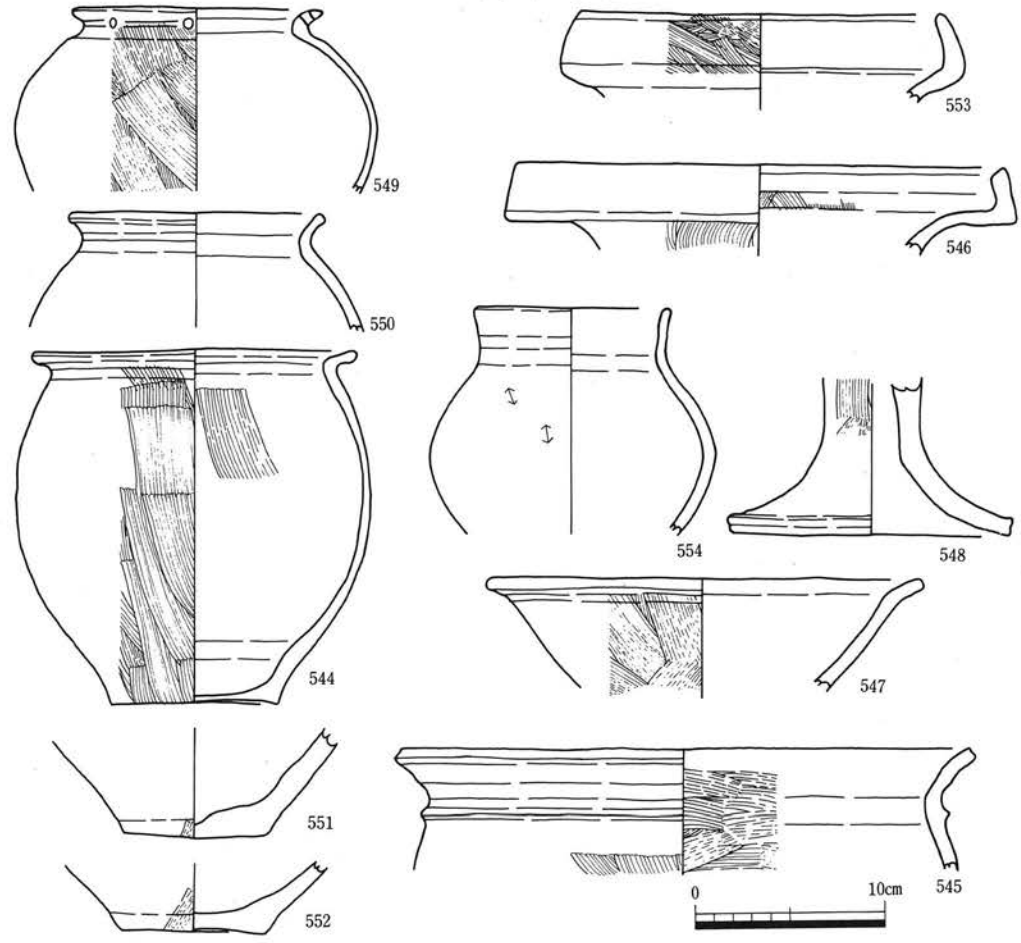


Fig.102　SE102出土遺物実測図１（1/4）



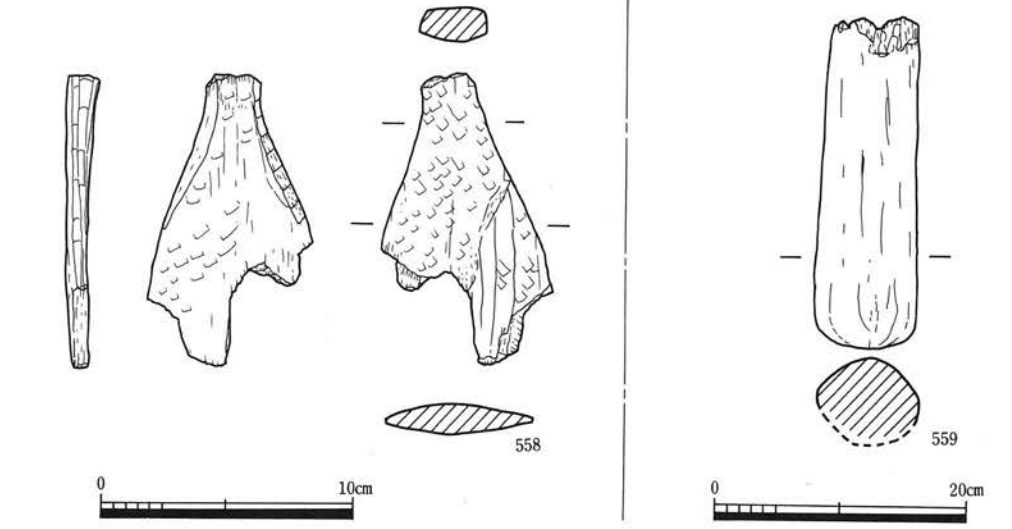


Fig.193　SE193出土遺物実測図２（1/4・1/3・1/6）

高坏（Fig.103／548）　脚端部はナデのため沈線状のくぼみがまわる。外面上位は縦方向のハケ目調整、下位はナデ調整。内面はナデ調整を施す。

鉢（Fig.103／547）　小破片だが鉢と思われる。一部に黒斑が認められる。外面は斜方向のハケ目調整。内面は上位でハケ目調整、下位はナデ調整。

石製品（Fig.102／555～557）　磨石である。555は、3面に磨耗痕、1面に敲打痕が認められる。556は、3面に磨耗痕が認められる。557は、3面に磨耗痕が認められる。

木製品（Fig.103／558・559）　558は、鍬の基部破片。559は、竪杵の破片か。先端には敲打痕が認められる。

5・土壙と出土遺物

(1) 井戸の可能性がある土壙

ＳＫ137土壙（Fig.104）

CF-75区画に検出した。検出面の標高は、6.9m前後。平面形はやや不整な円形をなし、径1.0m・深さ0.7mをはかる。北側にゆるい段状部をもつ。壁面はきつく立ち上り、南側で抉れ込む。底面はレンズ状をなす。埋土は3層に大別され、どれも自然堆積によるものと判断する。

埋土全体から土器破片が出土しているが、図示している土器群は③層出土で、一括投棄によるものである。

ＳＫ137出土遺物（Fig.105）

8点を図化する。どれも土師器である。381は、完形品。体部内外面回転ナデ調整。内底部は一定方向のナデ調整。外底部は回転ヘラ切りの後板目圧痕が認められる。382は、完形に近い。口縁部は横ナデ調整。外面は、目の粗い並行タタキ目の後に斜方向のハケ目を施し、一部にはナデを加えている。底部にはタタキ目がそのまま残っている。内面は斜方向のヘラ削りで、底部近くはナデ

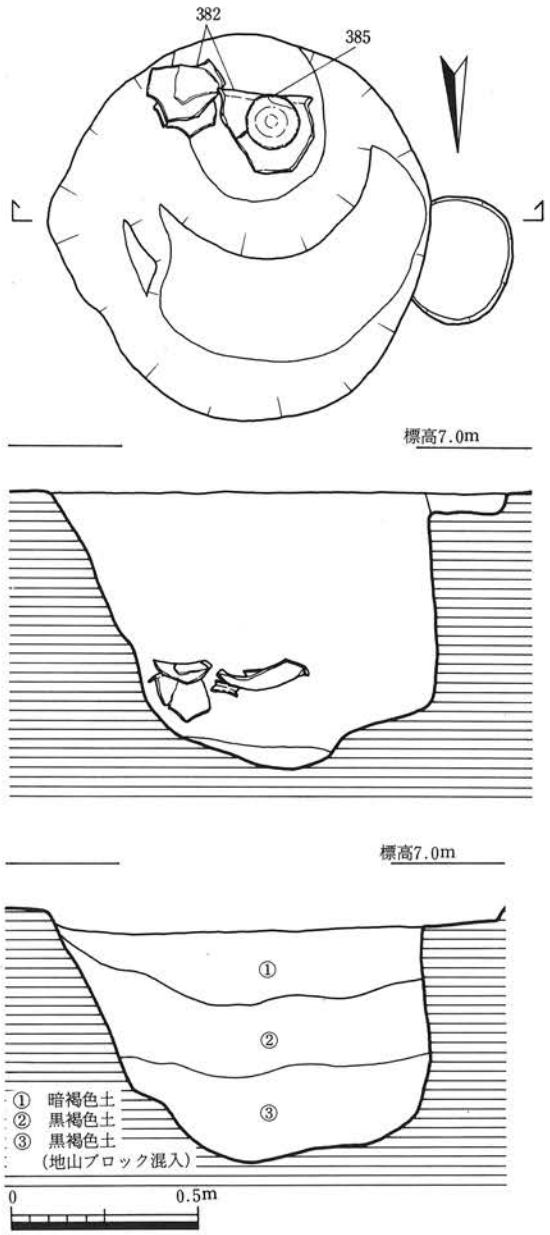


Fig.104　SK137実測図（1/20）

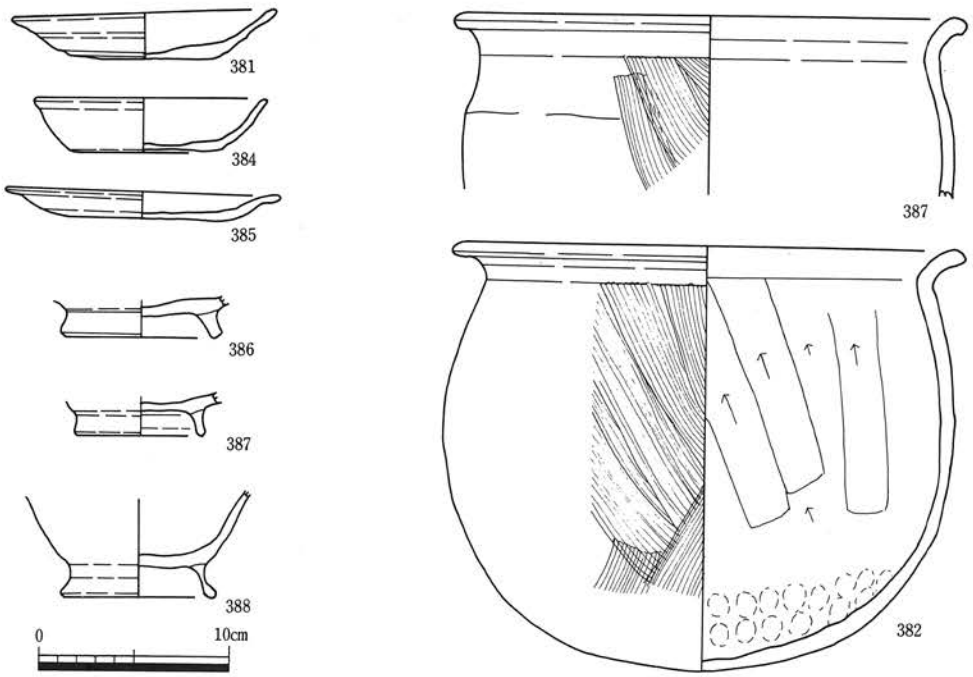


Fig.105　SK137出土遺物実測図（1/4）

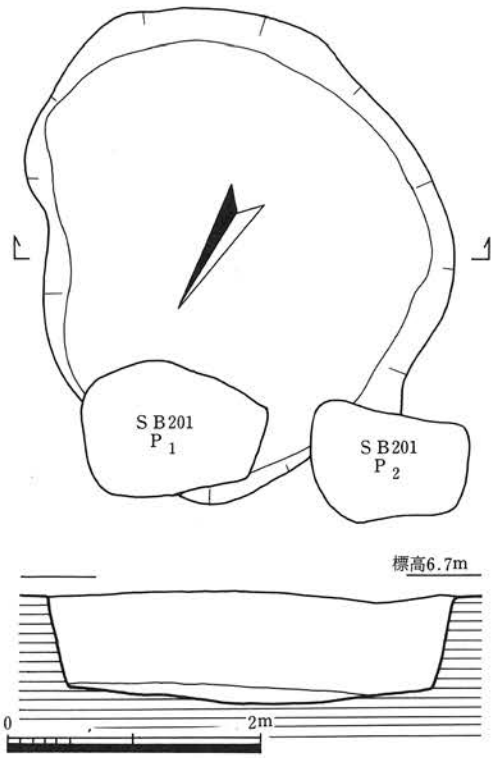


Fig.106　SK125実測図（1/60）

調整で指頭痕が観察できる。384・385は、体部内外面横ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後ナデツケ。388は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部には回転ヘラ切りの後の板目圧痕が認められる。389は、口縁部横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜方向のヘラ削り。

(2)　貯蔵穴の可能性がある土壙

ＳＫ125土壙（Fig.106）

CJ・CK-70区画に検出した。検出面の標高は、6.5～6.6m。SD101・SB201と切り合い関係にあり、SD101の底面で検出された。SK125が先行する。平面形は不整な楕円形をなし、長径3.9m・短径3.2m・深さ0.9mをはかる。壁面はきつく立ち上り、底面は浅いレンズ状をなす。埋土は、暗褐色～黒灰色土。埋土全体から多量の遺物が

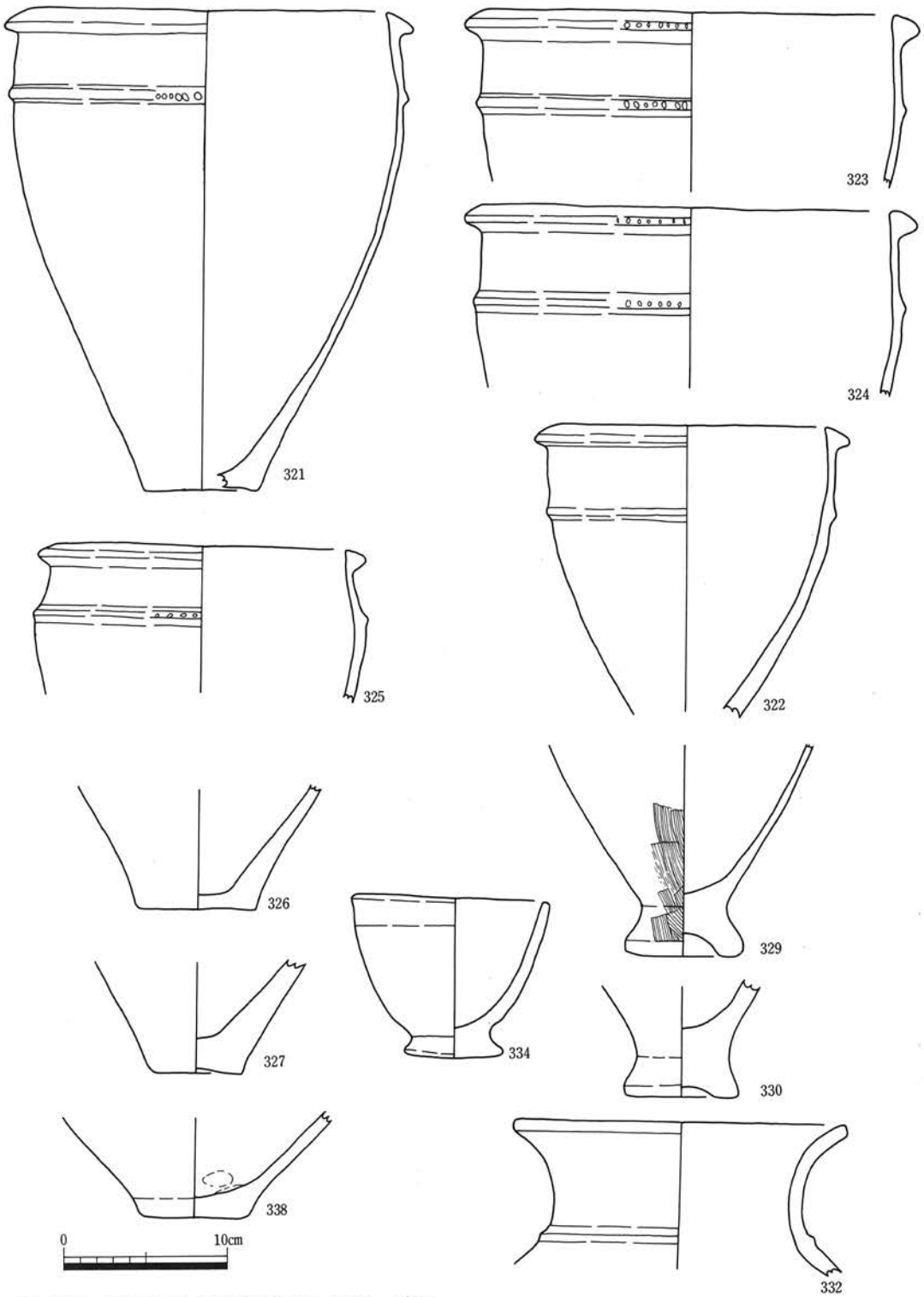


Fig.107　SK125出土遺物実測図（1/4・1/2）

出土した。

ＳＫ125出土遺物（Fig.107・108）

甕（Fig.107／321～327・329・330）　321は、口縁部はきつい横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。322は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整。323は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整で、外面全体にススが付着する。324は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整で、外面一部にススが付着する。325は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整。326は、内外面ナデ調整。327は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整で、底部外面にススが付

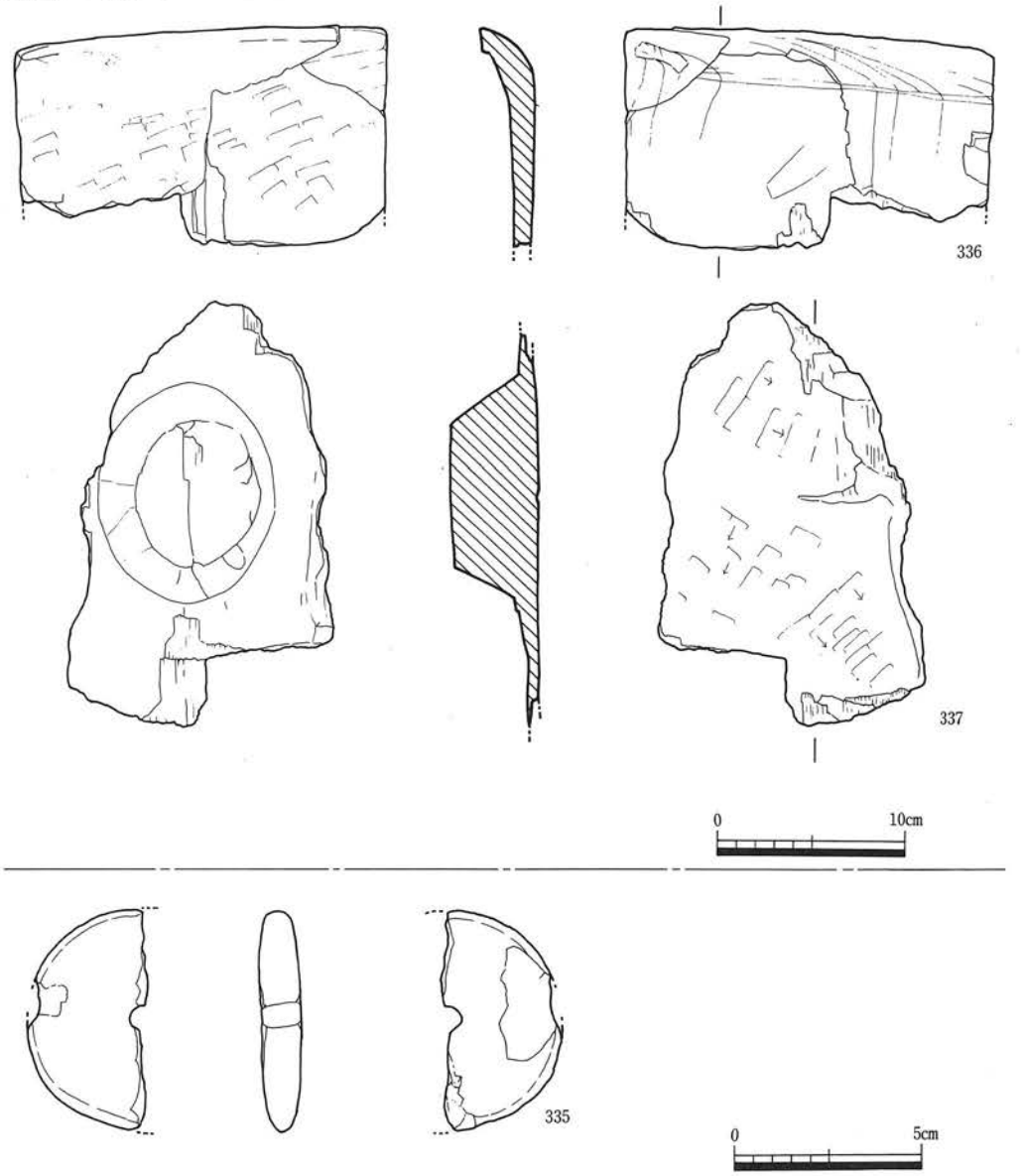


Fig.108　SK125出土遺物実測図（1/4・1/2）

着する。329は、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。330は、外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

壷（Fig.107／332•338）　332は、口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。338は、内外面ナデ調整で、底部内面には指頭痕が観察できる。外面下位に黒班が認められる。

鉢（Fig.107／334）　台付の鉢B類。ほぼ完存である。口縁部は横ナデ調整、内外面はナデ調整を施す。

木製品（Fig.108／336•337）　336は、不明木製品。全体に削りはていねいである。337は、鍬未製品の基部破片。

土製品（Fig.108／335）　紡錘車の欠損品である。

(3) 土器溜の土壙

ＳＫ135土壙（Fig.109）

CC-79区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SB209と重複関係にある。平面形は短楕円形をなし、長径0.9m・短径0.8m・深さ0.6mをはかる。壁面は、東側できつく、西側でややゆるく立ち上る。底面は浅いレンズ状をなす。埋土中から多量の遺物が出土した。出土状況の観察からは、埋没の過程で西側から遺物が一括投棄されたことがわかる。

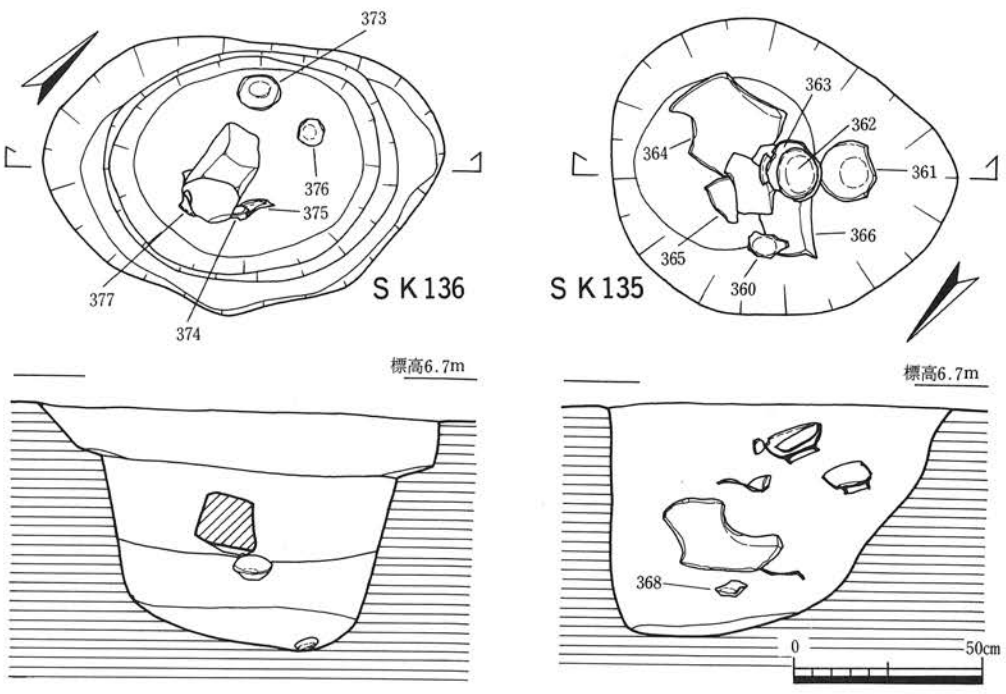


Fig.109　SK135・136実測図（1/40）

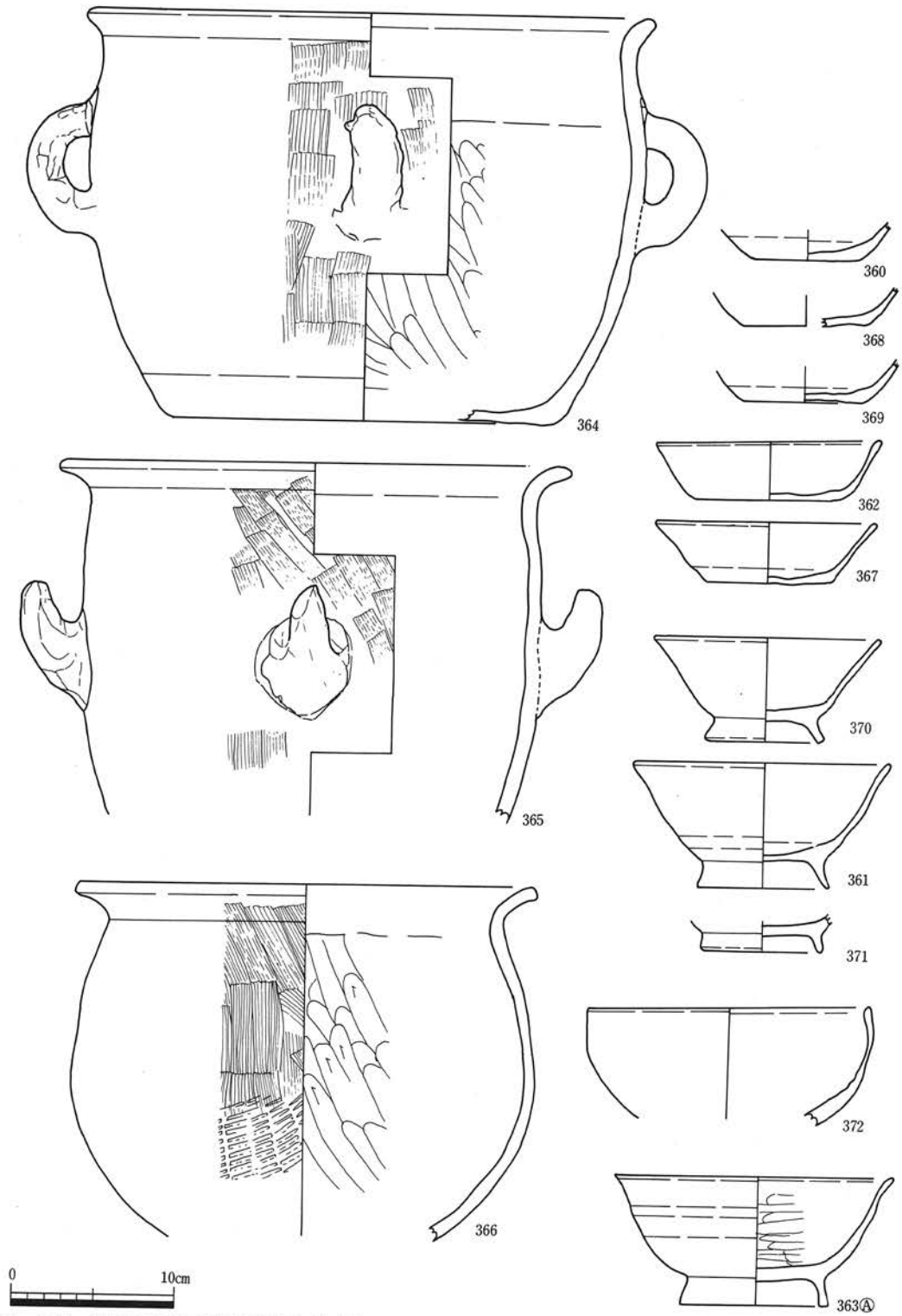


Fig.110　SK135出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ135出土遺物（Fig.110）

363は黒色土器A類、他は土師器である。

坏（360・362・367～369）　360は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後にナデツケ。362は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後に板目圧痕が観察できる。367は、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後に板目圧痕。368は、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後に板目圧痕。369は、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後にナデツケ。外面に黒班が認められる。

碗（361・363・370～372）　361は、外面に赤塗りの痕跡が観察できる。体部内外面は回転ナデ調整、内定部は一定方向のナデ調整、胎土に2㎜ほどの砂粒を多量に含む。363は、外面はていねいな回転ナデ調整、内面には緻密なヘラミガキを施している。370は、内外面に赤塗りの痕跡が確認できる。体部内外面は回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整。371は、内底部は不定方向のナデ調整。外底部に板目圧痕の痕跡が観察できる。372は、器壁の剝落のために調整は不明瞭だが、外面は横方向のヘラミガキを施してあるらしい。

甑（364・365）　364は、口縁部内外面は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のヘラ削り。365は、口縁部内外面は横ナデ調整、外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面は削りの後にナデ調整を施している。外面一部にススが付着する。

甕（366）　口縁部は横ナデ調整。外面は、目の粗い並行タタキ目の後に斜～縦方向のハケ目を施している。下位ではタタキ目がそのまま残っている。内面は斜方向のヘラ削り。

ＳＫ136土壙（Fig.109）

CD-79区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SB222と重複する。平面形は楕円形をなし、長径1.1m・短径0.7m・深さ0.6mをはかる。断面形は二段掘りの形状をなし、壁面はきつく立ち上る。底面はレンズ状をなす。埋土の中位以下で、遺物の集中が認められた。埋没過程の初期に投棄されたものと判断する。

ＳＫ136出土遺物（Fig.111）

どれも土師器である。373は、ほぼ完存である。体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方

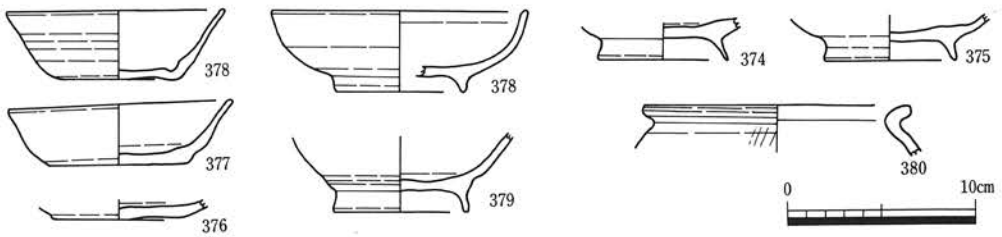


Fig.111　SK136出土遺物実測図（1/4）

向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後に板目圧痕が観察できる。374は、内底部は不定方向のナデ調整。外底部に板目圧痕が認められる。375は、内底部は不定方向のナデ調整。376は、内底部は不定方向のナデ調整。外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。377は、完形に近い。体部内外面は回転ナデ調整。内底部は不定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。378は、体部内外面回転ナデ調整。379は、体部外面は回転ナデ調整、内面はヘラミガキか。赤塗りの痕跡が認められる。380は、口縁部横ナデ調整、外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。

ＳＫ176土壙（Fig.112）

CB-84区画に検出した。検出面の標高は、6.4m前後。SK177と近接する。平面形は隅丸長方形をなし、長辺1.5m・短辺1.1m・深さ0.3mをはかる。壁面はややきつく立ち上り、底面は平坦で東側でやや深くなる。埋土は、暗褐色土。埋土全体から多量の遺物が出土した。埋没過程に伴い投棄されたものと判断するが、確実な一括資料とはいえない。

ＳＫ176出土遺物（Fig.113）

12点を図示する。どれも弥生土器で、器種には、甕・壷・高坏がある。

甕（500～505・507・508）　500は、ほぼ完存で、一部に丹塗りの痕跡がある。口縁部は横ナデ調整、外面は斜～横方向のヘラミガキ、内面下位は斜方向のハケ目調整で上位はナデを加え指頭痕が観察できる。外面下位に黒斑が認められる。501は、口縁部横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整を施す。502は、口縁部は横ナデ調整で、内面の一部にヘラ状工具の痕跡がある。外面は斜方向の細かいハケ目調整、内面はナデ調整を施す。503は、口縁部横ナデ調整、外面縦～斜方向のハケ目調整、内面ナデ調整。504は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整で指頭痕が観察できる。505は、底部に焼成後の穿孔がある。外面縦方

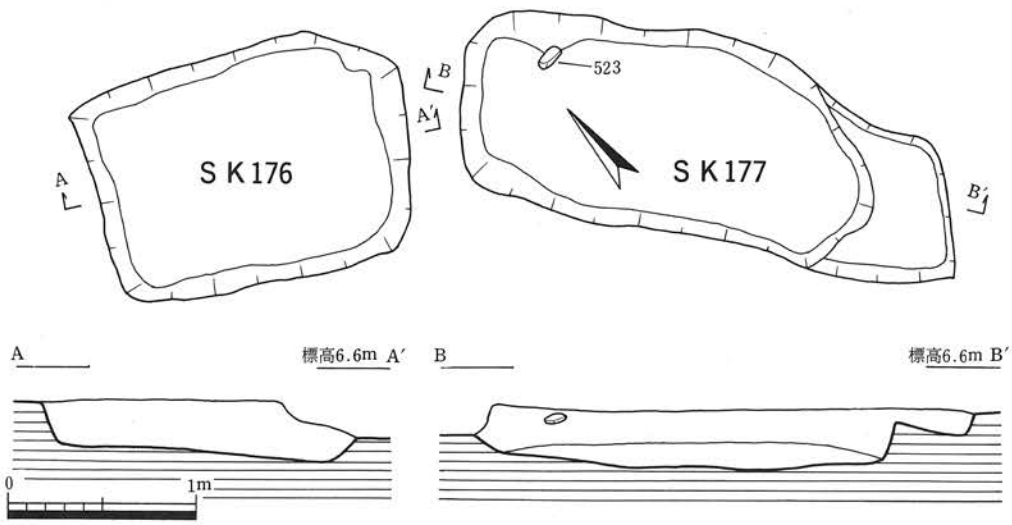


Fig.112　SK176・177実測図（1/40）

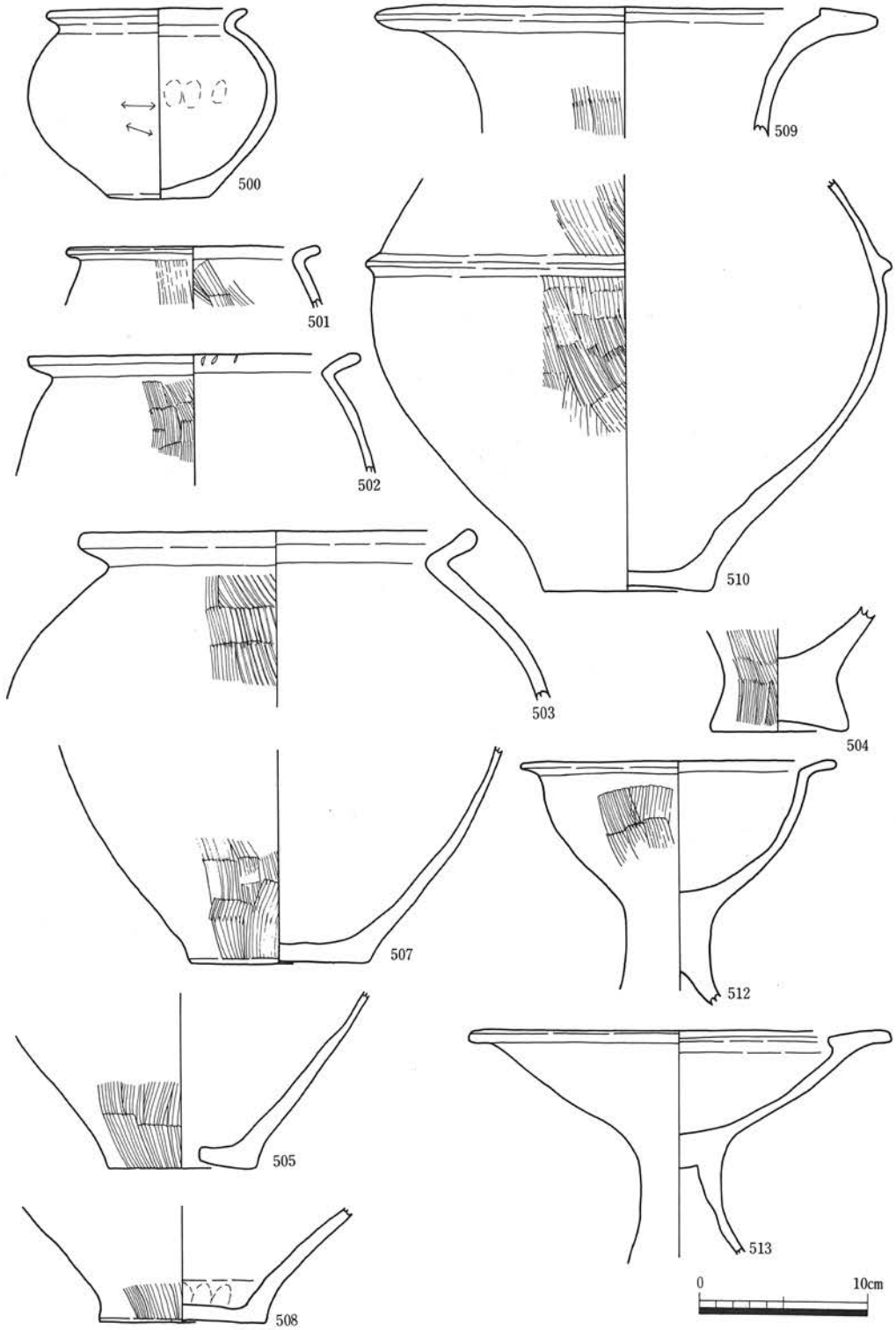


Fig.113　SK176出土遺物実測図（1/4）

向のハケ目調整、内面ナデ調整。507は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。内底部には指頭痕が観察できる。508は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。内底部には指頭痕が観察できる。

壷（509・510）　509は、口縁部横ナデ調整、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。510は、外面斜方向のハケ目調整、内面ナデ調整を施す。

高坏（512・513）　512は、坏部外面に黒班が認められる。口縁部は横ナデ調整。外面は坏部から脚部にかけてハケ目調整。内面はナデ調整を施す。513は、口縁部横ナデ調整。外面は坏部から脚部にかけて不明瞭なヘラミガキ。内面はナデ調整を施す。

ＳＫ177土壙（Fig.112）

CA・CB-84区画に検出した。検出面の標高は、6.4m前後。SK176と近接する。平面形は隅丸長方形をなし、長辺2.7m・短辺0.9m・深さ0.3mをはかる。南側の短辺に浅い段状部を有する。壁面はややきつく立ち上り、底面はレンズ状をなす。埋土は、暗褐色土。埋土全体から多量の遺物が出土した。

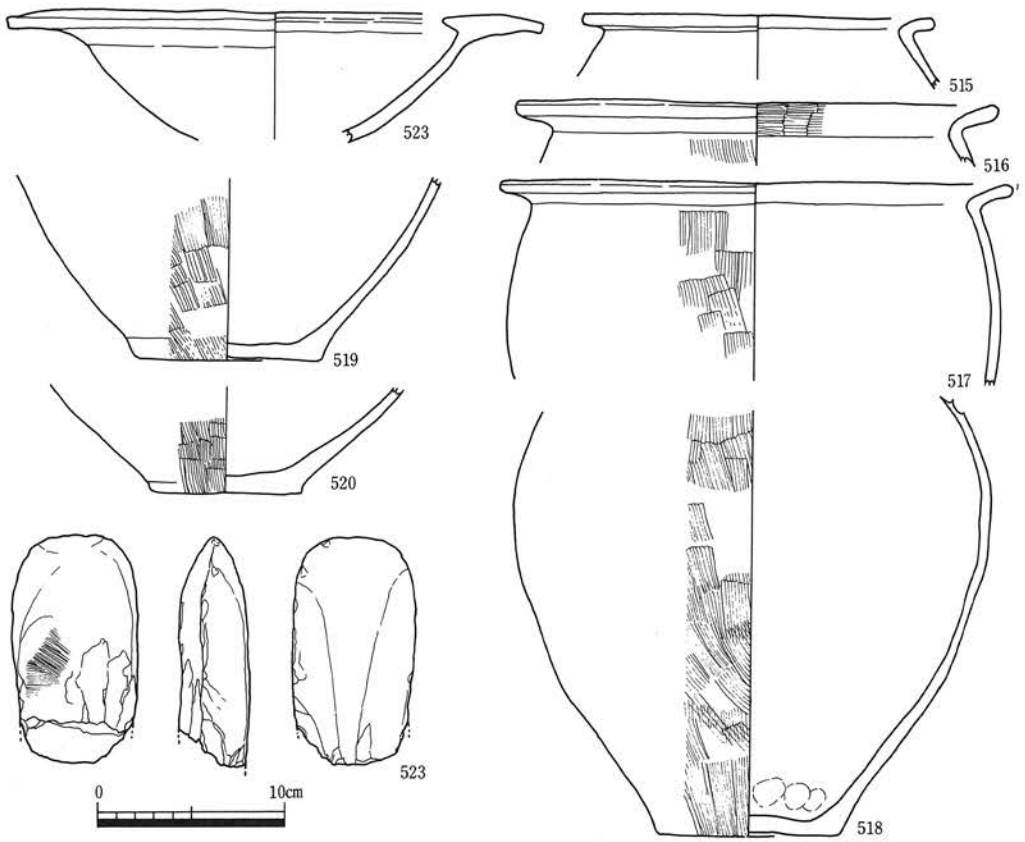


Fig.114　SK177出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ177出土遺物（Fig.114）

8点を図示する。515は、口縁部横ナデ調整、内外面ナデ調整。516は、口縁部内面横方向のハケ目調整、外面横ナデ調整。胴部外面縦方向のハケ目調整、内面横ナデ調整。517は、口縁部横ナデ調整、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。518は、外面斜～縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整で、内底部に指頭痕が観察できる。519は、外面斜方向のハケ目調整、内面ナデ調整で、外面一部に黒班が認められる。520は、外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整。522は、口縁部横ナデ調整、内外面は不明瞭なヘラミガキ。523は、磨製石斧。基部を欠損し表面の一部が剝離している。全体にていねいに研磨してある。

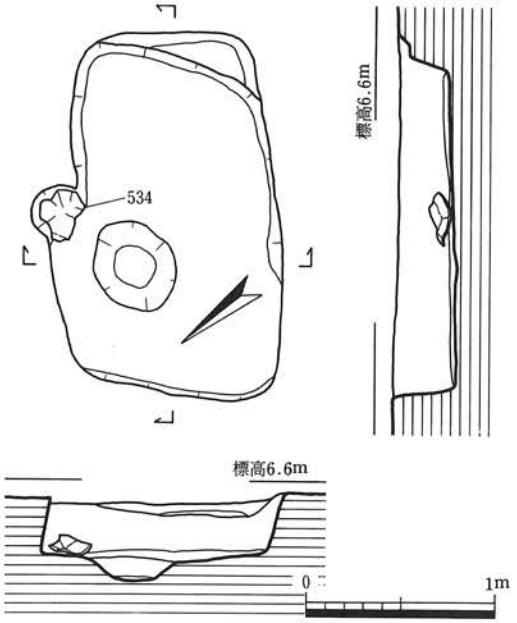


Fig.115　SK183実測図（1/40）

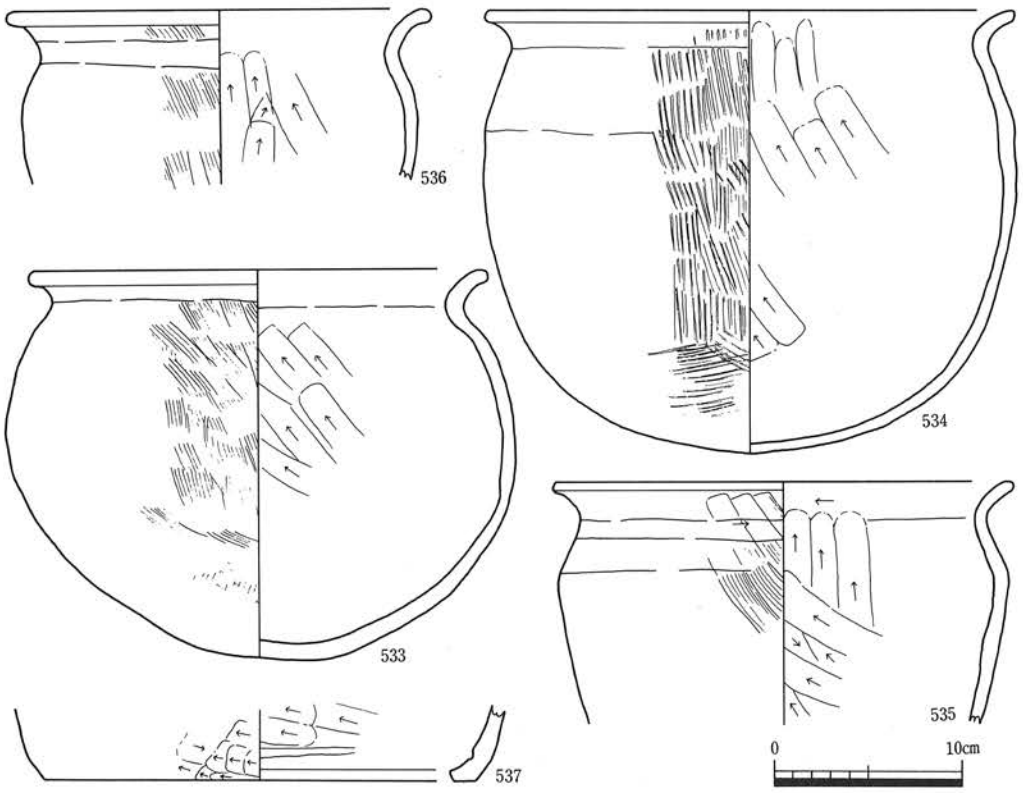


Fig.116　SK183出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ183土壙（Fig.115）

BY-88区画に検出した。検出面の標高は、6.5m前後。他の遺構と切り合い関係にはない。平面形はほぼ隅丸長方形をなし、長辺1.8～1.9m・短辺0.9～1.0m・深さ0.3mをはかる。北側の長辺で、半円状に膨らんでいる部分がある。壁面はきつく立ち上がり、崩落により抉れ込んでいる部分がある。底面はほぼ平坦で、径40cm・深さ10cmほどの小穴が検出された。埋土は、暗褐色土。埋土下部から、土師器がまとまって出土している。534は底面上から出土した。埋没過程のはやい段階で、一括投棄によるものと判断する。

ＳＫ183出土遺物（Fig.116）

5点が図化できた。533･534は、口縁部横ナデ調整。外面は、目の粗い平行タタキ目の後に斜方向のハケ目調整を施し、底部近くではタタキ目がそのまま残っている。内面は斜方向の削りを施している。533は、完形に近く、外面一部にススが付着している。535･536は、口縁部横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜～縦方向の削りを施す。537は、甑の底部破片。内外面に横方向の削りを施している。

６．周溝状遺構と出土遺物

ＳＲ150周溝状遺構（Fig.117）

CF・CG-76区画に検出した。検出面の標高は、6.8～6.9m。SB204・206と切り合い関係にあり、SR150が先行する。SB205と重複関係にある。平面形は径4.2～4.4mのほぼ円形で、溝幅0.6～0.7m・深さ0.3mをはかり、溝の断面形は台形状である。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土で、外側から埋没したと観察できる堆積状況を示していた。溝の内側に、付属するような遺構は検出していない。埋土中から若干の土器片が出土している。

ＳＲ150出土遺物（Fig.118／408～411・413・414）

6点を図示する。408は、口縁部横ナデ調整、外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整。409は、口縁部外面横ナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。胴部外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整。410は、内外面ナデ調整。411･412は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整を施す。413は、内外面横ナデ調整。414は、内外面ナデ調整を施す。

ＳＲ152周溝状遺構（Fig.117）

CE-77・78区画に検出した。検出面の標高は、6.6～6.7m。SE160・193・SB211と切り合い関係にあり、SR152が先行する。平面形は径4.8～4.9mのほぼ円形で、溝幅0.6～0.9m・深さ8cmをはかる。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土。溝の内側に、付属するような遺構は検出していない。埋土中から少量土器片が出土しているが、図化できたものはない。

ＳＲ153周溝状遺構（Fig.117）

CG・CH-72・73区画に検出した。検出面の標高は、6.9m前後。北西側で他の遺構に切り込まれ、東側を撹乱に破壊されている。平面形は短楕円形をなすものと推定され、長径6.1m・短径

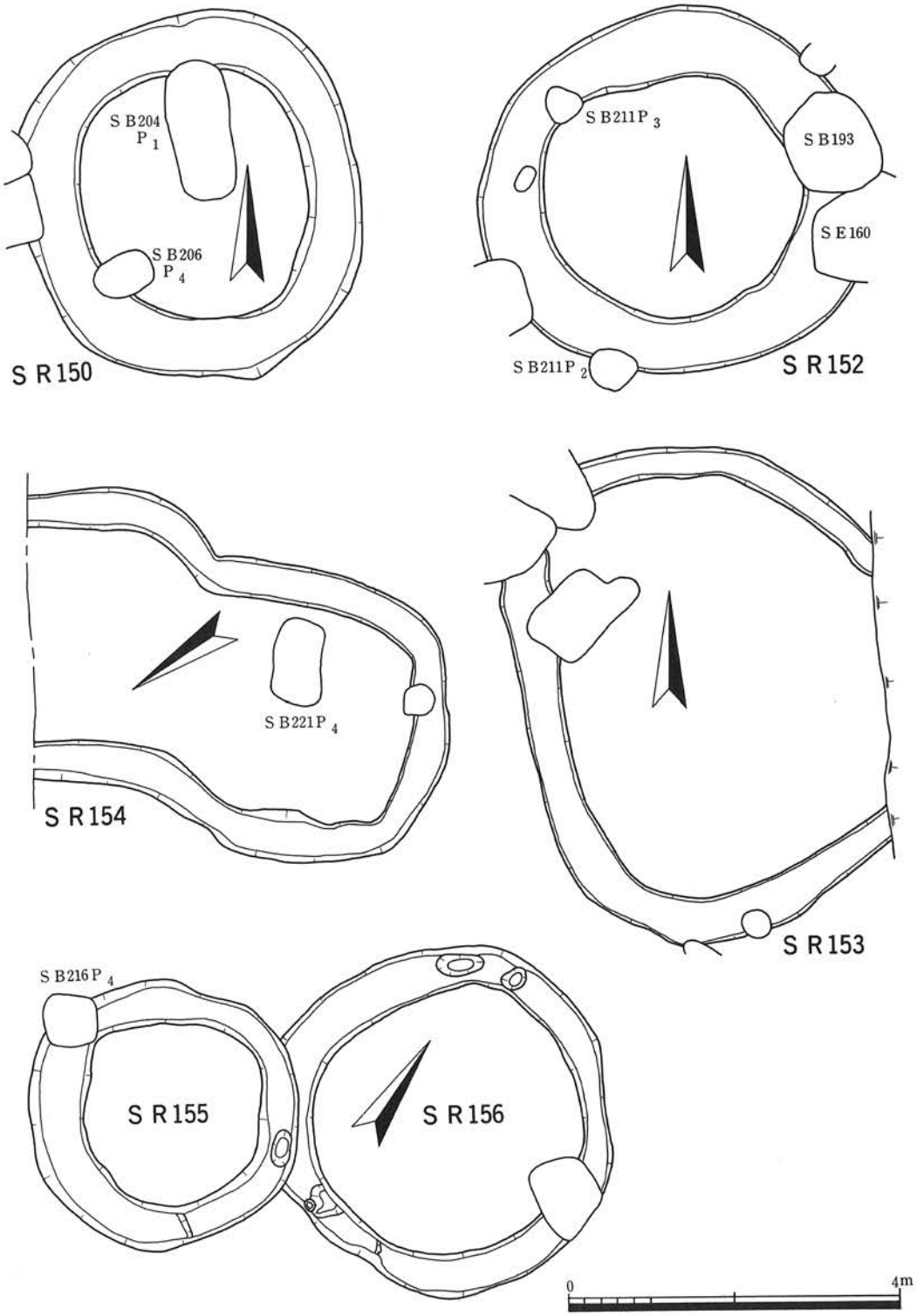


Fig.117　SR150・152・153・154・155・156実測図（1/80）

4.6mほどで、溝幅0.4～0.5m・深さ8cmをはかる。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土。溝の内側に、付属するような遺構は検出していない。埋土中から若干の土器片が出土している。

ＳＲ153出土遺物（Fig.118／415～417）

415は、口縁部横ナデ調整、外面は目の細かい斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。416・417は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。

ＳＲ154周溝状遺構（Fig.117）

CC・CD-81・82区画に検出した。検出面の標高は、6.7m前後。SB221と重複関係にある。北東側は調査区外に展開している。平面形は隅丸長方形に近いものか。長辺3.9m以上・短辺2.3mをはかる。溝幅0.4～0.5m・深さ15cmをはかり、溝の断面形は台形状である。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土。溝の内側に、付属するような遺構は検出していない。埋土中から若干の土器片が出土している。

ＳＲ154出土遺物（Fig.118／419）

外面はハケ目をナデ消し、内面はナデ調整。外面一部に黒斑が認められる。

ＳＲ155周溝状遺構（Fig.117）

CB・CC-82区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SR156・SB216と切り合い関係にあり、SR155が後出する。平面形は径3.3mのほぼ円形で、溝幅0.4～0.6m・深さ0.1～0.2mをはかり、溝の断面形は台形状である。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土。溝の内側に、付属する

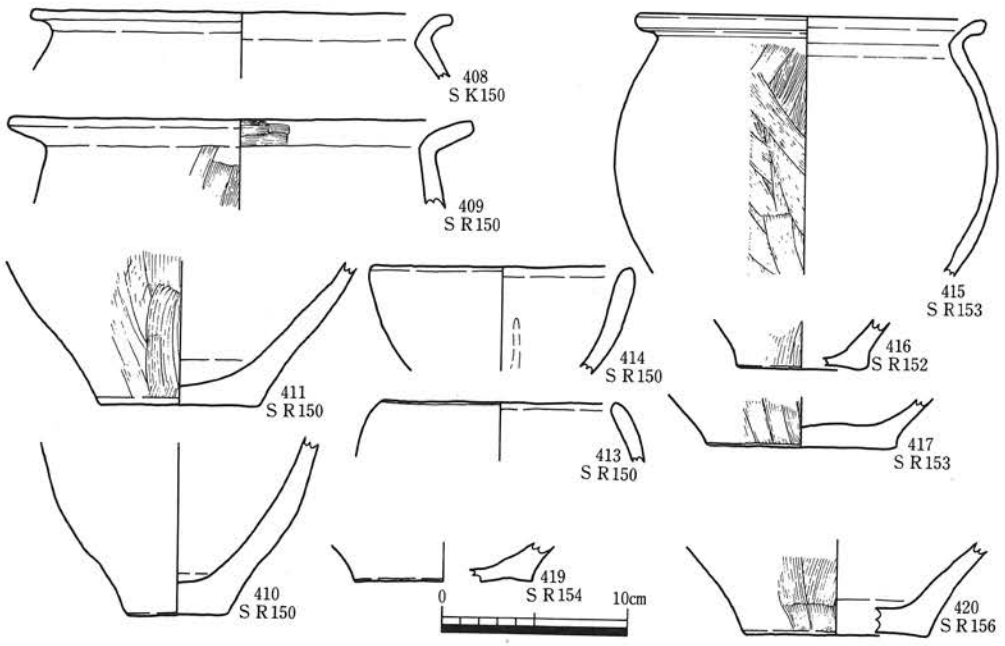


Fig.118　SR150・153・154・156出土遺物実測図（1/4）

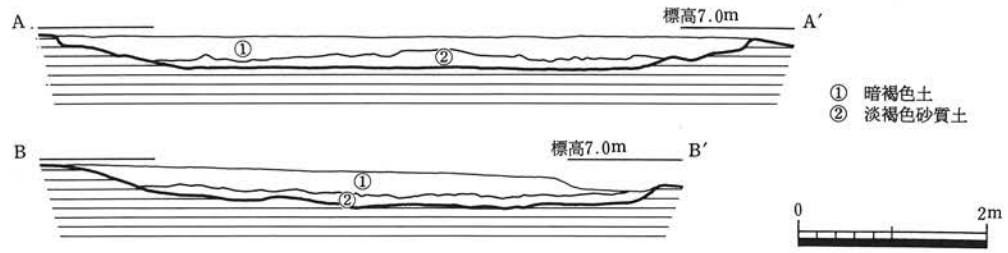


Fig.119　SD101土層断面実測図（1/80）

ような遺構は検出していない。埋土中から若干の土器片が出土しているが、図化できたものはない。

ＳＲ156周溝状遺構（Fig.117）

CB・CC-82・83区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SR155と切り合い関係にあり、SR156が先行する。平面形は径4.2mのほぼ円形で、溝幅0.4～0.6m・深さ0.1～0.2mをはかり、溝の断面形は台形状である。溝の埋土は砂混じりの暗褐色土。溝の内側に、付属するような遺構は検出していない。埋土中から若干の土器片が出土している。

ＳＲ156出土遺物（Fig.118／420）

外面は縦方向のハケ目調整、内面はハケ目の後にナデを加えている。

7．溝と出土遺物

ＳＤ101溝（Fig.119）

調査区西側に検出した。溝の両端は調査区外に展開する。すべての弥生時代に属する遺構を切り、SD102に切られる。直線的に東西方向にはしり、主軸をW-17°-Nにとる。G地区でもこの溝は検出されていて（Fig.6参照）、全長88m以上・溝幅6.1～7.7m・深さ0.3～0.4mで、西へむかってやや深く傾斜している。壁面はゆるく立ち上がり、底面は平坦である。埋土は、２層に大別でき、自然堆積によるものと判断した。②の観察では、ある時期には滞水していたことがわかる。埋土中からは多量の遺物が出土しているが、ほとんどは弥生土器であった。出土遺物中からは、古代に属する遺物は出土しているが中世に属する遺物は出土していないので、古代に属する遺構と判断した。

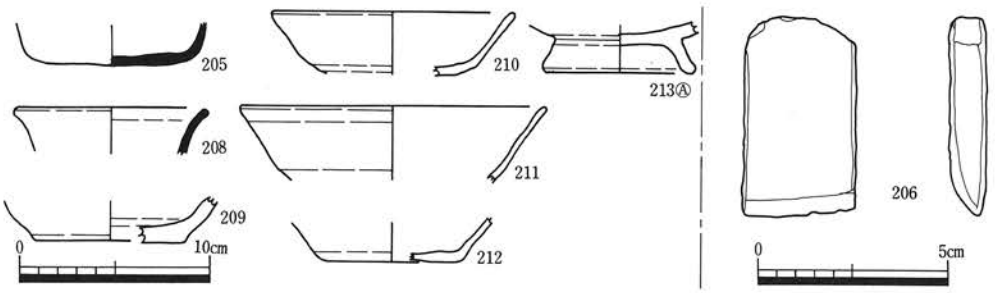


Fig.120　SD101・102・出土遺物実測図（1/4・1/2）

SD101出土遺物（Fig.120／205・206・208・209）

205は、須恵器。体部内外面と内底部は回転ナデ調整、外底部は静止ヘラ削りを行っている。206は、石斧である。基部を欠損している。全体をていねいに研磨していて、刃部には使用痕と思われる細かい欠損がある。208は、須恵器。内外面回転ナデ調整。209は、土師器。体部内外面回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部は板状圧痕が認められる。

SD102溝（Fig.63）

CF・CG・CH・CI－73・74区画に検出した。溝の両端は調査区外に展開する。弥生時代に属する遺構とSD101を切る。南北方向の溝で、主軸をN-8°-Wにとる。全長17m以上・溝幅1.5～3.1m・深さ15～25cmをはかり、断面形は浅い台形状をなし、溝底は平坦である。北へむかって、溝幅は広くなり、溝底も徐々に深くなる。埋土は褐色～暗褐色土で、自然堆積によるものである。埋土中から土器片がかなり出土しているが、大部分は弥生土器であった。

SD102出土遺物（Fig.120／210～213）

213は黒色土器A類、他は土師器である。210は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は不定方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後にきれいにナデツケている。211は、内外面回転ナデ調整。212は、体部内外面と内底部は回転ナデ調整、外底部は回転ヘラ切りの後きれいにナデツケている。213は、内面ヘラミガキを施し、外底部は回転ナデ調整。

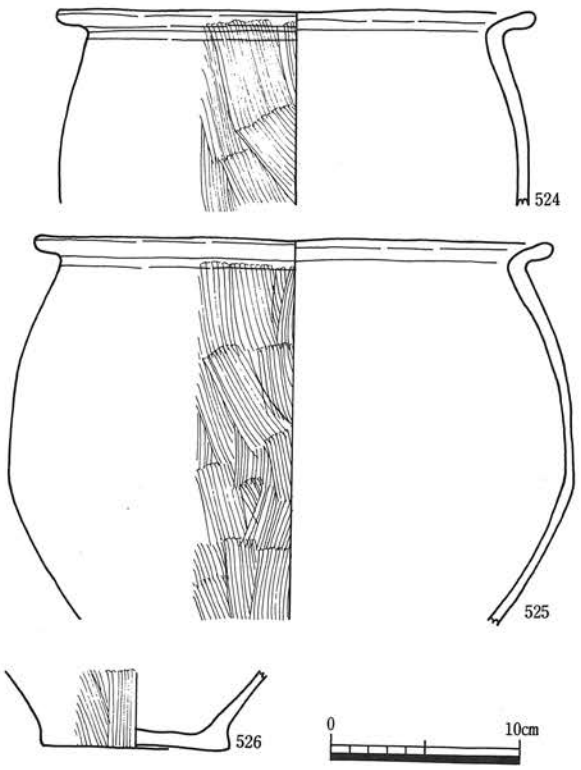


Fig.121　SD178出土遺物実測図（1/4）

SD178溝（Fig.63）

BY・BZ・CA－85・86区画に検出した。溝の両端は調査区外に展開する。直線的ではなく、北側でやや蛇行する。全長13m以上・溝幅0.6～1.1m・深さ0.1～0.3mをはかる。北から南にむかってなだらかに深く傾斜し、南側では二段掘の形状をなす。底面は浅い舟底状である。埋土は暗褐色土で、埋土中から少量の土器片が出土した。

SD178出土遺物（Fig.121）

524・525は、口縁部横ナデ調整、外面斜～縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整を施す。526は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。

8．その他の遺構と出土遺物

ＳＸ168不明遺構

（Fig.122）

CC-79・80区画に検出した。SB213・219・222と切り合い関係にあり、SX168が先行する。検出当初は竪穴住居かと思われたが、底面がそれらしくなかったので、不明遺構とした。南側は調査区外に展開する。平面形は不定形だが、隅丸長方形に近いかたちになるか。長軸4.3m・短軸3.4m以上・深さ2～6cm。底面で2個の小穴を検出した。埋土は砂混じりの暗褐色土。遺構の深さのわりには、かなりまとまった遺物が出土した。

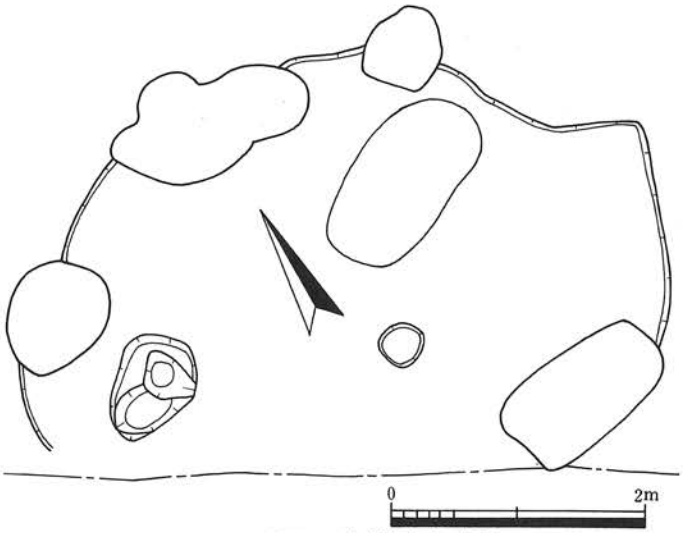


Fig.122　SX168実測図（1/60）

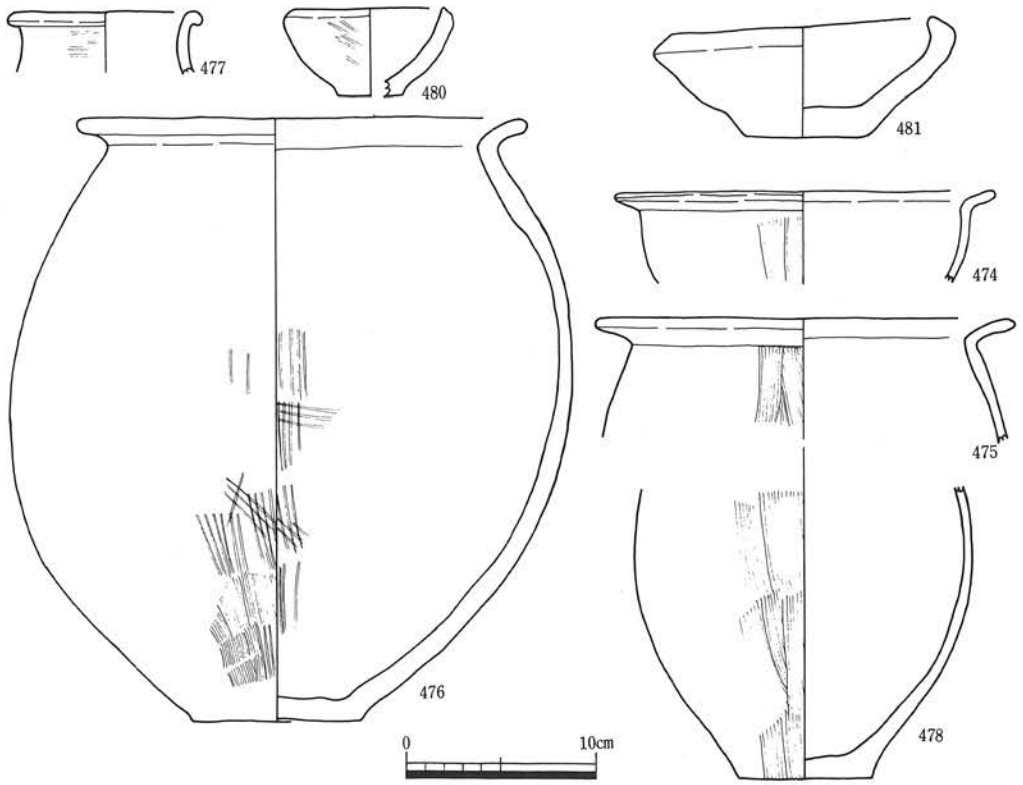


Fig.123　SX168出土遺物実測図（1/4）

ＳＸ168出土遺物（Fig.123）

7点を図示する。474は、口縁部横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。475は、口縁部横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目をナデ消している。476は、口縁部横ナデ調整、外面は縦～斜方向のハケ目をナデ消し、内面は上位横方向のハケ目で中位以下は斜方向のハケ目調整。477は、丹塗りを施してある。外面は横方向のヘラミガキ、内面は剝離のため調整不明。478は、外面縦方向のハケ目調整、内面ナデ調整。480は、外面斜方向のヘラミガキ、内面ナデ調整。481は、甕の底部を利用して、焼成前に鉢として転用したらしい。口縁端部横ナデ調整、内外面ナデ調整を施す。

9．その他の出土遺物

甕（Fig.124／450・469・487）　450は、外面はハケ目、内面はナデ。469は、口縁部はきつい横ナデ、外面はていねいなヘラミガキ、内面はナデで上位に指頭痕がある。487は、外面に不明瞭なミガキがはいる。

壷（Fig.124／290・295・306・353）　290・306は、内外面横方向のヘラミガキ。295は、内外面ヘラミガキ。353は、内外面横ナデ、下位にハケ目がはいる。

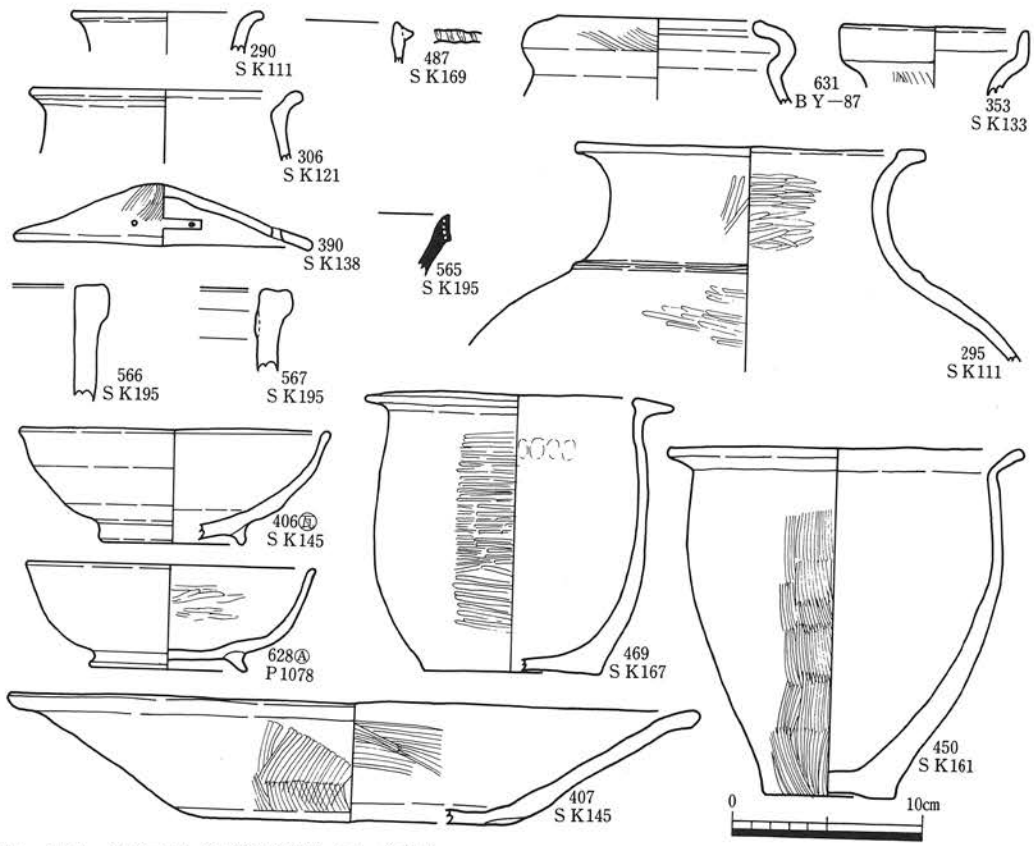


Fig.124　J２区出土遺物実測図１（1/4）

蓋（Fig.124／390）　ほぼ完形。対向位置に2対4個の穿孔をもつ。外面ハケ目、内面ナデを施す。

器台（Fig.124／631）　外面ハケ目、内面ナデ、受部端は横ナデ。

碗（Fig.124／406・628）　406は瓦器で、内外面ヘラミガキを施す。628は黒色土器A類で、内外面ヘラミガキを施す。

鉢（Fig.124／407・565）　407は土師器で、内外面にハケ目を施す。外底部にススが付着する。565は須恵器。内外面横ナデ調整。

鍋?（Fig.124／566・567）　ともに、胎土には多量の砂粒を含み、もろい。外面暗黄褐色、内面黒灰色。567は内面にゆるい突帯様のものをもつ。

瓦（Fig.125／568）　丸瓦と思われる。軟質の還元焔焼成である。裏面に布目圧痕を有する。

土製品（Fig.125／344・632）　344は土弾で、ほぼ完存。632は把手か。中空だが、貫通していない。

石製品（Fig.125／343・398・635）　343は石鎌か。残存状態は不良。398は磨石。2面に磨耗痕がある。635は石包丁。刃部を欠損する。立岩産か。

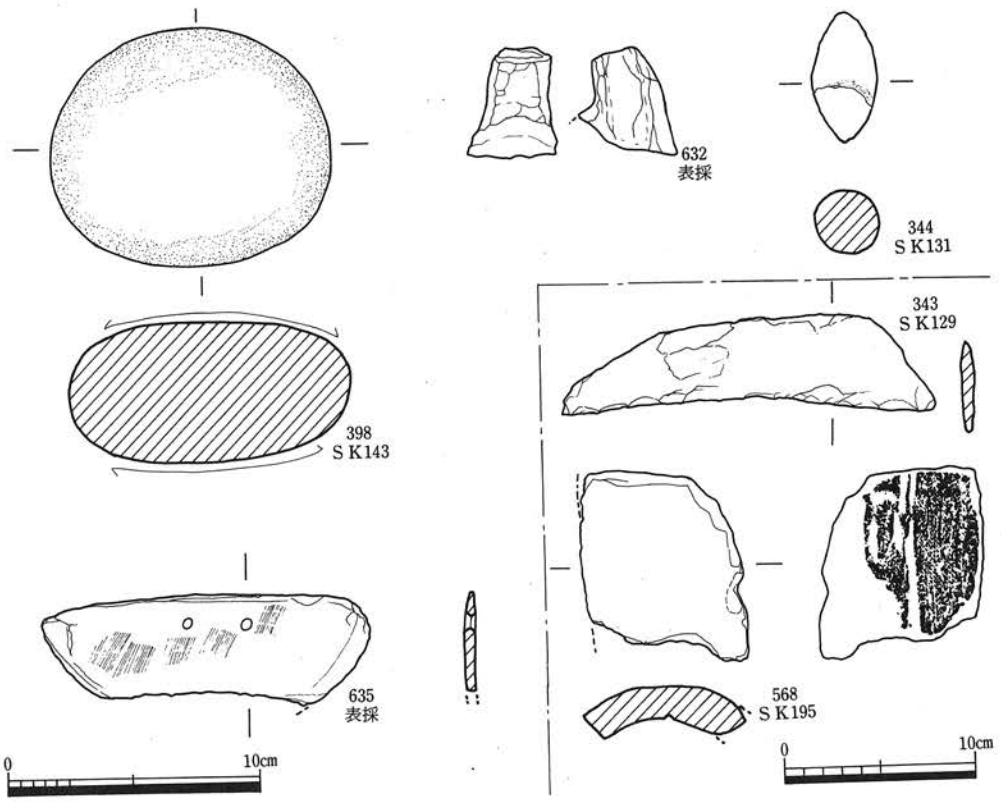


Fig.125　J 2 区出土遺物実測図（1/3・1/4）

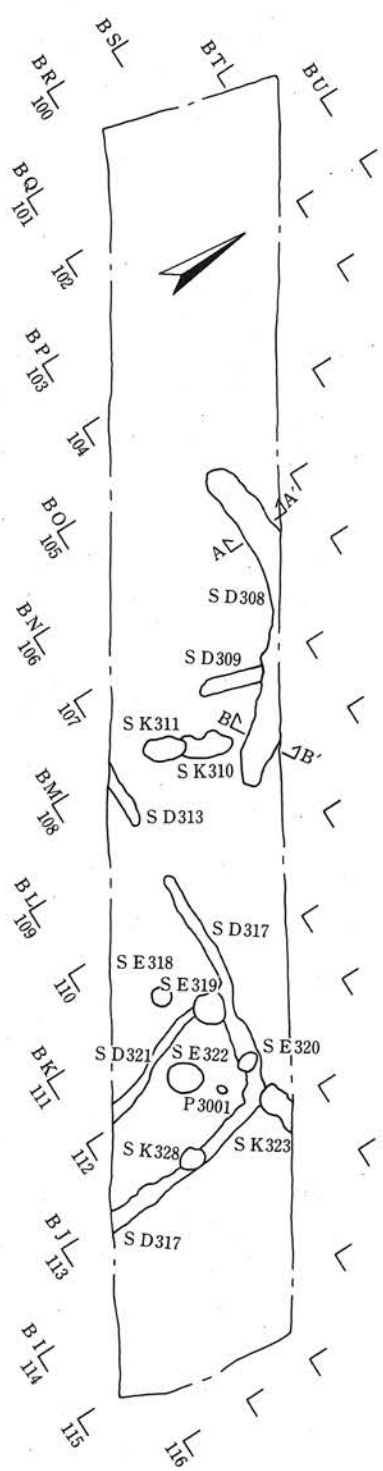


Fig.126　J3区主要遺構配置図(1/500)

VI. J 3 区の記録

1．遺構の分布状況

J 3 区では、全面に遺構が検出されている。西にむかって徐々に標高は低くなり、113ライン以東で谷地形に入り 2 枚の遺物包含層が堆積していた。

検出された遺構は、撹乱を除き、古代・中世に属している。遺物包含層IVb層は中世に属する溝に切り込まれ、遺物包含層のIVa層はその溝にかぶっていた。

主な検出遺構は、井戸・土壙・溝・土器埋納遺構である。井戸は、調査区東側にまとまっている。土壙は、調査区中央から東側にまばらに分布している。土壙の性格は、井戸の可能性があるもの・土器溜・性格不明のものがある。溝は、SD313・317が方形区画を形成しており、SD321もそれに伴う区画溝の可能性がある。土器埋納遺構と判断される小穴は、調査区東側で検出された。

2．井戸と出土遺物

S E 318井戸（Fig.128）

BL-110・111区画に検出した。検出面の標高は、6.5～6.6m. 他の遺構とは切り合い関係にはない。遺構の形状及び土層の堆積状態から、井戸と判断した。径1.2～1.3m・深さ0.9mをはかり、平面形は不整円形をなす。壁面はきつく立ち上がり、剝落によるためか、中位でやや外側にふくらむ。底面は、浅く二段掘りの形状を示し、最底部は平坦である。

埋土は、6 層に大別できる。⑥層は、いわゆる地山の混じり土で、壁面の崩落により堆積したものと判断する。①～⑤層は、その後に順次、自然堆積によって埋没していったものである。③及び⑤層から、完形に近い状態の土器破片が出土していて、埋没過程では、ゴミ捨て穴として利用され、土器片が投棄されていたのではないかと判断する。

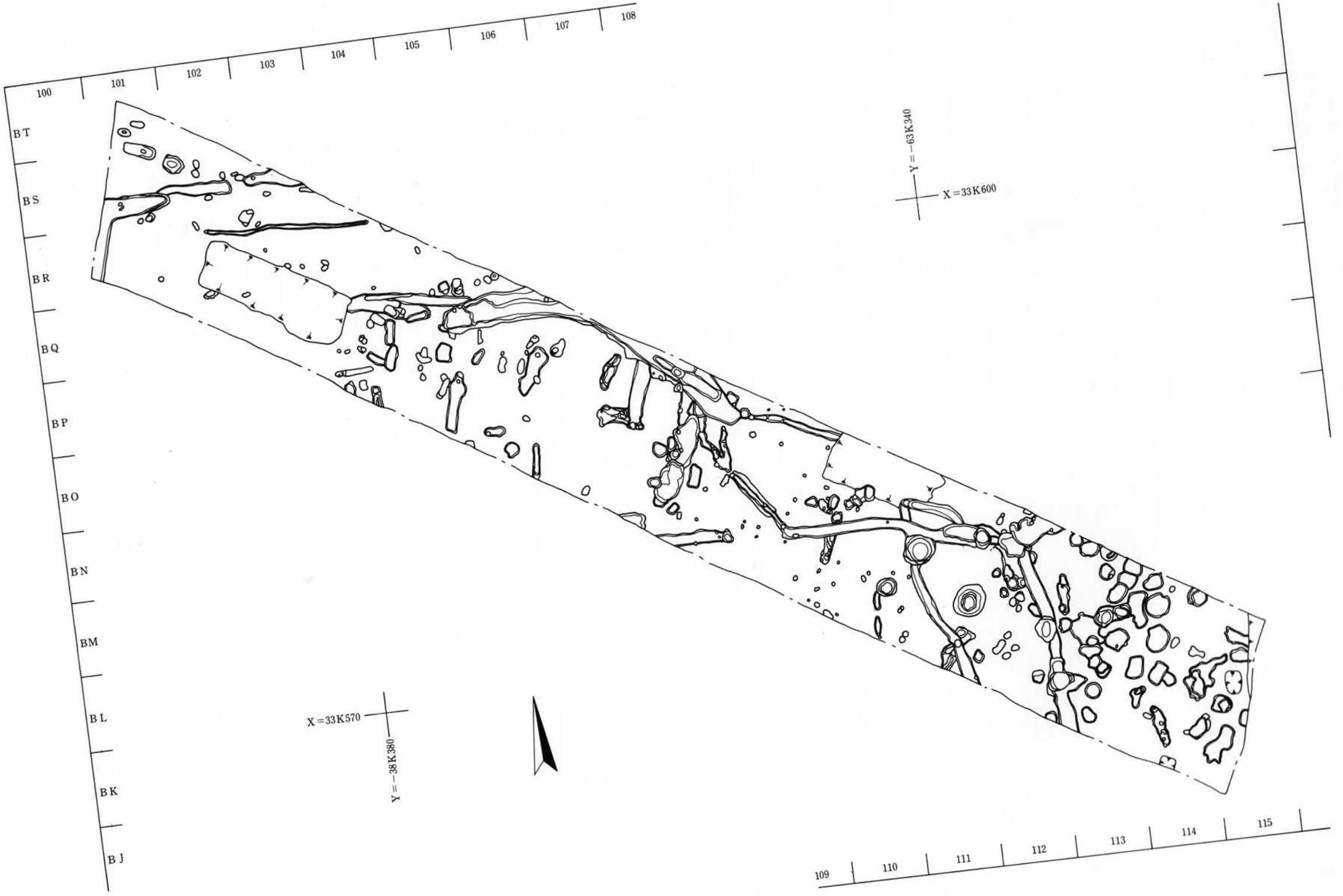


Fig.127　J 3 区遺構配置図（1/300）

ＳＥ318出土遺物(Fig.129)

17点を図示する。土師器・瓦器・白磁・石製品が出土している。

土師器小皿（695）　体部内外面は回転ナデ調整、内底部は多方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。

土師器坏（690～692）

690・691は、体部内外面回転ナデ調整。692は、体部外面回転ナデ調整、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。

瓦器小皿（701・702）

どちらも内外面横方向のヘラミガキ調整。701は外底部を回転ヘラ切り後ナデツケている。702は外底部にもヘラミガキを施してある。

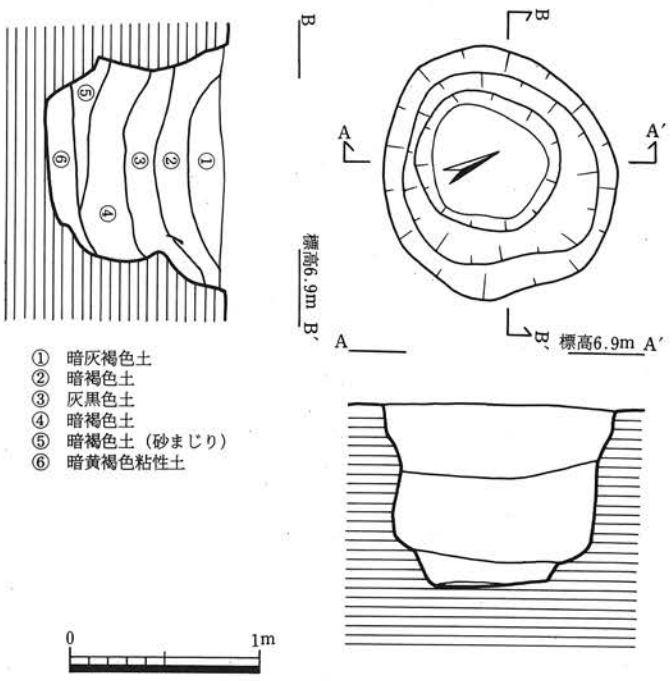


Fig.128　SE318実測図（1/40）

瓦器碗（698・699・703・708・709）　698は完形品。708は残存状況不良、調整不明。708以外には重ね焼きの痕跡が認められる。どれも内外面に横方向のていねいなヘラミガキを施している。703は、口縁端部がやや尖る。

白磁碗（694・697）　694は、高台外面の釉は掻きとってある。内底部に沈線がまわる。697は、玉縁の直下に沈線状のくぼみがまわる。

土師器鍋（693・700）　693は、欠損しているが、把手をもつ。特殊なもので類例を知らない。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は縦方向のハケ目の後縦方向のハケ目を施している。外面にススが付着する。700は、鍋Ⅰ類。口縁部は横ナデ調整、外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面は横ナデ調整。

石製品（706・707）　706は、滑石製の石鍋の破片を全面研磨して、楔状に加工している。707は滑石製石鍋破片。

ＳＥ319井戸（Fig.130）

BM-111区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SD317・SD321と切り合い関係にあり、SE319が後出する。遺構の形状及び土層の堆積状態から、井戸と判断した。径2.0～2.3m・深さ1.2mをはかり、不整円形の平面形を示す。壁面はきつく立ち上がり、断面は二段掘りの形状を

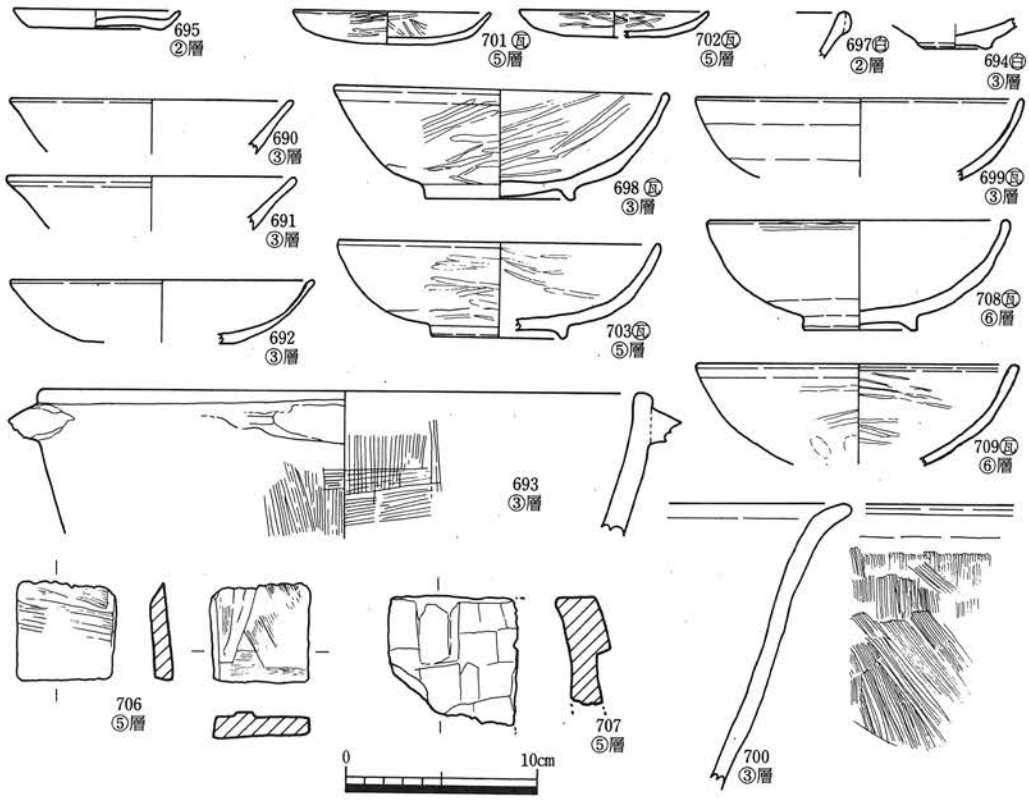


Fig.129　SE318出土遺物実測図（1/4）

示す。底部は浅いレンズ状をなす。

埋土は、12層に大別できた。①は暗灰褐色土、②・③は暗褐色土、④・⑤は暗褐色土、⑥は砂混じりの褐色土、⑦は砂混じりの暗黄褐色土、⑧は明黄褐色の粘性の混じり土、⑨は粘性の黒褐色土、⑩は砂混じりの暗褐色土、⑪は黄褐色砂質土である。⑩・⑪層は、いわゆる地山の混じり土で、壁面の崩落による堆積と思われる。②層は、上面から切り込んでいる、他の小穴の埋土である。⑧は人工的な埋土か。他の層は、順次、自然堆積によって形成されたものと判断でき、東側からの流れ込みにより埋没していったことを窺わせる。⑦及び⑧層上面の黒色土の薄いバンドは、埋没の過程である程度の期間、面が形成されたときに堆積した腐植土の堆積と思われる。遺物の取り上げは、①～⑥層を上層、⑦・⑧層を中層、⑨～⑪層を下層として行った。③～⑧層では、完存あるいは完形に近い土器資料が出土していて、埋没の過程のある時期では、ゴミ捨て穴として利用され、土器片が投棄されたものと判断する。

ＳＥ319出土遺物（Fig.131）

22点を図示する。土師器・須恵器・瓦器・白磁・石製品が出土している。

土師器皿（711・713～715・729）　711・713は、完存品。711は、内外面回転ナデ調整、外底部には回転糸切り痕。713は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部に

は回転ヘラ切りの後板状圧痕。714は、体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部はナデを施している。729は、内外面回転ナデ調整を施す。

土師器坏（724・730）　ともに赤塗りされている。内外面回転ナデ調整、外底部にはナデを加えている。730は、内外面回転ナデ調整を施す。

土師器碗（712・716）　ともに内外面をていねいにヘラミガキしてある。712は外面下位に型押し時の指頭痕が観察できる。

土師器鍋?（725）　口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜方向のヘラ削り。

土師器甕（731）　口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜方向のヘラ削り。

須恵器鉢（719）　東播系の捏鉢である。

瓦器碗（717・718・726～728）　726は完形に近い。どれも、重ね焼きの痕跡があり、内外面にヘラミガキを施している。717は、外底部は回転ナデで、高台端部に板目圧痕がある。

白磁碗（720～722）　720は、外面下位は施釉されていない。721は、口縁下部に小さな突帯状のものがある。722は、高台と内底部上位は施釉されていない。

石製品（723・732）　723は、おそらく滑石製石鍋の把手部分を転用して、ていねいに全面研磨してバレン状に成形している。732は滑石製石鍋の底部破片。

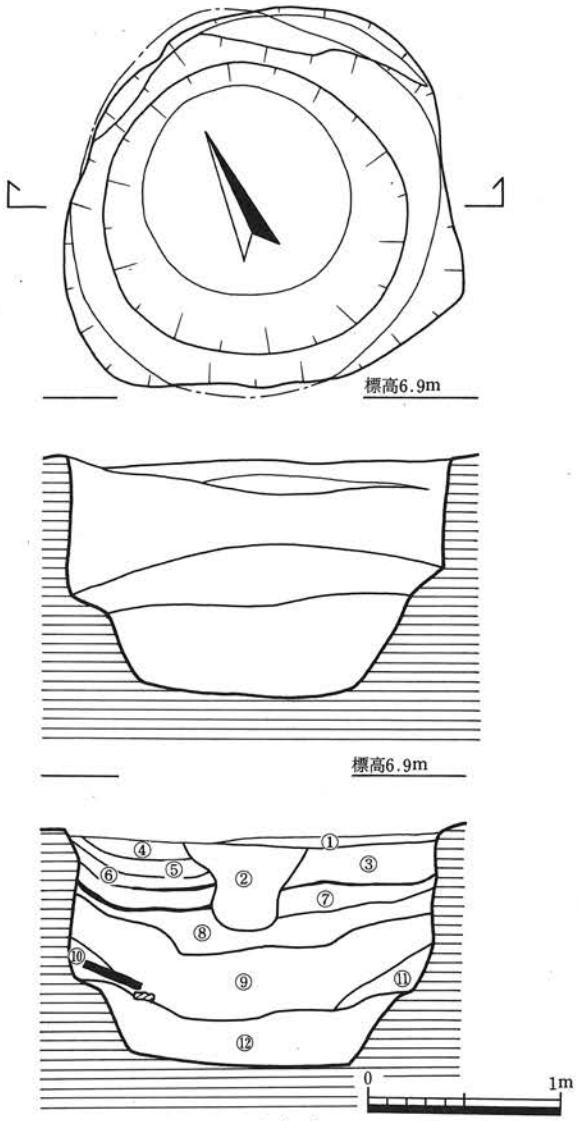


Fig.130　SE319実測図（1/40）

SE320井戸（Fig.132）

BM-112区画に検出した。検出面の標高は、6.6m前後。SD317と切り合い関係にあり、SE320が後出する。遺構の形状及び土層の堆積状態から、井戸と判断した。長径1.4m・短径1.1m・深さ1.1mをはかり、平面形は不整な短楕円形をなす。断面形は、下部で浅い二段掘りの形状を示す。壁面はきつく立ち上がるが、剝落のためか、下部で外側にややえぐれている。底面は平坦である。

埋土は、7層に大別できた。⑤及び⑦層は、いわゆる地山との混じり土で、⑤層は壁面の崩落土と思われる。①～⑥層は、順次、自然堆積によって形成されたものと判断できる。④及び⑥層では、完存・完形に近いか大破片の土器資料が多く出土し、これらの層位の堆積時期には、ゴミ捨て穴として利用され、土器片が投棄されたものと判断する。

SE320出土遺物（Fig.133・134）

25点を図示する。土師器・黒色土器A類・黒色土器B類が出土している。

土師器皿（Fig.133／733・734・743・744）　733・734・743は、小皿。どれも、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転ヘラ切り後板目圧痕がある。744は、

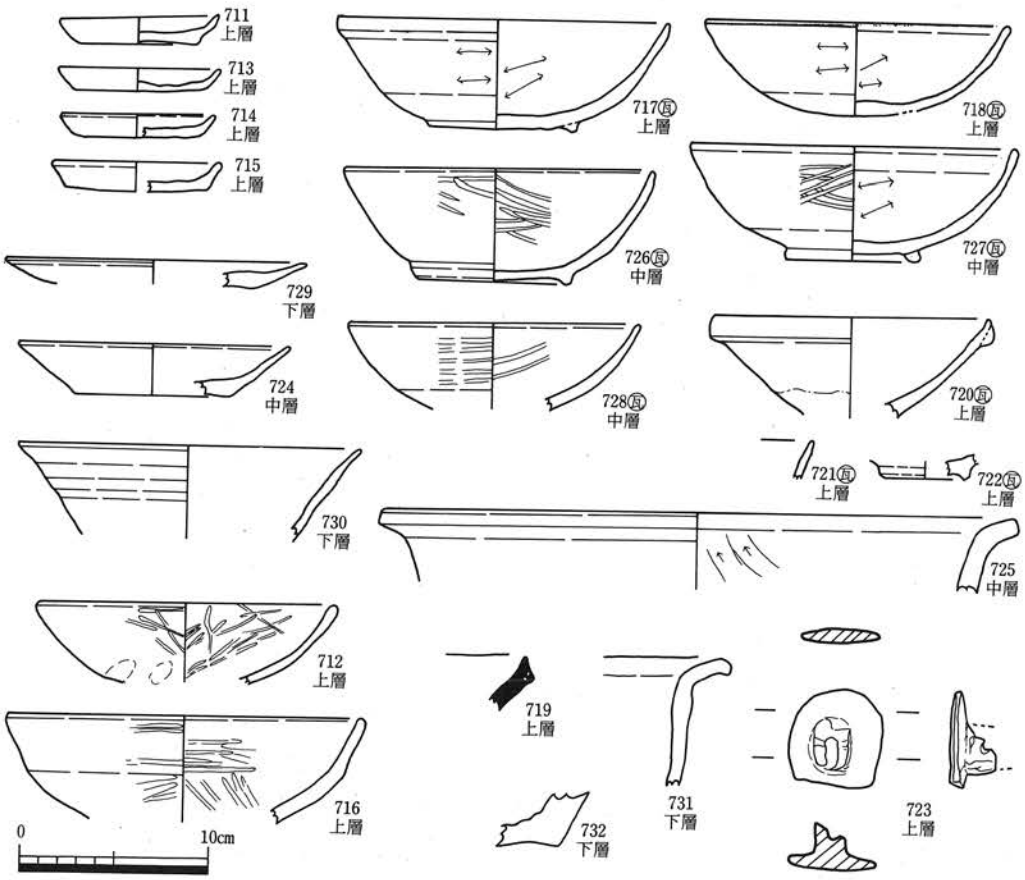


Fig.131　SE319出土遺物実測図（1/4）

内外面は回転ナデ調整。

土師器坏（Fig.133／735～740・742・748～752）　735～740・748～750はどれも、体部内外面回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転ヘラ切りで板目圧痕があるものが多い。742は、外面は回転ナデ調整、内面はヘラミガキを施し、外底部は回転ヘラ切り後ていねいにナデを加えている。751・752は、外面は回転ナデ調整、内面はヘラミガキを施す。外底部は、751が回転ヘラ切り後ナデツケ、752がナデを加えている。

土師器壷?（Fig.133／753）　底部破片。内外面ナデ調整。内面一部に黒斑が認められる。

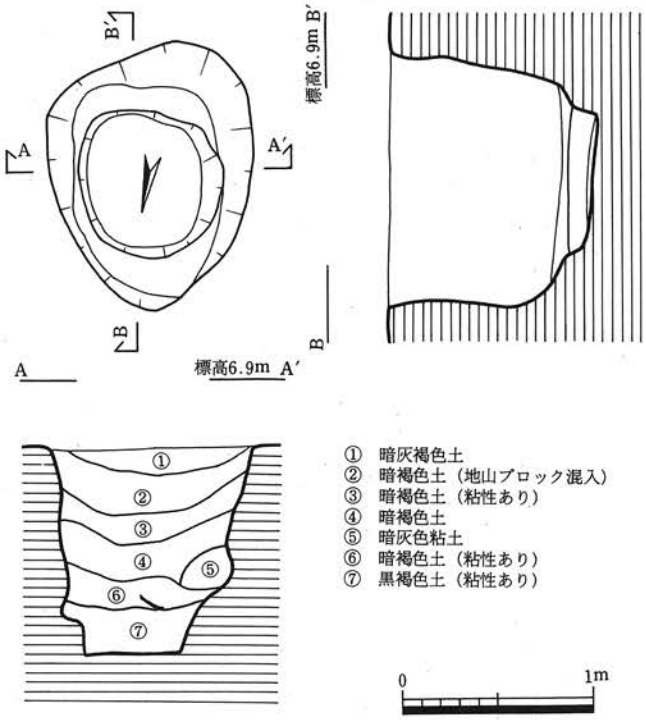


Fig.132　SE320実測図（1/40）

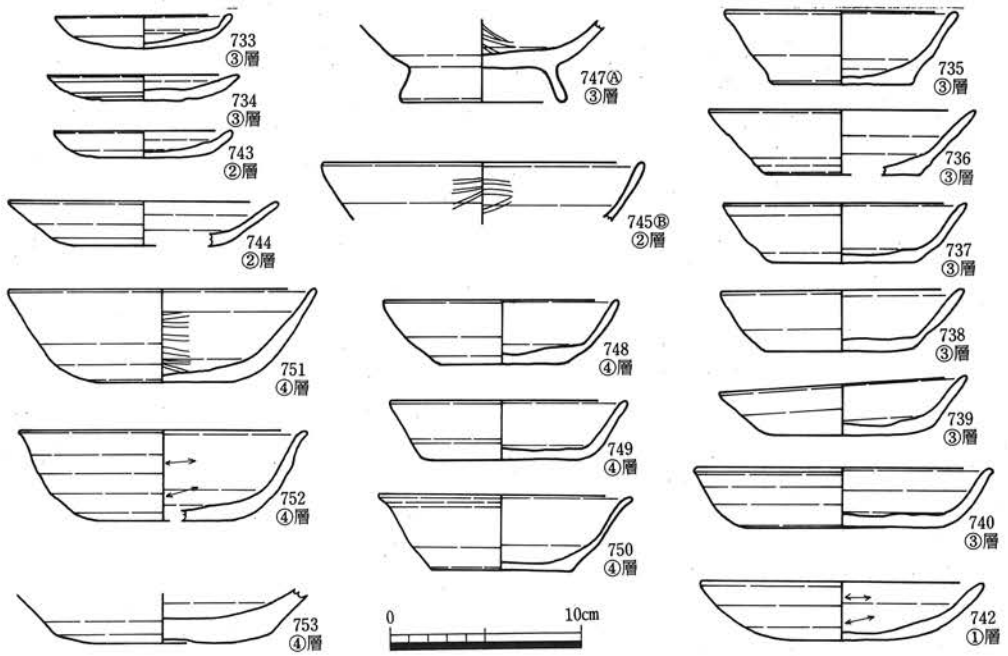


Fig.133　SE320出土遺物実測図1（1/4）

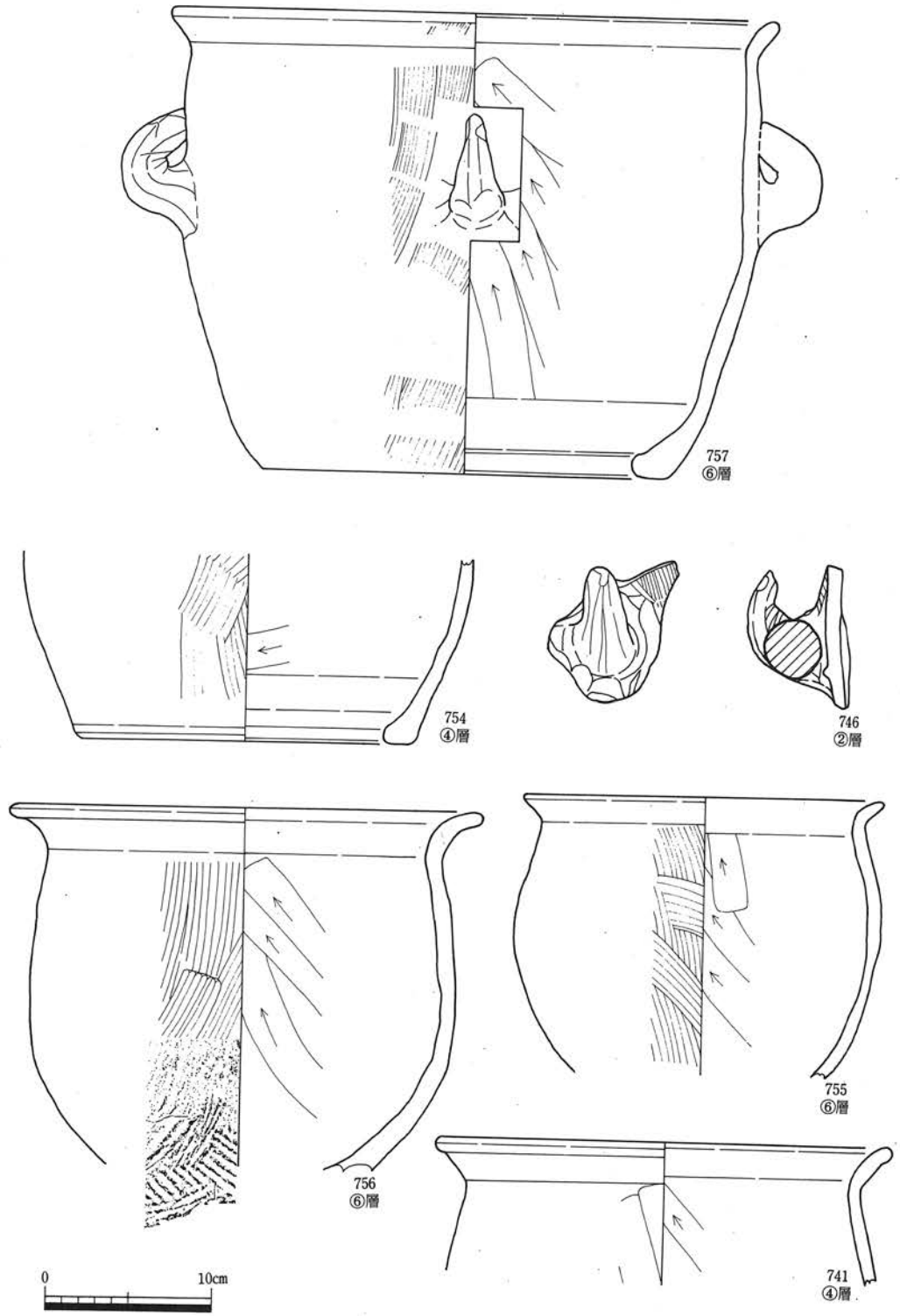


Fig.134　SE320出土遺物実測図2　(1/4)

土師器甕（Fig.134／741・755・756）　どれも、口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目調整、内面は斜方向の削りを施している。756は、目の粗い平行タタキ目の後にハケ目を施していて、外面下位にはタタキ目がそのまま残っている。

土師器甑（Fig.134／746・754・757）　746は把手破片。757は、口縁部は外面ハケ目の後に横ナデ調整、外面は斜方向のハケ目を部分的にナデ消し、内面は斜方向の削りを施している。757は、外面は斜方向のハケ目調整、内面は横方向の削りを施している。

黒色土器A類碗（Fig.133／747）　外面は回転ナデ調整、内面はていねいにヘラミガキを施している。

黒色土器B類碗（Fig.133／745）　内外面にていねいにヘラミガキを施している。

ＳＥ322井戸（Fig.135）

BL-111・112区画に検出した。検出面の標高は、6.4～6.6m。他の遺構とは切り合い関係にはない。遺構の形状及び土層の堆積状態から、井戸と判断した。径1.9～2.2m・深さ1.7mをはかり、不整円形の平面形をなす。断面形はやや不整な二段掘りの形状を示し、壁面は、上部でや

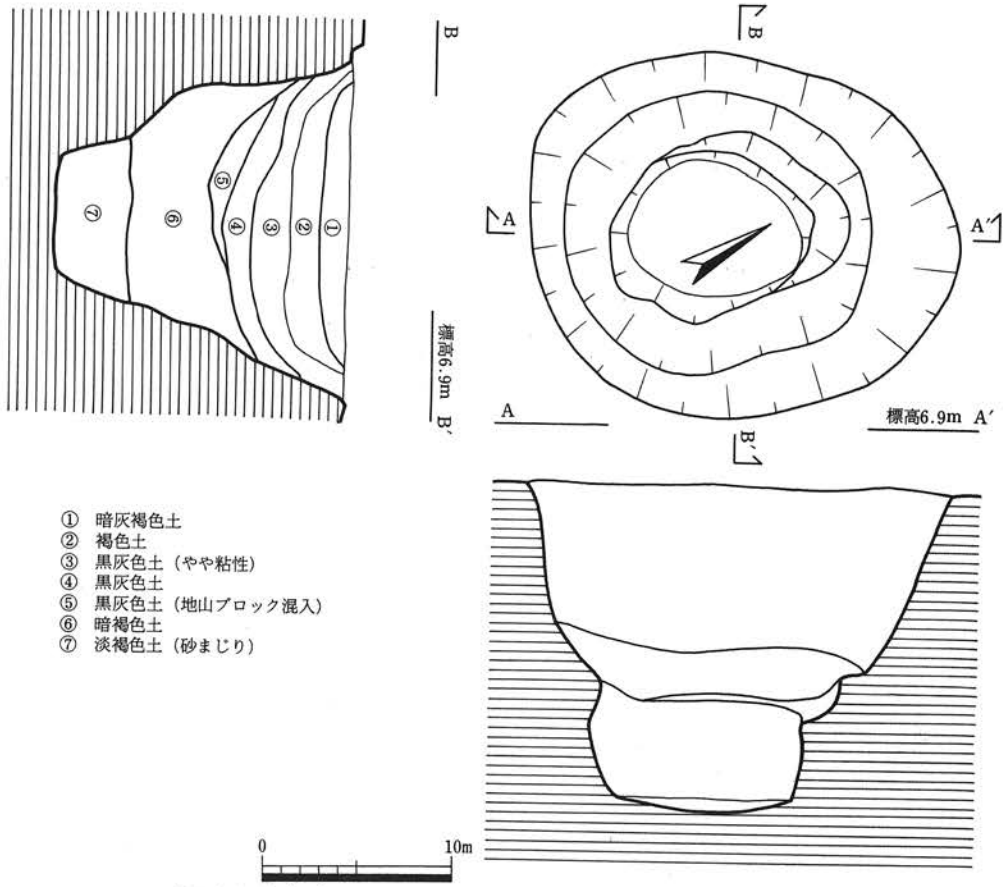


Fig.135　SE322実測図（1/40）

やゆるく立ち上がり、下部ではきつく立ち上がる。壁面の崩落のためか、立ち上がりは不整なラインを示す。底部は浅いレンズ状をなす。

埋土は、7層に大別できた。⑦層以外は、西側から流れ込んだ自然堆積の状況を示していた。③及び⑤層では、完存・完形に近い土器資料が多く出土し、これらの層位の堆積時期に一括投棄が行われたものと判断する。底面近くからは、木製の櫛（805）が出土している。

ＳＥ322出土遺物（Fig.136）

土師器・黒色土器・瓦器・白磁・木製品が出土した。27点を図示する。

土師器小皿（768～774・782・783・799・801）　どれも完形か完存に近い。回転ヘラ切り底で、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整を施す。内底部へのナデのためか、底部が押し出され、丸味を帯びているものが多い。

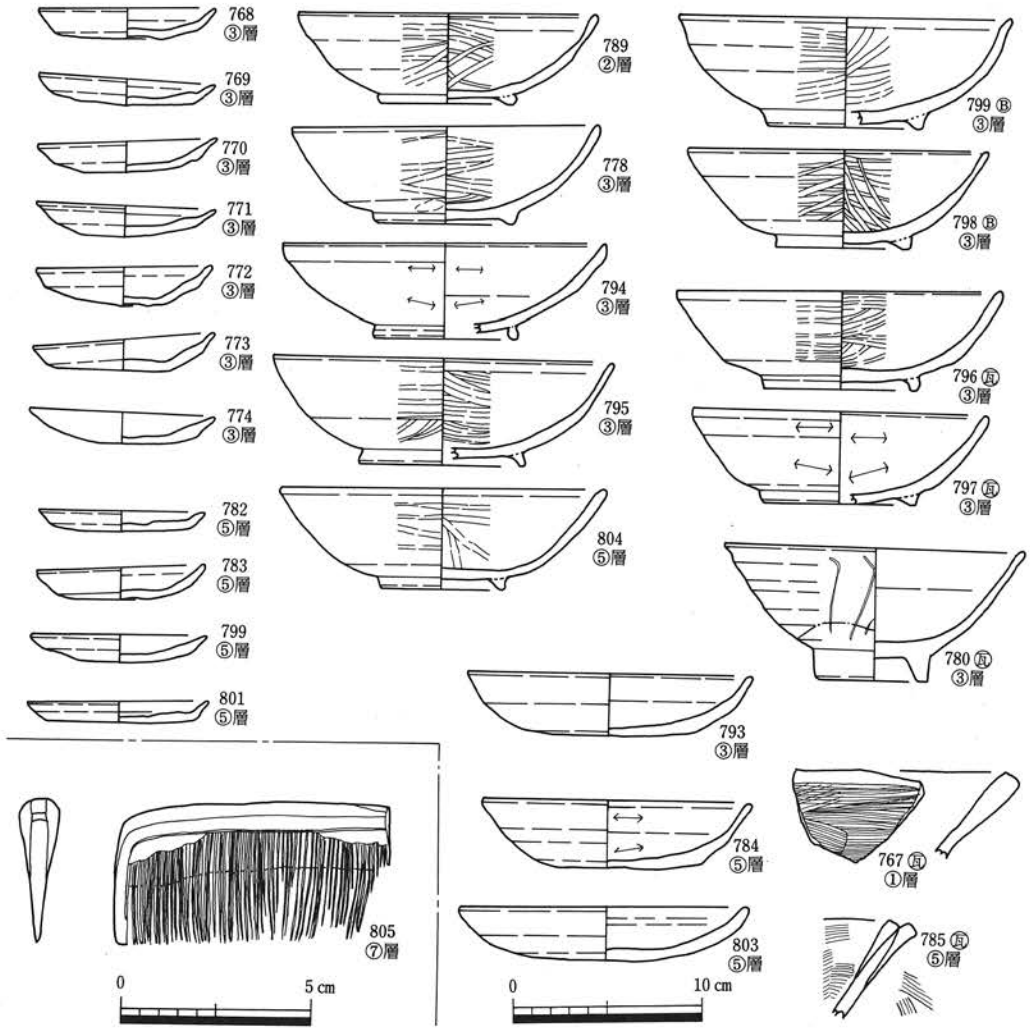


Fig.136　SE322出土遺物実測図（1/4・1/2）

土師器坏（784・793・803）　784は、体部外面は回転ナデ調整、内面はヘラミガキ、外底部はナデ調整を施す。793は、体部外面は回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整、外底部はナデ調整を施す。803は、体部外面は回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。

土師器碗（778・789・794・795・804）　どれも内外面はヘラミガキを施し、明黄褐色を呈する。778は外面下位に指頭痕が認められる。795は外面上位に回転ヘラミガキを施す。

黒色土器B類碗（779・798）　779は、外面上位は回転ヘラミガキ、外面下位と内面はヘラミガキ。798は内外面ヘラミガキを施す。

瓦器碗（796・797）　ともに内外面はヘラミガキを施し、796は外面上位に回転ヘラミガキを加えている。

瓦器鉢（767・785）　どちらも片口部の分を有する。767は、外面横ナデ調整、内面横方向のハケ目調整。785は、外面斜方向のハケ目調整、内面横方向のハケ目調整を施す。

白磁碗（780）　外面下位から高台にかけては施釉されていない。外面に3本単位で線刻文が施され、内面中位には線刻による沈線がまわっている。

木製品（805）　櫛の欠損品である。残存状態は良好。

3．土壙と出土遺物

(1) 井戸の可能性がある土壙

SK328土壙（Fig.137）

BL-112・113区画に検出した。検出面の標高は、6.1～6.2m。SD317と切り合い関係にあり、SK328が後出する。長径1.7m・短径1.4m・深さ0.8mをはかり、平面形は不整楕円形をなす。壁面はきつく立ち上がり、底面はゆるい舟底状をなす。埋土は、4層に大別できる。堆積は、地形の傾斜に沿ったかたちで、西側から流れ込んだ状況を示し、自然堆積により埋没したものと判断する。埋土の下部から、若干の土器資料と木製品が出土

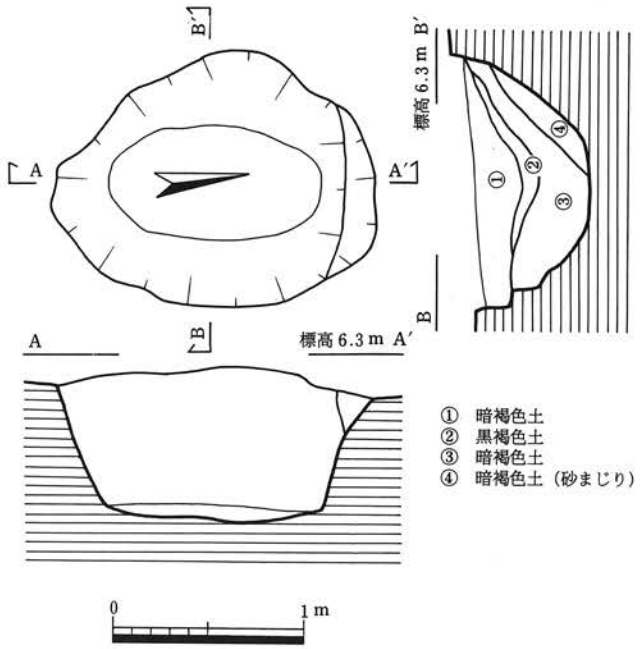


Fig.137　SK328実測図（1/40）

している。

SK328出土遺物（Fig.138）

土師器・瓦器・木製品が出土している。5点を図示する。830・831は土師器。830は、体部内外面と内底部は回転ナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後ナデを加えている。831は、内外面にヘラミガキを施す。832は、瓦器でほぼ完存。内外面にヘラミガキを施し、外面下位はナデ調整で指頭痕が認められる。口縁部内外面に環状黒斑がある。834・835は木製品で、ともに残存状況は悪い。834は、容器類と思われるが器種不明。835は杓の先端部の可能性がある。

(2) 土器溜の土壙

SK323土壙（Fig.139）

BM-112・113区画に検出した。4個の小穴に上面から切り込まれている。検出面の標高は、6.5～6.6m。平面形は不整な隅丸長方形に近い形をなし、長軸2.5m以上・短軸1.3～1.8m・深さ0.2～0.3mをはかる。壁面はややきつく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土で、自然堆積の状況を示した。埋土中から比較的多量の遺物が出土した。埋没過程での一括投棄によるものと判断する。

SK323出土遺物（Fig.140）

土師器・黒色土器が出土した。14点を図示する。

土師器坏（806～813）　809・811は完形に近い。どれも、回転ヘラ切り底で、板目圧痕を

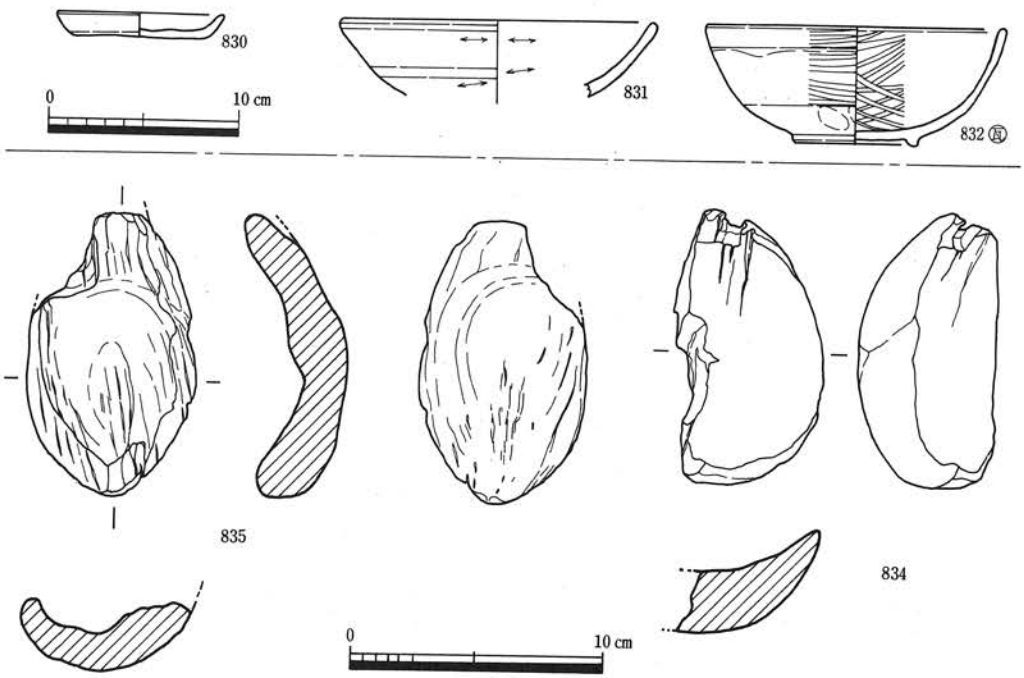


Fig.138　SK328出土遺物実測図（1/4・1/3）

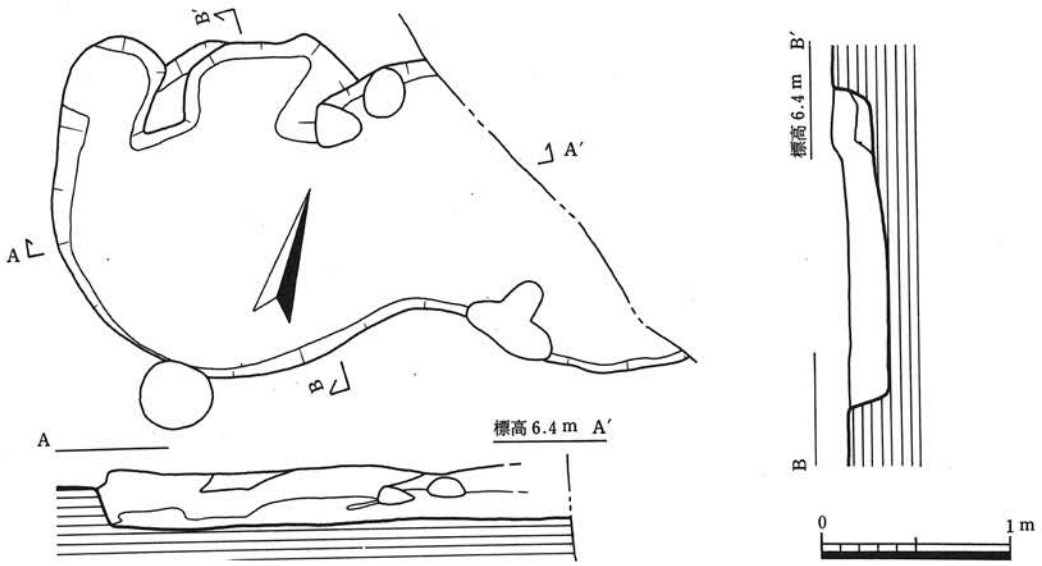


Fig.139　SK323実測図（1/40）

有する。体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整を施す。

土師器碗（815）　ほぼ完形。外面から高台は回転ナデ調整、内面はヘラミガキを施す。

土師器坩（819）　ほぼ完存で、外面は横ナデ調整。

土師器鉢（821）　内外面横ナデ調整を施す。

黒色土器A類碗（816～818）　816は完形に近い。外面はヘラミガキ、内面は調整不明、高

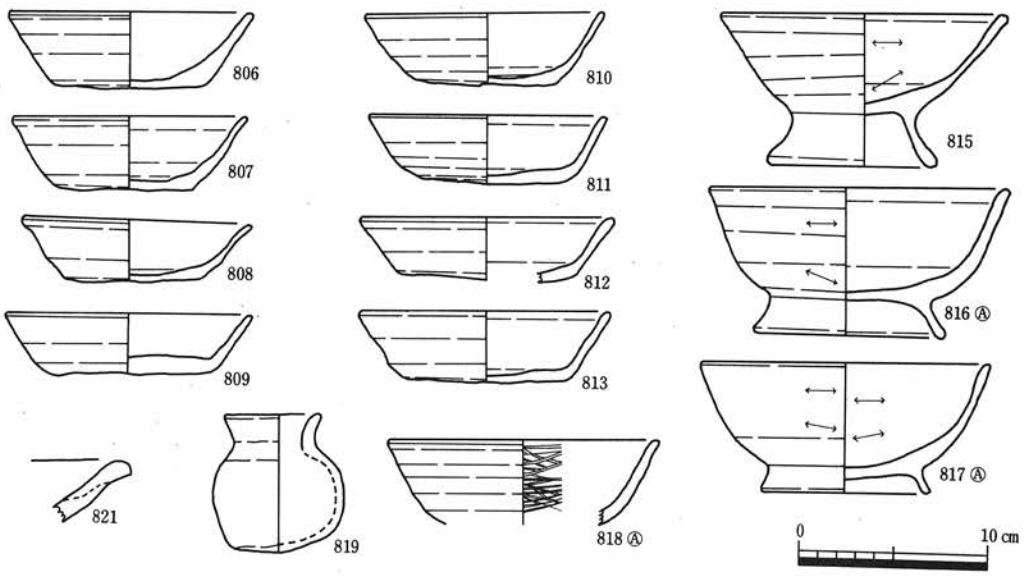


Fig.140　SK323出土遺物実測図（1/4）

台部は回転ナデ調整。817は、内外面ヘラミガキ、高台部は回転ナデ。818は、外面は回転ナデ調整、内面はていねいなヘラミガキを施す。

(3) 性格不明の土壙

SK310土壙（Fig.141）

BN・BO-108区画に検出した。SK311と直接の切り合い関係にあり、SK310が先行する。西側側辺を2個の小穴に切り込まれている。長軸3.7m・短軸1.0～1.6m・深さ0.3mをはかり、不定形な平面形をなす。壁面はややゆるく立ち上がり、底面は不整形な舟底状で、西側がやや深い。埋土は3層に大別でき、自然堆積によって埋没したものと判断する。出土遺物は、破片状態で出土し、流れ込みの状態を示す。

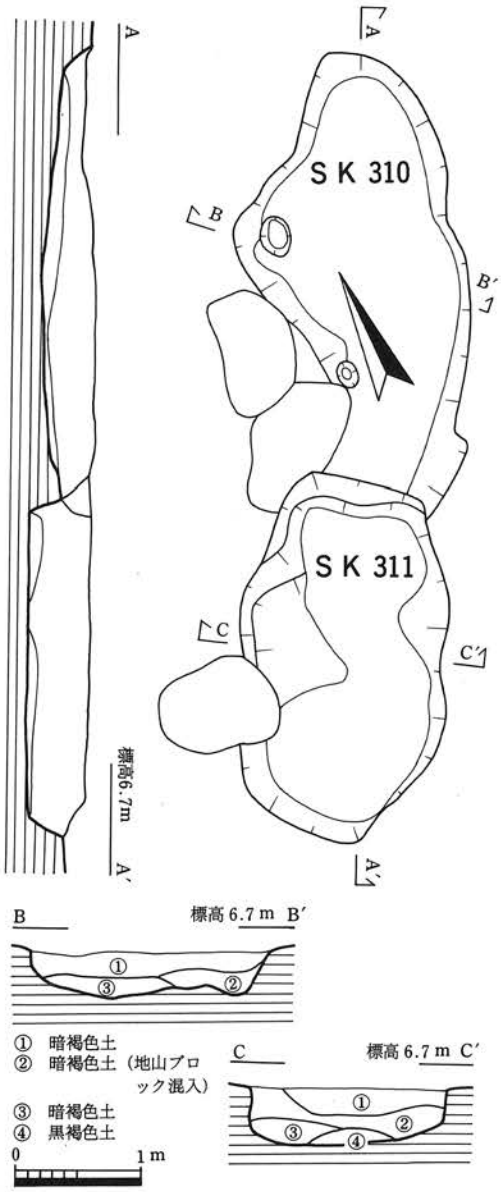


Fig.141 SK310・311実測図（1/60）

SK310出土遺物（Fig.142／649～655）

7点が図示できる。土師器・瓦器・青磁・白磁・陶器・土製品がある。649は、土鈴破片で、鈕に小さな穿孔がある。650は、土師器小皿。体部内外面回転ナデ、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転糸切り後に板目圧痕。651は、瓦器碗。内外面ヘラミガキ、外底部は回転ナデ。重ね焼きの痕跡がある。652・654は青磁。654は、外面は施釉されていない。内面見込に沈線がまわる。653は、白磁。玉縁下部に突帯状の段ができている。655は、陶器で四耳壺破片。口縁端部は欠失する。暗赤褐色を呈し、内外面横ナデ。把手を接着する前に沈線を施してある。

SK311土壙（Fig.141）

BN-108区画に検出した。SK310と直接の切り合い関係にあり、SK311が後出する。西側側辺を1個の小穴に切り込まれている。長軸2.8m・短軸1.6m・深さ0.4mをはかり、平面形は不整形な隅丸長方形をなす。壁面はきつく立ち上がり、底面はゆるい舟底状を示す。埋土は4層に大別でき、自然堆積によって埋没したものと判断する。出土遺物は、細片状態で出土し、流れ込みの状況を示す。

ＳＫ311出土遺物（Fig.142／656～663）

8点が図化できた。土師器・瓦器・土製品・石製品がある。656～660は土師器。656～658は、内外面回転ナデ、内底部はナデ。656・657は回転糸切り底。659は体部内外面回転ナデ、内底部は多方向のナデ、外底部は回転糸切り底。660は、器壁磨耗のため調整不明。661は土製品。外面は赤塗りが施されている。662は、瓦器碗。内底部はヘラミガキ。663は砥石。2面に使用痕がある。

4．溝と出土遺物

方形区画溝（Fig.143）

調査区中央から東側で検出した。SD313とSD317で形成される。西側と南側は調査区外に展開する。SD317は遺物包含層のIVb層を切り込み、溝が埋没した後に遺物包含層のIVa層が堆積している。SE319・320・SK328と切り合い関係にあり、SD317が先行する。SD321との切り合い関係は判然としなかった。SD321は方形区画内のなんらかの施設であった可能性がある。

SD313とSD317の間には陸橋部が形成されている。東西24m以上・南北13m以上・深さ0.1～0.4mをはかり、西へむかうほど削平が激しい。壁面はゆるく立ち上がり、底面は浅い舟底状をなす。東側の南北方向の部分は、谷地形の落ちのラインに沿っている。

埋土は、西側の残りの良い部分では3層に大別できた。どれも自然堆積によるものと判断する。埋土中からは土師器・黒色土器・瓦器・白磁が出土している。破片資料が多く、埋没する過程の流れ込みによるものか、溝を掘削した時にIVb層から混入したものと判断できる。SD317出土遺物の大部分は、東側の南北溝の部分で出土した。

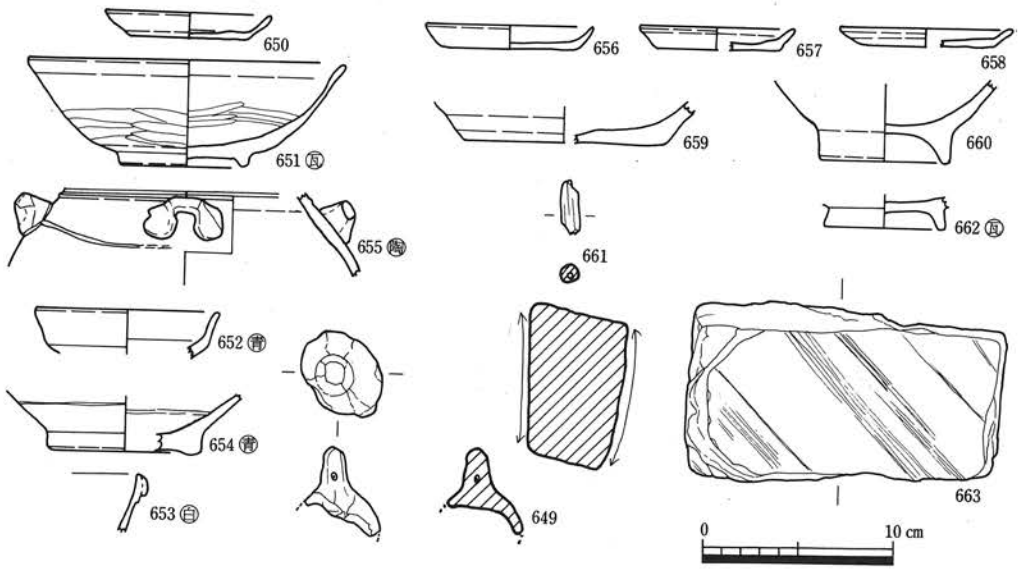


Fig.142　SK310・311出土遺物実測図（1/4）

SD313出土遺物（Fig.144／664・665）

664は土師器鉢の底部破片と思われる。外面は横ナデ調整、内面はナデ調整。665は瓦器碗。器壁磨耗のため調整不明。

SD317出土遺物（Fig.144／667～672・674～686・688・689）

土師器小皿（667・668・679・680・684）　667・679・680・684は、体部内外面回転ナデ、内底部はナデ、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。667は、口縁端部に沈線状の小さなくぼみがまわり、内面には赤塗りの痕跡がある。668は、回転糸切り底で、内外面回転ナデ。

土師器坏（669・685・689）　669は、体部内外面回転ナデ、内底部は多方向のナデ、外底部は回転ヘラ切り後に板目圧痕。685は、外面回転ナデ、内面ヘラミガキ、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。外面下位には型押しの時の指頭痕が観察できる。689は、内外面回転ナデ、外底部には板目圧痕が認められる。

土師器碗（670・671・676～678・682）　670は、高台を欠失する。外面回転ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。671は、外面回転ナデ、内面横方向のヘラミガキ。676は、器壁耗のため調整不明。赤塗りの痕跡がある。677は、高台を欠失する。器壁磨耗のため調整不明。678は、外面回転ナデ、内底部は多方向のナデ。682は、内外面ヘラミガキを施す。

土師器甕（688）　脚付の甕の脚部分である。

土師器甑（686）　外面方向のヘラ削り、内面はヘラ削りの後ナデを施す。

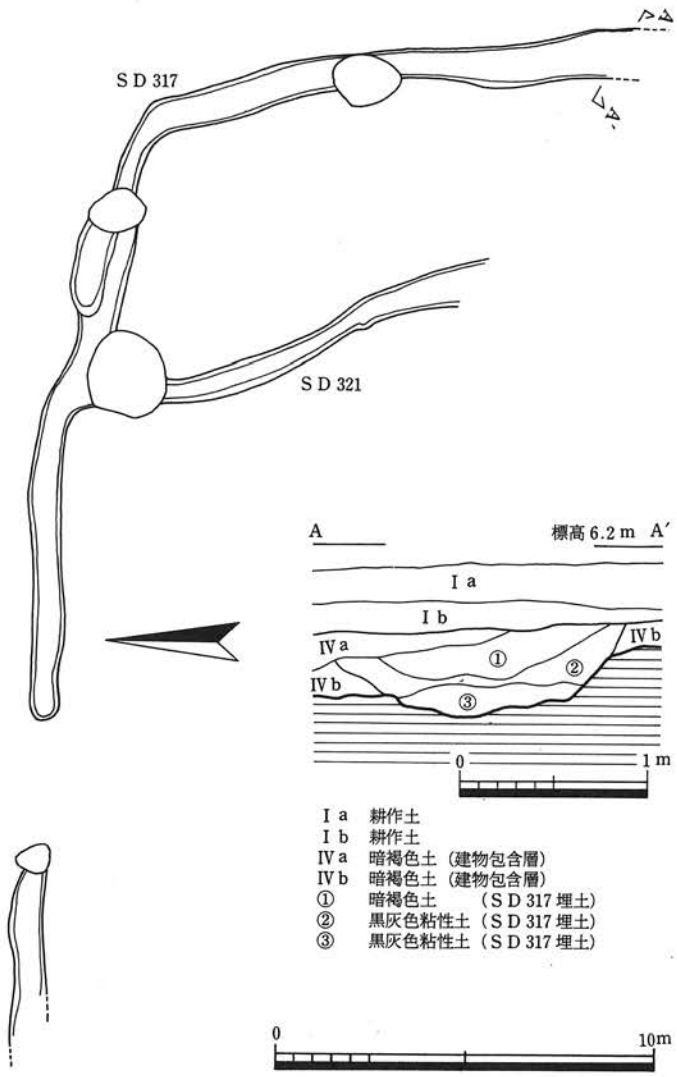


Fig.143　方形区画溝実測図（1/200・1/40）

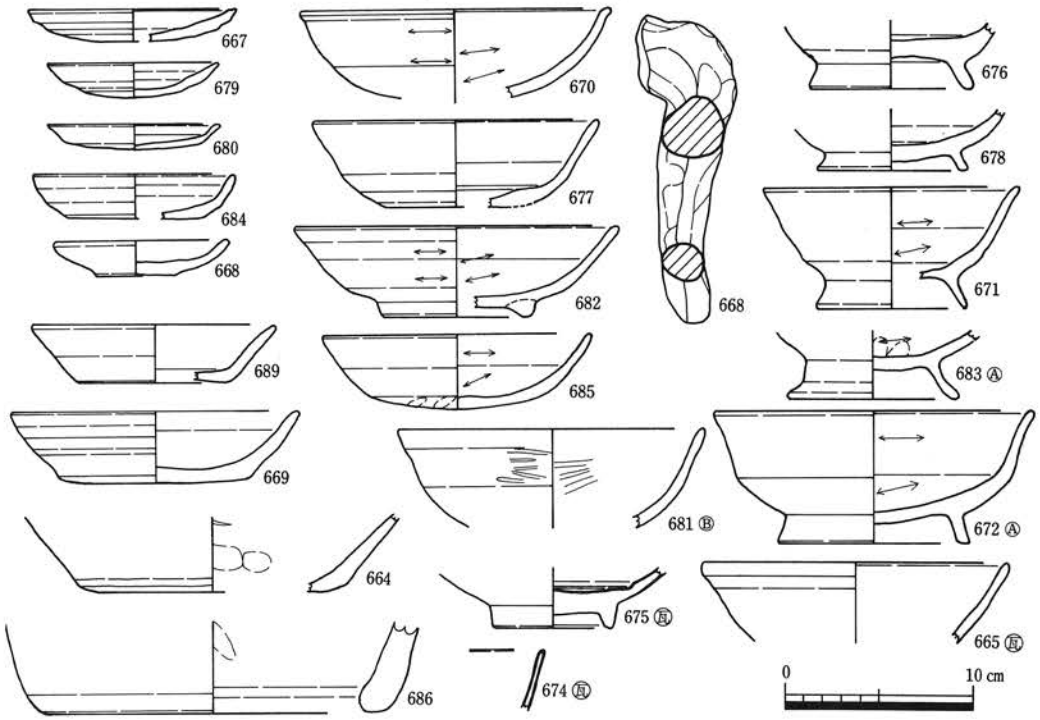


Fig.144　方形区画溝出土遺物実測図（1/4）

黒色土器A類（672・683）　外面回転ナデ、内面はヘラミガキを施す。672は外面に赤塗りの痕跡がある。

黒色土器B類（681）　内外面にヘラミガキを施している。

白磁（674・675）　674は細かい貫入が入る。675は、高台と外面下位は施釉しておらず、内面見込に沈線がまわる。

ＳＤ308溝状遺構（Fig.145）

調査区中央北側で検出した。北側は調査区外に展開する。SD309と切り合い関係にあり、SD308が後出する。三日月状に屈曲した溝状の遺構で、全長21m・溝幅2m程度・深さ0.4～0.5mをはかる。壁面はゆるく立ち上がる。東側では二段掘の断面形をなす。

埋土は自然堆積の状況を示し、北側から埋没していったことを窺わせる。埋土中から土師器・瓦器・須恵器が出土しているが、どれも破片資料で、

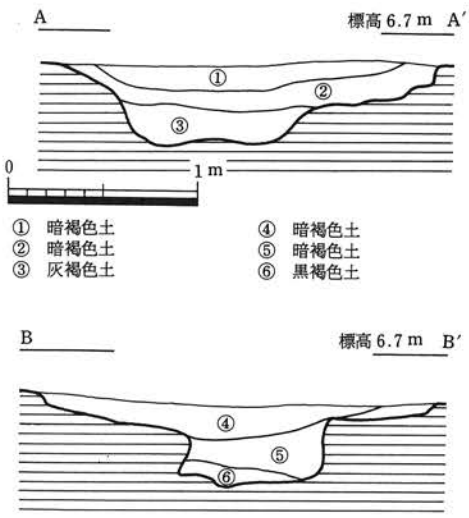
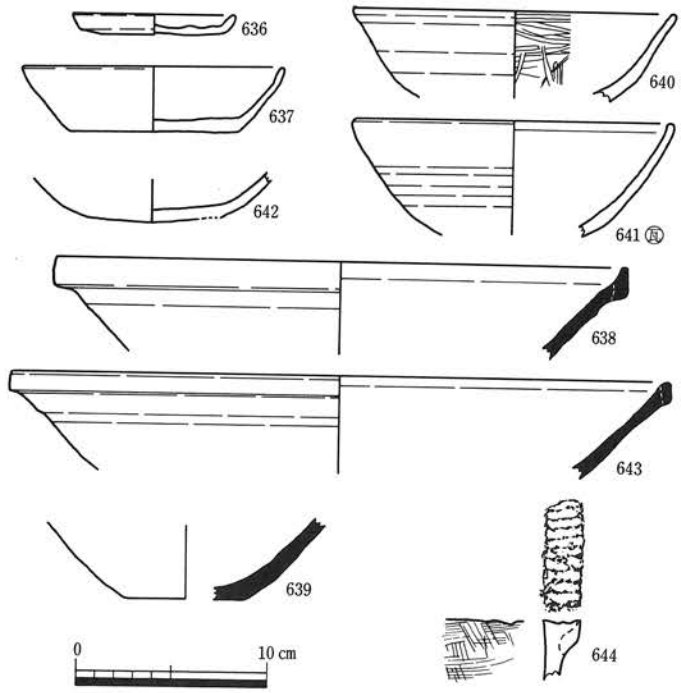


Fig.145　SD308土層断面図（1/40）



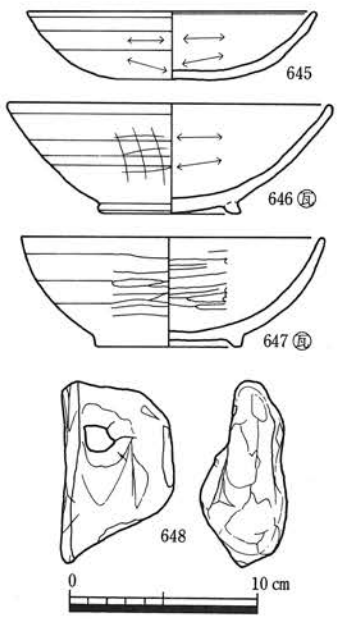
流れ込みによるものと判断する。

SD308出土遺物(Fig.146)

土師器(636・637・640・644) 636は、内外面・内底部は回転ナデ、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケ。637は、内外面回転ナデ、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転糸切り後に板目圧痕。640は、外面は回転ヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。644は、鍋II類。外面は横ナデ、内面は縦横のハケ目。口縁上端は縄の様なものを押圧している。

Fig.146 SD308出土遺物実測図 (1/4)

瓦器 (641・642) どちらも重ね焼きの痕跡があり、内外面にヘラミガキを施している。642は、高台を欠失している。



須恵器 (638・639・643) 東播系の捏鉢である。638・643は内外面横ナデ。639は、外面横ナデ、内面ナデを施す。

SD309溝状遺構 (Fig.126)

BO・BP−107・108区画に検出した。北側をSD308に切られる。全長4.8m以上・溝幅0.8〜1m・深さ15〜20cmをはかる。壁面はややきつく立ち上がり、底面は平坦である。埋土は暗褐色土。出土遺物には土師器・瓦器があるが、少量のわりには完形に近いものがある。一括投棄によるものか。

SD309出土遺物 (Fig.147)

土師器 (645・648) 645は全面にヘラミガキが施されいて、外底部も回転ヘラ切り後ヘラミガキされている。648は甑の把手。

瓦器 (646・647) どちらも完形に近い。ともに、外面は回転ヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施している。

Fig.147 SD309出土遺物実測図(1/4) 646は外面に細い線刻によるヘラ記号をもつ。

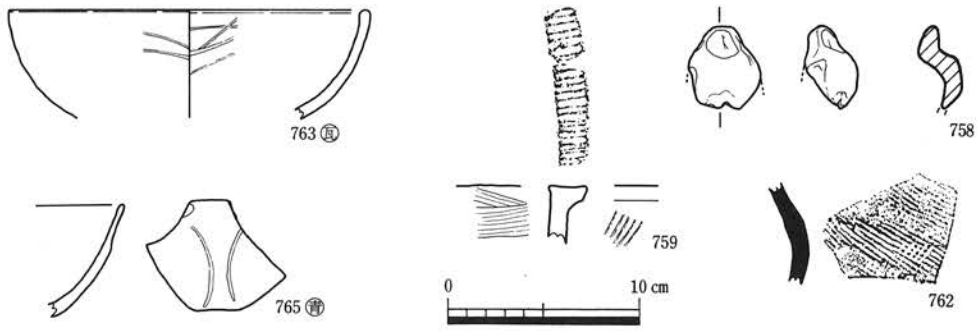


Fig.148　SD321出土遺物実測図（1/4）

ＳＤ321溝（Fig.143）

BK・BL・BM-111区画に検出した。南側は調査区外に展開する。SE319と切り合い関係にあり、SD321が先行する。SD317との切り合い関係は判然としなかった。全長11m以上・溝幅0.6～0.9m・深さ20cmほどである。埋土は暗褐色土。埋土中から土師器・瓦器・須恵器・青磁・白磁・土製品が出土している。どれも破片資料で流れ込みによるものと判断する。

ＳＤ321出土遺物（Fig.148）

5点を図示する。白磁片も出土しているが、図化に耐えない。759は土師器鍋II類。外面は斜方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整、口縁部上端は植物の茎状のものを押圧している。763は瓦器碗。内外面ヘラミガキを施す。762は須恵器の壷の肩部か。外面は平行タタキ目が残り、内面はナデ調整。765は青磁碗。外面に蓮弁文を施す。758は土鈴破片。鈕の部分には穿孔はない。

5．その他の遺構と出土遺物

Ｐ3001土器埋納遺構（Fig.149）

BL-112区画に検出した。他の遺構とは切り合い関係にはない。長径0.6m・短径0.4m・深さ0.1mをはかり、不整な短楕円形の平面形をなし、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土。底面からやや浮いた状態で、土師器の杯・碗が出土した。894・895が完存状態、893が大破片でが出土し、他にも碗・杯等の破片が出土している。これらの土器群は、出土状況から考えて、埋納されたものと判断する。

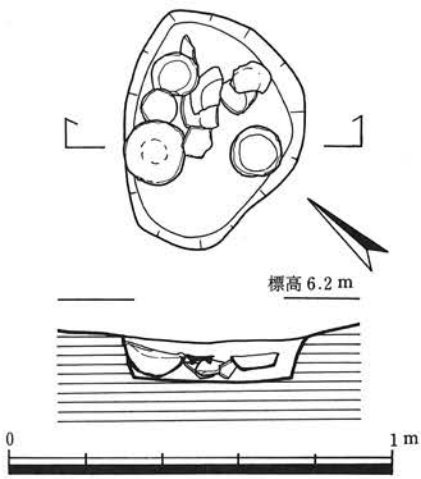


Fig.149　Ｐ3001実測図（1/20）

Ｐ3001出土遺物（Fig.150）

どれも土師器である。10点を図示する。

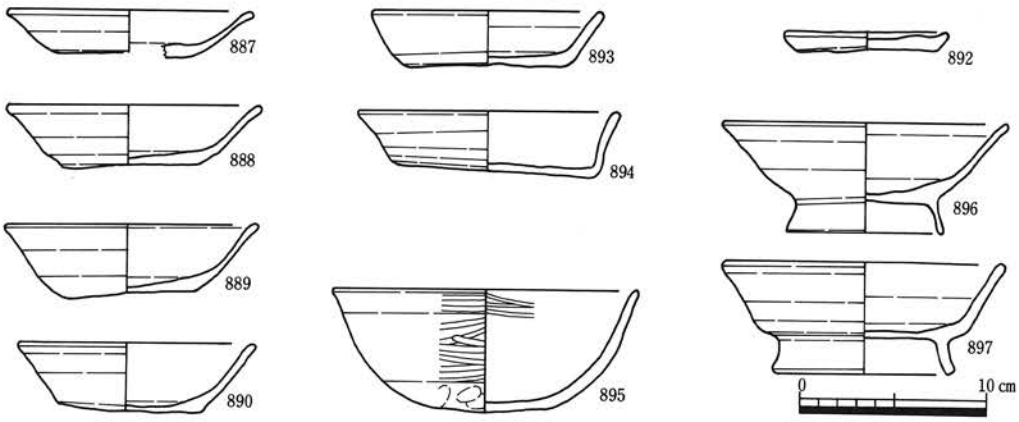


Fig.150　P3001出土遺物実測図（1/4）

土師器皿（892）　坏の底部であるが、焼成後に口縁端部を掻きとって成形し、皿状にしている。内底部は回転ナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後にナデツケ。

土師器坏（887～890・893・894）　どれも、体部内外面は回転ナデ調整、内底部は一定方向のナデ、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケで板目圧痕が認められるものがある。

土師器碗（895～897）　895は無高台。内外面ヘラミガキを施し、外面下位には型押しの時の指頭痕が残る。896・897は、体部内外面から高台にかけて回転ナデ調整、内底部には一定方向のナデを加えている。

6．その他の出土遺物（Fig.151）

縄文土器深鉢（930）　晩期の底部破片か。外底部に木葉痕が残る。内外面ナデ調整を施している。色調は暗黄褐色で、胎土には1～3㎜ほどの砂粒を多量に含む。

土師器鉢（859・860・918・921）　859・860は、口縁部は横ナデ調整、外面は斜方向のナデ調整、内面は横ナデ調整を施す。918は甑である可能性もある。口縁部は横ナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整、内面は斜方向のハケ目調整を施す。921は、外面縦方向のハケ目調整、内面横方向のハケ目調整で、部分的に横ナデを加えている。

土師器高台（857・861・938）　どれも破片の上端に接合痕があり、高台と判断するが器種は不明である。内外面に横ナデ調整を施す。

須恵器壷（924）　底部破片で高台を欠失する。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整、外底部は回転ナデ調整を施す。

須恵器鉢（929）　東播系捏鉢の底部破片である。外面は回転ナデ調整、内面はナデ調整、外底部には回転糸切り痕を有する。

青磁壷?（862）　小形品である。茶壷のようなものか。口縁内面には突出した段を有し、色調はオリーブグリーンを呈する。

白磁碗（920）　二次焼成を受けていて、釉薬の遺存状態は悪い。口縁にはごく小形の玉

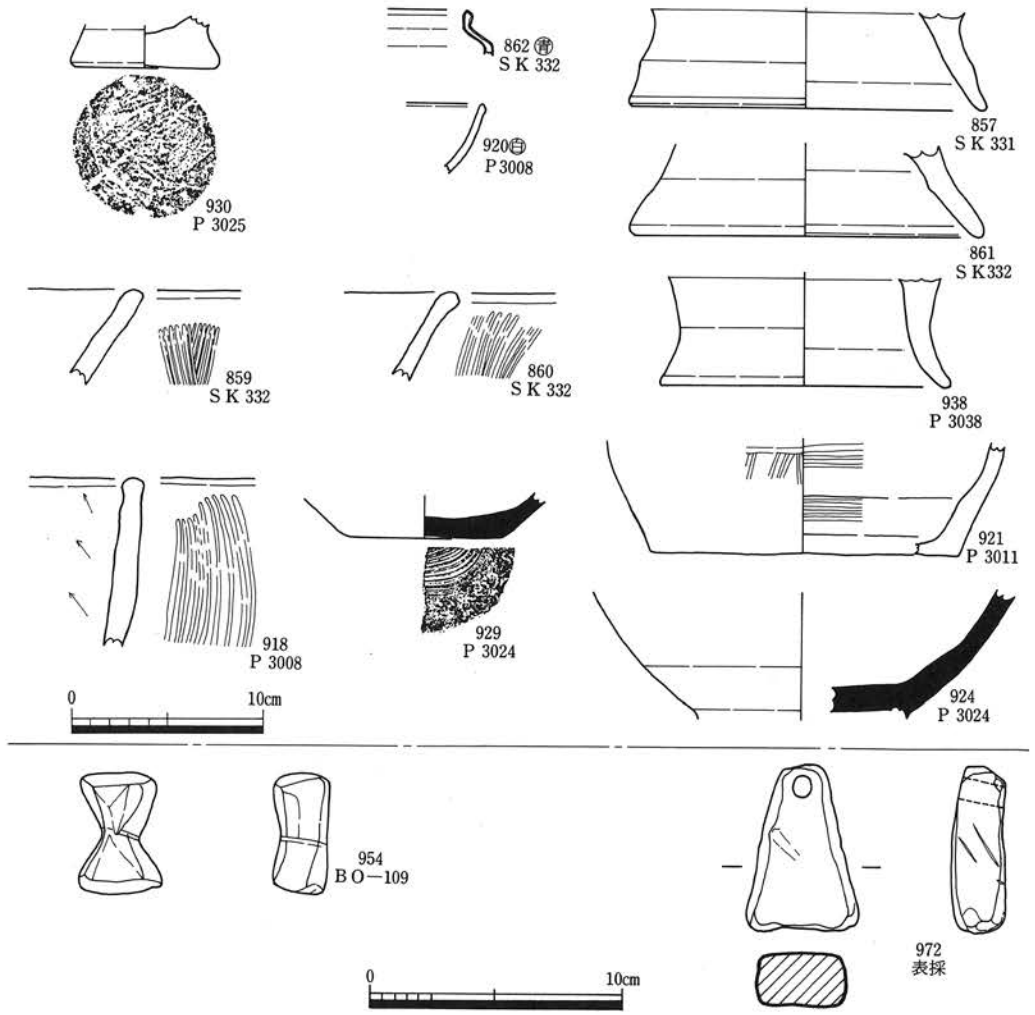


Fig.151　J 3 区出土遺物実測図（1/4・1/3）

縁を有する。

石製品錘（954・972）　　ともに滑石製で、表面をていねいに削って加工してある。954は、くびれの部分には紐擦れのような痕跡があるが、確実なものであるかはわからない。972の形状は分銅を連想させる。上端には孔径7㎜ほどの穿孔がある。

Ⅶ. J４区の記録

１．遺構の分布状況

J４区では、中央から西側にかけて集中的に遺構が検出された。140・141ライン以東では谷地形に入り、東へむかってゆるく落ちていき、撹乱の溝以外は遺構はほとんど検出されず、調査区東端では黒灰色粘性土が厚く堆積している。

主な検出遺構には、掘立柱建物・井戸・土壙・溝がある。掘立柱建物は東側に１棟検出された。確実に井戸と判断できるものは１基だけで、調査区西側に検出した。土壙は、140ライン以西で全面に検出しているが、西側に分布が集中する。土壙の性格としては、井戸の可能性があるもの・土器溜・土壙墓の可能性があるもの・性格不明のものがある。溝は、調査区西側のSD400・409・410が方形区画を形成している。SD410東側の方形区画内部では、土塁状遺構を伴っていた形跡がある。

検出された遺構は、撹乱を除き、中世前半と近世初頭に属している。近世初頭に属するものはSK401と方形区画溝で、遺構の方位角・埋土の状態から両者は有機的な関係にあるものと判断する。調査区中央で検出された複数の浅い溝も方位角・埋土から同一時期に属するもので、耕作痕と耕地の区画溝と判断する。他の遺構はほぼ瓦器碗を伴う中世前半に属するが、遺物としては弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器も出土している。

また、SK408とSK420、およびSK418とSK406・SK407では、出土遺物間に接合関係がある。このことは、それぞれの遺構間では、埋没過程がある期間内では同一時期であったことを示している。遺構間の同時期性を判断するうえで、ある程度の手掛りを与えてくれる。

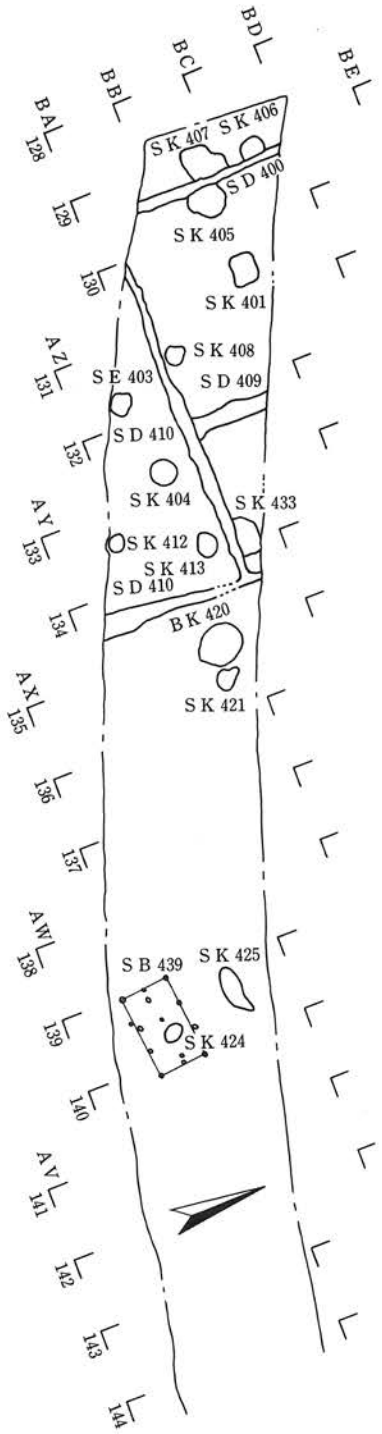


Fig.152　J４区主要遺構配置図(1/500)

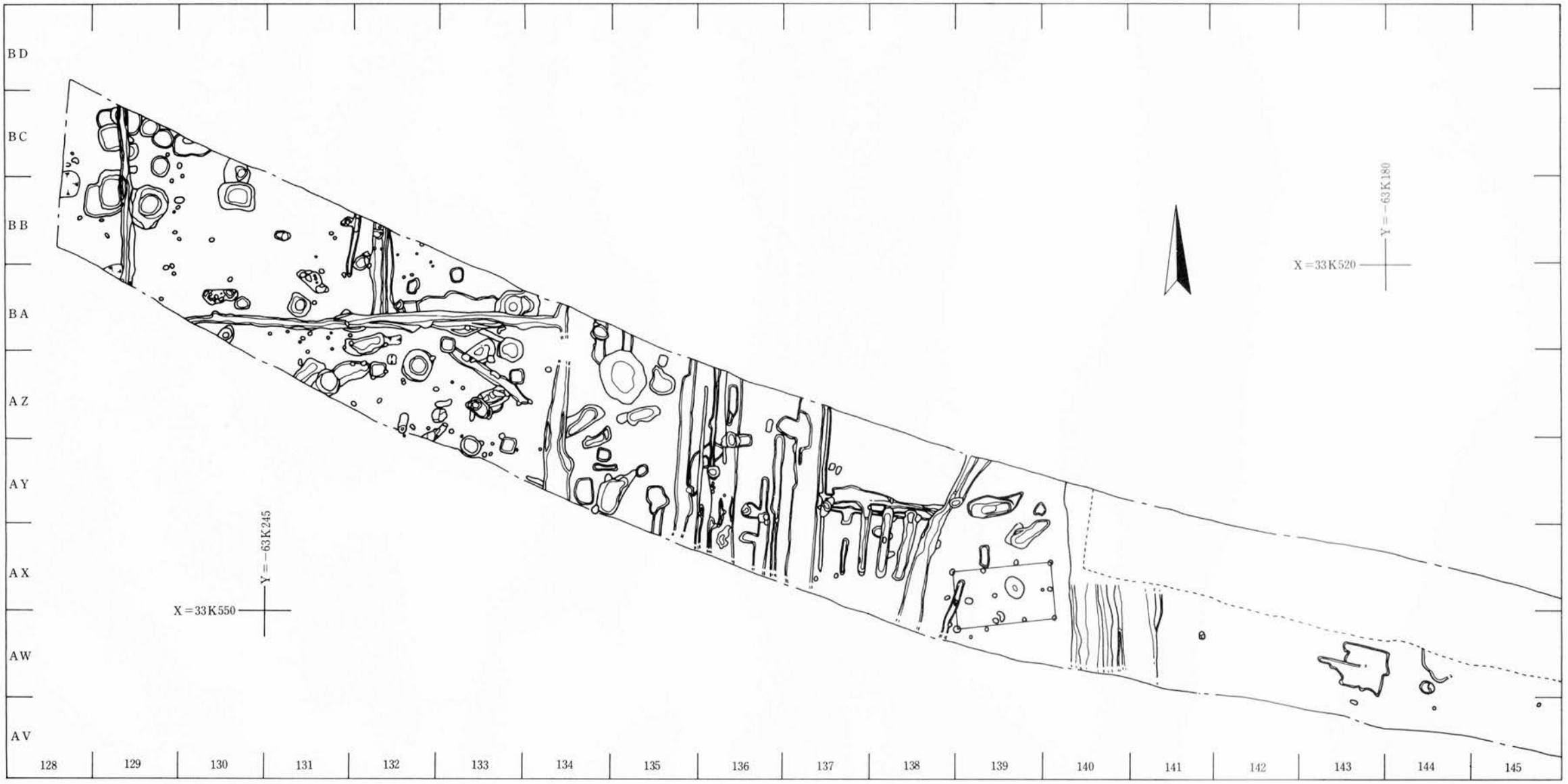


Fig.153　J 4 区遺構配置図（1/300）

2.掘立柱建物建物と出土遺物

SB439掘立柱建物(Fig.154)

AW・AX-139・140区画に検出した。検出面の標高は、6.0～6.2m。SK424と重複関係にあるが、直接の先後関係は不明。桁行3間・梁行2間の建物である。主軸をN-5°-Wにとる。柱間は図示したとおり。建物内部で梁行方向にそって3個の柱穴からなる柱列を検出した。床を張るための束柱と判断する。柱穴掘り方の平面形は円形・楕円形で、径0.2～0.2m・深さ0.2～0.4mをはかる。柱穴の埋土は、砂混じりの褐色～淡褐色土で、遺物は出土していない。方位角からみて、方形区画溝と時期的に伴う可能性は高いと考える。

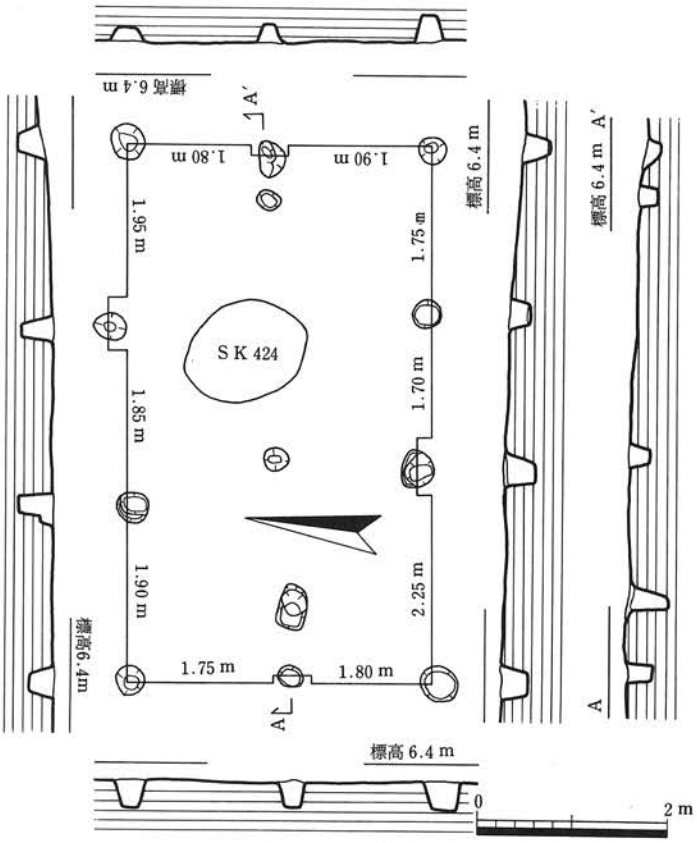


Fig.154　SB439実測図（1/80）

3．井戸と出土遺物

SE403井戸(Fig.155)

AZ-131区画に検出した。検出面の標高は、6.5m前後。他の遺構との切り合い関係にはない。激しい湧水のために完掘できなかった。一辺1.4～1.5m・深さ1.6m以上をはかり、平面形は不整な隅丸正方形をなす。断面形は二段掘りの形状を示している。壁面はきつく立ち上がり、北側の上部では、崩落によるためか、やや外側にえぐれている。埋土は、上部で褐色土、下部で砂混じり灰褐色土であったが、土層壁面が崩落したため層位の堆積状況を記録することはできなかった。埋土中からは容器類がまとまって出土した。遺物の取り上げは、検出面から深さ30cmまでの埋土中から出土したものを上部、30～70cmものを中部、70cm以下のものを下部として行った。

SE403出土遺物（Fig.156）

土師器・黒色土器B類・瓦器が出土している。17点を図示する。

土師器小皿（980～982・984・989～992）　どれも回転ヘラ切り底で、体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えている。外底部は、ヘラ切り後に板目圧痕を有するか、ナデツケを行っている。内底部へのナデのせいか、底部にふくらみをもつものが多い。

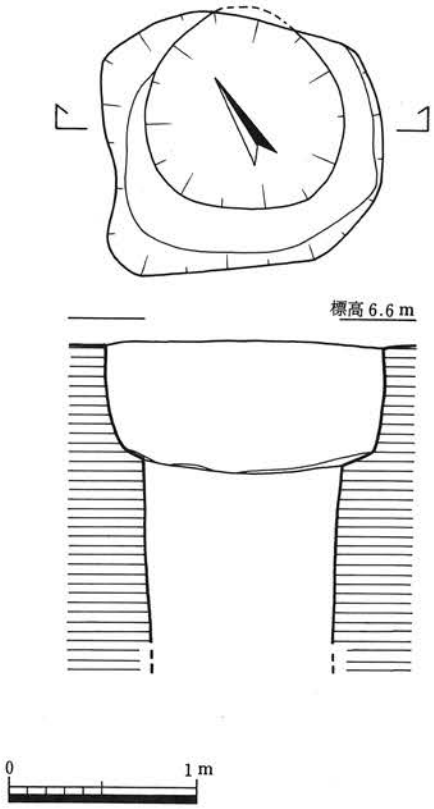


Fig.155　SE403実測図（1/40）

土師器坏（986・993）　どちらも回転ヘラ切り底で、体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えている。型押しのためか、底部に丸みをもつ。986はヘラ切り後ナデツケ、993は板目圧痕を有する。

土師器碗（994・995・997）　994は、外面ヘラミガキ、内面はこてあて痕を有する。外面上位ににヘラ状の工具による削りのような痕跡がある。外底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。995は、内外面ヘラミガキを施す。997は、内外面にヘラミガキを施す。

黒色土器B類碗（988・998・999）　どれも内外面はヘラミガキ調整で、988・998は外面上位に回転ヘラミガキを施す。

瓦器碗（987）　焼成が悪く、ややもろい。内外面にヘラミガキを施している。

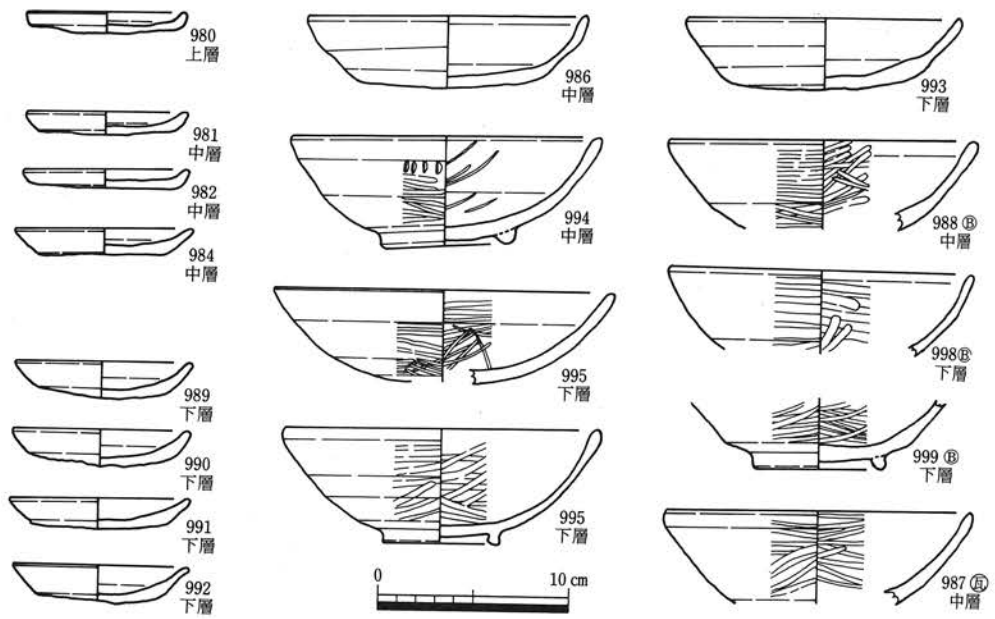


Fig.156　SE403出土遺物実測図（1/4）

4．土壙と出土遺物

(1) 井戸の可能性がある土壙

SK404土壙(Fig.157)

AZ-132区画に検出した。検出面の標高は、6.5m前後。北側を小穴に切り込まれている。径1.7～1.9m・深さ0.8mをはかり、平面形はやや不整な円形をなす。北側と南側の壁面上部にゆるい段部をもつ。断面形はゆるい二段掘りの形状を示し、壁面はややゆるく立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

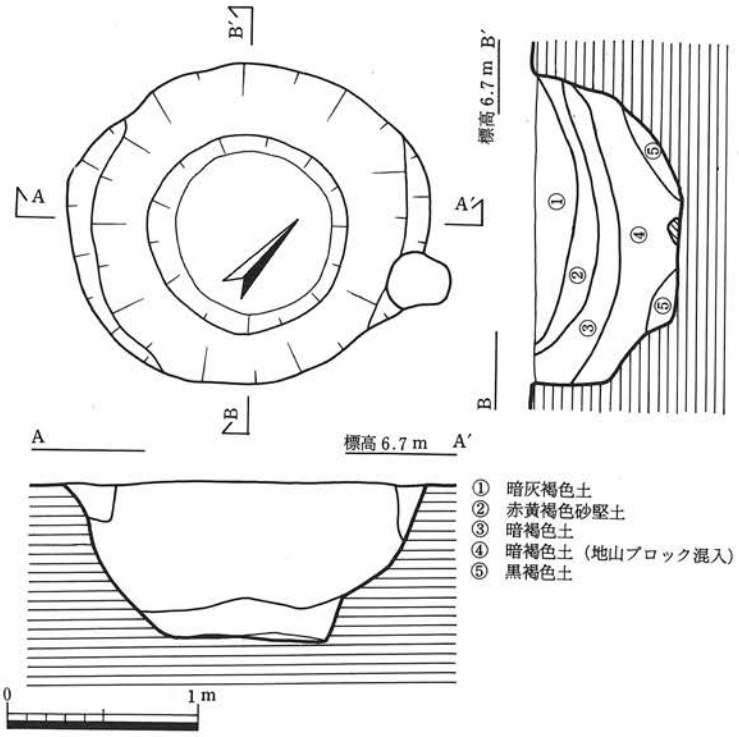


Fig.157 SK404実測図（1/40）

埋土は、5層に大別できた。⑤層は、いわゆる地山との混じり土で、壁面の剝落により、堆積したものと判断した。①～④層は、順次、自然堆積により、埋没する過程で形成されたものと判断した。

SK404出土遺物（Fig.158）

9点を図示する。土師器・白磁・石製品がある。1005・10076は土師器小皿。どちらも回転ヘラ切り底で、板目圧痕が認められる。体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えてい

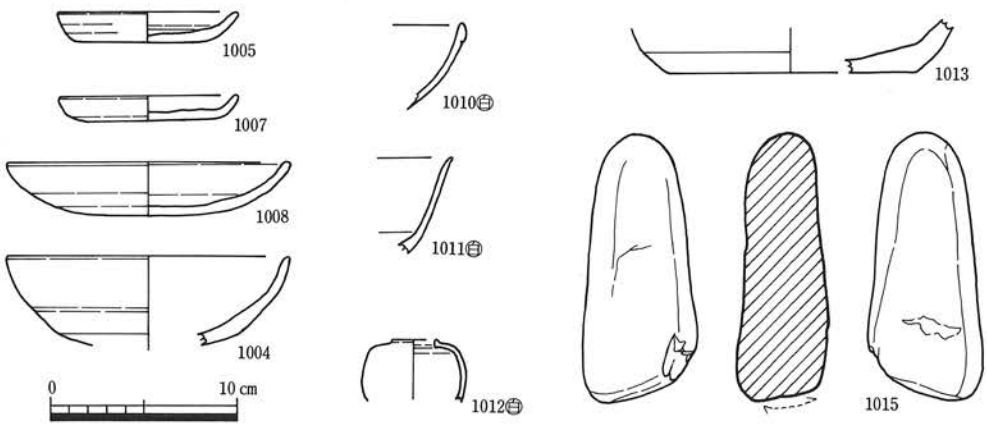


Fig.158 SK404実測図（1/4）

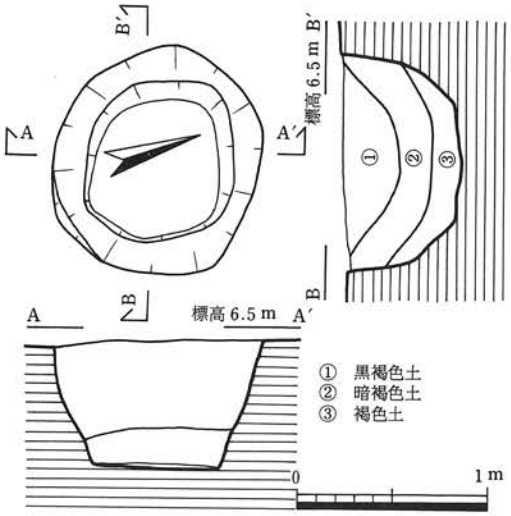


Fig.159 SK412実測図（1/40）

る。1008は土師器坏。体部内外面は回転ナデ調整、内底部は多方向のナデ調整、外底部は回転ヘラ切り後に板目圧痕。1004は土師器碗。内外面回転ナデ調整。1043は土師器、鉢の底部か。体部内外面は回転ナデ調整、底部内外面ナデ調整、底部外端にはヘラ削りを加えている。1010～1012は白磁。1010は口縁に小さな玉縁をもち、その下部に沈線状のくぼみがまわる。1012は茶壷のようなものか。内面まで全面に施釉されている。1015は叩き石。先端に敵打痕があり、使用のためにくぼんでいる。

ＳＫ412土壙（Fig.159）

AZ・AY-133区画に検出した。検出面の標高は、6.4m前後。他の遺構とは切り合い関係にはない。径1.1～1.2m・深さ0.7mをはかり、平面形は不整な円形をなす。南側の壁面上部にゆるい段部をもつ。断面形はゆるい二段掘りの形状を示す。壁面はややゆるく立ち上がり、底面は浅いレンズ状をなす。埋土は３層に大別され、自然堆積による埋没状況を示している。各層から土師器の細片が出土しているが、図化に耐えるものはない。

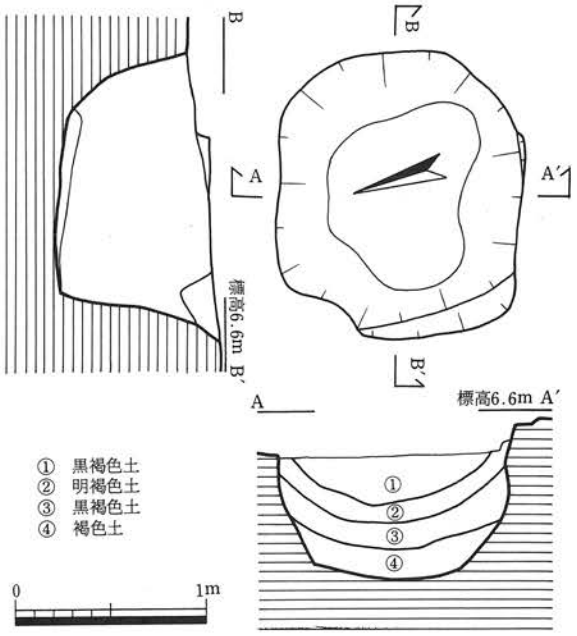


Fig.160 SK413実測図（1/40）

ＳＫ413土壙（Fig.160）

AZ・BA-133区画に検出した。検出面の標高は、6.4～6.6m前後。長軸1.5m・短軸1.3m・深さ0.8mをはかり、隅丸長方形に近い平面形をなす。西側の壁面上部にゆるい段部をもつ。壁面はややゆるく立ち上がり、底面は浅いレンズ状をなす。埋土は４層に大別され、自然堆積による埋没状況を示している。埋土中から容器類がまとまって出土したが、②層からの出土遺物はごくわずかで、無遺物層に近い。

ＳＫ413出土遺物（Fig.161）

土師器・瓦器・白磁・土製品が出土した。24点を図示する。

土師器小皿（1086～1088・1090・1094・1102・1103・1107）　どれも回転糸切り底で、板目圧痕をもつものが多い。体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えている。

土師器坏（1089・1091・1095・1104～1106・1108・1109）　どれも回転糸切り底で、板目圧痕をもつものが多い。体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えている。内底部へのナデのためか、底部が変形しているものが多い。

瓦器碗（1096）　内外面にヘラミガキを施している。

白磁碗（1092・1097～1101）　口縁端部を外方につまみだしているもの（1097～1099）と、玉縁の口縁をもつもの（1092・1100・1101）がある。1097・1098は体部外面に線刻による３本単位の文様、1098は体部内面に櫛状工具による文様が施してある。1092・1101は体部外面下位には施釉されていない。

土製品（1093）　土錘の欠損品か。

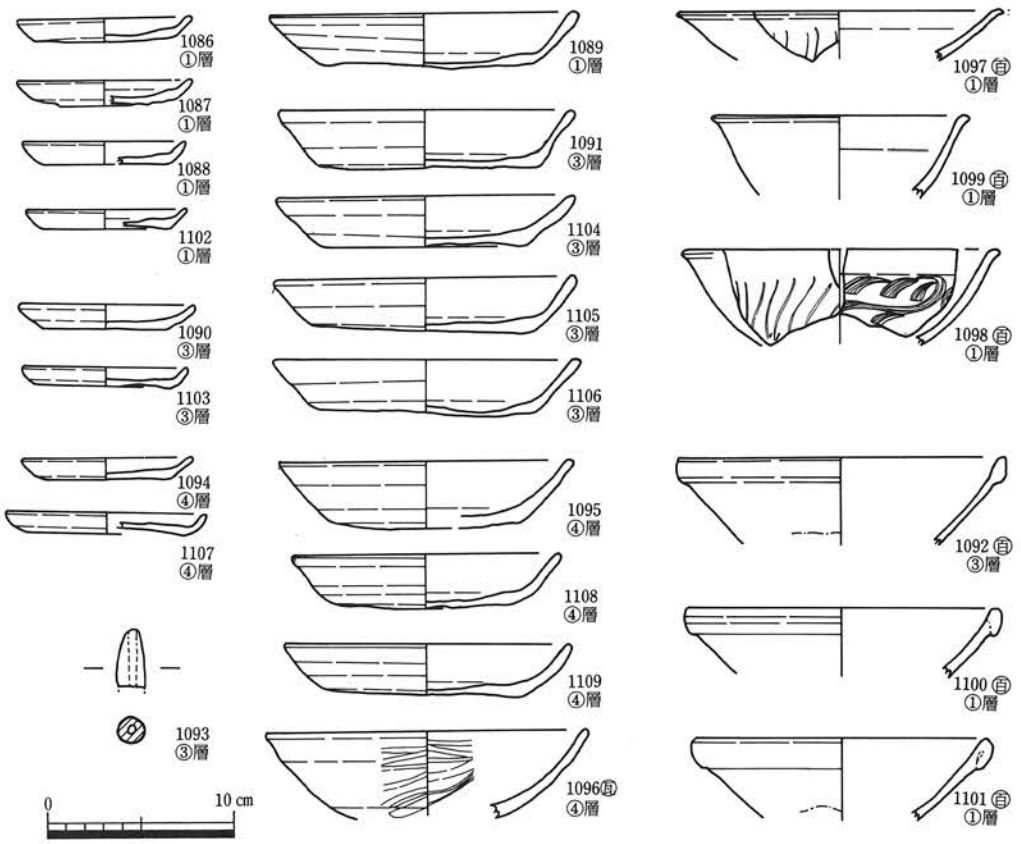


Fig.161　SK413出土遺物実測図（1/4）

(2) 土器溜の土壙

ＳＫ420土壙（Fig.162）

AZ-134・135区画に検出した。検出面の標高は、6.1～6.2m。他の遺構とは切り合い関係にはない。長径3.2m・短径2.5m・深さ0.6mをはかり、平面形はやや不整な楕円形をなす。壁面はややゆるく立ち上がり、底面は浅いレンズ状をなす。埋土は３層に大別された。自然堆積によるものと判断され、東側から埋没していった状況を示している。また、①層出土須恵器(1133)はSK408埋土上部出土のもの(1060)と接合関係にあり、両者の埋没過程におけるある段階の同時期性を示すものと判断する。各層から多量の容器類が出土している。完形に近いものが多く（特に土師器)、連続的に一括投棄が行われたものと判断する。廃棄物処理的な遺構である。自然遺物などは確認されていない。

ＳＫ420出土遺物（Fig.163・164）

土師器・瓦器・須恵器・白磁・陶器・石製品が出土した。61点を図示する。

土師器小皿（Fig.163／1120～1123・1137・1148・1149・1155～1158・1160・1161・1167～1173）どれも回転糸切り底で、板目圧痕をもつものが多い。体部内外面回転ナデ調整、内底部にはナ

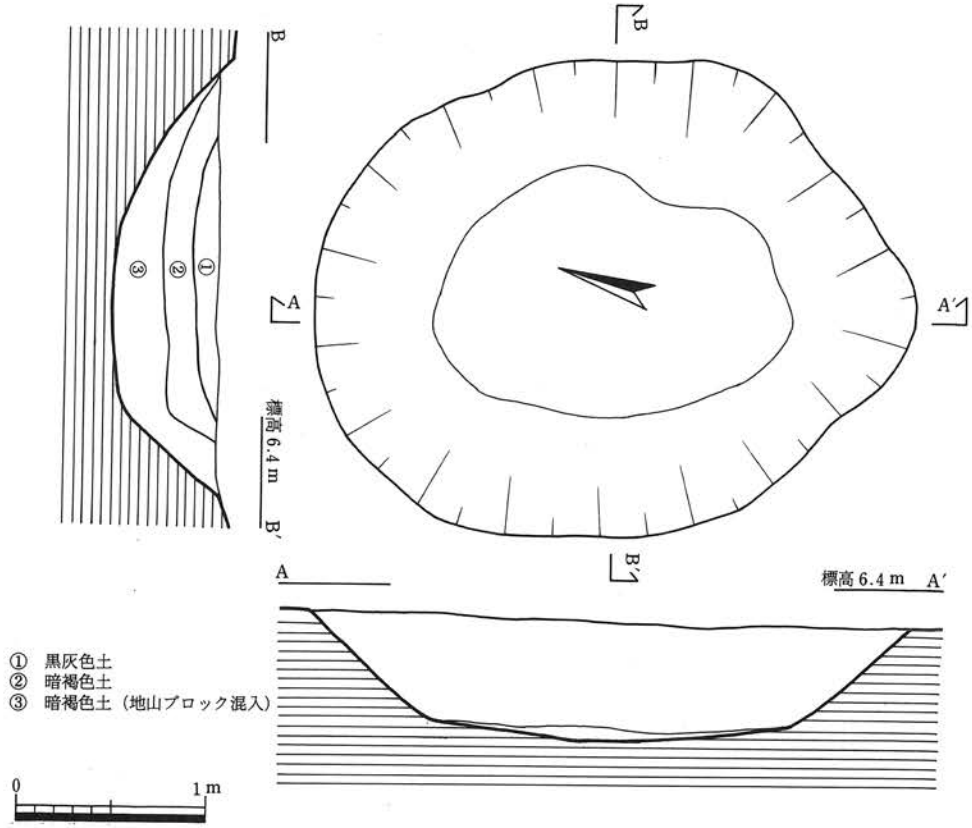


Fig.162　SK420実測図（1/40）

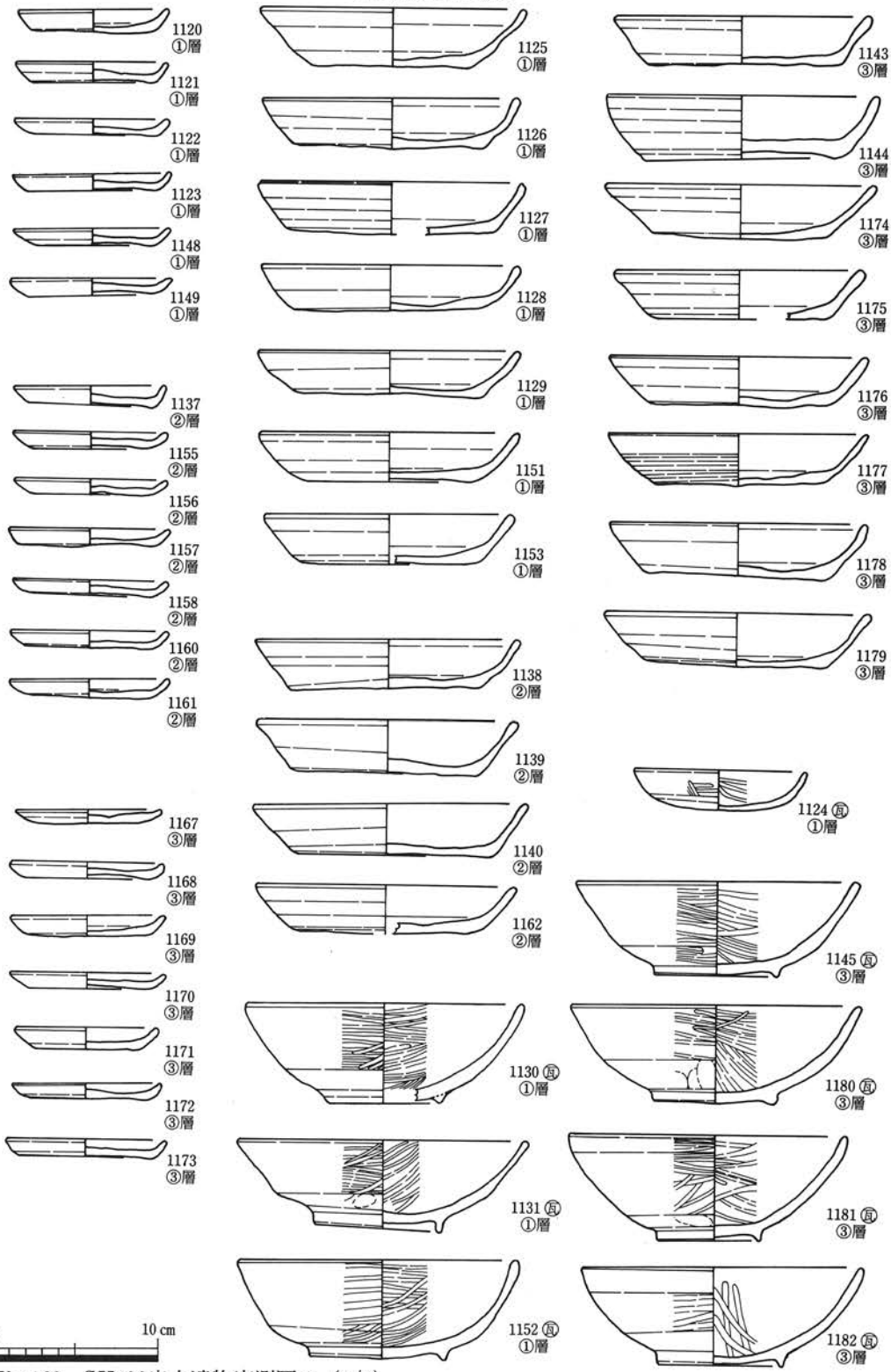


Fig.163　SK420出土遺物実測図１（1/4）

デを施している。このナデのためか、底部が歪み、上げ底状をなすものが多い。

土師器坏（Fig.163／1125～1129・1138～1140・1143・1144・1151・1153・1162・1174～1179）どれも回転糸切り底で、板目圧痕をもつものが多い。体部内外面は回転ナデ調整、内底部にはナデを加えている。1177は指ナデによる横線が稜を形成している。

瓦器小皿（Fig.163／1124）　回転糸切り離しの後、型押し出しで丸底に成形している。内外面にヘラミガキを施し、外底部はナデを加えている。

瓦器碗（Fig.163／1130・1131・1145・1152・1180～1182）　どれも内外面にヘラミガキを施し、重ね焼きの痕跡は明瞭である。1152は体部外面上位に回転ヘラミガキを加えている。1131・1180・1181は体部外面下位に型押しの時の指頭痕が残る。1152・1145は外底部にヘラ記号を有する。

須恵器鉢（Fig.164／1132・1133）　東播系捏鉢の口縁破片である。内外面横ナデ調整。1133は口縁部から内面に自然釉がかかる。

白磁皿（Fig.164／1184）　削り出し高台で、体部外面下位から高台は施釉されていない。内面には細い沈線がまわる。

白磁碗（Fig.164／1134・1141・1142・1163～1165・1183・1185）　1134・1154・1163・1164・1185は体部外面中位から下位にかけて施釉されていない。1134・1154は内面に細い沈線がまわる。1165は体部外面に沈線による３本単位の文様を有する。

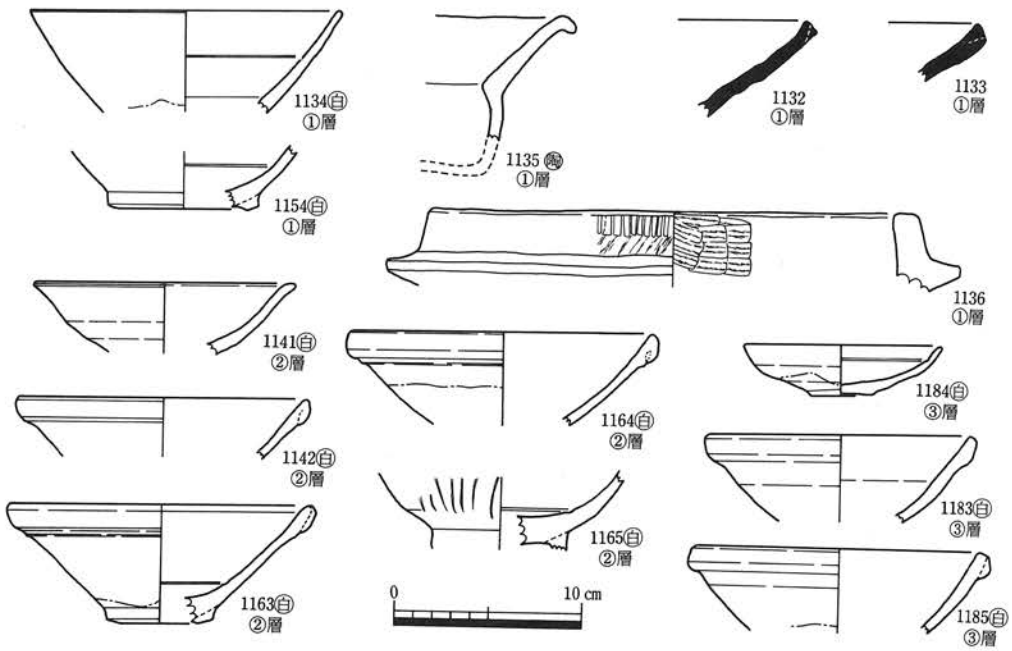


Fig.164　SK420出土遺物実測図２（1/4）

陶器盤（Fig.164／1135）　褐釉陶器の大形の盤である。

石製品（Fig.164／1136）　滑石製石鍋である。

(3) 土壙墓の可能性がある土壙

ＳＫ425土壙（Fig.165）

AY-139区画に検出した。検出面の標高は、6.2m前後。他の遺構と切り合い関係にはない。上端ラインは不整な隅丸長方形に近い形態をなし、長軸3.4m・短軸1.3m・深さ0.3mをはかる。中端ラインは端整な隅丸長方形をなし、長軸2.3m・短軸0.7mをはかる。断面形は不明瞭な二段掘りの形状を示す。壁面はゆるく立ち上がり、底面は舟底状をなす。埋土は淡褐色土であった。北側壁上で、ほぼ完形の土師器が１個、沈み込んだような状態で出土した。埋置されたものと判断する。

ＳＫ425出土遺物（Fig.165）

土師器碗である。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形で、欠損は埋置前のものである。器壁の磨耗で調整は不明瞭だが、内外面にヘラミガキを施してある。体部外面下位には、板状圧痕の痕跡が残っている。

(4) 性格不明の土壙

ＳＫ401土壙（Fig.166）

BB-130区画に検出した。検出面の標高は、6.3～6.4m。他の遺構とは切り合い関係にはない。隅丸長方形の平面形をなし、長辺2.0m・短辺1.5m・深さ0.5mをはかる。壁面はややゆるく立ち上がり、中位で中端ラインがまわっている。底面はほぼ平坦である。埋土は３層に大別され、自然堆積による埋没状況を示すと判断する。埋土中から容器類がまとまって出土している。

埋土の状況・遺構の方位角から、方形区画溝に伴う可能性が高い。

ＳＫ401出土遺物（Fig.167）

瓦器・磁器・陶器が出土した。7点が図化できた。

瓦器湯釜（973）　口縁部が低く、体部

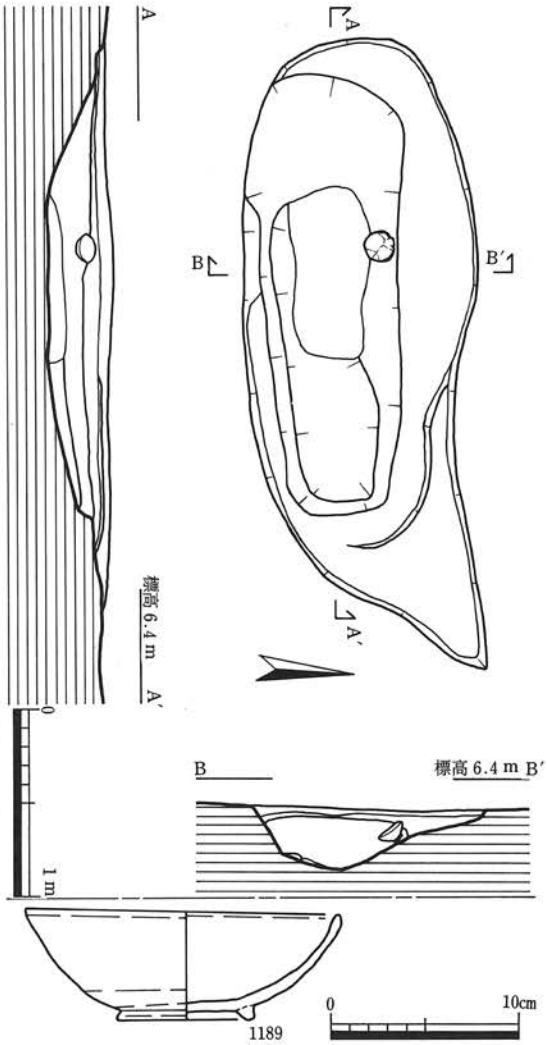


Fig.165　SK425実測図（1/40）
・出土遺物実測図（1/4）

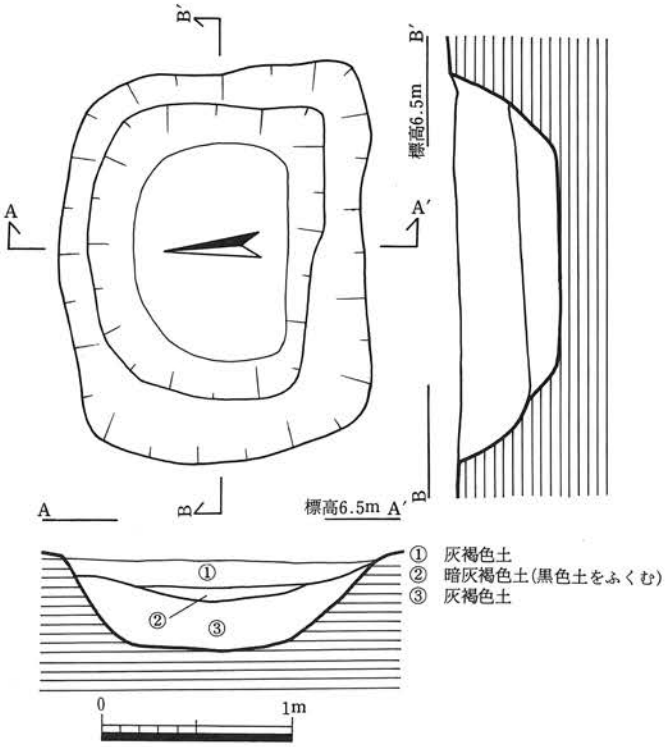


Fig.166　SK401実測図（1/40）

が扁平になる系統に属するものである。対向位置に一対の把手をもち、鍔は剝離している。口縁部外面は斜方向のハケ目、内面は横ナデ。体部外面上位は横ナデ、下位は斜方向のハケ目が残る。内面は横方向のハケ目。体部外面全体にススが付着している。

瓦器擂鉢（978）　口縁端部は横方向のハケ目、外面は斜方向のハケ目、内面は横方向のハケ目。内面に5本単位の縦方向の擂目をもつ。

瓦器火鉢（974）　外面は横ナデ、内面は横方向の細かいハケ目を施す。

陶器擂鉢(975)　肥前陶器(唐津焼）である。浅い片口をもち、口縁部付近には褐色の釉が施されている。色調は暗赤褐色を呈する。回転糸切り底で、体部外面は回転ナデ。内面は回転ナデの後に9本単位の擂目を施し、内底部は擂目の上からナデを加えている。

陶器絵皿（976）　肥前陶器（唐津焼）である。体部外面は暗灰褐色の釉が中位まで施され、下位には釉垂れしている。内面は黄灰色の釉が全面に施され、見込に暗緑色の釉と鉄釉で草花文があらわされている。内底部には目跡があり、体部外面下位には回転ヘラ削りが施されている。

磁器染付皿（977・979）　肥前磁器（伊万里焼）か。977は全面に淡緑白色の釉が施釉され、高台端部のみ釉がかきとられている。内面見込には暗青灰色の釉で草花文があらわされている。979は、淡青白色の釉が施され、内面見込には白青色の釉で文様が施されている。

ＳＫ405土壙（Fig.168）

BB-129区画に検出した。検出面の標高は、6.3m前後。SD400と切り合い関係にあり、SK405が先行する。上端ラインはやや不整な隅丸長方形をなし、長軸2.4m・短軸1.9m・深さ0.9mをはかる。断面形は二段掘りの形状を示し、中端ラインは径1.2～1.3mのやや不整な円形をなす。壁面は、東側できつく、他ではややゆるく立ち上がる。底面は浅いレンズ状をなす。埋土は5

層に大別できた。全体に自然堆積による埋没状態を示す。④層は⑤・⑥層を切り込んでいるような状況を示すが、人工的なものかは判断できなかった。①～③層で、わずかな遺物が出土した。

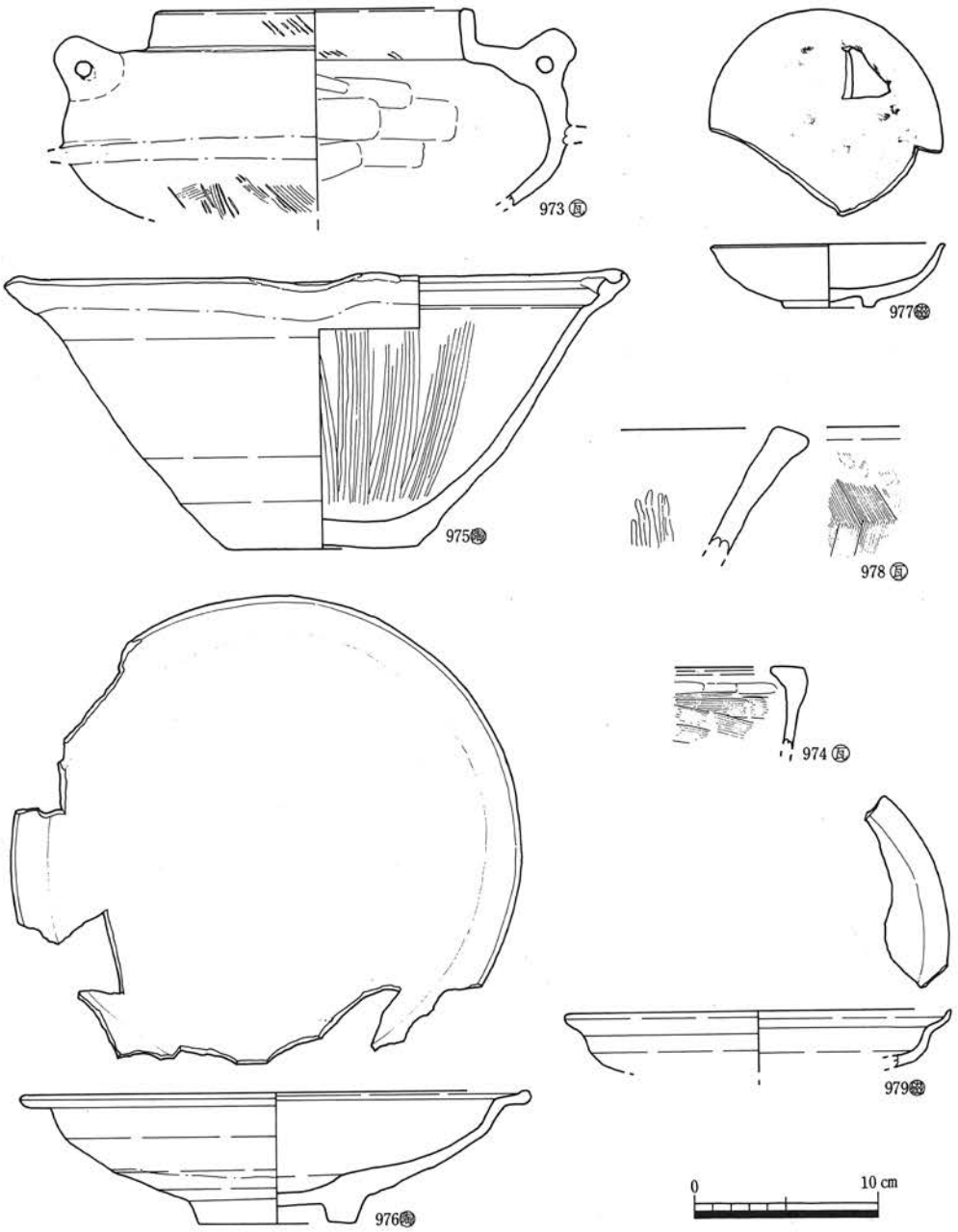


Fig.167　SK401出土遺物実測図（1/4）

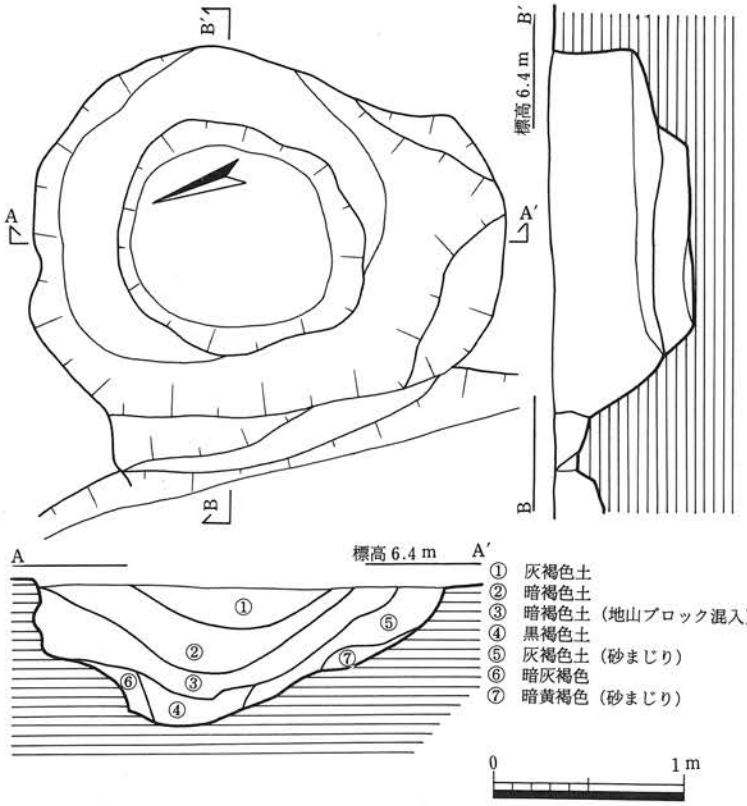


Fig.168　SK405実測図（1/40）

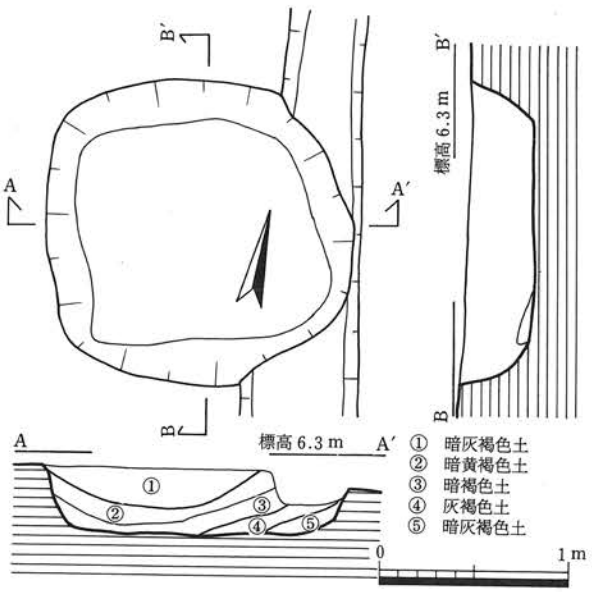


Fig.169　SK406実測図（1/40）

SK405出土遺物

（Fig.169）

3点が図化できた。1016・1017は土師器である。1016は、内底部はナデ調整を加え、体部外面下位から高台にかけては回転ナデ調整を施す。1017は、体部内外面回転ナデ調整、内底部はナデ調整を加え、外底部は回転ヘラ切り後ナデツケを行う。1018は須恵器破片である。外面は平行タタキ目の後にハケ目を加える。内面には円弧タタキ目の後にハケ目を加えている。

SK406土壙（Fig.170）

BC-129区画に検出した。検出面の標高は、6.2～6.3m。SD400と切り合い関係にあり、SK406が先行する。ほぼ隅丸正方形の平面形をなし、一辺1.3m・深さ0.4mをはかる。壁面はややゆるく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は5層に大別できた。自然堆積による埋没の過程を示し、西側から堆積していったことが認められる。埋土中から、若干の容器類が出土している。そのうちの青磁破片（1025）は、SK418出土のもの（1118）と接合関係にあり、両者の埋没過程におけるある段階の同時

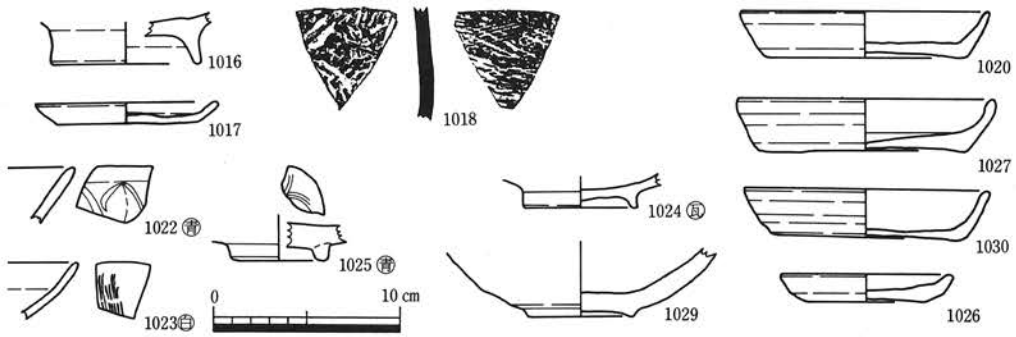


Fig.170　SK405・406出土遺物実測図（1/4）

期性を示すものと判断する。

ＳＫ406出土遺物（Fig.170）

土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。9点を図示する。

土師器小皿（1026）　　回転糸切り底で、体部内外面は回転ナデ、内底部はナデ。

土師器坏（1020・1027・1030）　　回転糸切り底で、体部内外面は回転ナデ、内底部はナデを加えている。1027は糸切り後にナデを加え、1030には板目圧痕がある。

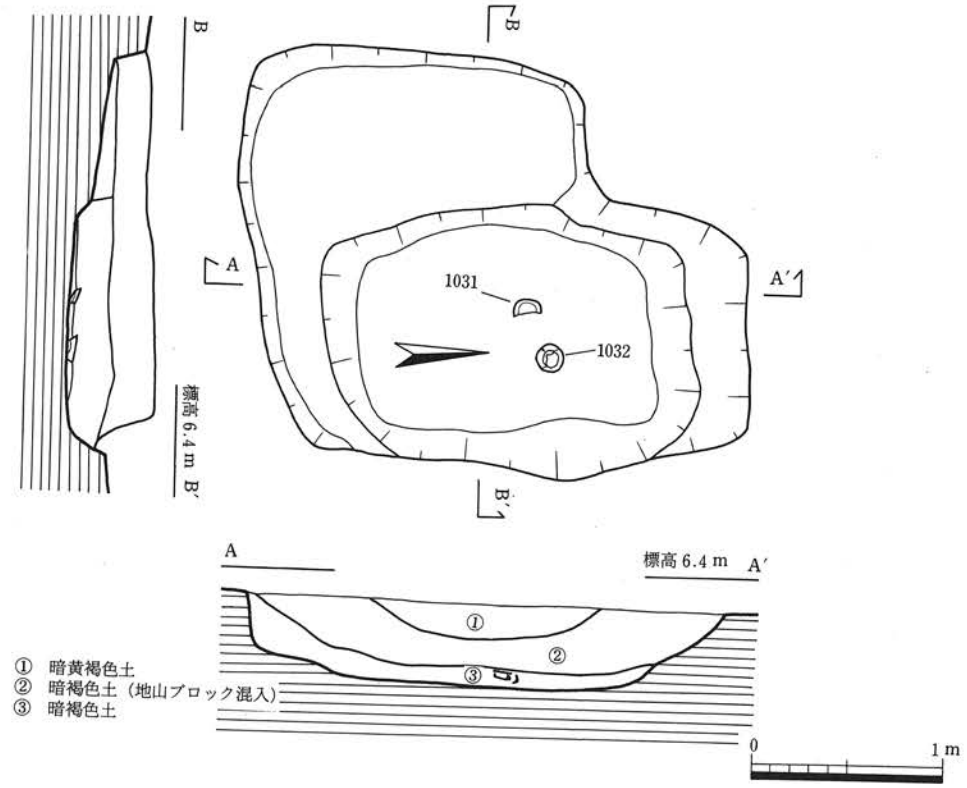


Fig.171　SK407実測図（1/40）

土師器鉢?（1029）　高台は削り出しである。体部内外面は回転ナデ。外面下位から高台にかけては回転ヘラ削り。

瓦器碗（1024）　内面はヘラミガキ、体部外面から高台にかけては回転ナデ。

青磁碗（1022・1025）　1022は体部外面に蓮弁文を施す。1025は内面見込に沈線による文様を有する。

白磁碗（1023）　体部外面に櫛状工具による文様を有する。

ＳＫ407土壙（Fig.171）

BB・BC-129区画に検出した。検出面の標高は、6.2～6.3m。SD400と切り合い関係にあり、SK407が先行する。平面形は2基の隅丸方形の土壙が重複しているような形態をなすが、切り合い関係は確認できなかった。長軸2.6m・短軸1.4～2.1m・深さ0.3～0.5mをはかる。壁面は、北側できつく、他ではややゆるく立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土は3層に大別できた。自然堆積による埋没の状況を示している。各層から遺物が出土しているが、③層からまとまって容器類が出土している。1031・1032は、底面上での出土である。また、③層出土の須恵器破片（1043）とSK418出土のもの（1116）とは接合関係にあり、両者の埋没過程におけるある段階の同時期性を示すものと判断する。

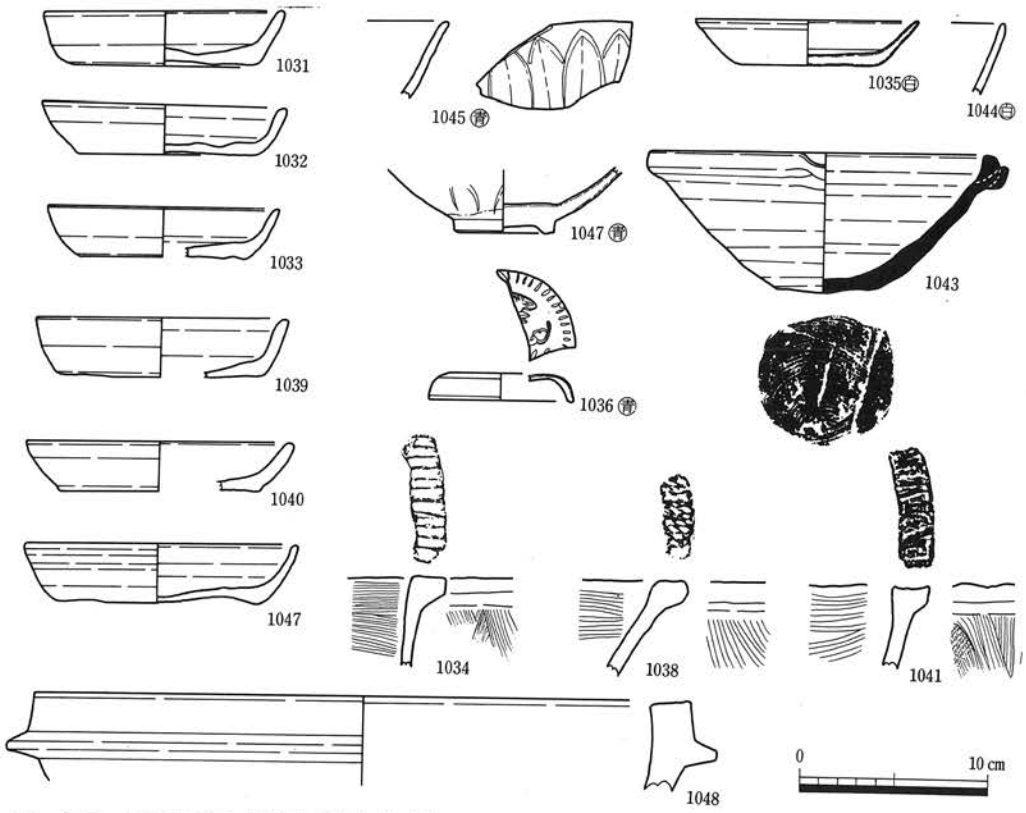


Fig.172　SK407出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ407出土遺物（Fig.172）

土師器・須恵器・青磁・白磁・石製品が出土した。16点を図示する。

土師器坏（1031～1033・1039・1040・1047）　どれも回転糸切り底である。体部内外面は回転ナデ、内底部にはナデを加えている。1031・1032は外底部に板目圧痕が認められる。

土師器鍋（1034・1038・1041）　どれもII類に属する。体部外面は斜～縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整で、口縁上端に各種の原体による文様を有する。1034は植物の茎のようなもので押圧している。1038は回転縄文を施している。1041は藁束状のものを押圧している。

須恵器鉢（1043）　東播系の捏鉢である。回転糸切り底で、体部内外面は回転ナデ調整。片口を有する。焼成不良で軟質であり、色調は暗白灰色～赤灰色を呈する。

青磁碗（1042・1045）　ともに体部外面に蓮弁文を有する。1042は内面見込に沈線を有し、体部外面下位から高台にかけて施釉されていない。

青磁合子（1036）　口縁から内面にかけては施釉されていない。体部外面から天井部外面にかけて、浮き彫りに文様（草花文?）が施されている。

白磁坏（1035）　全面に施釉されている。

白磁碗（1044）

SK408土壙（Fig.173）

BA-131区画に検出した。検出面の標高は、6.3m前後。SD410と切り合い関係にあり、SK４０８が先行する。不整な隅丸方形の平面形をなし、一辺1.0～1.1m・深さ0.7mをはかる。断面形は浅い二段掘りの形状を示し、中端ラインは径0.6mほどの円形をなす。壁面はきつく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

底面（やや浮いた状態）から高さ50cmほどまでの間に、自然石が積み上げられた状態で出土した。この集石の上方で、瓦器

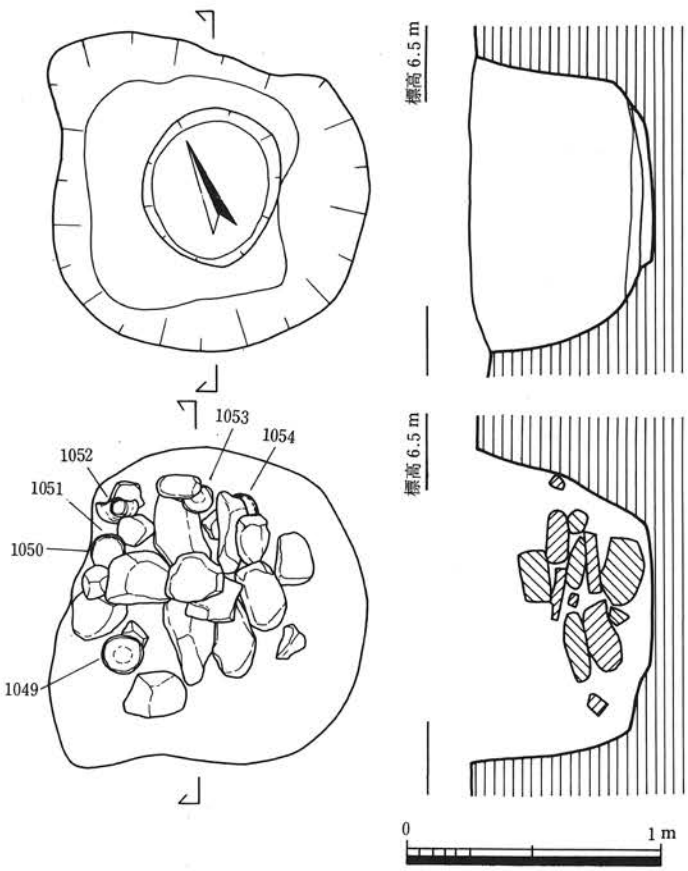


Fig.173　SK408実測図（1/30）

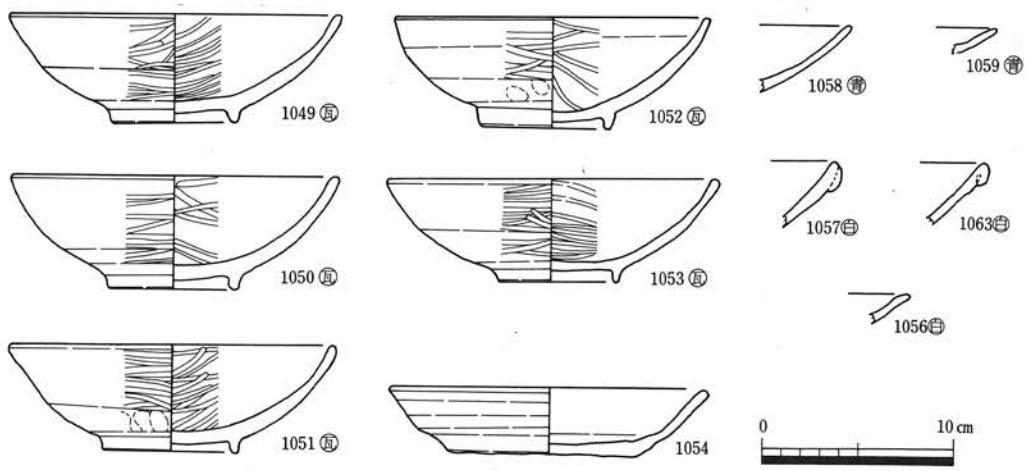


Fig.174　SK408出土遺物実測図（1/4）

した。この集石の上方で、瓦器碗5個体（1049～1053）と土師器坏1個体（1054）がほぼ完形で、石の下に埋置された状態で出土した。祭祀行為である可能性が高いと判断する。

集石の上には褐色の埋土が堆積していたが、自然堆積によるものかは不明である。この埋土中から容器類の細片が出土したが、流れ込みによるものと判断した。また、埋土上部出土の須恵器破片（1060）とSK420出土のもの（1133）とは接合関係にあり、両者の埋没過程におけるある段階の同時期性を示すものと判断する。

ＳＫ４０８出土遺物（Fig.174）

土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。11点が図化できた。

土師器坏（1054）　回転糸切り底で、体部内外面は回転ナデ、内底部にはナデを加え、外底部には板目圧痕がある。

瓦器碗（1049～1053）　1050は高台が1/2ほど欠損している。どれも内外面にヘラミガキを施し、体部外面下端から高台にかけては回転ナデ調整。1051・1052は体部外面下位に型押しの時の指頭痕が残り、1051には回転糸切りの痕跡がある。

青磁皿（1059）・青磁碗（1058）

白磁皿（1056）・白磁碗（1057・1063）

ＳＫ421土壙（Fig.175）

AZ-135区画に検出した。検出面の標高は、6.2m前後。SK420に近接する。平面形は不整形であるが、基本的には短楕円形をなすものか。長軸1.5m・短軸1.2m・深さ0.3mをはかる。壁面はややゆるく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に大別され、自然堆積による埋没を示すものと判断する。埋土中から少量の遺物が出土した。

ＳＫ421出土遺物（Fig.176）

3点が図化できた。1186は瓦器碗で、ほぼ完存だが高台を欠失する。内外面にヘラミガキを施

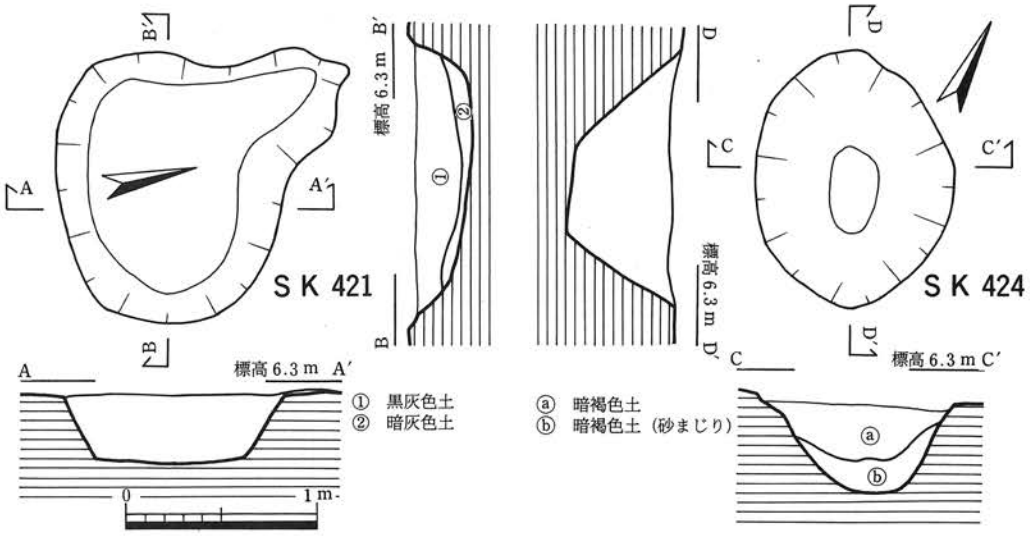


Fig.175　SK421・424実測図（1/40）

し、体部外面下位には回転糸切りの痕跡が残る。1187は白磁碗。1188は滑石製石鍋破片である。径7㎜ほどの穿孔がある。外面全体にススが付着している。

ＳＫ424土壙（Fig.175）

AX-139区画に検出した。検出面の標高は、6.1～6.2m。SB439と重複関係にあるが、先後関係は不明である。平面形は短楕円形をなし、長径1.4m・短径1.0m・深さ0.5mをはかる。断面形は円錐状に近い形態で、壁面はややきつく立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土は２層に大別できた。自然堆積による埋没状況を示す。埋土中からごく少量の土師器細片が出土したが、図化に耐えるものはない。

ＳＫ433土壙（Fig.177）

BA-133・134区画に検出した。検出面の標高は、6.3～6.4m。SD410と切り合い関係にあり、SK433が先行する。平面形は隅丸長方形をなし、長辺2.6m・短辺1.2m・深さ0.5～0.9mをはかる。断面形は二段掘りの形状を示し、中端ラインは径1.1mほどの円形をなす。東側には平坦な段状部がある。壁面は下部ではきつく立ち上がり、底面はレンズ状をなす。埋土は４層に大別できた。どれも自然堆積によるもので、北側からの流入で埋没したことを示している。②層が底面まで落込んでいた。埋土中から少量の遺物が出土したが、流れ込みによるものである。

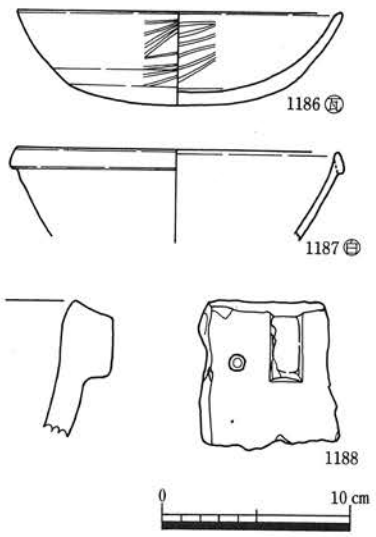


Fig.176　SK421出土遺物出土実測図(1/4)

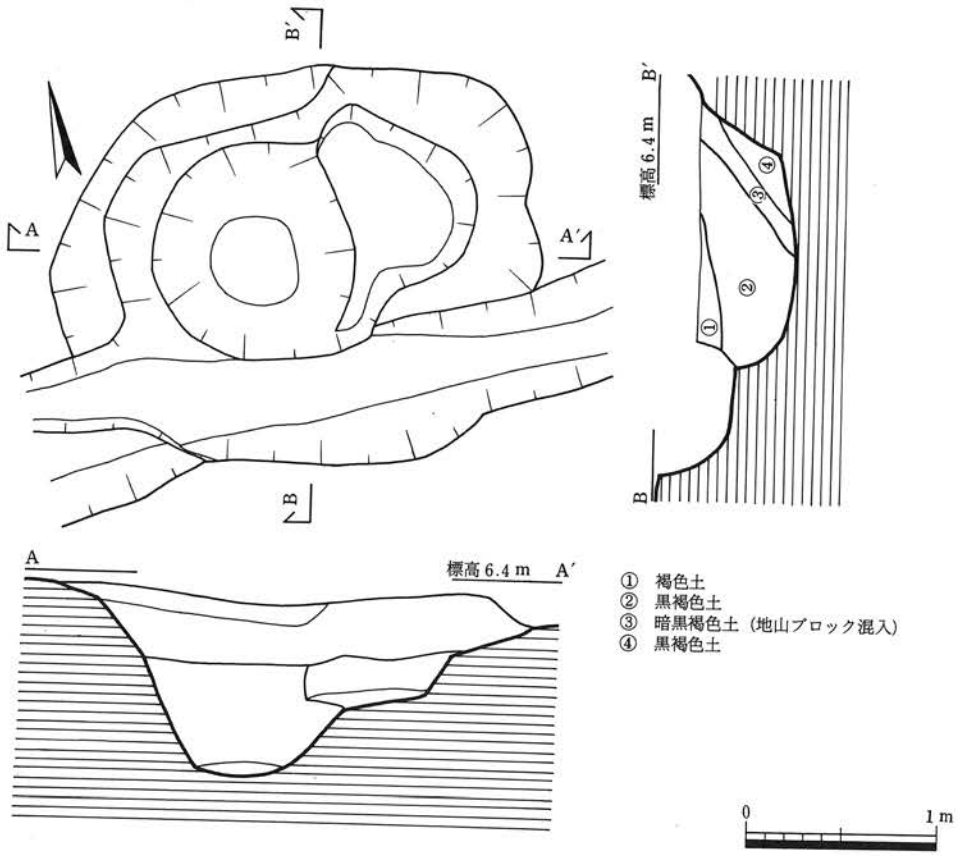


Fig.177　SK433実測図（1/40）

ＳＫ433出土遺物（Fig.178）

土師器・須恵器・白磁が出土した。6点が図化できた。

土師器小皿（1193・1196・1198）　1193・1198は回転糸切り底、1196は回転ヘラ切り底である。体部内外面は回転ナデ、内底部にはナデを加えている。1196・1198は外底部に板目圧痕がある。

須恵器鉢（1197）　東播系の捏鉢である。内外面横ナデ調整。

白磁皿（1194）

白磁碗（1195）　高台には施釉されていない。体部外面には線刻による文様があり、内面見込には沈線がまわる。

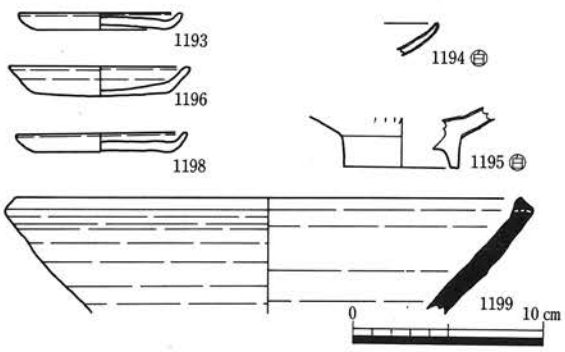
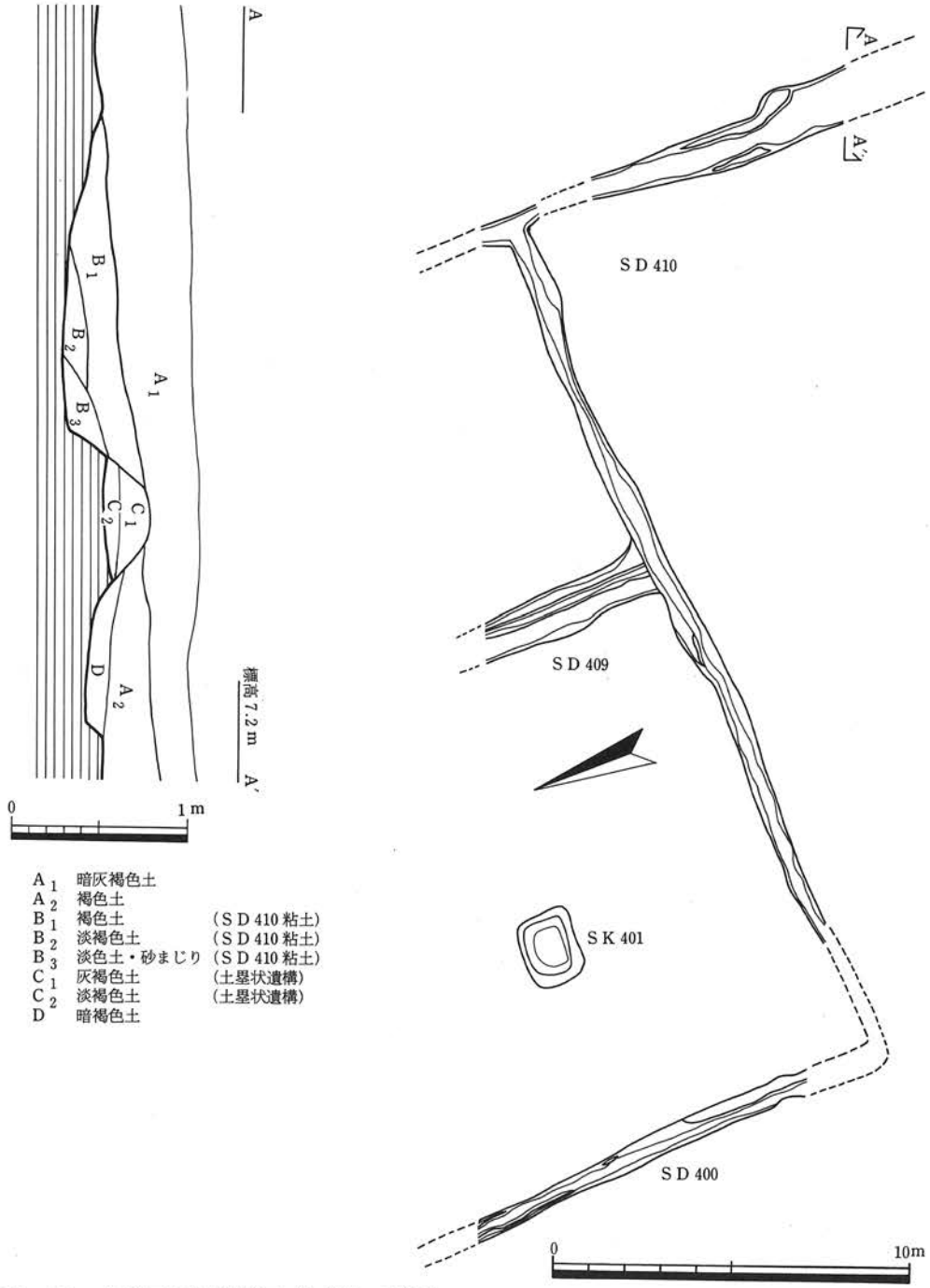


Fig.178　SK433出土遺物実測図（1/4）

5．溝と出土遺物

方形区画溝（Fig.179）

調査区西側で検出した。SD400・409・410により、少なくとも3個の方形区画を形成している。



A1　暗灰褐色土
A2　褐色土
B1　褐色土　（SD 410 粘土）
B2　淡褐色土　（SD 410 粘土）
B3　淡色土・砂まじり（SD 410 粘土）
C1　灰褐色土　（土塁状遺構）
C2　淡褐色土　（土塁状遺構）
D　暗褐色土

Fig.179　方形区画溝実測図（1/200・1/40）

溝の方位角はほぼ真北にのっている。東側ではT字状になりそれ以上のびないが、西側ではさらにのびる可能性がある。検出された範囲での延長は、東西26m以上・南北13m以上をはかる。

SD400は、深さ20～30cmで、南にむかってゆるやかに深くなる。壁面は東にむかってゆるく、西にむかってきつく立ち上がる。SD409は深さ20～30cmで、南にむかってゆるやかに深くなる。壁面は西にむかってゆるく、東にむかってきつく立ち上がる。SD410は深さ5～30cmである。壁面は北と西にむかってゆるく、南と東にむかってきつく立ち上がる。埋土は淡褐色～褐色土であった。方形区画の内側から埋没した堆積状態を示していた。

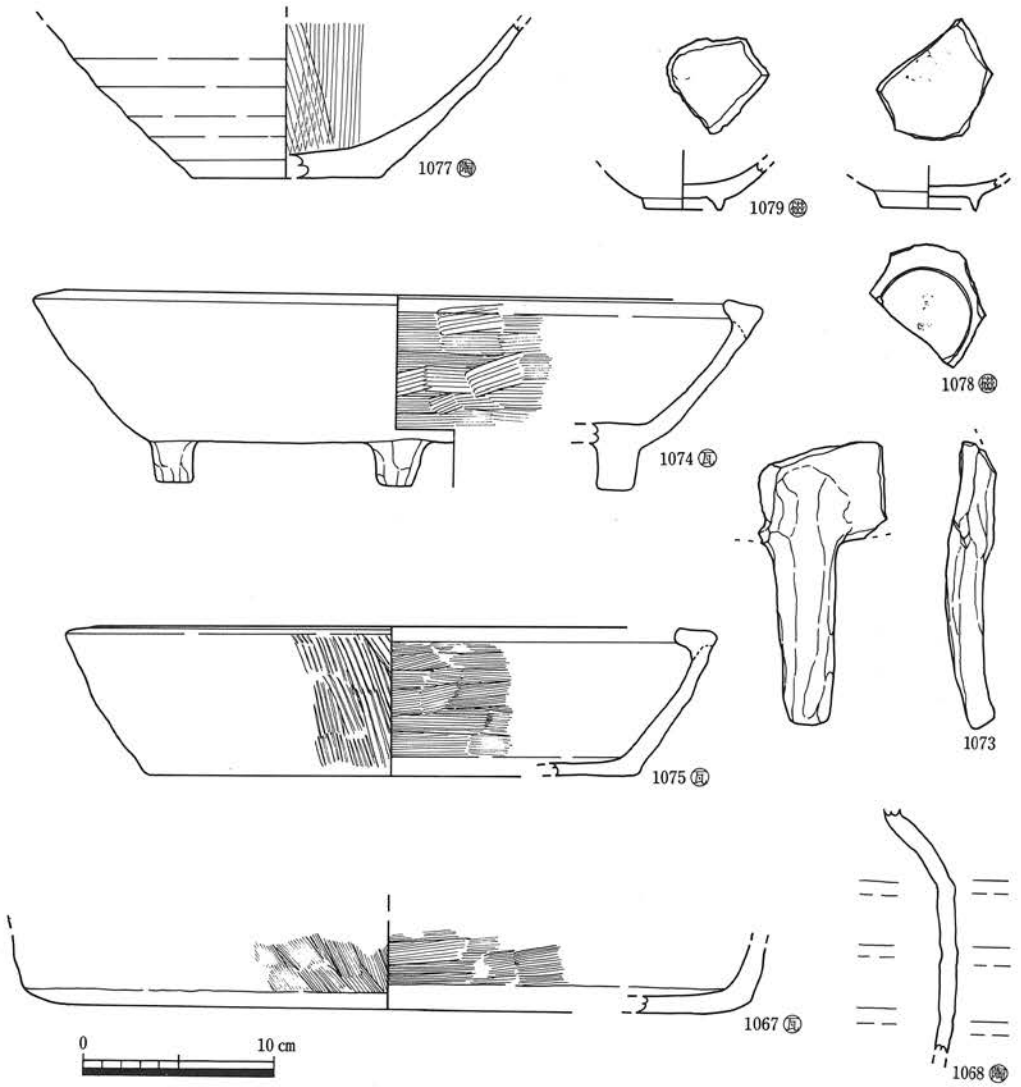


Fig.180　SD410出土遺物実測図（1/4）

表土除去作業の段階では気付かなかったが、調査区南壁の土層確認作業中に、SD410西側の方形区画内部に土塁状の遺構を伴うことを、土層断面観察によって確認した。調査区内では土塁状の遺構と認識できず、バックフォーにより破壊してしまったことに気が付いた。そこで、方形区画溝にからむ他の壁面の土層観察を行ったが、図示している部分以外には土塁状の遺構を確認することはできなかった。畑の開墾等で削平されている可能性もあるが、もとから区画溝にからむすべての部分には土塁状の遺構を伴っていなかった可能性が高いと考える。土塁状の遺構が確認された部分での土層観察では、SD410の壁面の立ち上がりにそった形で、淡褐色粘土と灰褐色土を突き固めて成形している。SD410の埋没状況も土塁状の遺構の上部からの流入により埋没した状況を示している。

この方形区画内部に伴う遺構は、方位角と埋土の状況からみてSK401だけである。

出土遺物は、方形区画溝全体から容器類の細片が出土しているが、SD410のBA-132•133区画でまとまった資料を得た。他の部分の出土遺物は図化に耐えない。

ＳＤ410出土遺物（Fig.180）

土師器・瓦器・磁器・陶器が出土している。8点を図示する。

土師器焙烙（1073）　把手の部分の破片である。基部にススが付着している。

瓦器火鉢（1067・1074・1075）　1067・1075は欠損しているが、本来は脚が付くものと考える。1067は、体部外面には横方向のハケ目、体部内面から内底部は横方向のハケ目、外底部にもハケ目を施している。1074は、口縁部から体部外面は横ナデ、体部内面から内底部にかけては横方向のハケ目、外底部はナデを施している。1075は、口縁部上端は横方向のハケ目、体部外面は斜方向のハケ目、体部内面から内底部にかけては横方向のハケ目、外底部はナデを施している。内外面にススが付着している。

磁器染付碗（1078・1079）　肥前磁器（伊万里焼）と思われる。青白色の釉に呉須で草花文があらわされている。1078は全面施釉、1079は高台には施釉されていない。1078は外底部に銘がある。「宜明」と読めるか。

陶器壷?（1068）　褐色を呈し、外面に格子タタキ目がわずかに残る。肥前陶器（唐津焼）か。

陶器擂鉢（1077）　肥前陶器（唐津焼）である。明褐色を呈する。回転糸切り底で、外面は回転ナデ、内面には16本単位の擂目を放射状に施している。

Ⅷ. 小　結

ここまで、村徳永遺跡J地区の調査で検出された遺構・遺物について、調査時の所見と整理作業で得られた成果について記述した。ここでは、以下の4項目について、さらに説明を加えるとともに若干の問題点を指摘したい。

1．縄文時代の遺物

今回のJ地区の調査および前年のF・G・H地区の調査でも、縄文時代晩期後半に属することが明確な遺構はF地区のF－SK024だけである。しかし、①当該期の遺物は数量的にまとまって出土していること、②F－SK024は貯蔵穴である可能性が高いこと、③かってG地区西方に支石墓が存在していたこと、などからこの周辺には縄文時代晩期後半の集落が営まれていたことが考えられる。ここでは、F・G・H地区の遺物で前年度の報告[1]から漏れたもののうち、特徴的なものについて掲載する。

H－030・G－201は、黒色磨研の浅鉢である。口縁部は横ナデで、内外面をヘラ状工具でていねいに研磨している。H－030は口縁部外面に赤色顔料(丹ではない)が付着する。F－263・H－048は深鉢である。F－263は外面は条痕文を施し、内面はヘラナデである。色調は暗黄褐色。H－048は、内底部はナデ、外面は横ナデ、外底部はヘラナデを施している。色調は暗赤褐色。F－265は高坏の破片である。坏部と脚部の接合部に、刺突文を施した突帯を有する。坏部内底は横方向の研磨、脚部外面は縦方向の研磨、脚部内面はナデを施している。色調は暗赤褐色。F－272は壷である。外面は斜～横方向の研磨を施しているが、肩部付近にはハケ目が残る。内面は肩部付近が横ナデ、中位が斜方向の研磨、下位はナデを施す。外底部はヘラナデで、色調は暗褐色。

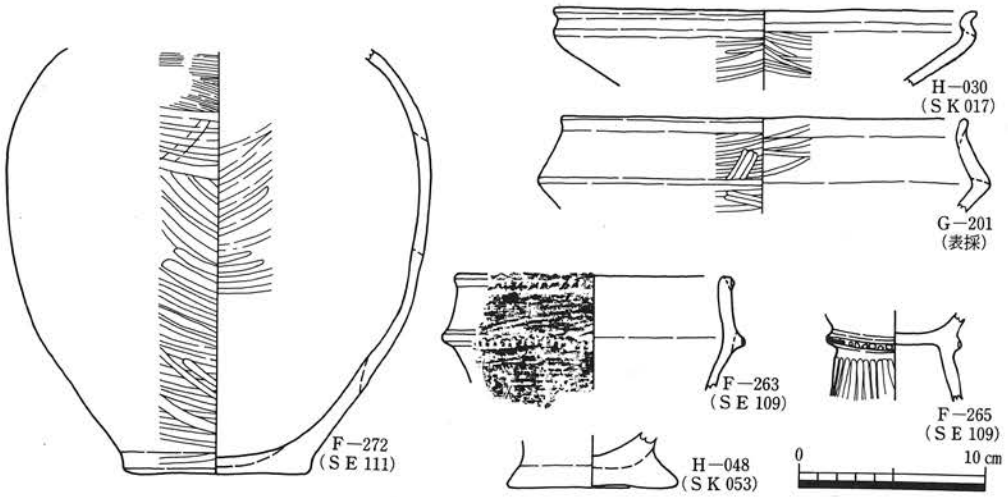


Fig.181　縄文土器実測図（1/4）

2．弥生時代集落

今回のJ地区および前年度の調査でも大きな成果を収めたのは弥生時代集落についてである。前年度の調査で得られた所見[1)]を変更する必要は認められないが、補足的な説明を行う。

この集落はE・F・G・H・J地区にまたがり、遺構が確認された範囲は南北450m・東西300m・面積70,000㎡以上に及ぶ。検出された遺構の大部分は後期前半に属するが、おおまかに区切ると、〔A期〕中期初頭～前半・〔B期〕中期末～後期初頭・〔C期〕後期前半、の3期にわかれる。A～C期に属する遺構を整理してみると、F地区北端・J1区東端・J2区西端付近でA期に属する貯蔵穴の可能性がある土壙を中心とした遺構群が掘り込まれ、次にB期に属する周溝状遺構を中心とした遺構群がF地区南端・G地区・J1区・J2区にかけて分布している。そして最後に、C期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝を中心とした遺構群が、F地区・G地区・H地区・J1区・J2区の全面に分布している。

前年度の調査から課題である、①掘立柱建物群のグルーピング、②竪穴住居群と掘立柱建物群の有機的な関係、③掘立柱建物群の機能・用途、④断続しながらつながる可能性がある溝と掘立柱建物群の関連、の各点については、十分に解明できる成果を今回の調査で挙げることはできなった。以下、各点について、今回の調査で得られた所見を記述する。

①については、1間×1間のものと1間×2間のものでは分布がやや異なるようである。調査区全体をみると、1間×1間のものが全面に分布し、そのなかにいくつかのまとまりをもって1間×2間のものが分布している。このことは③に関連するが、両者ともに同様な柱穴構造をもっているにもかかわらず、両者の機能・用途が異なる可能性を示唆している。

②についても前年度と同様の所見であるが、(a)掘立柱建物建物が竪穴住居を切り込んでいる例はあるが逆の例はない、(b)掘立柱建物柱穴出土遺物の方が竪穴住居出土のものよりやや新しい傾向にある、(c)竪穴住居群は構造・規模的にはバリエーションに富み切り合い関係にあるものも多いが出土遺物には大きな時期差は認められない、の3点から両者が併存していない可能性もある。このことは③にも関連するが、すべての掘立柱建物が高床倉庫ではなく、少なくとも一部の建物については平地式の住居である可能性を想定する必要がある。

③については、前述した以外の点では、特異な構造であるF地区SB015・G地区SB333に関する問題がある。両者ともに、多数の柱（F－SB015が21本、G－SB333が19本以上）をもち、複数の柱穴が溝状の遺構によって共有される形態（一見すると布掘り的）を示す。こうした類例を探した結果、必ずしも類似したものではないが、やはり特異な形態を示す遺構が、大谷遺跡（福岡市席田遺跡群）・井相田C遺跡（福岡市）で検出されていることを知った。どちらも、周壁が残っていたことから竪穴住居とされているが、ともに12個の柱穴をもつ。大谷遺跡A区第2号住居跡[2)]は、12個の柱穴を2間×3間の総柱状に方形の竪穴内に配し、周壁に沿って溝状の遺構（壁溝）が柱穴とからむ形態で存在する。時期的には弥生時代中期終末から後期初頭前後に

属する。井相田C遺跡[2]で検出されたものは、12個の柱穴が方形の竪穴の周壁にそってならび、周壁に沿った溝状の遺構の中に柱穴が存在する形態らしい。時期的には弥生時代前期に属する。どちらも通常の竪穴住居と併存している。こうした特異な多柱穴の遺構については今後さらに検討を要する。F－SB015・G－SB333についても前年度報告にも指摘してあるとおり、平地式の住居や他の構造物の可能性を含めて検討していく必要がある。

④については、F－SD001・081・103が断続的につながり、これらの溝が掘立柱建物群になんらかの規制を与えている可能性が、前年度報告で指摘されていた。今回の調査では、これらにつながる可能性があるJ－SD001を検出したが、掘立柱建物群との間には強い整合性は認められなかった。

以上が、今回の調査で得られた弥生時代集落についてのおおまかな所見である。さらに、今年度は北東方のK地区の調査（来年度報告予定）が行われている。多数の竪穴住居を中心とした弥生時代集落が検出されているが、F・G・H・J地区と連続する遺跡であるかは検討を要する。K地区の竪穴住居は、弥生時代前期にのぼる可能性がある８本柱の円形住居も検出されているが、大多数を占めるのは後期中頃を中心とした時期に属するものである。K地区で検出された竪穴住居群の方が、時期的には、F・G・H・J地区で検出された掘立柱建物群に対応する可能性もあり、竪穴住居群と掘立柱建物群の関連についてはこうした点を踏まえて今後検討を行う必要がある。

３．方形区画溝

中世から近世にかけて、方形状にまわる溝の内部に掘立柱建物・柵列・井戸・土壙等が伴う遺構の組合せは「方形区画」、この方形にまわる溝は「方形区画溝」と呼称されているが、現在までのところ明確な定義はなされていない。

コーナー部分や方形状に対応するかたちのものを含めて、こうした方形区画溝と思われるものは、知る限りでは県内の９遺跡13地点で検出されている（次表参照）。しかし、調査面積等の関係もあり、全体の形状とその内部に伴う遺構の組合せまで把握できる例は本村遺跡１区[3]・本告牟田遺跡[4]・大曲A遺跡[5]だけである。

Fig.182　方形区画溝比較図（1/800）

方形区画は居住施設に関連するものであるが、その形態から、おおまかに次の３類に分類できよう。(1)柏原遺跡群K遺跡[6]のように、内部には複数の掘立柱建物・柵列・井戸等を主体とする施設を伴うもので、居館としての機能を想定できるものである。諸岡館[1,4]のような土塁を伴い定型化した「方形館」につながる系譜と考えられる。(2)本告牟田遺跡のように、小

3．方形区画溝

遺跡名（地区名）	所在地	区画の形状・規模	文献
本村遺跡（1区）	佐賀市久保泉町下和泉	比較的大規模のものが2基並ぶ	3）
本村遺跡（2区）	佐賀市久保泉町下和泉	形状・規模不明	3）
村徳永遺跡（B地区）	佐賀市久保泉町上和泉	コーナー検出、他は不明	7）
村徳永遺跡（D地区）	佐賀市久保泉町上和泉	2基のコーナー検出、他は不明	8）
徳富権現堂遺跡	佐賀郡諸富町徳富	コーナー検出、45m以上	9）
小杭村中遺跡（1区）	佐賀郡諸富町小杭・大堂	コーナー検出、54m以上	10）
小杭村中遺跡（2区）	佐賀郡諸富町小杭・大堂	コーナー検出、他は不明	10）
崎村遺跡	神埼郡千代田町渡瀬	形状・規模不明	11）
下六丁遺跡	神埼郡神埼町横武	方形？、一辺24m	10）
本告牟田遺跡	神埼郡神埼町本告牟田	一辺15mの区画が複数連結	4）
大曲A遺跡	神埼郡東脊振村大曲	比較的大規模なものが5基並ぶ	5）
大曲B遺跡	神埼郡東脊振村大曲	台形？、比較的大規模のもの	12）
戊遺跡	小城郡三日月町三津	方形？、比較的大規模のもの	13）

規模な複数の区画が連結した形態をなすもので、各区画に1棟の掘立柱建物を伴い区画溝を共有している場合が多い。(3)両者の中間的な形態をなすもので、　よりも内部施設は貧弱であり、(2)のように連結あるいは近接している例もある。本村遺跡1区・大曲A遺跡がこれにあたろう。時期的には、(1)は13世紀には出現し、(2)は16世紀には出現しているようだ。

今回の調査では、J3区とJ4区で方形区画溝を検出している。どちらも検出面積は狭く、掘立柱建物は確認できていない。

J3区で検出された方形区画溝は、(a)黒色土器A類を主体とする遺物包含層IVb層を切り込み、溝の埋没後に瓦器碗を伴う包含層IVa層がかぶっていたこと、(b)出土遺物に瓦器碗を含んでいること、から12～13世紀の年代が考えられる。調査地点はやや南に離れているが、前年度に調査したE地区[11]では、似たような規模の溝と掘立柱建物が同じような方位で検出されているので、方形区画が複数並んでいた可能性はある。

J4区で検出された方形区画溝は、肥前陶器（唐津焼）を伴うので、17世紀初頭～前半の年代が考えられる。前述した(2)に属するもので、本告牟田遺跡で検出されたものと区画のありかたが類似する（Fig.182参照）。おそらく各区画に1棟づつの掘立柱建物が伴うものと考えられる。

4．中世の遺物

今回の調査では、主として瓦器碗を伴う時期の良好な遺物が多数出土しているが、ここでは土師器鍋についてふれたい。

今回の調査では、土師器鍋類の出土数はかなり少なく、やや後出する時期の本村遺跡の調査に比して奇異な感がある。煮沸容器である土師器鍋は、遺跡の性格にあまり左右されず、一定の数量は出土するものと考えられる。こうした様相が、今回の調査地点に特有のものなのか、この時期の土師器鍋の流通が小規模なものであったのかは、今後の検討を要する。

現在、佐賀平野の土師器鍋は、徳永分類[15]により6類に分類されているが、そのⅠ類の可能性があるものとⅡ類のみが出土している。Ⅲ類がまったく出土していないことから、やはりⅢ類は瓦器碗を伴わないといえよう。

参考文献

1）佐賀市教育委員会『村徳永遺跡－E･F･G･H地区の調査－』佐賀市文化財調査報告書第32集　平成2年3月

2）福岡市教育委員会『席田遺跡群（Ⅵ）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第218集　平成元年　（井相田C遺跡3次調査については調査に参加した牟田祐二氏からもご教示を得た。）

3）佐賀市教育委員会『本村遺跡－1・2区の調査－』佐賀市文化財調査報告書第29集　平成2年3月

4）神埼町教育委員会『本告牟田遺跡・的小渕遺跡』神埼町文化財調査報告書第13集　昭和61年

5）東脊振村教育委員会『大曲遺跡群Ⅱ』東背振村文化財調査報告書第9集　昭和60年

6）福岡市教育委員会『柏原遺跡群Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集　昭和62年

7）佐賀市教育委員会『村徳永遺跡（A・B地区）』佐賀市文化財調査報告書第26集　平成元年3月

8）佐賀市教育委員会『南宿遺跡・本村遺跡・阿高遺跡・牟田寄遺跡・村徳永遺跡・古村遺跡』佐賀市文化財調査報告書第28集　平成2年3月

9）諸富町教育委員会『徳富権現堂遺跡』諸富町文化財調査報告書　昭和59年

10）佐賀県教育委員会『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書2』佐賀県文化財調査報告書第93集　平成元年3月

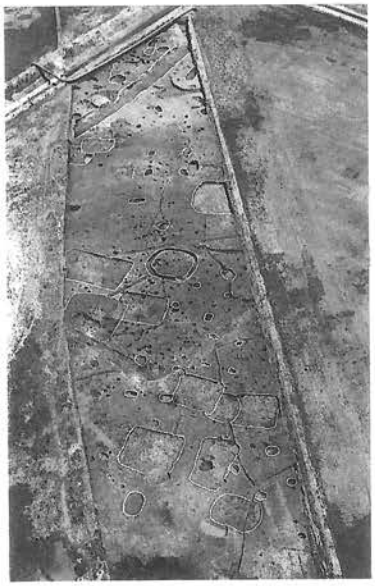
11）千代田町教育委員会『崎村遺跡』千代田町文化財調査報告書第1集　昭和56年3月

12）東脊振村教育委員会『大曲遺跡群Ⅰ』東背振村文化財調査報告書第8集　昭和59年3月

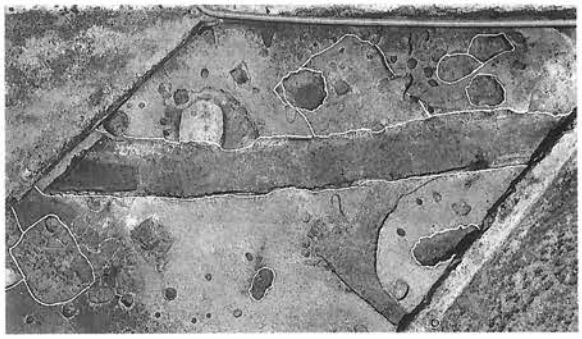
13）佐賀県教育委員会『戊遺跡』佐賀県文化財調査報告書第36集　昭和51年3月

14）福岡市教育委員会『諸岡遺跡－第14・17次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集　昭和59年

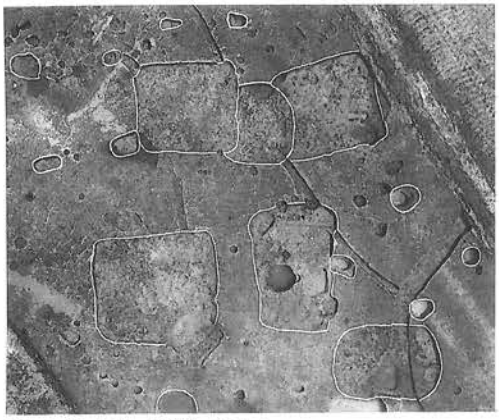
15）徳永貞紹「肥前における中世後期の在地土器」日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究Ⅵ』平成2年12月



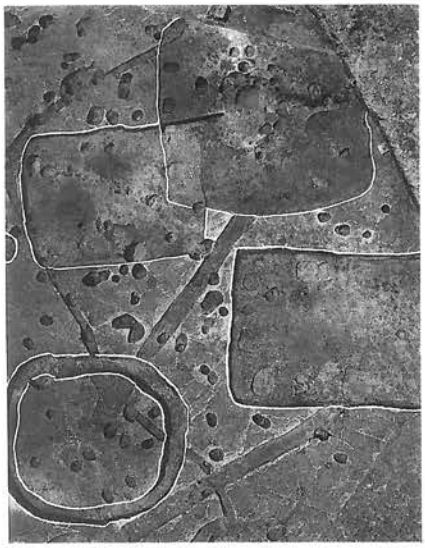
PL. 1-1　J1区全景　西から



PL. 1-2　J1区東端　西から

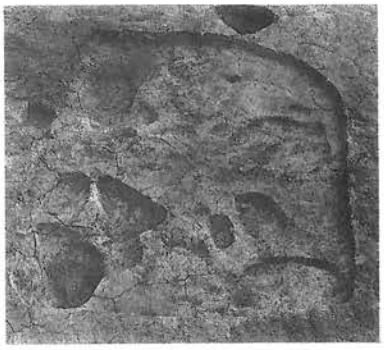


PL. 1-3　J1区西側　西から



PL. 1-4　J1区中央　東から

PL. 1-5　SH011北から

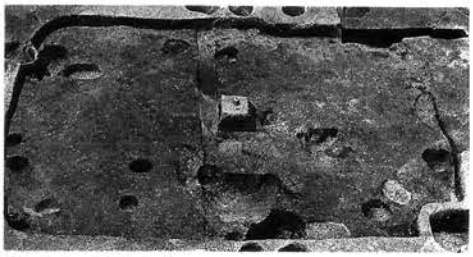


PL. 1-6　SH012北から

PL. 2

J1区

PL. 2-1　SH014 東から



PL. 2-2　SH016 東から

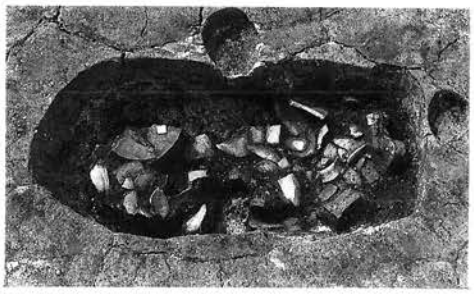
PL. 2-3　SH022 南から

PL. 2-4　SH024 西から

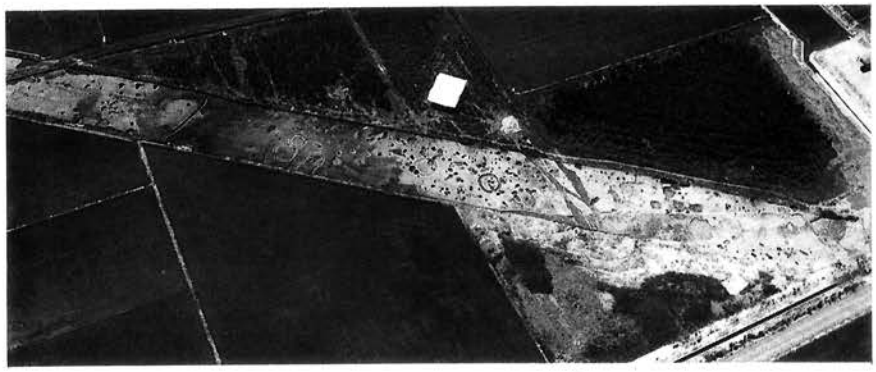
PL. 2-5　SD001 南から

PL. 2-6　SH025 西から

PL. 2-7　SK008 東から



PL. 2-8　SK018 東から



PL. 3-1　J2区全景　北から

PL. 3-2　J2区西側　南から

PL. 3-3　J2区中央　南から

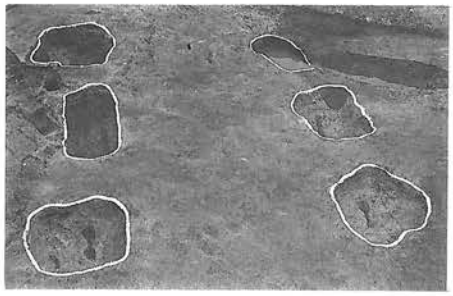
PL. 3-4　J2区東側　南から

PL. 4

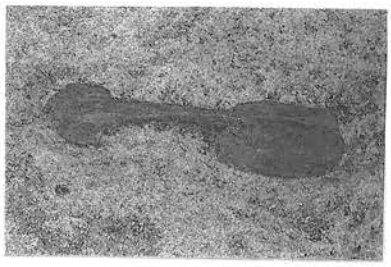
J2区

PL. 4-1　SH109 南から

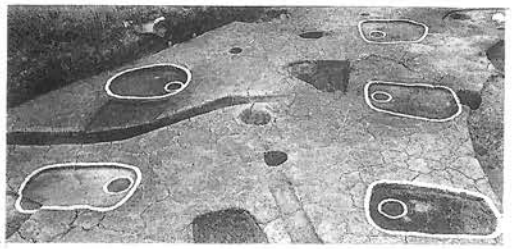
PL. 4-2　SB200 北から



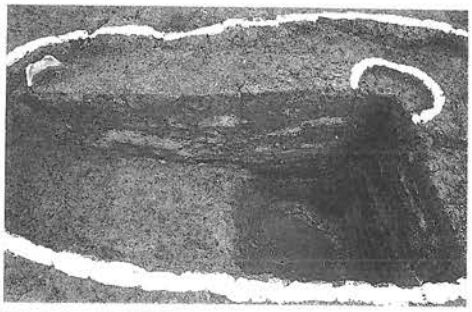
PL. 4-3　SB201 西から



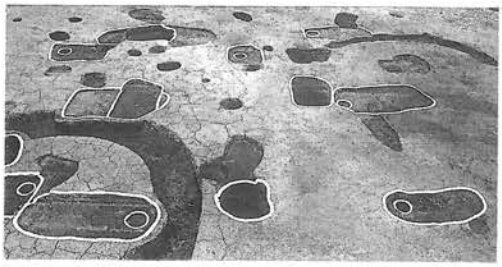
PL. 4-4　SB201 P 3　枕木



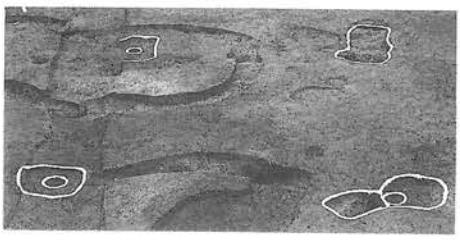
PL. 4-5　SB209 北から



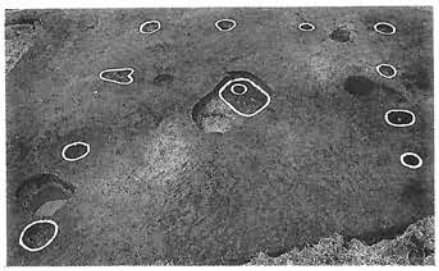
PL. 4-6　SB219 P 3



PL. 4-7　SB204 東から

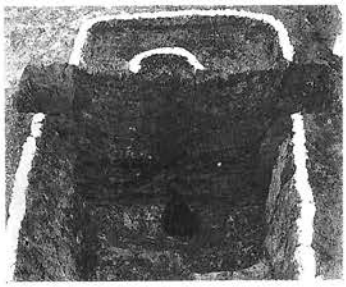


PL. 4-8　SB211 西から



PL. 5-1 SB215 南から

PL. 5-2 SB218 西から



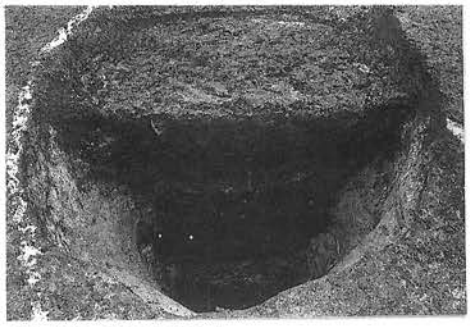
PL. 5-3 SB223 P 2

PL. 5-4 SB219 P 4

PL. 5-5 SE108 南から

PL. 5-6 SE122 南から

PL. 5-7 SE160 西から



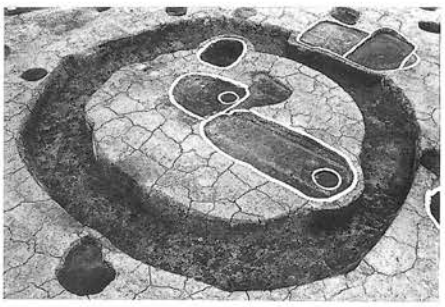
PL. 5-8 SE193 南から

PL. 6　　J2区

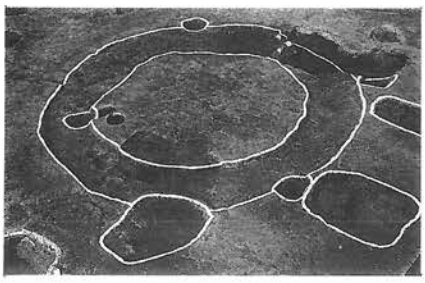
PL. 6-1　SK135 西から

PL. 6-2　SK136 東から

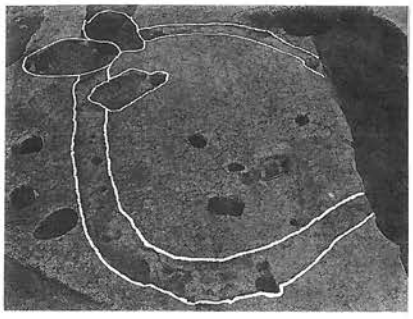
PL. 6-3　SK137 北から



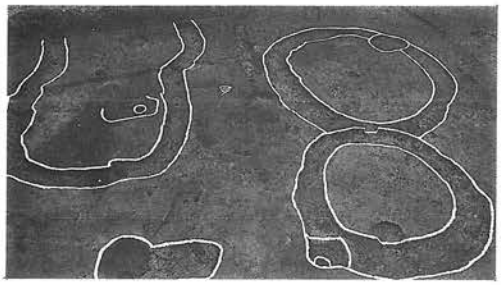
PL. 6-4　SR150 北から



PL. 6-5　SR152 西から



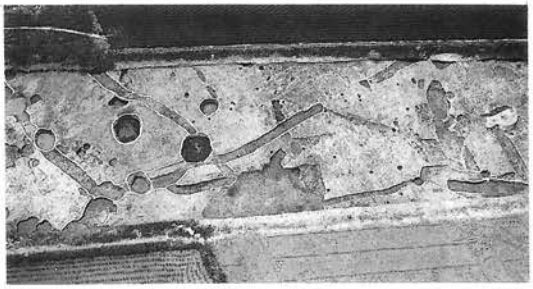
PL. 6-6　SR153 南から



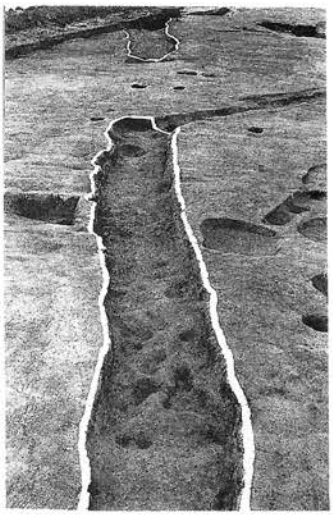
PL. 6-7　SR154・155・156 南から

PL. 6-8　SD101 西から

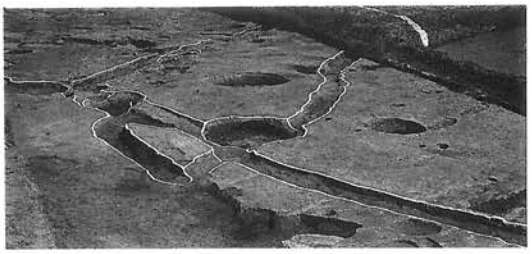
PL. 7-1 J3区全景 北から



PL. 7-2 方形区画全景 北から



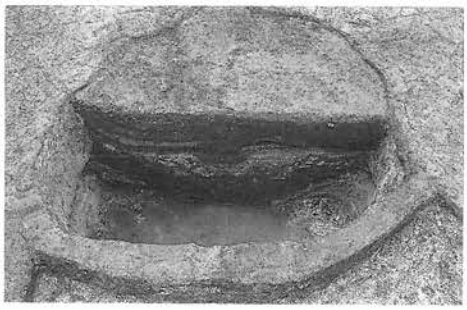
PL. 7-4 方形区画 陸橋部東から



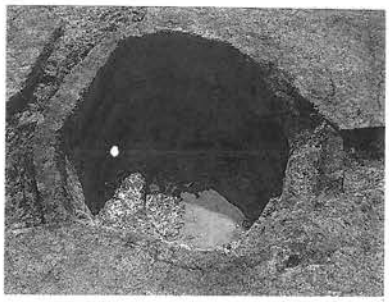
PL. 7-3 方形区画東側 西から

PL. 7-5 SE318 北から

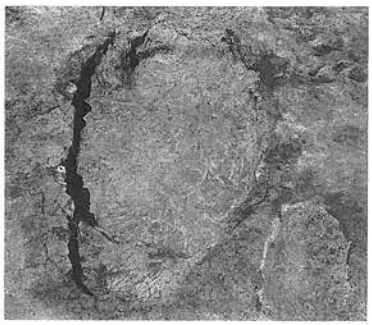
PL. 7-6 SE322 北から



PL. 8-1　SE319 北から

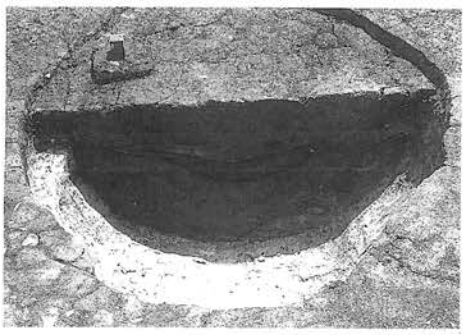


PL. 8-2　SE319 西から

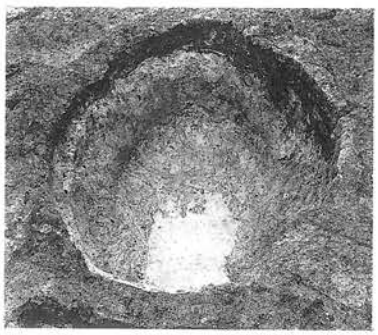


PL. 8-3　SK310 北から

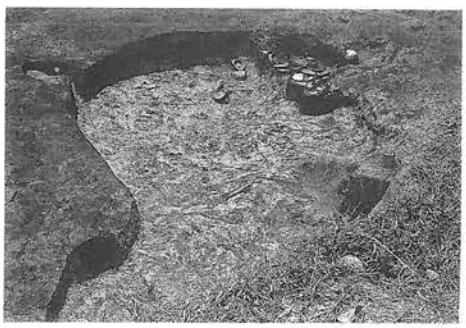
PL. 8-4　SK311 北から



PL. 8-5　SK328 北から



PL. 8-6　SK328 北から

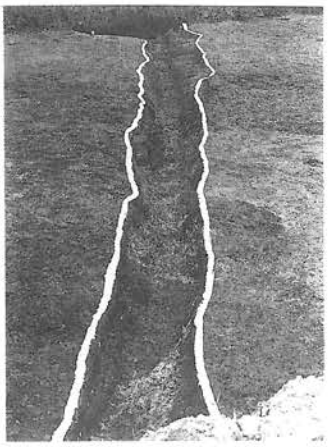


PL. 8-7　SK327 北から

PL. 8-8　P3001 西から

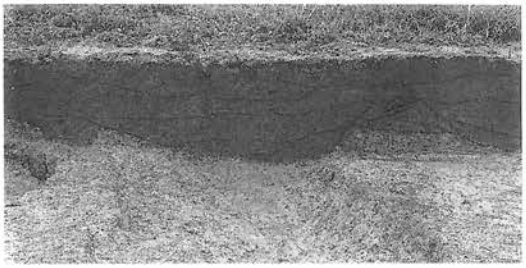
PL. 9-1　J4区全景　西から

PL. 9-2　J4区全景　東から



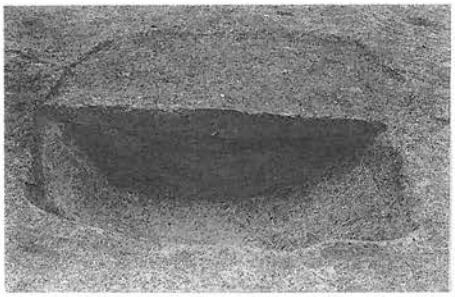
PL. 9-3　SO400 南から

PL. 9-4　SD410 西から

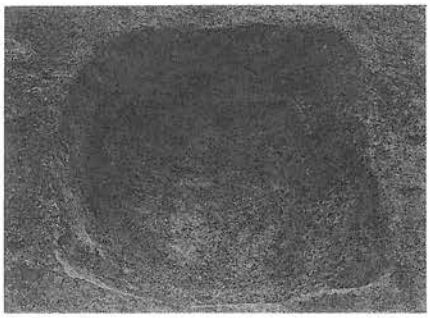


PL. 9-5　J4区南壁　SD410 と土異状遺構

PL. 9-6　SE403 南から



PL. 9-7　SK401 西から

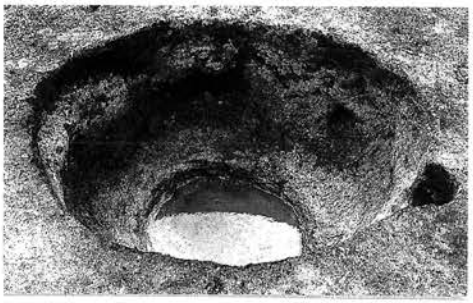


PL. 9-8　SK401 西から

PL. 10

J4区

PL. 10-1　SK404 北から



PL. 10-2　SK404 北から

PL. 10-3　SK407 南から

PL. 10-4　SK408 南から

PL. 10-5　SK425 西から

PL. 10-6　SK420 南から

PL. 10-7　SB439 東から

PL. 11-1 078 (SH011)

PL. 11-2 057 (SK005)

PL. 11-3 103 (SH014)

PL. 11-4 132 (SE020)

PL. 11-5 143 (SK026)

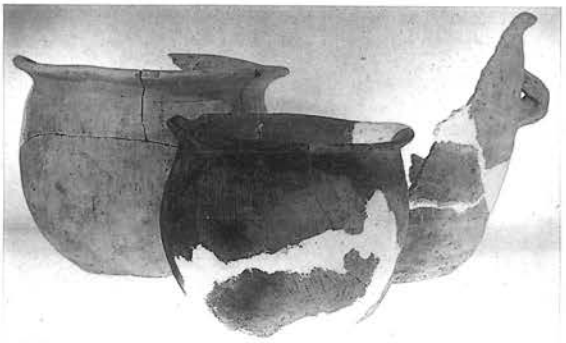
PL. 11-6 226 (SE104)

PL. 11-7 243 (SE105)

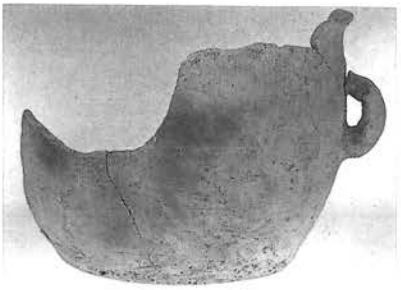
PL. 11-8 272 (SE108)

PL. 11-9 450 (SK161)

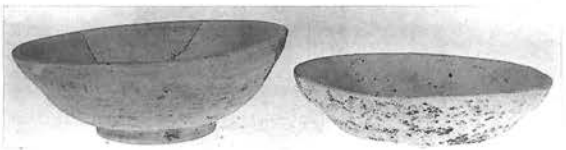
PL. 11-10 500 (SK176)



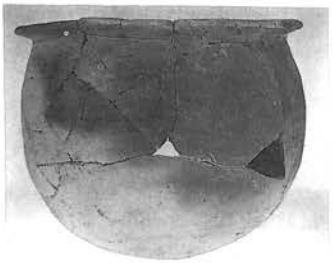
PL. 12-1 SE320 出土土師器



PL. 12-2 364 (SK135)

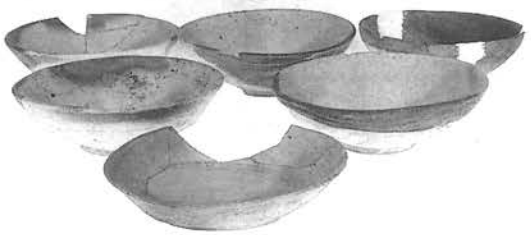


PL. 12-3 SK403 出土土師器 (994・986)

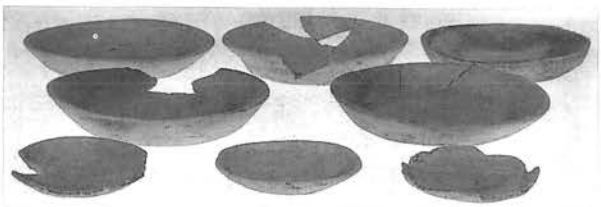


PL. 12-4 382 (SK137)

PL. 12-5 365 (SK135)



PL. 12-6 SK408 出土土師器・瓦器



PL. 12-7 SK413 出土土師器

PL. 12-8 1043 (SK407)

PL. 12-9 553 (SK183)

PL. 12-10 SK401 出土陶器・瓦器

村徳永遺跡収蔵品目録

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 002	甕	弥生土器	弥生	不明	口径26.0㎝ 底径 ── 器高 4.3㎝	ＳＤ００１	1990.05	1- 2	57- 002	1	A
MTN-J- 003	甕	弥生土器	弥生	不明	口径22.0㎝ 底径 ── 器高 4.7㎝	ＳＤ００１	1990.05	1- 3	57- 003	1	A
MTN-J- 004	甕	弥生土器	弥生	不明	口径31.0㎝ 底径 ── 器高 7.2㎝	ＳＤ００１	1990.05	1- 4	57- 004	1	A
MTN-J- 005	甕	弥生土器	弥生	不明	口径32.0㎝ 底径 ── 器高 8.9㎝	ＳＤ００１	1990.05	2- 5	57- 005	1	A
MTN-J- 006	甕	弥生土器	弥生	不明	口径29.6㎝ 底径 ── 器高 8.8㎝	ＳＤ００１	1990.05	3- 6	57- 006	1	A
MTN-J- 007	甕	弥生土器	弥生	不明	口径42.6㎝ 底径 ── 器高 5.4㎝	ＳＤ００１	1990.05	3- 7	57- 007	1	A
MTN-J- 008	甕	弥生土器	弥生	不明	口径22.6㎝ 底径 ── 器高15.8㎝	ＳＤ００１	1990.05	4- 8	57- 008	1	A
MTN-J- 009	甕	弥生土器	弥生	不明	口径13.8㎝ 底径 ── 器高 9.2㎝	ＳＤ００１	1990.05	4- 9	57- 009	1	A
MTN-J- 012	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 7.7㎝ 器高 8.5㎝	ＳＤ００１	1990.05	4- 12	58- 012	1	A
MTN-J- 013	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.6㎝ 器高 8.0㎝	ＳＤ００１	1990.05	5- 13	58- 013	1	A
MTN-J- 014	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 7.7 器高12.4㎝	ＳＤ００１	1990.05	8- 14	58- 014	1	A
MTN-J- 015	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 8.0㎝ 器高 8.5㎝	ＳＤ００１	1990.05	6- 15	58- 015	1	A
MTN-J- 016	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 8.0㎝ 器高10.1㎝	ＳＤ００１	1990.05	6- 16	58- 016	1	A
MTN-J- 017	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.2㎝ 器高 9.8㎝	ＳＤ００１	1990.05	6- 17	58- 017	1	A
MTN-J- 018	壺	弥生土器	弥生	不明	口径13.9㎝ 底径 ── 器高 4.4㎝	ＳＤ００１	1990.05	10- 18	58- 018	1	A
MTN-J- 019	壺	弥生土器	弥生	不明	口径20.0 底径 ── 器高 8.2㎝	ＳＤ００１	1990.05	15- 19	58- 019	1	A
MTN-J- 020	壺	弥生土器	弥生	不明	口径21.1㎝ 底径 ── 器高 4.0㎝	ＳＤ００１	1990.05	10- 20	58- 020	1	A
MTN-J- 021	壺	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径11.2 器高 5.6㎝	ＳＤ００１	1990.05	8- 21	58- 021	1	A
MTN-J- 022	壺	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 4.6 器高 3.0㎝	ＳＤ００１	1990.05	8- 22	58- 022	1	A
MTN-J- 023	高坏	弥生土器	弥生	不明	口径19.8 底径 ── 器高 3.5㎝	ＳＤ００１	1990.05	7- 23	58- 023	1	A
MTN-J- 024	高坏	弥生土器	弥生	不明	口径18.4 底径 ── 器高 4.8㎝	ＳＤ００１	1990.05	7- 24	58- 024	1	A
MTN-J- 025	高坏	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径15.2 器高 7.4㎝	ＳＤ００１	1990.05	5- 25	58- 025	1	A
MTN-J- 026	高坏	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径19.0 器高14.4㎝	ＳＤ００１	1990.05	5- 26	58- 026	1	A
MTN-J- 027	高坏	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 7.8 器高 5.0㎝	ＳＤ００１	1990.05	5- 27	58- 027	1	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 028	鉢	弥生土器	弥　生	３０	口径20.0　底径 6.2　器高13.3	ＳＤ００１	1990.05	9- 28	60- 028	1	A
MTN-J- 029	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径23.0復　底径 ―― 器高 9.6残	ＳＤ００１	1990.05	2- 29	60- 029	1	A
MTN-J- 030	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径22.0復　底径 ―― 器高 9.4残	ＳＤ００１	1990.05	2- 30	60- 030	1	A
MTN-J- 031	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径15.0復　底径 ―― 器高12.4残	ＳＤ００１	1990.05	10- 31	57- 031	1	A
MTN-J- 032	鉢	弥生土器	弥　生	７５	口径 8.2　底径 3.2　器高 4.6	ＳＤ００１	1990.05	7- 32	60- 032	1	A
MTN-J- 033	鉢	弥生土器	弥　生	２０	口径10.4復　底径 4.6復　器高 6.9	ＳＤ００１	1990.05	9- 33	60- 033	1	A
MTN-J- 034	鉢	弥生土器	弥　生	５０	口径13.9　底径 5.9　器高 6.5	ＳＤ００１	1990.05	8- 34	60- 034	1	A
MTN-J- 035	器台	弥生土器	弥　生	９５	口径14.7　底径14.8　器高18.7	ＳＤ００１	1990.05	11- 35	60- 035	1	A
MTN-J- 036	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径18.2復　器高16.5残	ＳＤ００１	1990.05	11- 36	60- 036	1	A
MTN-J- 037	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径 4.2　底径 ――　器高 6.7残	ＳＤ００１	1990.05	12- 37	60- 037	1	A
MTN-J- 038	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径12.0　器高11.8残	ＳＤ００１	1990.05	12- 38	60- 038	2	A
MTN-J- 039	器台	弥生土器	弥　生	６０	口径11.1　底径15.7　器高16.9	ＳＤ００１	1990.05	13- 39	60- 039	2	A
MTN-J- 040	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径13.8　底径 ――　器高16.9残	ＳＤ００１	1990.05	12- 40	60- 040	2	A
MTN-J- 041	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径15.9　底径 ――　器高14.0	ＳＤ００１	1990.05	13- 41	60- 041	2	A
MTN-J- 042	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径42.0復　底径 ――　器高18.8残	ＳＤ００１	1990.05	14- 42	59- 042	2	A
MTN-J- 044	器種不明	弥生土器	弥　生	不明	口径22.0　底径 ――　器高 3.6残	ＳＤ００１	1990.05	11- 44	60- 044	2	A
MTN-J- 045	石包丁	石　器	弥　生	不明	厚さ 0.9	ＳＤ００１	1990.05	15- 45	61- 045	2	A
MTN-J- 046	石包丁	石　器	弥　生	不明	厚さ 0.8	ＳＤ００１	1990.05	15- 46	61- 046	2	A
MTN-J- 047	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ11.2残　幅 7.0　厚さ 5.0	ＳＤ００１	1990.05	15- 47	61- 047	2	A
MTN-J- 048	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ 8.9　幅 3.8　厚さ 2.5	ＳＤ００１	1990.05	10- 48	61- 048	2	A
MTN-J- 049	紡錘車	土製品	弥　生	完存		ＳＤ００１	1990.05	10- 49	61- 049	2	A
MTN-J- 050	鍬	木製品	弥　生	不明	長さ32.2残　幅 9.5残　厚さ 1.9	ＳＤ００１	1990.05	16- 50	61- 050	2	A
MTN-J- 051	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径24.2復　底径 ――　器高18.3残	ＳＫ００４	1990.05	17- 51	42- 051	3	A
MTN-J- 052	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径24.2復　底径 ――　器高 7.8残	ＳＫ００４	1990.05	17- 52	42- 052	3	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 053	甕	弥生土器	弥生	不明	口径16.0復 底径 ── 器高 6.3残	ＳＫ００４	1990.05	18- 53	42- 053	3	A
MTN-J- 054	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 7.0 器高 7.7残	ＳＫ００４	1990.05	18- 54	42- 054	3	A
MTN-J- 055	壺	弥生土器	弥生	不明	口径25.8復 底径 ── 器高13.7残	ＳＫ００４	1990.05	19- 55	42- 055	3	A
MTN-J- 056	壺	弥生土器	弥生	不明	口径29.8復 底径 ── 器高17.0残	ＳＫ００４	1990.05	20- 56	42- 056	3	A
MTN-J- 057	甕	弥生土器	弥生	８０	口径22.9 底径 7.5 器高27.7	ＳＫ００５	1990.05	21- 57	51- 057	4	A
MTN-J- 058	管玉	石製品	弥生	完存	長さ 1.9 径 0.6 孔径 0.3	ＳＫ００５	1990.05	21- 58	51- 058	4	A
MTN-J- 059	坏	土師器	平安	９０	口径15.6 底径 8.3 器高 7.4	ＳＫ００８	1990.05	22- 59	53- 059	3	A
MTN-J- 060	坏	土師器	平安	不明	口径 ── 底径 7.3 器高 2.7残	ＳＫ００８	1990.05	22- 60	53- 060	3	A
MTN-J- 062	坏	土師器	平安	不明	口径 ── 底径 7.5 器高 1.8残	ＳＫ００８	1990.05	22- 62	53- 062	3	A
MTN-J- 063	甕	土師器	平安	不明	口径22.2復 底径 ── 器高12.7残	ＳＫ００８	1990.05	22- 63	53- 063	3	A
MTN-J- 064	甕	弥生土器	弥生	６０	口径33.2 底径 9.2 器高34.8	ＳＨ０１１	1990.05	23- 64	9- 064	5	A
MTN-J- 065	甕	弥生土器	弥生	６０	口径32.7 底径 8.8 器高34.8	ＳＨ０１１	1990.05	24- 65	9- 065	5	A
MTN-J- 066	甕	弥生土器	弥生	不明	口径31.0復 底径 ── 器高12.2残	ＳＨ０１１	1990.05	25- 66	10- 066	4	A
MTN-J- 067	甕	弥生土器	弥生	不明	口径30.4復 底径 ── 器高15.1	ＳＨ０１１	1990.05	25- 67	10- 067	4	A
MTN-J- 068	甕	弥生土器	弥生	不明	口径31.8復 底径 ── 器高17.4残	ＳＨ０１１	1990.05	26- 68	10- 068	4	A
MTN-J- 069	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 8.0 器高15.7残	ＳＨ０１１	1990.05	27- 69	10- 069	4	A
MTN-J- 070	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 8.8 器高10.1残	ＳＨ０１１	1990.05	27- 70	10- 070	4	A
MTN-J- 071	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.8 器高10.1残	ＳＨ０１１	1990.05	27- 71	10- 071	4	A
MTN-J- 072	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径10.4 器高 4.5残	ＳＨ０１１	1990.05	27- 72	10- 072	4	A
MTN-J- 073	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径13.2 器高 5.8残	ＳＨ０１１	1990.05	27- 73	10- 073	4	A
MTN-J- 074	甕	弥生土器	弥生	８５	口径20.0 底径 7.8 器高19.8	ＳＨ０１１	1990.05	28- 74	11- 074	4	A
MTN-J- 075	甕	弥生土器	弥生	７０	口径23.8 底径 8.6 器高21.8	ＳＨ０１１	1990.05	29- 75	11- 075	7	A
MTN-J- 076	甕	弥生土器	弥生	２５	口径20.7復 底径 7.2 器高18.8	ＳＨ０１１	1990.05	30- 76	11- 076	7	A
MTN-J- 077	甕	弥生土器	弥生	不明	口径19.0復 底径 ── 器高13.1残	ＳＨ０１１	1990.05	30- 77	11- 077	7	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 078	壺	弥生土器	弥　生	６０	口径24.6復　底径 9.5復　器高30.0	ＳＨ０１１	1990.05	31- 78	12- 078	6	A
MTN-J- 079	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高17.0残	ＳＨ０１１	1990.05	32- 79	12- 079	7	A
MTN-J- 080	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 7.6復　底径 ―― 器高11.7残	ＳＨ０１１	1990.05	29- 80	12- 080	7	A
MTN-J- 081	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径20.0復　底径 ―― 器高 5.5残	ＳＨ０１１	1990.05	29- 81	12- 081	7	A
MTN-J- 082	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径18.2　器高14.7残	ＳＨ０１１	1990.05	28- 82	12- 082	7	A
MTN-J- 083	鉢	弥生土器	弥　生	８５	口径21.7　底径 6.6　器高11.6	ＳＨ０１１	1990.05	33- 83	12- 083	7	A
MTN-J- 084	鉢	弥生土器	弥　生	５５	口径16.5復　底径 7.0　器高 9.5	ＳＨ０１１	1990.05	33- 84	12- 084	7	A
MTN-J- 085	鉢	弥生土器	弥　生	３０	口径17.3復　底径 8.4復　器高 9.5	ＳＨ０１１	1990.05	33- 85	12- 085	7	A
MTN-J- 086	鉢	弥生土器	弥　生	５５	口径14.7復　底径 5.6　器高 7.6	ＳＨ０１１	1990.05	33- 86	12- 086	7	A
MTN-J- 087	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径34.6復　底径 ―― 器高31.8残	ＳＨ０１１	1990.05	34- 87	11- 087	7	A
MTN-J- 088	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径28.4復　底径 ―― 器高 7.6残	ＳＨ０１２	1990.05	35- 88	14- 088	7	A
MTN-J- 089	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.4復　器高 7.1残	ＳＨ０１２	1990.05	35- 89	14- 089	7	A
MTN-J- 090	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.4復　底径 ―― 器高17.2残	ＳＨ０１３	1990.05	35- 90	16- 090	8	A
MTN-J- 091	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.6復　底径 ―― 器高 2.1残	ＳＨ０１３	1990.05	36- 91	16- 091	8	A
MTN-J- 092	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 9.4残	ＳＨ０１３	1990.05	36- 92	16- 092	8	A
MTN-J- 093	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.0復　底径 ―― 器高 3.8残	ＳＨ０１３	1990.05	36- 93	16- 093	8	A
MTN-J- 094	砥石	石製品	弥　生	ほぼ完存	長さ 5.2　　幅 4.5　厚さ 3.5	ＳＨ０１３	1990.05	37- 94	16- 094	8	A
MTN-J- 095	石鏃	石　器	弥　生	ほぼ完存	長さ 2.2　　幅 1.8　厚さ 0.5	ＳＨ０１３	1990.05	37- 95	16- 095	8	A
MTN-J- 096	鉢	弥生土器	弥　生	５５	口径23.1　底径 6.9　器高13.1	ＳＨ０１４	1990.05	38- 96	18- 096	8	A
MTN-J- 097	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径22.3復　底径 ―― 器高 2.8残	ＳＨ０１４	1990.05	38- 97	18- 097	8	A
MTN-J- 098	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径12.0復　底径 ―― 器高 3.2残	ＳＨ０１４	1990.05	38- 98	18- 098	8	A
MTN-J- 099	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.0復　器高 3.4残	ＳＨ０１４	1990.05	38- 99	18- 099	8	A
MTN-J- 100	投弾	土製品	弥　生	ほぼ完存	最大長 4.4　　最大径 2.7	ＳＨ０１４	1990.05	38- 100	18- 100	8	A
MTN-J- 101	投弾	土製品	弥　生	不明	長さ 4.6残	ＳＨ０１４	1990.05	38- 101	18- 101	8	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	引当書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 102	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径16.0復　底径 ―― 器高 5.6残	ＳＨ０１４	1990.05	39- 102	18- 102	8	A
MTN-J- 103	鉢	弥生土器	弥　生	７５	口径21.6　底径 7.1　器高12.2	ＳＨ０１４	1990.05	39- 103	18- 103	8	A
MTN-J- 104	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径15.0復 器高 8.3残	ＳＨ０１４	1990.05	39- 104	18- 104	8	A
MTN-J- 105	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.0復　底径 ―― 器高 2.4残	ＳＨ０１５	1990.05	40- 105	20- 105	8	A
MTN-J- 106	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.4　底径 ―― 器高 2.7残	ＳＨ０１５	1990.05	40- 106	20- 106	8	A
MTN-J- 107	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.7　器高 5.2残	ＳＨ０１５	1990.05	40- 107	20- 107	8	A
MTN-J- 108	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径19.8復　底径 ―― 器高 2.0残	ＳＨ０１５	1990.05	41- 108	20- 108	8	A
MTN-J- 109	鉢	弥生土器	弥　生	２５	口径16.8復　底径 6.0復 器高 8.7	ＳＨ０１５	1990.05	41- 109	20- 109	8	A
MTN-J- 110	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径16.9復　底径 ―― 器高 8.1残	ＳＨ０１６	1990.05	42- 110	22- 110	8	A
MTN-J- 111	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 5.5復 器高 2.6残	ＳＨ０１６	1990.05	42- 111	22- 111	8	A
MTN-J- 112	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径26.0　器高 3.9残	ＳＨ０１６	1990.05	42- 112	22- 112	8	A
MTN-J- 113	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径22.8復　底径 ―― 器高 3.6残	ＳＨ０１７	1990.05	43- 113	24- 113	8	A
MTN-J- 114	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.6復　底径 ―― 器高 6.2残	ＳＨ０１７	1990.05	43- 114	24- 114	8	A
MTN-J- 115	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径24.4復　底径 ―― 器高 6.6残	ＳＨ０１７	1990.05	43- 115	24- 115	8	A
MTN-J- 116	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.0復　底径 9.0復 器高21.8	ＳＨ０１７	1990.05	44- 116	24- 116	8	A
MTN-J- 117	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.4　器高21.0残	ＳＨ０１７	1990.05	45- 117	24- 117	8	A
MTN-J- 118	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.8　器高 5.6残	ＳＨ０１７	1990.05	45- 118	24- 118	8	A
MTN-J- 119	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径11.0復 器高 5.5残	ＳＨ０１７	1990.05	46- 119	24- 119	8	A
MTN-J- 120	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径12.6復　底径14.2　器高17.5	ＳＨ０１７	1990.05	45- 120	24- 120	8	A
MTN-J- 121	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径11.2復　底径 ―― 器高 3.6残	ＳＨ０１７	1990.05	45- 121	24- 121	8	A
MTN-J- 122	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径26.6復　底径 ―― 器高31.5残	ＳＫ０１８	1990.05	47- 122	44- 122	9	A
MTN-J- 123	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径27.0復　底径 ―― 器高41.0残	ＳＫ０１８	1990.05	48- 123	45- 123	１０	A
MTN-J- 124	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径32.4復　底径 ―― 器高 5.3残	ＳＫ０１８	1990.05	49- 124	45- 124	１１	A
MTN-J- 125	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径25.6復　底径 ―― 器高12.2残	ＳＫ０１８	1990.05	50- 125	44- 125	１１	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 126	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高10.3残	ＳＫ０１８	1990.05	50- 126	44- 126	１１	A
MTN-J- 127	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径18.6復 底径 ―― 器高 5.1残	ＳＫ０１８	1990.05	51- 127	44- 127	１１	A
MTN-J- 128	壺	弥生土器	弥　生	７０	口径 6.9復 底径10.2 器高13.8	ＳＫ０１８	1990.05	51- 128	44- 128	１１	A
MTN-J- 129	甕	弥生土器	弥　生	４０	口径24.4復 底径 8.4復 器高20.0	ＳＥ０２０	1990.05	52- 129	37- 129	１１	A
MTN-J- 130	甕	弥生土器	弥　生	５５	口径16.7 底径 8.5 器高21.0	ＳＥ０２０	1990.05	52- 130	37- 130	１１	A
MTN-J- 131	甕	弥生土器	弥　生	６５	口径15.2復 底径 6.3 器高 22.5	ＳＥ０２０	1990.05	53- 131	37- 131	１１	A
MTN-J- 132	甕	弥生土器	弥　生	ほぼ完存	口径16.7 底径 6.6 器高16.1	ＳＥ０２０	1990.05	53- 132	37- 132	１１	A
MTN-J- 133	鉢	弥生土器	弥　生	３５	口径13.6復 底径 5.2復 器高 6.8	ＳＥ０２０	1990.05	53- 133	37- 133	１１	A
MTN-J- 136	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径26.4復 底径 ―― 器高 3.5残	ＳＨ０２４	1990.05	55- 136	28- 136	１２	A
MTN-J- 137	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径21.8復 底径 ―― 器高 4.3残	ＳＨ０２４	1990.05	55- 137	28- 137	１２	A
MTN-J- 138	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.2 器高 3.8残	ＳＨ０２４	1990.05	55- 138	28- 138	１２	A
MTN-J- 140	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ 9.3残 幅 7.1残 厚さ 4.3	ＳＨ０２５	1990.05	56- 140	30- 140	１２	A
MTN-J- 141	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ10.3残 幅 6.1残 厚さ 3.4	ＳＨ０２５	1990.05	56- 141	30- 141	１２	A
MTN-J- 142	石戈？	石　器	弥　生	不明	長さ10.4残 幅 5.8 厚さ 1.2	ＳＨ０２５	1990.05	56- 142	30- 142	１２	A
MTN-J- 143	甕	弥生土器	弥　生	６０	口径23.4 底径 6.6 器高29.2	ＳＫ０２６	1990.05	57- 143	39- 143	１２	A
MTN-J- 144	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径21.8復 底径 ―― 器高 6.9残	ＳＫ０２６	1990.05	58- 144	39- 144	１２	A
MTN-J- 145	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.2復 底径 ―― 器高 5.8残	ＳＫ０２６	1990.05	58- 145	39- 145	１２	A
MTN-J- 146	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.2 器高 7.7残	ＳＫ０２６	1990.05	57- 146	39- 146	１２	A
MTN-J- 147	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.3 器高10.0残	ＳＫ０２６	1990.05	58- 147	39- 147	１２	A
MTN-J- 148	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径21.4復 底径 9.1 器高19.9	ＳＫ０２６	1990.05	59- 148	39- 148	１２	A
MTN-J- 149	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.4復 底径 ―― 器高 7.5	ＳＫ０２６	1990.05	59- 149	39- 149	１２	A
MTN-J- 150	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 6.4 器高 3.8残	ＳＫ０２６	1990.05	59- 150	39- 150	１２	A
MTN-J- 151	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 8.0復 底径 ―― 器高 6.4残	ＳＫ０２６	1990.05	59- 151	39- 151	１２	A
MTN-J- 152	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 9.0残	ＳＫ０２６	1990.05	60- 152	39- 152	１２	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 153	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 5.7 器高 5.6残	ＳＫ０２６	1990.05	60- 153	39- 153	１２	A
MTN-J- 154	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 5.4残	ＳＫ０２６	1990.05	60- 154	39- 154	１２	A
MTN-J- 155	石斧	石　器	弥　生	不明	長さ 7.3残　幅 7.4　厚さ 4.7	ＳＫ０２６	1990.05	60- 155	40- 155	１２	A
MTN-J- 156	石斧	石　器	弥　生	不明	長さ 8.5残　幅 6.6　厚さ 3.5残	ＳＫ０２６	1990.05	60- 156	40- 156	１２	A
MTN-J- 157	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 3.0残	ＳＲ０２７	1990.05	61- 157	55- 157	１３	A
MTN-J- 158	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.0復 器高 4.2残	ＳＲ０２７	1990.05	61- 158	55- 158	１３	A
MTN-J- 159	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 4.5残	ＳＲ０２７	1990.05	61- 159	55- 159	１３	A
MTN-J- 163	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径27.4復 底径 ―― 器高21.8残	ＳＫ０３３	1990.05	63- 163	47- 163	１３	A
MTN-J- 164	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.6復 底径 ―― 器高10.8残	ＳＫ０３３	1990.05	64- 164	47- 164	１３	A
MTN-J- 165	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径24.3復 底径 ―― 器高20.8残	ＳＫ０３３	1990.05	65- 165	47- 165	１３	A
MTN-J- 166	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径22.2復 底径 ―― 器高11.5残	ＳＫ０３３	1990.05	68- 166	47- 166	１４	A
MTN-J- 167	甕	弥生土器	弥　生	７０	口径16.2 底径10.8 器高21.1	ＳＫ０３３	1990.05	66- 167	47- 167	１４	A
MTN-J- 168	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.6 器高12.9残	ＳＫ０３３	1990.05	67- 168	47- 168	１４	A
MTN-J- 169	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.2 器高12.0残	ＳＫ０３３	1990.05	67- 169	47- 169	１４	A
MTN-J- 170	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.4 器高12.8残	ＳＫ０３３	1990.05	68- 170	47- 170	１５	A
MTN-J- 171	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.6 器高 9.5残	ＳＫ０３３	1990.05	68- 171	48- 171	１５	A
MTN-J- 172	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.0 器高16.7残	ＳＫ０３３	1990.05	72- 172	48- 172	１５	A
MTN-J- 173	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.4 器高15.6残	ＳＫ０３３	1990.05	72- 173	48- 173	１５	A
MTN-J- 174	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.0 器高12.1残	ＳＫ０３３	1990.05	67- 174	48- 174	１５	A
MTN-J- 175	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.8 器高14.1残	ＳＫ０３３	1990.05	67- 175	48- 175	１５	A
MTN-J- 176	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高11.6残	ＳＫ０３３	1990.05	69- 176	48- 176	１３	A
MTN-J- 177	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.9 器高 6.7残	ＳＫ０３３	1990.05	70- 177	48- 177	１３	A
MTN-J- 178	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径21.0復 底径 ―― 器高15.7残	ＳＫ０３３	1990.05	71- 178	48- 178	１３	A
MTN-J- 179	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径12.1 器高 4.8残	ＳＫ０３３	1990.05	72- 179	48- 179	１３	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 180	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径35.0復　底径 ―― 器高 4.9残	ＳＫ０３３	1990.05	73- 180	49- 180	１３	A
MTN-J- 181	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 ―― 器高10.4残	ＳＫ０３３	1990.05	73- 181	49- 181	１３	A
MTN-J- 182	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径14.8復　底径 ―― 器高 5.1残	ＳＫ０３３	1990.05	73- 182	49- 182	１３	A
MTN-J- 183	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径11.0復　底径 ―― 器高 4.8残	ＳＫ０３３	1990.05	73- 183	49- 183	１３	A
MTN-J- 185	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.4復　底径 ―― 器高 3.0残	ＳＨ０３７	1990.05	75- 185	33- 185	１５	A
MTN-J- 186	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.2復　底径 ―― 器高19.1残	ＳＨ０３７	1990.05	75- 186	33- 186	１５	A
MTN-J- 205	鉢	須恵器	古　墳	不明	口径 ――　底径 8.6復 器高 2.3残	ＳＤ１０１	1990.05	80- 205	120- 205	１６	A
MTN-J- 206	石斧	石　器	弥　生	３５	長さ 5.2残　幅 5.2　厚さ 5.2	ＳＤ１０１	1990.05	80- 206	120- 206	１６	A
MTN-J- 208	坏	土師器	奈　良	不明	口径 9.6復　底径 ―― 器高 2.4残	ＳＤ１０１	1990.05	81- 208	120- 208	１６	A
MTN-J- 209	坏	土師器	奈　良	不明	口径 ――　底径 7.8復 器高 2.2残	ＳＤ１０１	1990.05	81- 209	120- 209	１６	A
MTN-J- 210	坏	土師器	奈　良	２０	口径 12.6復 底径 7.4復 器高 3.3	ＳＤ１０２	1990.05	82- 210	120- 210	１６	A
MTN-J- 211	坏	土師器	奈　良	不明	口径 16.0復 底径 ―― 器高 4.0残	ＳＤ１０２	1990.05	82- 211	120- 211	１６	A
MTN-J- 212	坏	土師器	奈　良	不明	口径 ――　底径 7.4復 器高 2.1残	ＳＤ１０２	1990.05	82- 212	120- 212	１６	A
MTN-J- 213	坏	土師器	奈　良	不明	口径 ――　底径 8.0　器高 2.2残	ＳＤ１０２	1990.05	82- 213	120- 213	１６	A
MTN-J- 217	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径31.4復　底径 ―― 器高19.9残	ＳＥ１０４	1990.05	84- 217	89- 217	１６	A
MTN-J- 218	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径10.2　器高13.8残	ＳＥ１０４	1990.05	85- 218	90- 218	１６	A
MTN-J- 219	甕	弥生土器	弥　生	ほぼ完形	口径23.8　底径 6.5　器高22.0	ＳＥ１０４	1990.05	85- 219	89- 219	１６	A
MTN-J- 220	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径29.0復　底径 ―― 器高10.1残	ＳＥ１０４	1990.05	86- 220	89- 220	１７	A
MTN-J- 221	甕	弥生土器	弥　生	６０	口径19.8復　底径 7.2　器高19.0	ＳＥ１０４	1990.05	87- 221	89- 221	１７	A
MTN-J- 222	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径21.8復　底径 ―― 器高15.4残	ＳＥ１０４	1990.05	88- 222	89- 222	１７	A
MTN-J- 223	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径19.0復　底径 ―― 器高11.0残	ＳＥ１０４	1990.05	89- 223	89- 223	１７	A
MTN-J- 224	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.6復　底径 ―― 器高17.0残	ＳＥ１０４	1990.05	86- 224	89- 224	１７	A
MTN-J- 225	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 9.4　器高12.9残	ＳＥ１０４	1990.05	87- 225	90- 225	１７	A
MTN-J- 226	甕	弥生土器	弥　生	ほぼ完存	口径22.3　底径 8.8　器高18.2	ＳＥ１０４	1990.05	90- 226	89- 226	１７	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 229	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.6復 器高 8.0残	ＳＥ１０４	1990.05	89- 229	90- 229	１７	A
MTN-J- 230	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径19.8復 底径 ―― 器高 7.1残	ＳＥ１０４	1990.05	88- 230	90- 230	１８	A
MTN-J- 231	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径17.0復 底径 ―― 器高 6.2残	ＳＥ１０４	1990.05	87- 231	90- 231	１８	A
MTN-J- 233	鉢	弥生土器	弥　生	ほぼ完存	口径16.0 底径 6.2 器高10.2	ＳＥ１０４	1990.05	91- 233	90- 233	１８	A
MTN-J- 234	鉢	弥生土器	弥　生	４０	口径17.2復 底径 6.6 器高11.7	ＳＥ１０４	1990.05	91- 234	90- 234	１８	A
MTN-J- 235	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径12.2復 底径 ―― 器高 4.5残	ＳＥ１０４	1990.05	91- 235	90- 235	１８	A
MTN-J- 236	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径15.7 器高13.6残	ＳＥ１０４	1990.05	91- 236	90- 236	１８	A
MTN-J- 238	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ 7.2 幅 2.5 厚さ 1.5	ＳＥ１０４	1990.05	91- 238	90- 238	１８	A
MTN-J- 239	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径27.0復 底径 ―― 器高 4.6残	ＳＥ１０５	1990.05	92- 239	92- 239	１８	A
MTN-J- 240	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 9.0復 底径 ―― 器高 3.8残	ＳＥ１０５	1990.05	92- 240	92- 240	１８	A
MTN-J- 241	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径26.4復 底径 ―― 器高15.8残	ＳＥ１０５	1990.05	92- 241	92- 241	１８	A
MTN-J- 242	高坏	弥生土器	弥　生	５０	口径 7.0 底径 ―― 器高 5.3	ＳＥ１０５	1990.05	93- 242	92- 242	１８	A
MTN-J- 243	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 7.0 底径 6.0 器高20.1	ＳＥ１０５	1990.05	93- 243	92- 243	１８	A
MTN-J- 244	鋤	木製品	弥　生	不明		ＳＥ１０５	1990.05	94- 244	93- 244	１９	A
MTN-J- 245	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径37.7復 底径 ―― 器高20.1残	ＳＥ１０６	1990.05	95- 245	95- 245	１８	A
MTN-J- 246	器台	弥生土器	弥　生	不明	口径12.2 底径 ―― 器高 8.4残	ＳＥ１０６	1990.05	95- 246	95- 246	１８	A
MTN-J- 249	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径19.4復 底径 ―― 器高 3.9残	ＳＥ１０６	1990.05	95- 249	95- 249	１８	A
MTN-J- 250	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径31.9復 底径 ―― 器高 4.2残	ＳＥ１０６	1990.05	96- 250	95- 250	１８	A
MTN-J- 251	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径11.8復 器高 4.5残	ＳＥ１０６	1990.05	96- 251	95- 251	１８	A
MTN-J- 252	深鉢	縄文土器	弥　生	不明	口径27.8復 底径 ―― 器高 5.4残	ＳＨ１０７	1990.05	97- 252	65- 252	１８	A
MTN-J- 253	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径13.8復 底径 ―― 器高 2.3残	ＳＨ１０７	1990.05	97- 253	65- 253	１８	A
MTN-J- 254	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径31.3復 底径 ―― 器高 3.9残	ＳＨ１０７	1990.05	97- 254	65- 254	１８	A
MTN-J- 255	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径24.0復 底径 ―― 器高 3.7残	ＳＨ１０７	1990.05	97- 255	65- 255	１８	A
MTN-J- 256	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 3.5残	ＳＨ１０７	1990.05	97- 256	65- 256	１８	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	ｺﾝﾃﾅ番号	A･Bの別
MTN-J- 257	砥石	石製品	弥　生	不明	長さ25.9　幅 2.5　厚さ 2.0	ＳＨ１０７	1990.05	98- 257	65- 257	１８	A
MTN-J- 258	石斧	石製品	弥　生	不明	長さ 5.9残　幅 4.3　厚さ 3.5残	ＳＨ１０７	1990.05	98- 258	65- 258	１８	A
MTN-J- 259	石斧	石製品	弥　生	不明	長さ 7.0残　幅 3.2　厚さ 1.0残	ＳＨ１０７	1990.05	98- 259	65- 259	１８	A
MTN-J- 260	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径16.8復　底径 ―― 器高 5.6残	ＳＥ１０８	1990.05	99- 260	96- 260	２０	A
MTN-J- 261	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径30.0復　底径 ―― 器高 7.1残	ＳＥ１０８	1990.05	99- 261	96- 261	２０	A
MTN-J- 262	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径28.0復　底径 ―― 器高 9.4残	ＳＥ１０８	1990.05	99- 262	96- 262	２０	A
MTN-J- 263	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径18.5復　底径 6.7　器高14.4	ＳＥ１０８	1990.05	99- 263	96- 263	２０	A
MTN-J- 264	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.8復　底径 ―― 器高 7.4残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 264	96- 264	２０	A
MTN-J- 265	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 8.2　器高10.4残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 265	96- 265	２０	A
MTN-J- 266	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 7.4　器高 4.2残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 266	96- 266	２０	A
MTN-J- 267	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 5.1　器高 2.1残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 267	96- 267	２０	A
MTN-J- 268	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径16.8復　底径 ―― 器高 6.8残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 268	96- 268	２０	A
MTN-J- 269	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径14.6　器高 8.1残	ＳＥ１０８	1990.05	100- 269	96- 269	２０	A
MTN-J- 272	壺	弥生土器	弥　生	完存	口径 7.3　底径 5.6　器高14.2	ＳＥ１０８	1990.05	101- 272	96- 272	２０	A
MTN-J- 274	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.2復　底径 ―― 器高 4.8残	ＳＨ１０９	1990.05	102- 274	67- 274	２０	A
MTN-J- 276	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径16.7復　底径 ―― 器高 6.6残	ＳＨ１０９	1990.05	102- 276	67- 276	２０	A
MTN-J- 277	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径17.7復　底径 ―― 器高 3.5残	ＳＨ１０９	1990.05	102- 277	67- 277	２０	A
MTN-J- 278	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 9.1復　器高 5.3残	ＳＨ１０９	1990.05	102- 278	67- 278	２０	A
MTN-J- 280	勾玉	土製品	弥　生	不明	長さ 3.3残　幅 1.4　厚さ 1.0	ＳＨ１０９	1990.05	103- 280	67- 280	２０	A
MTN-J- 290	壺	縄文土器	縄　文	不明	口径10.0復　底径 ―― 器高 2.1残	ＳＫ１１１	1990.05	106- 290	124- 290	２０	A
MTN-J- 295	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径18.0復　底径 ―― 器高10.9残	ＳＫ１１１	1990.05	108- 295	124- 295	２０	A
MTN-J- 306	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径14.2復　底径 ―― 器高 3.4残	ＳＫ１２１	1990.05	113- 306	124- 306	２１	A
MTN-J- 312	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径22.3復　底径 ―― 器高 5.1残	ＳＥ１２２	1990.05	115- 312	98- 312	２１	A
MTN-J- 313	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径18.2復　底径 ―― 器高 3.5残	ＳＥ１２２	1990.05	115- 313	98- 313	２１	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番号	名称	種別	時代	現存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 314	壺	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径11.0復 器高 4.6残	ＳＥ１２２	1990.05	115- 314	98- 314	２１	A
MTN-J- 315	壺	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 8.2復 器高 3.5残	ＳＥ１２２	1990.05	115- 315	98- 315	２１	A
MTN-J- 316	壺	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 4.0復 器高 3.3残	ＳＥ１２２	1990.05	115- 316	98- 316	２１	A
MTN-J- 317	器台	弥生土器	弥生	不明	口径13.8復 底径18.0 器高20.2	ＳＥ１２２	1990.05	116- 317	98- 317	２１	A
MTN-J- 318	器台	弥生土器	弥生	不明	口径21.0復 底径 ── 器高 2.7残	ＳＥ１２２	1990.05	116- 318	98- 318	２１	A
MTN-J- 319	鉢	弥生土器	弥生	２５	口径 6.0復 底径 ── 器高 5.2残	ＳＥ１２２	1990.05	116- 319	98- 319	２１	A
MTN-J- 320	石包丁	石器	弥生	７０	長さ 9.1残 幅 3.7 厚さ 0.7	ＳＥ１２２	1990.05	116- 320	98- 320	２１	A
MTN-J- 321	甕	弥生土器	弥生	不明	口径25.0復 底径 7.0 器高29.4残	ＳＫ１２５	1990.06	117- 321	107- 321	２１	A
MTN-J- 322	甕	弥生土器	弥生	不明	口径19.3復 底径 ── 器高17.8残	ＳＫ１２５	1990.06	117- 322	107- 322	２１	A
MTN-J- 323	甕	弥生土器	弥生	不明	口径27.6復 底径 ── 器高10.6残	ＳＫ１２５	1990.06	118- 323	107- 323	２１	A
MTN-J- 324	甕	弥生土器	弥生	不明	口径27.6復 底径 ── 器高11.4残	ＳＫ１２５	1990.06	118- 324	107- 324	２１	A
MTN-J- 325	甕	弥生土器	弥生	不明	口径20.0復 底径 ── 器高 9.3残	ＳＫ１２５	1990.06	118- 325	107- 325	２１	A
MTN-J- 326	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 7.3 器高 7.5残	ＳＫ１２５	1990.06	119- 326	107- 326	２１	A
MTN-J- 327	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 5.5 器高 6.8残	ＳＫ１２５	1990.06	119- 327	107- 327	２１	A
MTN-J- 328	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.4 器高 4.3残	ＳＫ１２５	1990.06	119- 328	107- 328	２１	A
MTN-J- 329	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.8 器高12.9残	ＳＫ１２５	1990.06	119- 329	107- 329	２１	A
MTN-J- 330	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 ── 底径 6.9 器高 6.8残	ＳＫ１２５	1990.06	119- 330	107- 330	２１	A
MTN-J- 332	壺	弥生土器	弥生	不明	口径20.4復 底径 ── 器高 9.1残	ＳＫ１２５	1990.06	120- 332	107- 332	２１	A
MTN-J- 334	鉢	弥生土器	弥生	不明	口径12.2 底径 6.1 器高 9.8	ＳＫ１２５	1990.06	120- 334	107- 334	２１	A
MTN-J- 335	紡錘車	土製品	弥生	５０	径 5.8 厚さ 1.1	ＳＫ１２５	1990.06	120- 335	108- 335	２１	A
MTN-J- 336	木器	木製品	弥生	不明	長さ11.6残 幅19.4残 厚さ 1.9	ＳＫ１２５	1990.06	121- 336	108- 336	２２	A
MTN-J- 337	木器	木製品	弥生	不明	長さ20.7残 幅13.9残 厚さ 4.7	ＳＫ１２５	1990.06	122- 337	108- 337	２２	A
MTN-J- 343	石鏃	石器	弥生	不明	長さ19.4残 幅 4.7 厚さ 0.7	ＳＫ１２９	1990.05	124- 343	125- 343	２２	A
MTN-J- 344	投弾	土製品	弥生	完存	長さ 5.0 径 2.5	ＳＫ１３１	1990.05	125- 344	125- 344	２２	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 353	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径10.0復　底径 ―― 器高 3.1残	ＳＫ１３３	1990.05	127- 353	124- 353	２２	A
MTN-J- 360	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 2.1残	ＳＫ１３５	1990.06	129- 360	110- 360	２２	A
MTN-J- 361	坏	土師器	平　安	ほぼ完形	口径15.8 底径 8.2 器高 7.6	ＳＫ１３５	1990.06	129- 361	110- 361	２２	A
MTN-J- 362	坏	土師器	平　安	ほぼ完形	口径13.8 底径 8.8 器高 3.5	ＳＫ１３５	1990.06	129- 362	110- 362	２２	A
MTN-J- 363	坏	土師器	平　安	８５	口径17.0 底径 9.2 器高 7.8	ＳＫ１３５	1990.06	129- 363	110- 363	２２	A
MTN-J- 364	甕	土師器	平　安	４０	口径33.4復　底径23.0復　器高24.8	ＳＫ１３５	1990.06	130- 364	110- 364	２３	A
MTN-J- 365	甕	土師器	平　安	不明	口径29.8復　底径 ―― 器高21.6残	ＳＫ１３５	1990.06	131- 365	110- 365	２３	A
MTN-J- 366	甕	土師器	平　安	不明	口径37.4復　底径 ―― 器高21.5残	ＳＫ１３５	1990.06	132- 366	110- 366	２３	A
MTN-J- 367	坏	土師器	平　安	７０	口径13.5 底径 7.5 器高 3.7	ＳＫ１３５	1990.06	129- 367	110- 367	２２	A
MTN-J- 368	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 8.0復　器高 2.1残	ＳＫ１３５	1990.06	129- 368	110- 368	２２	A
MTN-J- 369	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.8 器高 2.4残	ＳＫ１３５	1990.06	129- 369	110- 369	２２	A
MTN-J- 370	坏	土師器	平　安	不明	口径13.6復　底径 7.2 器高 6.3	ＳＫ１３５	1990.06	133- 370	110- 370	２２	A
MTN-J- 371	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.3 器高 1.9残	ＳＫ１３５	1990.06	133- 371	110- 371	２２	A
MTN-J- 372	鉢	土師器	平　安	不明	口径17.1 底径 ―― 器高 6.5残	ＳＫ１３５	1990.06	133- 372	110- 372	２２	A
MTN-J- 373	坏	土師器	平　安	完形	口径11.5 底径 6.0 器高 3.7	ＳＫ１３６	1990.05	134- 373	111- 373	２２	A
MTN-J- 374	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 1.7	ＳＫ１３６	1990.05	134- 374	111- 374	２２	A
MTN-J- 375	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 2.1残	ＳＫ１３６	1990.05	134- 375	111- 375	２２	A
MTN-J- 376	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 0.7	ＳＫ１３６	1990.05	134- 376	111- 376	２２	A
MTN-J- 377	坏	土師器	平　安	不明	口径11.8 底径 7.4 器高 3.3	ＳＫ１３６	1990.05	134- 377	111- 377	２２	A
MTN-J- 378	坏	土師器	平　安	不明	口径13.5復　底径 6.8 器高 4.2	ＳＫ１３６	1990.05	134- 378	111- 378	２２	A
MTN-J- 379	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高 4.0残	ＳＫ１３６	1990.05	134- 379	111- 379	２２	A
MTN-J- 380	甕	土師器	平　安	不明	口径14.0復　底径 ―― 器高 2.4残	ＳＫ１３６	1990.05	134- 380	111- 380	２２	A
MTN-J- 381	坏	土師器	平　安	完形	口径13.6 底径 7.8 器高 2.6	ＳＫ１３７	1990.06	135- 381	105- 381	２３	A
MTN-J- 382	甕	土師器	平　安	７０	口径25.5 丸底 器高22.2	ＳＫ１３７	1990.06	135- 382	105- 382	２３	A

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 384	坏	土師器	平安	60	口径12.1復 底径 8.1 器高 2.8	SK137	1990.05	135- 384	105- 384	23	A
MTN-J- 385	坏	土師器	平安	30	口径14.3復 底径10.8復 器高 1.4	SK137	1990.05	135- 385	105- 385	23	A
MTN-J- 386	坏	土師器	平安	不明	口径 —— 底径 7.9 器高 1.8残	SK137	1990.05	135- 386	105- 386	23	A
MTN-J- 387	坏	土師器	平安	不明	口径 —— 底径 6.6 器高 1.8残	SK137	1990.05	135- 387	105- 387	23	A
MTN-J- 388	坏	土師器	平安	不明	口径 —— 底径 7.9 器高 5.4残	SK137	1990.05	135- 388	105- 388	23	A
MTN-J- 389	甕	土師器	平安	不明	口径25.2復 底径 —— 器高 9.4残	SK137	1990.05	136- 389	105- 389	23	A
MTN-J- 390	蓋	弥生土器	弥生	95	口径15.2 底径 —— 器高 3.2	SK138	1990.05	137- 390	124- 390	23	A
MTN-J- 397	磨石	石製品	弥生	完存	長さ11.0 幅 9.4 厚さ 5.5	SK143	1990.06	140- 398	125- 398	24	A
MTN-J- 406	碗	瓦器	鎌倉	30	口径15.8復 底径 7.2 器高 6.0	SK145	1990.06	142- 406	124- 406	24	A
MTN-J- 407	鉢	土師器	鎌倉	30	口径35.8復 底径16.6復 器高 6.3	SK145	1990.06	143- 407	124- 407	24	A
MTN-J- 408	甕	弥生土器	弥生	不明	口径22.2復 底径 —— 器高 3.2残	SR150	1990.05	144- 408	118- 408	24	A
MTN-J- 409	甕	弥生土器	弥生	不明	口径24.4復 底径 —— 器高 4.6残	SR150	1990.05	144- 409	118- 409	24	A
MTN-J- 410	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 5.0復 器高 9.0残	SR150	1990.05	144- 410	118- 410	24	A
MTN-J- 411	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 8.4復 器高 7.3残	SR150	1990.05	144- 411	118- 411	24	A
MTN-J- 413	壺	弥生土器	弥生	不明	口径12.0復 底径 —— 器高 3.0残	SR150	1990.05	145- 413	118- 413	24	A
MTN-J- 414	鉢	弥生土器	弥生	不明	口径13.6復 底径 —— 器高 5.5残	SR150	1990.05	145- 414	118- 414	24	A
MTN-J- 415	甕	弥生土器	弥生	不明	口径18.6復 底径 —— 器高13.5残	SR153	1990.05	146- 415	118- 415	24	A
MTN-J- 416	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 6.8復 器高 2.5残	SR153	1990.05	146- 416	118- 416	24	A
MTN-J- 417	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径10.0復 器高 2.8残	SR153	1990.05	146- 417	118- 417	24	A
MTN-J- 419	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 9.2 器高 1.9残	SR154	1990.05	147- 419	118- 419	24	A
MTN-J- 420	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 9.6復 器高 4.5残	SR156	1990.06	148- 420	118- 420	24	A
MTN-J- 431	甕	弥生土器	弥生	不明	口径25.3復 底径 —— 器高15.1残	SE160	1990.06	152- 431	100- 431	24	A
MTN-J- 433	甕	弥生土器	弥生	不明	口径20.1復 底径 —— 器高 9.8残	SE160	1990.06	152- 433	100- 433	24	A
MTN-J- 436	甕	弥生土器	弥生	不明	口径 —— 底径 7.8復 器高 4.5残	SE160	1990.06	153- 436	100- 436	24	A

村徳永遺跡（J地区） I種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 437	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.5 器高 2.5残	ＳＥ１６０	1990.06	153- 437	100- 437	２４	A
MTN-J- 440	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径16.2復 底径 ―― 器高 4.0残	ＳＥ１６０	1990.06	153- 440	100- 440	２４	A
MTN-J- 450	甕	弥生土器	弥　生	６０	口径18.5復 底径 6.8 器高18.4	ＳＫ１６１	1990.05	156- 450	124- 450	２５	A
MTN-J- 469	甕	弥生土器	弥　生	８５	口径11.8 底径 8.2 器高14.6	ＳＫ１６７	1990.05	163- 469	124- 469	２５	A
MTN-J- 474	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径20.0復 底径 ―― 器高 4.8残	ＳＸ１６８	1990.06	165- 474	123- 474	２６	A
MTN-J- 475	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径22.0復 底径 ―― 器高 6.8残	ＳＸ１６８	1990.06	165- 475	123- 475	２６	A
MTN-J- 476	甕	弥生土器	弥　生	６５	口径23.2復 底径 8.6 器高31.5残	ＳＸ１６８	1990.06	166- 476	123- 476	２６	A
MTN-J- 477	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 9.2復 底径 ―― 器高 3.2残	ＳＸ１６８	1990.06	165- 477	123- 477	２６	A
MTN-J- 478	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.0 器高15.2残	ＳＸ１６８	1990.06	165- 478	123- 478	２６	A
MTN-J- 480	鉢	弥生土器	弥　生	２０	口径 7.8復 底径 4.6復 器高 4.6	ＳＸ１６８	1990.06	165- 480	123- 480	２６	A
MTN-J- 481	鉢	弥生土器	弥　生	完形	口径13.5 底径 6.3 器高 5.8	ＳＸ１６８	1990.06	165- 481	123- 481	２６	A
MTN-J- 487	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径26.4復 底径 ―― 器高 2.2残	ＳＫ１６９	1990.05	168- 487	127- 487	２６	A
MTN-J- 500	甕	弥生土器	弥　生	ほぼ完形	口径11.8 底径 6.0 器高11.3	ＳＫ１７６	1990.05	172- 500	113- 500	２７	A
MTN-J- 501	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径12.0復 底径 ―― 器高 3.5残	ＳＫ１７６	1990.05	172- 501	113- 501	２７	A
MTN-J- 502	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径15.2復 底径 ―― 器高 7.1残	ＳＫ１７６	1990.05	172- 502	113- 502	２７	A
MTN-J- 503	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径17.6復 底径 ―― 器高10.0残	ＳＫ１７６	1990.05	173- 503	113- 503	２７	A
MTN-J- 504	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.8 器高 6.9残	ＳＫ１７６	1990.05	173- 504	113- 504	２７	A
MTN-J- 505	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.8 器高10.3残	ＳＫ１７６	1990.05	173- 505	113- 505	２７	A
MTN-J- 507	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径10.5 器高12.8残	ＳＫ１７６	1990.05	174- 507	113- 507	２７	A
MTN-J- 508	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.4 器高 6.5残	ＳＫ１７６	1990.05	174- 508	113- 508	２７	A
MTN-J- 509	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径23.0復 底径 ―― 器高 7.6残	ＳＫ１７６	1990.05	175- 509	113- 509	２７	A
MTN-J- 510	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.8 器高24.6残	ＳＫ１７６	1990.05	176- 510	113- 510	２７	A
MTN-J- 512	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径14.4 底径 7.8 器高14.0残	ＳＫ１７６	1990.05	175- 512	113- 512	２７	A
MTN-J- 513	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径17.8復 底径 ―― 器高13.3残	ＳＫ１７６	1990.05	177- 513	113- 513	２７	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 515	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径14.6復　底径 ―― 器高 3.4残	ＳＫ１７７	1990.05	178- 515	114- 515	２６	A
MTN-J- 516	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.0復　底径 ―― 器高 3.3残	ＳＫ１７７	1990.05	178- 516	114- 516	２６	A
MTN-J- 517	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径20.0復　底径 ―― 器高10.6残	ＳＫ１７７	1990.05	178- 517	114- 517	２６	A
MTN-J- 518	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 9.4　器高22.2残	ＳＫ１７７	1990.05	179- 518	114- 518	２６	A
MTN-J- 519	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 9.8　器高 9.6残	ＳＫ１７７	1990.05	178- 519	114- 519	２６	A
MTN-J- 520	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 7.8　器高 5.6残	ＳＫ１７７	1990.05	179- 520	114- 520	２６	A
MTN-J- 522	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径17.4　底径 ―― 器高 6.8残	ＳＫ１７７	1990.05	180- 522	114- 522	２６	A
MTN-J- 523	石斧	石　器	弥　生	不明	長さ12.0残　幅 6.5　厚さ 3.1	ＳＫ１７７	1990.05	180- 523	114- 523	２６	A
MTN-J- 524	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.2復　底径 ―― 器高10.1残	ＳＤ１７８	1990.05	181- 524	121- 524	２８	A
MTN-J- 525	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径27.2復　底径 ―― 器高20.4残	ＳＤ１７８	1990.05	181- 525	121- 525	２８	A
MTN-J- 526	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 9.8　器高 4.0残	ＳＤ１７８	1990.05	181- 526	121- 526	２８	A
MTN-J- 533	甕	土師器	平　安	７０	口径23.1　丸底　器高20.5	ＳＫ１８３	1990.07	185- 533	116- 533	２８	A
MTN-J- 534	甕	土師器	平　安	２５	口径27.3復　丸底　器高23.3	ＳＫ１８３	1990.07	186- 534	116- 534	２８	A
MTN-J- 535	甕	土師器	平　安	不明	口径24.0復　底径 ―― 器高12.7残	ＳＫ１８３	1990.07	186- 535	116- 535	２８	A
MTN-J- 536	甕	土師器	平　安	不明	口径21.1復　底径 ―― 器高 9.1残	ＳＫ１８３	1990.07	187- 536	116- 536	２８	A
MTN-J- 537	甕	土師器	平　安	不明	口径 ――　底径22.6復 器高 3.7残	ＳＫ１８３	1990.07	187- 537	116- 537	２８	A
MTN-J- 544	甕	弥生土器	弥　生	６０	口径16.8復　底径 8.8復 器高18.5	ＳＥ１９３	1990.07	190- 544	103- 544	２９	A
MTN-J- 545	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径30.0復　底径 ―― 器高 6.4残	ＳＥ１９３	1990.07	190- 545	103- 545	２９	A
MTN-J- 546	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径25.6復　底径 ―― 器高 4.6残	ＳＥ１９３	1990.07	190- 546	103- 546	２９	A
MTN-J- 547	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径22.4復　底径 ―― 器高 6.9残	ＳＥ１９３	1990.07	190- 547	103- 547	２９	A
MTN-J- 548	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径14.4復 器高 8.4残	ＳＥ１９３	1990.07	190- 548	103- 548	２９	A
MTN-J- 549	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径13.2復　底径 ―― 器高 9.9残	ＳＥ１９３	1990.07	191- 549	103- 549	２９	A
MTN-J- 550	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径13.0復　底径 ―― 器高 6.4残	ＳＥ１９３	1990.07	191- 550	103- 550	２９	A
MTN-J- 551	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ――　底径 7.6　器高 5.0残	ＳＥ１９３	1990.07	191- 551	103- 551	２９	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 552	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.6㎝ 器高 3.5㎝	ＳＥ１９３	1990.07	191- 552	103- 552	２９	A
MTN-J- 553	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径18.8㎝ 底径 ―― 器高 4.7㎝	ＳＥ１９３	1990.07	191- 553	103- 553	２９	A
MTN-J- 554	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径10.0㎝ 底径 ―― 器高12.1㎝	ＳＥ１９３	1990.07	191- 554	103- 554	２９	A
MTN-J- 555	磨石	石製品	弥　生	完存	長さ 9.8　幅 6.5　厚さ 5.8	ＳＥ１９３	1990.07	192- 555	102- 555	２９	A
MTN-J- 556	磨石	石製品	弥　生	完存	長さ13.0　幅10.2　厚さ 5.2	ＳＥ１９３	1990.07	192- 556	102- 556	２９	A
MTN-J- 557	磨石	石製品	弥　生	完存	長さ13.8　幅12.0　厚さ 5.6	ＳＥ１９３	1990.07	193- 557	102- 557	２９	A
MTN-J- 558	鍬	木製品	弥　生	不明	長さ11.0㎝　幅 6.3　厚さ 1.4	ＳＥ１９３	1990.07	194- 558	103- 558	２９	A
MTN-J- 559	竪杵	木製品	弥　生	不明	長さ25.6㎝　径 7.9	ＳＥ１９３	1990.07	194- 559	103- 559	２９	A
MTN-J- 565	鉢	須恵器	室　町	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 3.1㎝	ＳＫ１９５	1990.07	197- 565	125- 565	２８	A
MTN-J- 566	鉢	土師器	室　町	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 6.1㎝	ＳＫ１９５	1990.07	197- 566	124- 566	２８	A
MTN-J- 567	鉢	土師器	室　町	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 4.2㎝	ＳＫ１９５	1990.07	197- 567	124- 567	２８	A
MTN-J- 568	布目瓦	瓦	室　町	不明	長さ 9.0㎝　幅 8.3㎝ 厚さ 2.1	ＳＫ１９５	1990.07	197- 568	125- 568	２８	A
MTN-J- 569	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径17.0㎝ 底径 ―― 器高 5.7㎝	ＳＢ２００　Ｐ１	1990.05	198- 569	69- 569	２９	A
MTN-J- 571	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.0㎝ 器高 4.5㎝	ＳＢ２００　Ｐ４	1990.05	198- 571	69- 571	２９	A
MTN-J- 573	手捏	弥生土器	弥　生	６０	口径 4.0㎝ 底径 1.9 器高 4.1	ＳＢ２０１　Ｐ２	1990.05	199- 573	69- 573	２９	A
MTN-J- 574	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径17.4㎝ 底径 ―― 器高 4.7㎝	ＳＢ２０１　Ｐ２	1990.05	199- 574	69- 574	２９	A
MTN-J- 575	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径14.0㎝ 底径 ―― 器高 7.4㎝	ＳＢ２０１　Ｐ３	1990.05	199- 575	69- 575	２９	A
MTN-J- 576	紡錘車	土製品	弥　生	７０	径 4.3　厚さ 1.9	ＳＢ２０１　Ｐ４	1990.05	199- 576	69- 576	２９	A
MTN-J- 577	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径28.4㎝ 底径 ―― 器高 4.6㎝	ＳＢ２０１　Ｐ６	1990.05	200- 577	69- 577	２９	A
MTN-J- 578	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径20.8㎝ 底径 ―― 器高 5.0㎝	ＳＢ２０１　Ｐ６	1990.05	200- 578	69- 578	２９	A
MTN-J- 579	勾玉	土製品	弥　生	不明	長さ 4.1㎝　径 1.3	ＳＢ２０１　Ｐ６	1990.05	200- 579	69- 579	２９	A
MTN-J- 582	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.0㎝ 器高 3.3㎝	ＳＢ２０４　Ｐ４	1990.06	202- 582	70- 582	３０	A
MTN-J- 583	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径12.8㎝ 底径 ―― 器高 6.3㎝	ＳＢ２０４　Ｐ３	1990.06	202- 583	70- 583	３０	A
MTN-J- 584	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径23.0㎝ 底径 ―― 器高 4.7㎝	ＳＢ２０４　Ｐ６	1990.06	202- 584	70- 584	３０	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 585	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径19.0復　底径 ―― 器高 5.3残	ＳＢ２０５　Ｐ１	1990.05	203- 585	73- 585	３０	A
MTN-J- 586	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径15.0復　底径 ―― 器高 4.6残	ＳＢ２０５　Ｐ３	1990.05	203- 586	73- 586	３０	A
MTN-J- 587	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径10.0復 器高 3.0残	ＳＢ２０６　Ｐ２	1990.05	204- 587	73- 587	３０	A
MTN-J- 588	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 5.0残	ＳＢ２０６　Ｐ３	1990.05	204- 588	73- 588	３０	A
MTN-J- 589	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径19.4復　底径 ―― 器高 3.8残	ＳＢ２０６　Ｐ３	1990.05	204- 589	73- 589	３０	A
MTN-J- 590	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径11.4復　底径 ―― 器高 4.9残	ＳＢ２０６　Ｐ３	1990.05	204- 590	73- 590	３０	A
MTN-J- 594	鉢	弥生土器	弥　生	４０	口径15.5復　底径 7.6復 器高 8.9	ＳＢ２０８　Ｐ３	1990.06	205- 594	75- 594	３０	A
MTN-J- 595	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径13.9復　底径 ―― 器高 5.6残	ＳＢ２０８　Ｐ４	1990.06	205- 595	75- 595	３０	A
MTN-J- 596	鉢	弥生土器	弥　生	５０	口径 8.7復　丸底　　器高 4.4	ＳＢ２０８　Ｐ４	1990.06	205- 596	75- 596	３０	A
MTN-J- 598	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径12.8復　底径 ―― 器高 5.1残	ＳＢ２０９　Ｐ４	1990.06	206- 598	77- 598	３０	A
MTN-J- 601	鉢	弥生土器	弥　生	不明	口径17.0復　底径 ―― 器高 6.1残	ＳＢ２１１　Ｐ１	1990.05	208- 601	77- 601	３０	A
MTN-J- 602	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 7.5復 器高 4.2残	ＳＢ２１１　Ｐ４	1990.05	208- 602	77- 602	３０	A
MTN-J- 603	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 9.4復 器高 1.3残	ＳＢ２１２　Ｐ１	1990.06	209- 603	77- 603	３０	A
MTN-J- 604	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径11.0復 器高 2.5残	ＳＢ２１２　Ｐ５	1990.06	209- 604	77- 604	３０	A
MTN-J- 605	手捏	弥生土器	弥　生	３０	口径 8.2復　底径 4.4復 器高 5.0	ＳＢ２１３　Ｐ２	1990.06	210- 605	80- 605	３０	A
MTN-J- 606	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.8復　底径 ―― 器高10.3残	ＳＢ２１３　Ｐ２	1990.06	210- 606	80- 606	３０	A
MTN-J- 607	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.7復 器高 4.2残	ＳＢ２１３　Ｐ２	1990.06	210- 607	80- 607	３０	A
MTN-J- 608	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 6.8復 器高 3.9残	ＳＢ２１３　Ｐ２	1990.06	210- 608	80- 608	３０	A
MTN-J- 609	高坏	弥生土器	弥　生	不明	口径19.2復　底径 ―― 器高 5.6残	ＳＢ２１３　Ｐ２	1990.06	211- 609	80- 609	３０	A
MTN-J- 612	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径21.0復　底径 ―― 器高 4.9残	ＳＢ２１６　Ｐ２	1990.06	213- 612	83- 612	３０	A
MTN-J- 613	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径25.8復　底径 ―― 器高 9.6残	ＳＢ２１６　Ｐ２	1990.06	213- 613	83- 613	３０	A
MTN-J- 615	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 6.7残	ＳＢ２１９　Ｐ２	1990.05	214- 615	85- 615	３０	A
MTN-J- 616	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 4.1残	ＳＢ２１９　Ｐ２	1990.05	214- 616	85- 616	３０	A
MTN-J- 617	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 5.6残	ＳＢ２１９　Ｐ２	1990.05	214- 617	85- 617	３０	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 618	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.4復 器高 4.7残	ＳＢ２１９　Ｐ２	1990.05	214- 618	85- 618	３０	A
MTN-J- 622	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径21.0復 底径 ―― 器高 2.9残	ＳＢ２２３　Ｐ１	1990.07	217- 622	87- 622	３０	A
MTN-J- 623	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.6復 器高 5.7残	ＳＢ２２３　Ｐ１	1990.07	217- 623	87- 623	３０	A
MTN-J- 624	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径18.2復 底径 ―― 器高 4.1残	ＳＢ２２３　Ｐ２	1990.07	217- 624	87- 624	３０	A
MTN-J- 625	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径22.8復 底径 ―― 器高 4.0残	ＳＢ２２３　Ｐ３	1990.07	217- 625	87- 625	３０	A
MTN-J- 626	甕	弥生土器	弥　生	不明	口径 ―― 底径 8.4復 器高 3.7残	ＳＢ２２３　Ｐ３	1990.07	217- 626	87- 626	３０	A
MTN-J- 628	碗	黒色土器Ａ	平　安	不明	口径15.1復 底径 8.3 器高 5.5	Ｐ１０７８	1990.05	219- 628	124- 628	３０	A
MTN-J- 631	壺	弥生土器	弥　生	不明	口径10.4復 底径 ―― 器高 4.3残	ＢＹ－８７	1990.07	222- 631	124- 631	３０	A
MTN-J- 632	把手	土師器	平　安	不明	長さ 4.3　　幅 3.5	表採	1990.07	223- 632	125- 632	３０	A
MTN-J- 636	小皿	土師器	鎌　倉	５０	口径 8.3復 底径 6.5 器高 1.1	ＳＤ３０８	1990.06	224- 636	146- 636	３１	A
MTN-J- 637	坏	土師器	鎌　倉	４０	口径13.4復 底径 8.8復 器高 3.4	ＳＤ３０８	1990.06	224- 637	146- 637	３１	A
MTN-J- 638	鉢	須恵器	鎌　倉	不明	口径29.2復 底径 ―― 器高 4.9残	ＳＤ３０８	1990.06	224- 638	146- 638	３１	A
MTN-J- 639	鉢	須恵器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 3.9残	ＳＤ３０８	1990.06	224- 639	146- 639	３１	A
MTN-J- 640	碗	土師器	鎌　倉	不明	口径16.6復 底径 ―― 器高 4.7残	ＳＤ３０８	1990.06	224- 640	146- 640	３１	A
MTN-J- 641	碗	瓦　器	鎌　倉	不明	口径16.4復 底径 ―― 器高 6.0残	ＳＤ３０８	1990.06	225- 641	146- 641	３１	A
MTN-J- 642	碗	瓦　器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 2.3残	ＳＤ３０８	1990.06	225- 642	146- 642	３１	A
MTN-J- 643	鉢	須恵器	鎌　倉	不明	口径34.0復 底径 ―― 器高 5.2残	ＳＤ３０８	1990.06	225- 643	146- 643	３１	A
MTN-J- 644	鉢	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 2.9残	ＳＤ３０８	1990.06	225- 644	146- 644	３１	A
MTN-J- 645	坏	土師器	鎌　倉	４０	口径14.8復 丸底　　器高 3.5	ＳＤ３０９	1990.06	226- 645	147- 645	３１	A
MTN-J- 646	碗	瓦　器	鎌　倉	９０	口径16.7 底径 7.2復 器高 5.7	ＳＤ３０９	1990.06	226- 646	147- 646	３１	A
MTN-J- 647	碗	瓦　器	鎌　倉	８０	口径15.8復 底径 7.6 器高 5.7	ＳＤ３０９	1990.06	226- 647	147- 647	３１	A
MTN-J- 648	把手	土師器	鎌　倉	不明	長さ 9.6残　　幅 4.4	ＳＤ３０９	1990.06	226- 648	147- 648	３１	A
MTN-J- 649	土鈴？	土製品	鎌　倉	不明	長さ 4.4残　　幅 4.1	ＳＫ３１０	1990.06	227- 649	142- 649	３１	A
MTN-J- 650	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径 9.6復 底径 6.4 器高 1.3	ＳＫ３１０	1990.06	227- 650	142- 650	３１	A

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 651	碗	瓦器	鎌倉	55	口径16.4復 底径 6.8 器高 5.5	SK310	1990.06	227- 651	142- 651	31	A
MTN-J- 652	皿	青磁	鎌倉	不明	口径 9.6復 底径 —— 器高 2.4残	SK310	1990.06	227- 652	142- 652	31	A
MTN-J- 653	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 —— 器高 3.2残	SK310	1990.06	227- 653	142- 653	31	A
MTN-J- 654	碗	青磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 8.0復 器高 3.0残	SK310	1990.06	227- 654	142- 654	31	A
MTN-J- 655	壺	陶器	鎌倉	不明	口径 —— 底径 —— 器高 3.7残	SK310	1990.06	228- 655	142- 655	31	A
MTN-J- 656	小皿	土師器	鎌倉	40	口径 8.8復 底径 6.8残 器高 1.3	SK311	1990.06	229- 656	142- 656	31	A
MTN-J- 657	小皿	土師器	鎌倉	40	口径 8.0復 底径 6.6残 器高 1.2	SK311	1990.06	229- 657	142- 657	31	A
MTN-J- 658	小皿	土師器	鎌倉	30	口径 8.8復 底径 6.2残 器高 1.0	SK311	1990.06	229- 658	142- 658	31	A
MTN-J- 659	坏	土師器	鎌倉	不明	口径 —— 底径10.4残 器高 1.9残	SK311	1990.06	229- 659	142- 659	31	A
MTN-J- 660	碗	土師器	鎌倉	不明	口径 —— 底径 6.4残 器高 4.2残	SK311	1990.06	229- 660	142- 660	31	A
MTN-J- 661	土錘	土製品	鎌倉	不明	長さ 2.8残 幅 1.0	SK311	1990.06	229- 661	142- 661	31	A
MTN-J- 662	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径 —— 底径 5.6 器高 1.8残	SK311	1990.06	229- 662	142- 662	31	A
MTN-J- 663	砥石	石製品	鎌倉	完存	長さ16.4 幅 9.4 厚さ 5.1	SK311	1990.06	230- 663	142- 663	31	A
MTN-J- 664	鉢	土師器	鎌倉	不明	口径 —— 底径12.2復 器高 3.9残	SD313	1990.06	231- 664	144- 664	31	A
MTN-J- 665	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径16.0復 底径 —— 器高 4.1残	SD313	1990.06	231- 665	144- 665	31	A
MTN-J- 667	小皿	土師器	鎌倉	40	口径10.8復 底径 9.0復 器高 1.7	SD317	1990.06	233- 667	144- 667	31	A
MTN-J- 668	小皿	土師器	鎌倉	90	口径 9.0 底径 4.2 器高 1.9	SD317	1990.06	233- 668	144- 668	31	A
MTN-J- 669	坏	土師器	鎌倉	40	口径15.0復 底径10.0復 器高 3.7	SD317	1990.06	233- 669	144- 669	31	A
MTN-J- 670	坏	土師器	鎌倉	70	口径16.1 丸底 器高 4.6	SD317	1990.06	233- 670	144- 670	31	A
MTN-J- 671	碗	土師器	鎌倉	30	口径13.4復 底径 7.8復 器高 6.3	SD317	1990.06	233- 671	144- 671	31	A
MTN-J- 672	碗	黒色土器A	平安	40	口径16.6復 底径10.0復 器高 7.0	SD317	1990.06	233- 672	144- 672	31	A
MTN-J- 674	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 —— 器高 2.2残	SD317	1990.06	234- 674	144- 674	31	A
MTN-J- 675	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 6.4 器高 2.9残	SD317	1990.06	234- 675	144- 675	31	A
MTN-J- 676	碗	土師器	鎌倉	不明	口径 —— 底径 8.4復 器高 3.1残	SD317	1990.06	234- 676	144- 676	31	A

村徳永遺跡（J地区）Ⅰ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 677	碗	土師器	鎌　倉	３０	口径14.8復　底径 ―― 器高 4.5	ＳＤ３１７	1990.06	234- 677	144- 677	３１	A
MTN-J- 678	碗	土師器	鎌　倉	不明	口径 ――　底径 7.8　器高 3.0残	ＳＤ３１７	1990.06	234- 678	144- 678	３１	A
MTN-J- 679	小皿	土師器	鎌　倉	３０	口径 8.9復　底径 5.4復 器高 1.8	ＳＤ３１７	1990.06	234- 679	144- 679	３１	A
MTN-J- 680	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径 9.0復　底径 6.9　器高 1.3	ＳＤ３１７	1990.06	234- 680	144- 680	３１	A
MTN-J- 681	碗	黒色土器Ｂ	鎌　倉	不明	口径16.0復　底径 ―― 器高 5.1残	ＳＤ３１７	1990.06	234- 681	144- 681	３１	A
MTN-J- 682	碗	土師器	鎌　倉	４０	口径16.8復　底径 8.0復 器高 4.7	ＳＤ３１７	1990.06	235- 682	144- 682	３１	A
MTN-J- 683	碗	黒色土器Ａ	平　安	不明	口径 ――　底径 9.0　器高 3.3残	ＳＤ３１７	1990.06	235- 683	144- 683	３１	A
MTN-J- 684	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径10.4復　底径 7.6復 器高 2.3	ＳＤ３１７	1990.06	235- 684	144- 684	３１	A
MTN-J- 685	坏	土師器	鎌　倉	６０	口径14.0復　丸底　　器高 3.9	ＳＤ３１７	1990.06	235- 685	144- 685	３１	A
MTN-J- 686	甑	土師器	平　安	不明	口径 ――　底径18.0復 器高 4.4残	ＳＤ３１７	1990.06	235- 686	144- 686	３１	A
MTN-J- 688	支脚	土師器	平　安	不明	長さ16.0残　　幅 5.0	ＳＤ３１７	1990.06	236- 688	144- 688	３１	A
MTN-J- 689	坏	土師器	鎌　倉	２０	口径12.6復　底径 7.9復 器高 3.0	ＳＤ３１７	1990.06	236- 689	144- 689	３１	A
MTN-J- 690	坏	土師器	鎌　倉	不明	口径14.6復　底径 ―― 器高 2.8残	ＳＥ３１８	1990.06	237- 690	129- 690	３１	A
MTN-J- 691	坏	土師器	鎌　倉	不明	口径15.0復　底径 ―― 器高 2.8残	ＳＥ３１８	1990.06	237- 691	129- 691	３１	A
MTN-J- 692	坏	土師器	鎌　倉	不明	口径15.6復　丸底　　器高 3.3残	ＳＥ３１８	1990.06	237- 692	129- 692	３１	A
MTN-J- 693	鉢	土師器	鎌　倉	不明	口径30.6復　底径 ―― 器高 7.6残	ＳＥ３１８	1990.06	238- 693	129- 693	３１	A
MTN-J- 694	皿	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ――　底径 4.0復 器高 1.2残	ＳＥ３１８	1990.06	237- 694	129- 694	３１	A
MTN-J- 695	小皿	土師器	鎌　倉	６５	口径 8.6　底径 7.6　器高 1.0	ＳＥ３１８	1990.06	239- 695	129- 695	３１	A
MTN-J- 697	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ――　底径 ―― 器高 2.5残	ＳＥ３１８	1990.06	239- 697	129- 697	３１	A
MTN-J- 698	碗	瓦　器	鎌　倉	完存	口径17.0　底径 7.8　器高 5.8	ＳＥ３１８	1990.06	239- 698	129- 698	３１	A
MTN-J- 699	碗	瓦　器	鎌　倉	不明	口径16.8復　底径 ―― 器高 4.3残	ＳＥ３１８	1990.06	239- 699	129- 699	３１	A
MTN-J- 700	鍋	土師器	鎌　倉	不明	口径 ――　底径 ―― 器高15.0残	ＳＥ３１８	1990.06	240- 700	129- 700	３１	A
MTN-J- 701	小皿	瓦　器	鎌　倉	ほぼ完存	口径10.4　底径 8.2　器高 1.7	ＳＥ３１８	1990.06	239- 701	129- 701	３１	A
MTN-J- 702	小皿	瓦　器	鎌　倉	３０	口径 9.8復　底径 8.4復 器高 1.4	ＳＥ３１８	1990.06	240- 702	129- 702	３１	A

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 703	碗	瓦器	鎌倉	２０	口径16.6復 底径 7.0 器高 5.1	ＳＥ３１８	1990.06	240- 703	129- 703	３１	A
MTN-J- 706	不明石製品	滑石製品	鎌倉	不明	長さ 5.1 幅 5.2 厚さ 1.3	ＳＥ３１８	1990.06	241- 706	129- 706	３１	A
MTN-J- 707	石鍋	滑石製品	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 6.6残	ＳＥ３１８	1990.06	241- 707	129- 707	３１	A
MTN-J- 708	碗	瓦器	鎌倉	３５	口径15.6復 底径 6.0復 器高 5.8	ＳＥ３１８	1990.06	241- 708	129- 708	３１	A
MTN-J- 709	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径16.6復 底径 ── 器高 5.3残	ＳＥ３１８	1990.06	241- 709	129- 709	３１	A
MTN-J- 711	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完存	口径 8.2 底径 6.2 器高 1.4	ＳＥ３１９	1990.06	242- 711	131- 711	３１	A
MTN-J- 712	碗	土師器	鎌倉	不明	口径15.4復 底径 ── 器高 4.2残	ＳＥ３１９	1990.06	242- 712	131- 712	３１	A
MTN-J- 713	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 8.4 底径 7.0 器高 1.2	ＳＥ３１９	1990.06	242- 713	131- 713	３１	A
MTN-J- 714	小皿	土師器	鎌倉	４５	口径 8.0復 底径 6.6残 器高 1.2	ＳＥ３１９	1990.06	242- 714	131- 714	３１	A
MTN-J- 715	小皿	土師器	鎌倉	２０	口径 8.6復 底径 7.8残 器高 1.5	ＳＥ３１９	1990.06	242- 715	131- 715	３１	A
MTN-J- 716	碗	土師器	鎌倉	不明	口径18.4復 底径 ── 器高 5.6残	ＳＥ３１９	1990.06	242- 716	131- 716	３１	A
MTN-J- 717	碗	土師器	鎌倉	４０	口径17.8復 底径 7.7 器高 5.8	ＳＥ３１９	1990.06	243- 717	131- 717	３１	A
MTN-J- 718	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径15.8復 底径 ── 器高 5.0	ＳＥ３１９	1990.06	243- 718	131- 718	３１	A
MTN-J- 719	鉢	須恵器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 3.0残	ＳＥ３１９	1990.06	243- 719	131- 719	３１	A
MTN-J- 720	碗	白磁	鎌倉	不明	口径14.4復 底径 ── 器高 5.3残	ＳＥ３１９	1990.06	243- 720	131- 720	３１	A
MTN-J- 721	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 2.1残	ＳＥ３１９	1990.06	243- 721	131- 721	３１	A
MTN-J- 722	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 4.8復 器高 0.9残	ＳＥ３１９	1990.06	243- 722	131- 722	３１	A
MTN-J- 723	不明石製品	滑石製品	鎌倉	不明	長さ 5.2残 幅 4.8 厚さ 2.5残	ＳＥ３１９	1990.06	244- 723	131- 723	３１	A
MTN-J- 724	坏	土師器	鎌倉	２０	口径14.2復 底径 8.0復 器高 2.8	ＳＥ３１９	1990.06	243- 724	131- 724	３１	A
MTN-J- 725	鍋？	土師器	鎌倉	不明	口径33.2復 底径 ── 器高 4.0残	ＳＥ３１９	1990.06	244- 725	131- 725	３１	A
MTN-J- 726	碗	瓦器	鎌倉	６０	口径16.1 底径 8.2復 器高 6.0	ＳＥ３１９	1990.06	244- 726	131- 726	３１	A
MTN-J- 727	碗	瓦器	鎌倉	４５	口径17.2復 底径 7.2復 器高 6.0	ＳＥ３１９	1990.06	244- 727	131- 727	３１	A
MTN-J- 728	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径15.3復 底径 ── 器高 4.6残	ＳＥ３１９	1990.06	244- 728	131- 728	３１	A
MTN-J- 729	皿	土師器	鎌倉	２０	口径15.6復 底径10.3復 器高 1.3	ＳＥ３１９	1990.06	245- 729	131- 729	３１	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 730	坏	土師器	鎌　倉	不明	口径17.8復　底径 ―― 器高 5.0残	ＳＥ３１９	1990.06	245- 730	131- 730	３１	A
MTN-J- 731	甕	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 6.7残	ＳＥ３１９	1990.06	245- 731	131- 731	３１	A
MTN-J- 732	石鍋	滑石製品	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 2.7残	ＳＥ３１９	1990.06	245- 732	131- 732	３１	A
MTN-J- 733	小皿	土師器	平　安	７０	口径 9.1　底径 7.6　器高 1.7	ＳＥ３２０	1990.06	246- 733	133- 733	３１	A
MTN-J- 734	小皿	土師器	平　安	５０	口径10.0復　底径 7.8復 器高 1.3	ＳＥ３２０	1990.06	246- 734	133- 734	３１	A
MTN-J- 735	坏	土師器	平　安	４０	口径12.0復　底径 7.6復 器高 3.8	ＳＥ３２０	1990.06	246- 735	133- 735	３１	A
MTN-J- 736	坏	土師器	平　安	３０	口径13.8復　底径 8.4復 器高 3.4	ＳＥ３２０	1990.06	246- 736	133- 736	３１	A
MTN-J- 737	坏	土師器	平　安	７０	口径12.1復　底径 7.8復 器高 2.1	ＳＥ３２０	1990.06	246- 737	133- 737	３１	A
MTN-J- 738	坏	土師器	平　安	８０	口径12.5　底径 8.1　器高 3.3	ＳＥ３２０	1990.06	246- 738	133- 738	３１	A
MTN-J- 739	坏	土師器	平　安	完形	口径12.9　底径 8.9　器高 2.2	ＳＥ３２０	1990.06	246- 739	133- 739	３１	A
MTN-J- 740	坏	土師器	平　安	４０	口径15.6復　底径10.8復 器高 3.2	ＳＥ３２０	1990.06	246- 740	133- 740	３１	A
MTN-J- 741	甕	土師器	平　安	不明	口径27.4復　底径 ―― 器高 8.0残	ＳＥ３２０	1990.06	247- 741	134- 741	３１	A
MTN-J- 742	坏	土師器	平　安	５５	口径15.0復　底径 7.6復 器高 3.0	ＳＥ３２０	1990.06	247- 742	133- 742	３１	A
MTN-J- 743	小皿	土師器	平　安	４５	口径 9.4復　底径 7.6復 器高 1.4	ＳＥ３２０	1990.06	247- 743	133- 743	３１	A
MTN-J- 744	坏	土師器	平　安	２０	口径14.0復　底径 9.7復 器高 2.3	ＳＥ３２０	1990.06	247- 744	133- 744	３１	A
MTN-J- 745	碗	黒色土器Ｂ	平　安	不明	口径17.0復　底径 ―― 器高 3.3残	ＳＥ３２０	1990.06	247- 745	133- 745	３１	A
MTN-J- 746	把手	土師器	平　安	不明	長さ 8.7　幅 6.6　厚さ 5.9	ＳＥ３２０	1990.06	248- 746	134- 746	３１	A
MTN-J- 747	坏	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径 8.4　器高 4.0残	ＳＥ３２０	1990.06	248- 747	133- 747	３１	A
MTN-J- 748	坏	土師器	平　安	完形	口径12.4　底径 6.8　器高 3.3	ＳＥ３２０	1990.06	248- 748	133- 748	３１	A
MTN-J- 749	坏	土師器	平　安	６０	口径12.5復　底径 8.8復 器高 3.1	ＳＥ３２０	1990.06	248- 749	133- 749	３１	A
MTN-J- 750	坏	土師器	平　安	６０	口径13.4復　底径 7.4　器高 3.9	ＳＥ３２０	1990.06	248- 750	133- 750	３１	A
MTN-J- 751	坏	土師器	平　安	５０	口径16.2復　底径 8.0復 器高 4.8	ＳＥ３２０	1990.06	248- 751	133- 751	３１	A
MTN-J- 752	坏	土師器	平　安	４０	口径15.2復　底径 9.6復 器高 4.7	ＳＥ３２０	1990.06	249- 752	133- 752	３１	A
MTN-J- 753	甕	土師器	平　安	不明	口径 ―― 底径11.4復 器高 2.5残	ＳＥ３２０	1990.06	249- 753	133- 753	３１	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 754	甑	土師器	平安	不明	口径 ── 底径20.8復 器高11.1残	SE320	1990.06	249- 754	134- 754	31	A
MTN-J- 755	甕	土師器	平安	不明	口径21.0復 底径 ── 器高17.2残	SE320	1990.06	250- 755	134- 755	31	A
MTN-J- 756	甑	土師器	平安	不明	口径27.6復 底径 ── 器高21.5残	SE320	1990.06	251- 756	134- 756	31	A
MTN-J- 757	甑	土師器	平安	40	口径36.2復 底径24.6復 器高27.6	SE320	1990.06	252- 757	134- 757	31	A
MTN-J- 758	土鈴	土製品	鎌倉	60	長さ 4.3 幅 3.6 厚さ 1.7	SD321	1990.06	253- 758	148- 758	31	A
MTN-J- 759	鉢	土師器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 3.1残	SD321	1990.06	253- 759	148- 759	31	A
MTN-J- 762	甕?	須恵器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 1.9残	SD321	1990.06	253- 762	148- 762	31	A
MTN-J- 763	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径18.6復 底径 ── 器高 5.8残	SD321	1990.06	253- 763	148- 763	31	A
MTN-J- 765	碗	青磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 5.9残	SD321	1990.06	254- 765	148- 765	31	A
MTN-J- 767	鉢	瓦器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 4.7残	SE322	1990.06	255- 767	136- 767	32	A
MTN-J- 768	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 9.2 底径 7.3 器高 1.6	SE322	1990.06	255- 768	136- 768	32	A
MTN-J- 769	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完形	口径 9.2 底径 6.9 器高 1.4	SE322	1990.06	255- 769	136- 769	32	A
MTN-J- 770	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完形	口径 9.3 底径 7.4 器高 1.6	SE322	1990.06	255- 770	136- 770	32	A
MTN-J- 771	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完形	口径 9.3 底径 7.2 器高 1.7	SE322	1990.06	255- 771	136- 771	32	A
MTN-J- 772	小皿	土師器	鎌倉	完形	口径 9.1 底径 7.8 器高 2.0	SE322	1990.06	255- 772	136- 772	32	A
MTN-J- 773	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完形	口径 9.4 底径 8.1 器高 1.7	SE322	1990.06	255- 773	136- 773	32	A
MTN-J- 774	小皿	土師器	鎌倉	完形	口径 9.1 底径 7.7 器高 1.6	SE322	1990.06	255- 774	136- 774	32	A
MTN-J- 778	碗	瓦器	鎌倉	完存	口径16.2 底径 7.5 器高 5.1	SE322	1990.06	256- 778	136- 778	32	A
MTN-J- 779	碗	瓦器	鎌倉	20	口径17.4復 底径 8.3復 器高 5.8	SE322	1990.06	256- 779	136- 779	32	A
MTN-J- 780	碗	白磁	鎌倉	70	口径15.7 底径 5.9 器高 6.9	SE322	1990.06	256- 780	136- 780	32	A
MTN-J- 782	小皿	土師器	鎌倉	完形	口径 8.5 底径 7.7 器高 1.1	SE322	1990.06	257- 782	136- 782	32	A
MTN-J- 783	小皿	土師器	鎌倉	80	口径 8.8 底径 6.8 器高 1.9	SE322	1990.06	257- 783	136- 783	32	A
MTN-J- 784	坏	土師器	鎌倉	60	口径14.2復 底径 8.7 器高 3.6	SE322	1990.06	257- 784	136- 784	32	A
MTN-J- 785	鉢	瓦器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 5.2残	SE322	1990.06	257- 785	136- 785	32	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 789	碗	土師器	鎌　倉	７０	口径15.6復　底径 7.0復 器高 4.8	ＳＥ３２２	1990.06	257- 789	136- 789	３２	A
MTN-J- 793	坏	土師器	鎌　倉	７０	口径14.8復　底径 8.6復 器高 3.3	ＳＥ３２２	1990.06	258- 793	136- 793	３２	A
MTN-J- 794	碗	土師器	鎌　倉	４０	口径16.8復　底径 7.6復 器高 5.0	ＳＥ３２２	1990.06	258- 794	136- 794	３２	A
MTN-J- 795	碗	土師器	鎌　倉	３０	口径18.0復　底径 8.8復 器高 5.6	ＳＥ３２２	1990.06	259- 795	136- 795	３２	A
MTN-J- 796	碗	瓦　器	鎌　倉	９０	口径17.0　底径 8.0　器高 5.2	ＳＥ３２２	1990.06	259- 796	136- 796	３２	A
MTN-J- 797	碗	瓦　器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.6　底径 8.0　器高 4.9	ＳＥ３２２	1990.06	259- 797	136- 797	３２	A
MTN-J- 798	碗	黒色土器Ｂ	鎌　倉	８０	口径15.9　底径 7.0　器高 5.1	ＳＥ３２２	1990.06	259- 798	136- 798	３２	A
MTN-J- 799	小皿	土師器	鎌　倉	完形	口径 9.0　底径 7.4　器高 1.4	ＳＥ３２２	1990.06	260- 799	136- 799	３２	A
MTN-J- 801	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.3　底径 7.5　器高 1.1	ＳＥ３２２	1990.06	260- 801	136- 801	３２	A
MTN-J- 803	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.1　底径 9.4　器高 2.9	ＳＥ３２２	1990.06	260- 803	136- 803	３２	A
MTN-J- 804	碗	瓦　器	鎌　倉	５０	口径16.8復　底径 6.6復 器高 5.3	ＳＥ３２２	1990.06	260- 804	136- 804	３２	A
MTN-J- 805	櫛	木製品	鎌　倉	不明	長さ 7.2残　幅 3.7　厚さ 1.0	ＳＥ３２２	1990.06	261- 805	136- 805	３２	A
MTN-J- 806	坏	土師器	平　安	４０	口径13.0復　底径 7.9　器高 4.1	ＳＫ３２３	1990.06	262- 806	140- 806	３３	A
MTN-J- 807	坏	土師器	平　安	４０	口径12.5復　底径 7.4　器高 3.8	ＳＫ３２３	1990.06	262- 807	140- 807	３３	A
MTN-J- 808	坏	土師器	平　安	４０	口径12.4復　底径 7.2　器高 3.3	ＳＫ３２３	1990.06	262- 808	140- 808	３３	A
MTN-J- 809	坏	土師器	平　安	８０	口径13.1　底径 8.1　器高 3.2	ＳＫ３２３	1990.06	262- 809	140- 809	３３	A
MTN-J- 810	坏	土師器	平　安	４０	口径12.6復　底径 7.5　器高 3.8	ＳＫ３２３	1990.06	262- 810	140- 810	３３	A
MTN-J- 811	坏	土師器	平　安	７０	口径12.6　底径 7.8　器高 3.6	ＳＫ３２３	1990.06	262- 811	140- 811	３３	A
MTN-J- 812	坏	土師器	平　安	６０	口径13.4　底径 9.5　器高 3.4	ＳＫ３２３	1990.06	262- 812	140- 812	３３	A
MTN-J- 813	坏	土師器	平　安	３０	口径13.4復　底径 8.7　器高 3.7	ＳＫ３２３	1990.06	262- 813	140- 813	３３	A
MTN-J- 815	碗	土師器	平　安	７０	口径15.1　底径 8.8　器高 8.0	ＳＫ３２３	1990.06	262- 815	140- 815	３３	A
MTN-J- 816	碗	黒色土器Ａ	平　安	７０	口径15.6復　底径10.0復 器高 7.8	ＳＫ３２３	1990.06	263- 816	140- 816	３３	A
MTN-J- 817	碗	黒色土器Ａ	平　安	不明	口径15.0復　底径 8.8復 器高 6.8	ＳＫ３２３	1990.06	263- 817	140- 817	３３	A
MTN-J- 818	碗	黒色土器Ａ	平　安	不明	口径14.2復　底径 ―― 器高 4.4残	ＳＥ３２０	1990.06	263- 818	140- 818	３３	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 819	坩	土師器	平　安	ほぼ完存	口径 5.0　丸底　　器高 7.2	ＳＫ３２３	1990.06	263- 819	140- 819	３３	A
MTN-J- 821	鉢	土師器	平　安	不明	口径 ―　底径 ―　器高 3.2残	ＳＫ３２３	1990.06	263- 821	140- 821	３３	A
MTN-J- 830	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径 8.8復　底径 6.6残　器高 1.3	ＳＫ３２８	1990.06	264- 830	138- 830	３３	A
MTN-J- 831	碗	土師器	鎌　倉	３０	口径16.8復　底径 ―　器高 3.9残	ＳＫ３２８	1990.06	264- 831	138- 831	３３	A
MTN-J- 832	碗	瓦　器	鎌　倉	ほぼ完存	口径16.0　底径 6.7　器高 6.2	ＳＫ３２８	1990.06	264- 832	138- 832	３３	A
MTN-J- 834	不明木製品	木製品	鎌　倉	不明	長さ10.7残　幅 5.7残　厚さ 2.4	ＳＫ３２８	1990.06	265- 834	138- 834	３３	A
MTN-J- 835	不明木製品	木製品	鎌　倉	不明	長さ11.2残　幅 6.7　厚さ 2.3	ＳＫ３２８	1990.06	265- 835	138- 835	３３	A
MTN-J- 857	高台破片	土師器	平　安	不明	口径 ―　底径18.2復　器高 5.1残	ＳＫ３３１	1990.06	266- 857	151- 857	３３	A
MTN-J- 859	鉢	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 5.0残	ＳＫ３３２	1990.06	267- 859	151- 859	３３	A
MTN-J- 860	鉢	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 4.6残	ＳＫ３３２	1990.06	267- 860	151- 860	３３	A
MTN-J- 861	高台破片	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 4.7残	ＳＫ３３２	1990.06	267- 861	151- 861	３３	A
MTN-J- 862	壺	陶　器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 2.4残	ＳＫ３３２	1990.06	267- 862	151- 862	３３	A
MTN-J- 887	坏	土師器	平　安	４０	口径13.0復　底径 7.2復　器高 2.2	Ｐ３００１	1990.06	269- 887	150- 887	３４	A
MTN-J- 888	坏	土師器	平　安	４０	口径13.5復　底径 7.5　器高 3.3	Ｐ３００１	1990.06	269- 888	150- 888	３４	A
MTN-J- 889	坏	土師器	平　安	４０	口径13.4復　底径 7.3　器高 3.9	Ｐ３００１	1990.06	269- 889	150- 889	３４	A
MTN-J- 890	坏	土師器	平　安	４０	口径12.6復　底径 7.9　器高 3.6	Ｐ３００１	1990.06	269- 890	150- 890	３４	A
MTN-J- 892	小皿	土師器	平　安	完存	口径 8.7　底径 7.4　器高 1.1	Ｐ３００１	1990.06	269- 892	150- 892	３４	A
MTN-J- 893	坏	土師器	平　安	８０	口径12.3　底径 8.9　器高 2.9	Ｐ３００１	1990.06	269- 893	150- 893	３４	A
MTN-J- 894	坏	土師器	平　安	完存	口径13.9　底径10.6　器高 3.5	Ｐ３００１	1990.06	269- 894	150- 894	３４	A
MTN-J- 895	碗	土師器	平　安	完存	口径16.2　丸底 ―　器高 7.4	Ｐ３００１	1990.06	269- 895	150- 895	３４	A
MTN-J- 896	碗	土師器	平　安	４０	口径15.2復　底径 8.3復　器高 5.8	Ｐ３００１	1990.06	269- 896	150- 896	３４	A
MTN-J- 897	碗	土師器	平　安	４０	口径15.0復　底径 9.7　器高 5.9	Ｐ３００１	1990.06	269- 897	150- 897	３４	A
MTN-J- 918	鉢	土師器	平　安	不明	口径 ―　底径 ―　器高 8.8残	Ｐ３００８	1990.06	271- 918	151- 918	３４	A
MTN-J- 920	碗	白　磁	平　安	不明	口径 ―　底径 ―　器高 3.8残	Ｐ３００８	1990.06	271- 920	151- 920	３４	A

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 921	鉢	土師器	平安	不明	口径 ── 底径 9.8復 器高 5.9残	P3011	1990.06	272- 921	151- 921	34	A
MTN-J- 924	壺	須恵器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 6.4残	P3024	1990.06	273- 924	151- 924	34	A
MTN-J- 929	鉢	須恵器	鎌倉	不明	口径 ── 底径 8.0復 器高 2.0残	P3024	1990.06	273- 929	151- 929	34	A
MTN-J- 930	深鉢	縄文土器	縄文	不明	口径 ── 底径 7.7 器高 2.2残	P3025	1990.06	274- 930	151- 930	34	A
MTN-J- 938	鉢	土師器	平安	不明	口径 ── 底径15.0復 器高 5.7残	P3038	1990.06	275- 938	151- 938	34	A
MTN-J- 954	石錘	滑石製品	鎌倉	完存	長さ 4.7 幅 3.2 厚さ 2.1	BO－109	1990.06	277- 954	151- 954	35	A
MTN-J- 972	石錘	滑石製品	鎌倉	完存	長さ 6.5 幅 4.3 厚さ 2.1	表採	1990.06	279- 972	151- 972	35	A
MTN-J- 973	湯釜	瓦器	近世	不明	口径16.5 底径 ── 器高11.8残	SK401	1990.06	280- 973	167- 973	35	A
MTN-J- 974	鉢	瓦器	近世	不明	口径 ── 底径 ── 器高 4.6残	SK401	1990.06	280- 974	167- 974	35	A
MTN-J- 975	擂鉢	陶器	近世	50	口径33.0 底径10.5 器高15.0	SK401	1990.06	281- 975	167- 975	35	A
MTN-J- 976	台付皿	陶器	近世	80	口径27.5 底径 8.5 器高 7.1	SK401	1990.06	282- 976	167- 976	35	A
MTN-J- 977	染付皿	磁器	近世	60	口径12.6 底径 4.8 器高 3.4	SK401	1990.06	280- 977	167- 977	35	A
MTN-J- 978	鉢	瓦器	近世	不明	口径 ── 底径 ── 器高 6.8残	SK401	1990.06	280- 978	167- 978	35	A
MTN-J- 979	染付皿	磁器	近世	不明	口径21.0復 底径 ── 器高 3.1残	SK401	1990.06	281- 979	167- 979	35	A
MTN-J- 980	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 8.4 底径 7.9 器高 1.2	SE403	1990.07	283- 980	156- 980	35	A
MTN-J- 981	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 8.5 底径 7.3 器高 1.2	SE403	1990.07	283- 981	156- 981	35	A
MTN-J- 982	小皿	土師器	鎌倉	ほぼ完存	口径 8.7 底径 7.4 器高 1.0	SE403	1990.07	283- 982	156- 982	35	A
MTN-J- 984	小皿	土師器	鎌倉	完形	口径 9.4 底径 7.6 器高 1.4	SE403	1990.07	283- 984	156- 984	35	A
MTN-J- 986	坏	土師器	鎌倉	完存	口径14.8 底径 8.9 器高 3.7	SE403	1990.07	283- 986	156- 986	35	A
MTN-J- 987	碗	瓦器	鎌倉	不明	口径16.2復 底径 ── 器高 4.8残	SE403	1990.07	283- 987	156- 987	35	A
MTN-J- 988	碗	黒色土器B	鎌倉	不明	口径16.4復 底径 ── 器高 4.6残	SE403	1990.07	283- 988	156- 988	35	A
MTN-J- 989	小皿	土師器	鎌倉	55	口径 9.3 底径 7.1 器高 1.9	SE403	1990.07	283- 989	156- 989	35	A
MTN-J- 990	小皿	土師器	鎌倉	75	口径 9.4 底径 7.8 器高 2.0	SE403	1990.07	283- 990	156- 990	35	A
MTN-J- 991	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 9.5 底径 7.4 器高 1.6	SE403	1990.07	283- 991	156- 991	35	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J- 992	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.3　底径 7.5　器高 2.0	ＳＥ４０３	1990.07	283- 992	156- 992	３５	A
MTN-J- 993	坏	土師器	鎌　倉	４０	口径14.6復　底径 8.9　器高 3.7	ＳＥ４０３	1990.07	283- 993	156- 993	３５	A
MTN-J- 994	碗	土師器	鎌　倉	完形	口径16.4　底径 7.1　器高 5.9	ＳＥ４０３	1990.07	283- 994	156- 994	３５	A
MTN-J- 995	碗	土師器	鎌　倉	不明	口径18.0復　底径 ―― 器高 4.8残	ＳＥ４０３	1990.07	283- 995	156- 995	３５	A
MTN-J- 997	碗	土師器	鎌　倉	４０	口径16.8復　底径 6.2　器高 6.0	ＳＥ４０３	1990.07	283- 997	156- 997	３５	A
MTN-J- 998	碗	黒色土器Ｂ	鎌　倉	不明	口径16.2復　底径 ―― 器高 4.2残	ＳＥ４０３	1990.07	283- 998	156- 998	３５	A
MTN-J- 999	碗	黒色土器Ｂ	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 7.0　器高 3.4	ＳＥ４０３	1990.07	283- 999	156- 999	３５	A
MTN-J-1004	碗	土師器	鎌　倉	不明	口径15.0復　底径 ―― 器高 4.6	ＳＫ４０４	1990.07	285-1004	158-1004	３５	A
MTN-J-1005	小皿	土師器	鎌　倉	８０	口径 9.5　底径 7.0　器高 1.6	ＳＫ４０４	1990.07	285-1005	158-1005	３５	A
MTN-J-1007	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径 9.6復　底径 6.2　器高 1.3	ＳＫ４０４	1990.07	285-1007	158-1007	３５	A
MTN-J-1008	坏	土師器	鎌　倉	３０	口径15.0復　底径10.2復　器高 2.7	ＳＫ４０４	1990.07	285-1008	158-1008	３５	A
MTN-J-1010	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 4.5残	ＳＫ４０４	1990.07	285-1010	158-1010	３５	A
MTN-J-1011	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 5.1残	ＳＫ４０４	1990.07	285-1011	158-1011	３５	A
MTN-J-1012	小壺	白　磁	鎌　倉	不明	口径 2.2復　底径 ―― 器高 3.2残	ＳＫ４０４	1990.07	285-1012	158-1012	３５	A
MTN-J-1013	鉢	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径13.0　器高 2.4残	ＳＫ４０４	1990.07	285-1013	158-1013	３５	A
MTN-J-1015	叩き石	石製品	鎌　倉	ほぼ完存	長さ13.8　幅 5.8　厚さ 4.6	ＳＫ４０４	1990.07	286-1015	158-1015	３５	A
MTN-J-1016	碗	土師器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 7.6復　器高 2.2残	ＳＫ４０５	1990.07	287-1016	170-1016	３６	A
MTN-J-1017	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.4　底径 7.0　器高 1.1	ＳＫ４０５	1990.07	287-1017	170-1017	３６	A
MTN-J-1018	須恵器破片	須恵器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 4.0残	ＳＫ４０５	1990.07	287-1018	170-1018	３６	A
MTN-J-1020	坏	土師器	鎌　倉	不明	口径13.0復　底径10.0復　器高 2.5	ＳＫ４０６	1990.07	288-1020	170-1020	３６	A
MTN-J-1022	碗	青　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 3.0残	ＳＫ４０６	1990.07	288-1022	170-1022	３６	A
MTN-J-1023	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 ―― 器高 3.0残	ＳＫ４０６	1990.07	288-1023	170-1023	３６	A
MTN-J-1024	碗	瓦　器	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 6.0　器高 1.2残	ＳＫ４０６	1990.07	288-1024	170-1024	３６	A
MTN-J-1025	碗	青　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 底径 5.2復　器高 1.0残	ＳＫ４０６	1990.07	288-1025	170-1025	３６	A

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J-1026	小皿	土師器	鎌倉	45	口径 9.0復 底径 6.0復 器高 1.5	SK406	1990.07	288-1026	170-1026	36	A
MTN-J-1027	坏	土師器	鎌倉	85	口径13.5 底径10.9 器高 2.8	SK406	1990.07	288-1027	170-1027	36	A
MTN-J-1029	碗	土師器	鎌倉	不明	口径 —— 底径 5.6 器高 3.3残	SK406	1990.07	288-1029	170-1029	36	A
MTN-J-1030	坏	土師器	鎌倉	50	口径12.8復 底径10.3 器高 2.6	SK406	1990.07	288-1030	170-1030	36	A
MTN-J-1031	坏	土師器	室町	完存	口径12.4 底径10.0 器高 2.7	SK407	1990.07	289-1031	172-1031	36	A
MTN-J-1032	坏	土師器	室町	完存	口径12.7 底径 9.3 器高 2.7	SK407	1990.07	289-1032	172-1032	36	A
MTN-J-1033	坏	土師器	室町	30	口径12.0復 底径 8.6復 器高 2.6	SK407	1990.07	289-1033	172-1033	36	A
MTN-J-1034	鉢	土師器	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高 4.6残	SK407	1990.07	289-1034	172-1034	36	A
MTN-J-1035	皿	白磁	室町	40	口径11.6復 底径 7.0復 器高 2.3	SK407	1990.07	289-1035	172-1035	36	A
MTN-J-1036	合子	青磁	室町	30	口径 7.6復 上底 5.6復 器高 1.4	SK407	1990.07	289-1036	172-1036	36	A
MTN-J-1038	鉢	土師器	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高 5.0残	SK407	1990.07	289-1038	172-1038	36	A
MTN-J-1039	坏	土師器	室町	30	口径13.0復 底径11.0復 器高 3.1	SK407	1990.07	289-1039	172-1039	36	A
MTN-J-1040	坏	土師器	室町	20	口径13.7復 底径10.5復 器高 2.6	SK407	1990.07	290-1040	172-1040	36	A
MTN-J-1041	鉢	土師器	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高 4.3残	SK407	1990.07	290-1041	172-1041	36	A
MTN-J-1042	碗	青磁	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高	SK407	1990.07	290-1042	172-1042	36	A
MTN-J-1043	鉢	須恵器	室町	65	口径18.6 底径 5.8 器高 7.3	SK407	1990.07	291-1043	172-1043	36	A
MTN-J-1044	碗	白磁	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高 3.8残	SK407	1990.07	291-1044	172-1044	36	A
MTN-J-1045	碗	青磁	室町	不明	口径 —— 底径 —— 器高 4.0残	SK407	1990.07	290-1045	172-1045	36	A
MTN-J-1047	坏	土師器	室町	75	口径14.4復 底径10.5復 器高 3.1	SK407	1990.07	290-1047	172-1047	36	A
MTN-J-1048	石鍋	滑石製品	室町	不明	口径30.0復 底径 —— 器高 4.7残	SK407	1990.07	291-1048	172-1048	36	A
MTN-J-1049	碗	瓦器	鎌倉	ほぼ完形	口径17.4 底径 6.6 器高 5.7	SK408	1990.07	292-1049	174-1049	36	A
MTN-J-1050	碗	瓦器	鎌倉	ほぼ完存	口径17.2 底径 6.9復 器高 5.9	SK408	1990.07	292-1050	174-1050	36	A
MTN-J-1051	碗	瓦器	鎌倉	完存	口径17.2 底径 7.2 器高 5.7	SK408	1990.07	292-1051	174-1051	36	A
MTN-J-1052	碗	瓦器	鎌倉	ほぼ完形	口径16.6 底径 6.9 器高 5.9	SK408	1990.07	292-1052	174-1052	36	A

村徳永遺跡（J地区） I種

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J-1053	碗	瓦器	鎌倉	ほぼ完存	口径17.5 底径 6.4 器高 5.4	SK408	1990.07	292-1053	174-1053	36	A
MTN-J-1054	坏	土師器	鎌倉	ほぼ完形	口径16.8 底径10.1 器高 3.6	SK408	1990.07	292-1054	174-1054	36	A
MTN-J-1056	皿	白磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 1.5残	SK408	1990.07	292-1056	174-1056	36	A
MTN-J-1057	碗	白磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 3.4残	SK408	1990.07	292-1057	174-1057	36	A
MTN-J-1058	碗	青磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 3.5残	SK408	1990.07	292-1058	174-1058	36	A
MTN-J-1059	皿	青磁	鎌倉	不明	口径 ── 底径 ── 器高 1.3残	SK408	1990.07	292-1059	174-1059	36	A
MTN-J-1067	火鉢	瓦器	近世	不明	口径 ── 底径38.0残 器高 3.7残	SD410	1990.07	295-1067	180-1067	36	A
MTN-J-1068	壺	陶器	近世	不明	口径 ── 底径 ── 器高11.7残	SD410	1990.07	295-1068	180-1068	36	A
MTN-J-1073	焙烙（把手）	土師器	近世	不明	長さ14.3残 幅 3.9 厚さ 2.0	SD410	1990.07	295-1073	180-1073	36	A
MTN-J-1074	火鉢	瓦器	近世	不明	口径38.0復 底径25.8復 器高10.0	SD410	1990.07	296-1074	180-1074	36	A
MTN-J-1075	火鉢	瓦器	近世	不明	口径34.0復 底径25.7復 器高 7.8	SD410	1990.07	296-1075	180-1075	36	A
MTN-J-1077	擂鉢	陶器	近世	不明	口径 ── 底径10.0 器高 8.1残	SD410	1990.07	294-1077	180-1077	36	A
MTN-J-1078	染付碗	磁器	近世	不明	口径 ── 底径 5.0 器高 1.3残	SD410	1990.07	294-1078	180-1078	36	A
MTN-J-1079	染付碗	磁器	近世	不明	口径 ── 底径 4.0 器高 2.1残	SD410	1990.07	294-1079	180-1079	36	A
MTN-J-1086	小皿	土師器	鎌倉	80	口径 9.2 底径 7.5 器高 1.2	SK413	1990.07	298-1086	161-1086	37	A
MTN-J-1087	小皿	土師器	鎌倉	30	口径 9.2復 底径 7.6復 器高 1.3	SK413	1990.07	298-1087	161-1087	37	A
MTN-J-1088	小皿	土師器	鎌倉	30	口径 8.6復 底径 6.3復 器高 1.2	SK413	1990.07	298-1088	161-1088	37	A
MTN-J-1089	坏	土師器	鎌倉	90	口径16.4 底径11.2 器高 2.9	SK413	1990.07	298-1089	161-1089	37	A
MTN-J-1090	小皿	土師器	鎌倉	完存	口径 9.3 底径 6.6 器高 1.3	SK413	1990.07	298-1090	161-1090	37	A
MTN-J-1091	坏	土師器	鎌倉	ほぼ完存	口径15.7 底径11.9 器高 3.1	SK413	1990.07	298-1091	161-1091	37	A
MTN-J-1092	碗	白磁	鎌倉	不明	口径17.4復 底径 ── 器高 4.6残	SK413	1990.07	299-1092	161-1092	37	A
MTN-J-1093	土錘	土師器	鎌倉	不明	長さ 3.0残 幅 1.4	SK413	1990.07	298-1093	161-1093	37	A
MTN-J-1094	小皿	土師器	鎌倉	65	口径 9.1 底径 6.6 器高 1.2	SK413	1990.07	298-1094	161-1094	37	A
MTN-J-1095	坏	土師器	鎌倉	40	口径15.6復 底径10.3復 器高 3.5	SK413	1990.07	298-1095	161-1095	37	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J-1096	碗	瓦　器	鎌　倉	不明	口径17.0㎝　底径 ―― 器高 4.6㎝	ＳＫ４１３	1990.07	298-1096	161-1096	３７	A
MTN-J-1097	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径17.2㎝　底径 ―― 器高 2.6㎝	ＳＫ４１３	1990.07	299-1097	161-1097	３７	A
MTN-J-1098	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径16.8㎝　底径 ―― 器高 5.0㎝	ＳＫ４１３	1990.07	299-1098	161-1098	３７	A
MTN-J-1099	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径13.6㎝　底径 ―― 器高 4.3㎝	ＳＫ４１３	1990.07	299-1099	161-1099	３７	A
MTN-J-1100	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径16.6㎝　底径 ―― 器高 3.6㎝	ＳＫ４１３	1990.07	299-1100	161-1100	３７	A
MTN-J-1101	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径15.8㎝　底径 ―― 器高 4.2㎝	ＳＫ４１３	1990.07	299-1101	161-1101	３７	A
MTN-J-1102	小皿	土師器	鎌　倉	８５	口径 8.5　底径 6.8　器高 1.0	ＳＫ４１３	1990.07	298-1102	161-1102	３７	A
MTN-J-1103	小皿	土師器	鎌　倉	８５	口径 8.7　底径 7.2　器高 1.1	ＳＫ４１３	1990.07	298-1103	161-1103	３７	A
MTN-J-1104	坏	土師器	鎌　倉	５５	口径15.8　底径10.9　器高 2.7	ＳＫ４１３	1990.07	298-1104	161-1104	３７	A
MTN-J-1105	坏	土師器	鎌　倉	完形	口径16.0　底径11.4　器高 3.0	ＳＫ４１３	1990.07	298-1105	161-1105	３７	A
MTN-J-1106	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径16.3　底径11.2　器高 3.0	ＳＫ４１３	1990.07	298-1106	161-1106	３７	A
MTN-J-1107	小皿	土師器	鎌　倉	４０	口径10.6㎝　底径 8.0㎝ 器高 1.1	ＳＫ４１３	1990.07	298-1107	161-1107	３７	A
MTN-J-1108	坏	土師器	鎌　倉	３０	口径14.2㎝　底径 9.2　器高 2.9	ＳＫ４１３	1990.07	298-1108	161-1108	３７	A
MTN-J-1109	坏	土師器	鎌　倉	完存	口径15.2　底径10.4　器高 2.8	ＳＫ４１３	1990.07	298-1109	161-1109	３７	A
MTN-J-1120	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 8.9　底径 7.1　器高 1.4	ＳＫ４２０	1990.07	301-1120	163-1120	３７	A
MTN-J-1121	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.0　底径 7.4　器高 1.2	ＳＫ４２０	1990.07	301-1121	163-1121	３７	A
MTN-J-1122	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.2　底径 7.1　器高 1.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1122	163-1122	３７	A
MTN-J-1123	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.4　底径 7.9　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1123	163-1123	３７	A
MTN-J-1124	小皿	瓦　器	室　町	完形	口径10.3　底径 8.7　器高 2.4	ＳＫ４２０	1990.07	301-1124	163-1124	３７	A
MTN-J-1125	坏	土師器	鎌　倉	完存	口径15.9　底径 9.4　器高 3.6	ＳＫ４２０	1990.07	301-1125	163-1125	３７	A
MTN-J-1126	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.4　底径11.5　器高 3.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1126	163-1126	３７	A
MTN-J-1127	坏	土師器	鎌　倉	４０	口径16.0㎝　底径12.2㎝ 器高 3.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1127	163-1127	３７	A
MTN-J-1128	坏	土師器	鎌　倉	７０	口径15.5　底径11.3　器高 2.8	ＳＫ４２０	1990.07	301-1128	163-1128	３７	A
MTN-J-1129	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.7　底径10.9　器高 2.8	ＳＫ４２０	1990.07	301-1129	163-1129	３７	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量　(cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J-1130	碗	瓦　器	鎌　倉	２０	口径16.8復　底径 7.2復　器高 5.9	ＳＫ４２０	1990.07	303-1130	163-1130	３７	A
MTN-J-1131	碗	瓦　器	鎌　倉	７５	口径17.4　底径 7.7　器高 5.4	ＳＫ４２０	1990.07	303-1131	163-1131	３７	A
MTN-J-1132	鉢	須恵器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 4.9残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1132	164-1132	３７	A
MTN-J-1133	鉢	須恵器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 3.0残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1133	164-1133	３７	A
MTN-J-1134	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径16.4復　底径 ―　器高 5.3残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1134	164-1134	３７	A
MTN-J-1135	盤	陶　器	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 ―　器高 6.5残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1135	164-1135	３７	A
MTN-J-1136	石鍋	滑石製品	鎌　倉	不明	口径25.6復　底径 ―　器高 3.0残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1136	164-1136	３７	A
MTN-J-1137	小皿	土師器	鎌　倉	６０	口径 9.0　底径 7.4　器高 1.3	ＳＫ４２０	1990.07	301-1137	163-1137	３７	A
MTN-J-1138	坏	土師器	鎌　倉	完存	口径15.9　底径11.3　器高 3.1	ＳＫ４２０	1990.07	302-1138	163-1138	３７	A
MTN-J-1139	坏	土師器	鎌　倉	７５	口径15.7　底径11.2　器高 3.2	ＳＫ４２０	1990.07	302-1139	163-1139	３７	A
MTN-J-1140	坏	土師器	鎌　倉	完形	口径16.5　底径11.6　器高 3.2	ＳＫ４２０	1990.07	302-1140	163-1140	３７	A
MTN-J-1141	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径13.8復　底径 ―　器高 3.7残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1141	164-1141	３７	A
MTN-J-1142	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径15.4復　底径 ―　器高 3.1残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1142	164-1142	３７	A
MTN-J-1143	坏	土師器	鎌　倉	７５	口径15.3　底径11.5　器高 3.0	ＳＫ４２０	1990.07	302-1143	163-1143	３７	A
MTN-J-1144	坏	土師器	鎌　倉	８０	口径16.2　底径11.6　器高 3.9	ＳＫ４２０	1990.07	302-1144	163-1144	３７	A
MTN-J-1145	碗皿	瓦　器	鎌　倉	ほぼ完形	口径17.0　底径 7.6　器高 5.6	ＳＫ４２０	1990.07	303-1145	163-1145	３７	A
MTN-J-1148	小皿	土師器	鎌　倉	８５	口径 9.3　底径 7.7　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1148	163-1148	３７	A
MTN-J-1149	小皿	土師器	鎌　倉	９０	口径 9.6　底径 7.4　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1149	163-1149	３７	A
MTN-J-1151	坏	土師器	鎌　倉	３０	口径15.6復　底径 9.8復　器高 3.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1151	163-1151	３７	A
MTN-J-1152	碗	瓦　器	鎌　倉	７０	口径16.9　底径 8.3　器高 5.9	ＳＫ４２０	1990.07	303-1152	163-1152	３７	A
MTN-J-1153	坏	土師器	鎌　倉	３０	口径15.0復　底径10.8復　器高 3.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1153	163-1153	３７	A
MTN-J-1154	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ―　底径 7.8復　器高 3.0残	ＳＫ４２０	1990.07	304-1154	164-1154	３７	A
MTN-J-1155	小皿	土師器	鎌　倉	６０	口径 9.2　底径 6.6　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1155	163-1155	３７	A
MTN-J-1156	小皿	土師器	鎌　倉	ほぼ完存	口径 9.1　底径 6.9　器高 0.9	ＳＫ４２０	1990.07	301-1156	163-1156	３７	A

番　号	名　　称	種　別	時　代	残存率(%)	法　　量 (cm,g)	遺　構　名	出土年月	実測図番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A・Bの別
MTN-J-1157	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.6　底径 7.9　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1157	163-1157	３７	A
MTN-J-1158	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 9.3　底径 7.5　器高 0.9	ＳＫ４２０	1990.07	301-1158	163-1158	３７	A
MTN-J-1160	小皿	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径 9.4　底径 7.6　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1160	163-1160	３７	A
MTN-J-1161	小皿	土師器	鎌　倉	６０	口径 9.6　底径 7.0　器高 1.2	ＳＫ４２０	1990.07	301-1161	163-1161	３７	A
MTN-J-1162	碗	土師器	鎌　倉	４０	口径15.6復　底径10.9復　器高 3.3	ＳＫ４２０	1990.07	302-1162	163-1162	３７	A
MTN-J-1163	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径16.2復　底径 5.6復　器高 6.2残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1163	164-1163	３７	A
MTN-J-1164	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径16.4復　底径 ―― 　器高 4.8残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1164	164-1164	３７	A
MTN-J-1165	碗	白　磁	鎌　倉	不明	口径 ―― 　底径 ―― 　器高 3.8残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1165	164-1165	３７	A
MTN-J-1167	小皿	土師器	鎌　倉	ほぼ完存	口径 8.7　底径 6.7　器高 0.8	ＳＫ４２０	1990.07	301-1167	163-1167	３７	A
MTN-J-1168	小皿	土師器	鎌　倉	ほぼ完存	口径 9.2　底径 7.2　器高 1.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1168	163-1168	３７	A
MTN-J-1169	小皿	土師器	鎌　倉	６０	口径 9.2　底径 7.7　器高 1.2	ＳＫ４２０	1990.07	301-1169	163-1169	３７	A
MTN-J-1170	小皿	土師器	鎌　倉	６０	口径 9.3　底径 7.3　器高 0.9	ＳＫ４２０	1990.07	301-1170	163-1170	３７	A
MTN-J-1171	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 8.6　底径 6.3　器高 1.3	ＳＫ４２０	1990.07	301-1171	163-1171	３７	A
MTN-J-1172	小皿	土師器	鎌　倉	完存	口径 8.9　底径 7.0　器高 1.0	ＳＫ４２０	1990.07	301-1172	163-1172	３７	A
MTN-J-1173	小皿	土師器	鎌　倉	ほぼ完存	口径 9.6　底径 7.9　器高 1.1	ＳＫ４２０	1990.07	301-1173	163-1173	３７	A
MTN-J-1174	坏	土師器	鎌　倉	６５	口径16.2　底径10.6　器高 3.3	ＳＫ４２０	1990.07	302-1174	163-1174	３７	A
MTN-J-1175	坏	土師器	鎌　倉	３０	口径15.0復　底径10.2復　器高 2.9	ＳＫ４２０	1990.07	302-1175	163-1175	３７	A
MTN-J-1176	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.5　底径10.3　器高 3.0	ＳＫ４２０	1990.07	302-1176	163-1176	３７	A
MTN-J-1177	坏	土師器	鎌　倉	６０	口径15.5　底径 9.9　器高 3.1	ＳＫ４２０	1990.07	302-1177	163-1177	３７	A
MTN-J-1178	坏	土師器	鎌　倉	ほぼ完形	口径15.4　底径10.9　器高 3.4	ＳＫ４２０	1990.07	302-1178	163-1178	３７	A
MTN-J-1179	坏	土師器	鎌　倉	完形	口径15.9　底径10.8　器高 3.2	ＳＫ４２０	1990.07	302-1179	163-1179	３７	A
MTN-J-1180	碗	瓦　器	鎌　倉	７０	口径17.4　底径 7.4　器高 5.8	ＳＫ４２０	1990.07	303-1180	163-1180	３７	A
MTN-J-1181	碗	瓦　器	鎌　倉	完存	口径16.6　底径 6.8　器高 6.3	ＳＫ４２０	1990.07	303-1181	163-1181	３７	A
MTN-J-1182	坏	土師器	鎌　倉	７５	口径16.8　底径 7.6　器高 6.8	ＳＫ４２０	1990.07	303-1182	163-1182	３７	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

番号	名称	種別	時代	残存率(%)	法量 (cm,g)	遺構名	出土年月	実測図 番号	報告書Fig番号	コンテナ番号	A·Bの別
MTN-J-1183	碗	白磁	鎌倉	不明	口径14.4復 底径 —— 器高 4.5残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1183	164-1183	３７	A
MTN-J-1184	皿	白磁	鎌倉	６５	口径10.3 底径 3.3 器高 2.7	ＳＫ４２０	1990.07	305-1184	164-1184	３７	A
MTN-J-1185	碗	白磁	鎌倉	不明	口径16.0復 底径 —— 器高 4.3残	ＳＫ４２０	1990.07	305-1185	164-1185	３７	A
MTN-J-1186	碗	瓦器	鎌倉	ほぼ完形	口径17.0 底径11.1 器高 4.9	ＳＫ４２１	1990.07	306-1186	176-1186	３８	A
MTN-J-1187	碗	白磁	鎌倉	不明	口径16.8復 底径 —— 器高 4.5残	ＳＫ４２１	1990.07	306-1187	176-1187	３８	A
MTN-J-1188	石鍋	滑石製品	鎌倉	不明	口径 —— 底径 —— 器高 7.1残	ＳＫ４２１	1990.07	306-1188	176-1188	３８	A
MTN-J-1189	碗	瓦器	鎌倉	９０	口径15.8復 底径 7.1 器高 5.7	ＳＫ４２５	1990.07	307-1189	165-1189	３８	A
MTN-J-1193	小皿	土師器	鎌倉	９５	口径 8.5 底径 6.8 器高 0.8	ＳＫ４３３	1990.07	308-1193	178-1193	３８	A
MTN-J-1194	皿	白磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 —— 器高 1.7残	ＳＫ４３３	1990.07	308-1194	178-1194	３８	A
MTN-J-1195	碗	青磁	鎌倉	不明	口径 —— 底径 6.0 器高 2.6残	ＳＫ４３３	1990.07	308-1195	178-1195	３８	A
MTN-J-1196	小皿	土師器	鎌倉	８０	口径 9.2復 底径 7.1 器高 1.5	ＳＫ４３３	1990.07	308-1196	178-1196	３８	A
MTN-J-1197	鉢	須恵器	鎌倉	不明	口径20.6復 底径 —— 器高 6.1残	ＳＫ４３３	1990.07	308-1197	178-1197	３８	A
MTN-J-1198	小皿	土師器	鎌倉	８０	口径 8.7 底径 7.1 器高 1.0	ＳＫ４３３	1990.07	308-1198	178-1198	３８	A

村徳永遺跡（Ｊ地区）Ｉ種

地区名	種別	時代	遺構名	出土年月	ｺﾝﾃﾅ番号	袋数	備考
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD001	1990.04	39	5	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD001	1990.04	40	6	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD001	1990.04	41	1	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD001	1990.04	42	1	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD001, SK002～004	1990.04	43	9	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生	SK005～008, SD009, SK010, SK011	1990.04～05	44	12	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SH011～017	1990.05	45	10	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SK018, SH019, SE020, SH022～025, SK026	1990.05	46	12	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SR027, SD028～031, SK033, SH034, SD035・036, SH037, SE038, SK039, SD040	1990.05	47	13	
MTN－J	弥生土器・土師器・磁器・陶器破片	弥生～近世	CV－51, CS・CR－52, CU・CV－53, CQ－60, CP・CO－60, CO・CN－60	1990.05	48	9	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	P0001～0037, P0039～0058, P0060, P0061	1990.04～05	49	59	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD101	1990.05	50	8	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SD101	1990.05	51	13	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生・奈良	SD102・103, SE104・105	1990.05	52	9	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SE106, SH107, SE108, SH107・109	1990.05	53	11	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SH109, SK110～120	1990.05	54	18	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SK121, SE122・123	1990.05	55	8	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SK125～133, SX134	1990.05	56	14	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	SK135～138, SX139, SK141～145, SD146, SK147～149	1990.05～06	57	21	

地区名	種別	時代	遺構名	出土年月	ｺﾝﾃﾅ番号	袋数	備考
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生・平安	SR150～156, SK157～159, SE160, SK161, SD162	1990. 05 ～06	58	18	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生・平安	SK163・164, SD165, SK166, SK167, SX168, SK169, SK170・171, SD172～174, SK175	1990. 06 ～07	59	15	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生・平安	SK176・177, SD178, SK179, SK180～186, SD187, SK188～190	1990. 06 ～07	60	18	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	SD191, SK192, SE193, SK194・195	1990. 07	61	14	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SB200～206	1990. 06	62	12	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SB207～215	1990. 06	63	10	
MTN－J	弥生土器破片	弥生	SB216・218・219～223	1990. 07	64	7	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	P1002～1017・1022・1024～1036・1039～1066・1068～1077・1079～1082・1084～1091・1093	1990. 04 ～07	65	82	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	CI－70, CH－72, CE－72, CE－76, CE－77, CC－80, CD－81, CC－82, CB－83, BZ－85, CA－86, BZ－86, BY－87, BW－88, BW－91	1990. 04 ～07	66	14	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	J2区表採	1990. 04 ～07	67	7	
MTN－J	弥生土器・土師器破片	弥生 平安・鎌倉	SE303, SD307～309, SK310～312, SD313～316	1990. 06	68	16	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	SD317	1990. 06	69	10	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	SE318～320	1990. 06	70	6	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	SD321, SE322, SK323	1990. 06	71	12	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	SK324～328, SE329, SK330, SK331	1990. 06 ～07	72	9	

地区名	種別	時代	遺構名	出土年月	ｺﾝﾃﾅ番号	袋数	備考
MTN－J	土師器破片	平安・鎌倉	SK332～334・336・337, P3001～3017・3019・3020	1990.06～07	73	24	
MTN－J	土師器破片	平安・鎌倉	P3021～3052	1990.07	74	32	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	包含層	1990.06	75	7	
MTN－J	土師器・瓦器破片	平安・鎌倉	包含層	1990.06	76	6	
MTN－J	土師器・陶器・磁器破片	鎌倉～近世	攪乱溝, 表採	1990.06～07	77	7	
MTN－J	土師器・瓦器破片	鎌倉・近世	SD400, SK401・402, SE403, SE404, SK405～407	1990.06～07	78	8	
MTN－J	土師器・瓦器破片	鎌倉・室町	SK408, SD409・410, SK411～413, SD414, SK417～419	1990.07	79	10	
MTN－J	土師器・瓦器破片	鎌倉	SK420～425	1990.07	80	14	
MTN－J	土師器・瓦器破片	鎌倉・室町	SD426～432, SK433, SD434・435, P4001～4028・4044～4066, BC－128・129	1990.06～07	81	35	

村徳永遺跡（J地区）II種

佐賀市文化財調査報告書第34集

村 徳 永 遺 跡

——J地区の調査——

平成3年3月31日

発行　佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷　㈱佐賀印刷社
佐賀市高木瀬西六丁目11—7